

青森県埋蔵文化財調査報告書第388集

櫛館遺跡Ⅱ

－八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

2005年3月

青森県教育委員会



調査区全景（空撮直下）

序

八戸南環状道路の工事路線内には、縄文時代から近世までの遺跡が多数所在しており、平成8年度から事業関連遺跡の発掘調査が実施されております。

櫛館遺跡は、中世の館跡として周知の遺跡であり、平成12年度から調査が始められております。

本報告書は、平成15年度に行われた第2次発掘調査の成果をまとめたものであります。この調査によって、櫛館遺跡が位置する河岸段丘上に、縄文時代から近世まで長期間にわたり、さまざまなかたちで人々が生活してきたことがわかりました。

この成果が、文化財の保護・研究に活用され、地域社会の歴史学習や地域住民の文化財保護意識の高揚につながることを心から期待してやみません。

今回の発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、種々御指導・御協力いただいた調査指導員・調査員をはじめとする関係各位に対して厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 佐藤良治

例 言

- 1 本報告書は、平成15年度発掘調査された八戸南環状道路建設事業に伴う、八戸市櫛館遺跡の2次発掘調査の成果を収録したものである。
- 2 櫛館遺跡の所在地、緯度・経度、遺跡登録番号は第1章第1節と報告書抄録に示した。
- 3 本報告書の作成は、小田川哲彦と平山明寿が担当し執筆者名は文末に記した。依頼原稿（第3章第3節）の執筆者・機関は文頭に記した。編集は小田川が行った。
自然科学分析等については下記に依頼した。
出土銭の年代と素材分析……パリノ・サーヴェイ株式会社
人骨同定 ……同上
炭素年代測定 ……株式会社地球科学研究所
- 4 遺跡の空中写真撮影 ……株式会社シン技術コンサル
遺物写真撮影 ……シルバーフォト
- 5 本報告書に掲載した遺跡位置図は、国土地理院発行地形図を使用した。
- 6 基本層序及び遺構の土層には、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2002年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
- 7 本報告書における用例は次のとおりである。
 - 1) 挿図中の方位は座標北を示す。複数の遺構が図示され座標北が異なる場合、各々方向を示した。
 - 2) 挿図の縮尺は、遺構・遺物など大きさにより適宜し、スケールと縮尺率を図中に示した。
 - 3) 挿図の柱穴及び小穴については、深さを数値で示した。
 - 4) 挿図中のアミ掛けは、内容を図中に示した
 - 5) 遺物写真は縮尺不同で、個々の遺物番号は挿図番号と一致する。(図5 - 13 = 5 - 13と表記)
 - 6) 遺構および遺物観察表の計測値で () は推定値、< > は残存値を示したものである。
- 8 引用文献については巻末に収めた。
- 9 調査成果については、本報告書が優先する。
- 10 本調査に関わる諸記録、遺物等の資料は、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々から御指導・助言および御協力を頂いた。銘記して感謝申し上げます。(順不同・敬称略)。

高橋與右衛門、佐々木浩一、村本恵一郎、藤田俊雄、小笠原善範、宇部則保、村木 淳、大野 亨、小保内裕之、小久保拓也、瀬川 滋、駒田 透、西谷久美子、長尾正義、田中寿明、高島 成侑、秋元信夫、阿部勝則、五十嵐一治、伊藤武士、井上雅孝、宇田川浩一、小野正敏、木村高、工藤清泰、高橋 学、羽柴直人、本澤慎輔、村田淳、八重樫忠郎、山口博之、櫛館 知、畑中 秀夫

目 次

序	
例 言	
目 次	
挿図目次・写真図版目次	
第1章 調査概要.....	1
第1節 調査要項.....	1
第2節 調査に至る経緯.....	2
第3節 調査の経過と方法.....	3
第2章 検出遺構と出土遺物.....	7
第1節 調査区の層序.....	7
第2節 遺構と遺物の概略.....	8
第3節 土塁・壕跡・平場.....	8
第4節 溝跡.....	25
第5節 門跡.....	26
第6節 通路跡.....	28
第7節 掘立柱建物跡・塀跡.....	29
第8節 竪穴建物跡.....	34
第9節 竪穴住居跡.....	36
第10節 土坑.....	43
第11節 焼土跡.....	59
第12節 性格不明遺構.....	61
第13節 集配石.....	62
第14節 遺構外出土遺物.....	63
第3章 自然科学的分析.....	80
第4章 まとめ.....	96
引用・参考文献.....	98
遺物観察表.....	99
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図1	遺跡位置.....	2	図26	第9号竪穴住居跡.....	40
図2	遺跡の地形と路線・調査区.....	3	図27	第9号竪穴住居跡出土遺物.....	41
図3	遺構配置.....	5	図28	第10号竪穴住居跡.....	42
図4	平場斜面層序.....	7	図29	第10号竪穴住居跡出土遺物.....	43
図5	調査前の壕跡と土塁 『南部諸城の研究』掲載 檜館.....	10	図30	平場内遺構配置.....	44
図6	第1号壕跡・第6・7号溝跡.....	12	図31	土坑(1) 類A型.....	46
図7	第2・3・4・5号壕跡.....	13	図32	土坑(2) 類A型.....	47
図8	第2・3・4・5号壕跡土層(1).....	15	図33	土坑(3) 類B・C型.....	48
図9	第2・3・4号壕跡土層(2).....	17	図34	土坑(4) 類D・E、類A・B・D型.....	49
図10	第2号壕跡出土遺物.....	18	図35	土坑(5) 類B～E型.....	50
図11	第3号壕跡出土遺物.....	20	図36	土坑(6) 類B型、類A・C型、類.....	51
図12	第4号壕跡出土遺物(1).....	22	図37	土坑出土遺物(1).....	54
図13	第4号壕跡出土遺物(2).....	23	図38	土坑出土遺物(2).....	55
図14	第5号壕跡出土遺物.....	24	図39	土坑出土遺物(3).....	56
図15	第5号溝跡.....	26	図40	土坑出土遺物(4).....	57
図16	第1・2号門跡.....	27	図41	土坑出土遺物(5)、柱穴・集配石出土遺物.....	58
図17	通路跡.....	29	図42	焼土跡・性格不明遺構.....	60
図18	掘立柱建物跡・堀跡.....	30	図43	集配石.....	61
図19	第1・2・3・4号掘立柱建物跡.....	32	図44	遺構外出土遺物(1)縄文土器.....	65
図20	調査区内柱穴全図.....	33	図45	遺構外出土遺物(2)縄文土器.....	66
図21	第1号竪穴建物跡(1).....	34	図46	遺構外出土遺物(3)須恵器・陶磁器.....	68
図22	第1号竪穴建物跡(2).....	35	図47	遺構外出土遺物(4)陶磁器・金属製品.....	70
図23	第1号竪穴建物跡出土遺物.....	36	図48	遺構外出土遺物(5)土製品.....	73
図24	第8号竪穴住居跡.....	37	図49	遺構外出土遺物(6)石器.....	74
図25	第8号竪穴住居跡出土遺物.....	38	図50	遺構外出土遺物(7)石器・石製品.....	76

写真目次

表紙	第2号壕跡出土緡銭		写真22	土坑(1)	
写真1	調査区全景		写真23	土坑(2)	
写真2	調査前遺跡近景		写真24	土坑(3)	
写真3	調査後調査区全景		写真25	土坑(4)	
写真4	平場		写真26	土坑(5)	
写真5	第1号壕跡		写真27	土坑(6)	
写真6	第2～5号壕跡		写真28	土坑(7)	
写真7	壕跡(1)		写真29	土坑(8)	
写真8	壕跡(2)		写真30	土坑(9)	
写真9	壕跡(3)		写真31	焼土遺構	
写真10	壕跡(4)		写真32	集配石・緡銭出土状況	
写真11	壕跡(5)		写真33	作業状況	
写真12	壕跡(6)		写真34	壕跡出土遺物(1)	
写真13	壕跡(7)・溝跡		写真35	壕跡出土遺物(2)	
写真14	門跡(1)		写真36	竪穴住居跡出土遺物(1)	
写真15	門跡(2)		写真37	竪穴住居跡出土遺物(2)・竪穴建物跡出土遺物	
写真16	通路跡(1)		写真38	土坑出土遺物(1)	
写真17	通路跡(2)		写真39	土坑出土遺物(2)	
写真18	第8号竪穴住居跡		写真40	土坑出土遺物(3)・集配石・柱穴出土遺物	
写真19	第9号竪穴住居跡		写真41	遺構外出土遺物(1)	
写真20	第10号竪穴住居跡		写真42	遺構外出土遺物(2)	
写真21	第1号竪穴建物跡		写真43	遺構外出土遺物(3)	

第1章 調査概要

第1節 調査要項

1 調査目的

八戸南環状道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する櫛館遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成15年7月1日～平成15年10月31日

3 遺跡名及び所在地 櫛館遺跡 (青森県遺跡番号03148)
八戸市大字是川字櫛館、外

4 調査対象面積 6,000平方メートル

5 調査委託者 国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査指導員	市川 金丸	青森県考古学会会長	(考古学)
調査員	佐々木辰雄	青森県立八戸中央高等学校教諭	(地質学)
調査員	工藤 竹久	八戸市教育委員会文化課副参事	(考古学)
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター		
所長	佐藤 良治		
次長	福田 友之		
総務課長	工藤 和夫		
調査第二課長	成田 滋彦		
文化財保護総括主査	小田川哲彦		
文化財保護主事	平山 明寿		
調査補助員	小野亜沙美・山上 学		
	船橋 美咲・大柳 結香		

第2節 調査に至る経緯

八戸南環状道路建設事業に先立ち、平成7年度に建設省東北建設局青森工事事務所（現・国土交通省東北地方整備局青森工事事務所）から工事予定地内の埋蔵文化財包蔵地の有無について青森県教育庁文化課（現文化財保護課）に照会があり、路線内の遺跡を確認し櫛館遺跡・弥次郎窪遺跡・大開遺跡・新田遺跡・潟野遺跡の所在が明らかになった。その後工事関係者と文化課および当センター職員による踏査が行われた。これにより、試掘調査を先行させ、発掘調査の条件の整った遺跡から順次調査することとなり、工事の優先箇所も合わせ、翌年度に当遺跡に隣接する弥次郎窪遺跡の調査を行った。調査は暫く中断していたが、この後、平成12年度に当センターが櫛館遺跡の試掘調査を行い、平成13年度に遺跡の北側にあたる低地部分を主体に発掘調査を実施した。都合により調査は1年間中断されたが、平成15年度に遺跡の北端部を主体とした調査が行われた。

試掘を含めた平成12・13年度の1次発掘調査の成果は、平成14年度（2003年）に青森県埋蔵文化財調査報告書第342集として刊行されている。



▲は中世・近世の城および館跡と登録されている遺跡

(S=1/10万)

図1 遺跡位置

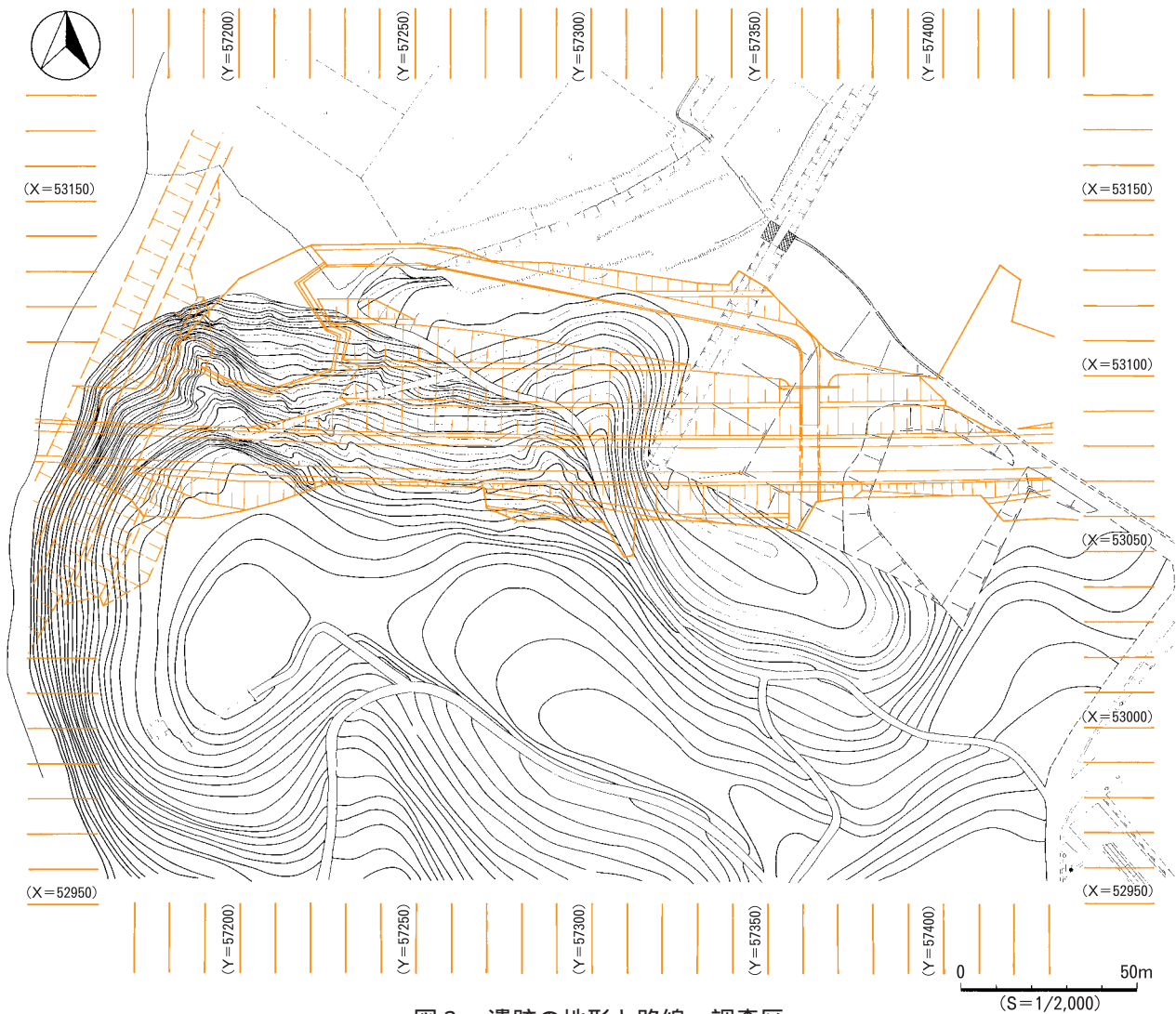


図2 遺跡の地形と路線・調査区

第3節 調査の経過と方法

調査経過

2次の発掘調査は7月1日に開始した。新井田川に舌状に突き出た段丘の斜面部が主たる調査区である。調査に約1年半の間をおいたため、熊笹を再度処理することから始めた。第1次調査で縄文時代早期から前期に帰属する円形の落とし穴を検出していることから、この遺構がO-30グリッドを中心とした斜面部に広がる可能性が考えられ、その範囲から掘り下げ検出作業を行った。

7月中旬には、遺跡の特徴である三重の壕跡にトレンチを設定し、下旬には調査区南側の境界から壕跡を掘り下げ精査にあたったほか、突端部の表土剥ぎも行った。

8月上旬には、斜面部と壕跡に設定したトレンチが掘りあがり、段丘頂部の平坦部東側縁辺にも埋没した4条目の壕跡が検出された。当初の予測に反し斜面部からは遺構は検出されなかった。また、各壕跡の規模もおおよそわかり、掘り下げに着手したが、長梅雨の影響のためか8月から9月上旬まで降雨日が多く、加えて調査区のほとんどが斜面地であるため調査は遅滞した。

9月中旬から下旬には各壕跡がおおよそ掘り上がり、調査区北西端の急斜面地と平坦部の表土剥ぎに着手した。当初、平坦部は館の構築時に造成されたものと推測していたが、聞き取り調査により現

代にはいつてからも耕地や宅地として利用されているほか、出土遺物から縁辺部に盛り土され現況での地形が形成されていることも判明した。

9月下旬から平坦部の遺構検出と精査作業にはいった。調査面積は狭小であるが、予想以上の遺構が縁辺にまでひろがっており、掘り下げと記録作成に追われた。

10月中旬に、排土処理のため壕跡中程に残しておいた土橋を撤去し、その下に門跡を検出した。門跡の精査にも追われたが、平坦部（平場）の遺構精査作業も遅れており、当初は10月24日終了予定であったが調査を1週間延長し10月31日に終了した。

調査の方法

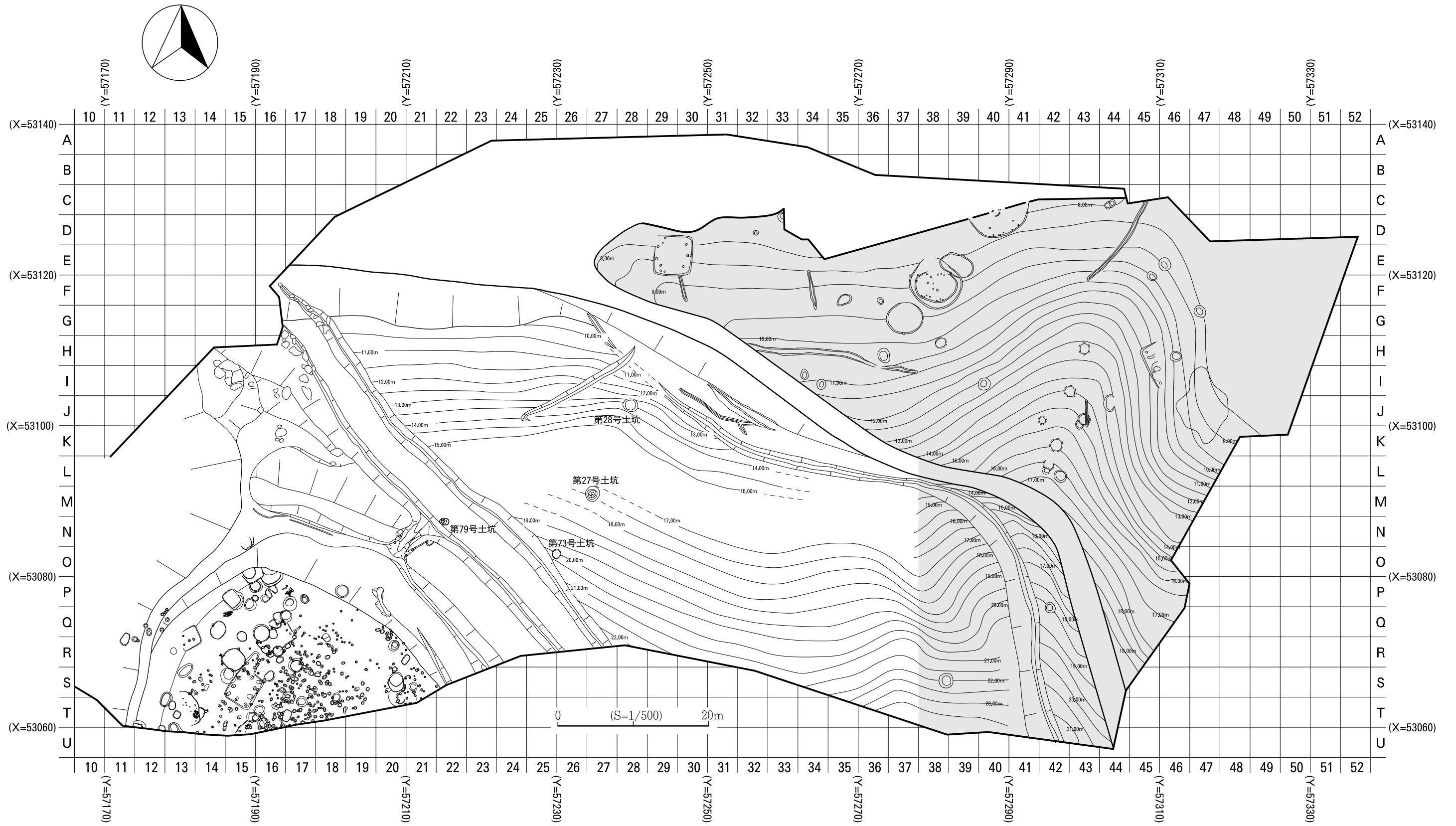
本遺跡は館跡として周知されていることから、現況での館の遺存状態と形態を記録するための地形測量を業者委託により平成13年度に行っている。これと合わせて公共座標軸に合わせた基準杭を調査区全体に10点設置しており、今回の第2次調査でもその基準杭を用いている。基準杭の座標値は旧日本測地系のものであり、図中においてもその当時のままの数値で表記している。世界測地系との対比は巻末の報告書抄録に記載している。

調査は基準杭を基点としたグリッド法を用い、グリッドは業者委託で打設した各基準杭を基に、20m四方の大区画に木杭を用い、さらにその中に4m四方のグリッドをピンで設定した。グリッドの呼称は、北から南に向けてアルファベットを、西から東に向け算用数字を付し組み合わせで呼称した。今回の発掘調査は、農作業道から西側を主体にした範囲で南北方向E～T・東西方向10～38までの範囲内である。標高値は、委託で打設した基準点上に同時に設け、各遺構精査および地形図作成の必要に応じてさらに移動して用いた。粗掘り作業は人力を主体にしたが、一部の表土撤去と無遺物層や遺構・遺物に支障のない個所の掘り下げには重機を用いた。排土の移動には重機を用い1次調査区に集積した。移動は伐採木搬出時に付けられた通路を利用した。

遺構は、発掘調査時に各遺構の番号と略号を付した。遺構番号は第1次調査から連続させて付した。略号は、竪穴住居跡 = S I、土坑 = S K、焼土跡 = S R、溝跡 = S D、性格不明遺構 = S Xとし、これ以外の土塁・壕跡には略号は付していない。また、調査時と第1次の報告書中には、堀跡と表記しているが、本報告書では壕跡と表記している。

遺構精査は四分法と二分法を基本として、各遺構の規模と形状に応じて用いた。堆積土が遺構壁面と峻別しにくいものについては、サブトレンチを設けて確認にあたった。土層観察は、『新版標準土色帖』を用い、土色とマンセル記号を併記し、特徴を注記した。層順については、遺構の堆積土には算用数字を用い、調査区全体の自然層についてはローマ数字を用いた。実測図の作成は種類や規模に応じて適宜した。遺構図は1/20を基本としたが、遺物出土状態等の違いに応じて1/10を用いたものもある。地形図や土塁等は1/200や1/100など任意に定めた。図2・5の等高線が抜けている部分は、急傾斜および排土移動の通路として使用した箇所である。遺物の取り上げは、遺構およびグリッド単位ごとに各層単位で行うことを基本としたが、壕跡出土遺物に関しては層が複雑で各グリッドが対応しないことと、調査の遅延から大多数を覆土で取り上げている。

写真撮影は基本的に、35mmカメラを主体にしモノクロームおよびリバーサルフィルムで同方向で同一枚数で撮影したほか、デジタルカメラも併用し適時中型カメラも使用した。また、調査区の全景および遺構撮影にはラジコンヘリコプターを委託したほか、高所作業車上からの撮影を行った。(小田川)



(平場内遺構番号=図30参照・壕跡番号=図7参照)

(アミ掛範囲=1次調査区)

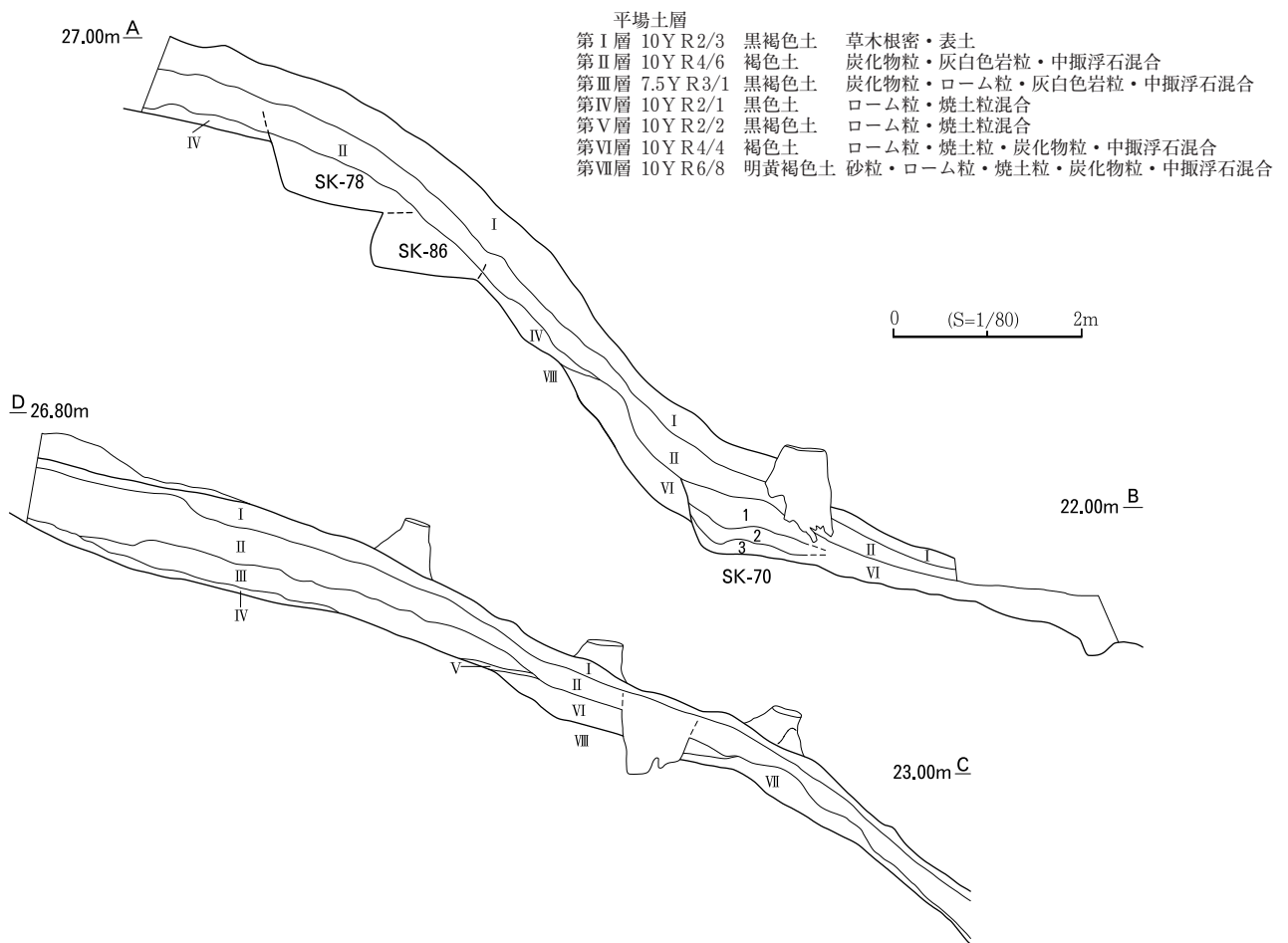
図3 遺構配置

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 調査区の層序

本遺跡の層序については前回の調査報告書第1章第4・5節に記載したとおりで、基本的には表土である第Ⅰ層の黒色土から、第Ⅱ層黒色土、第Ⅲ層黒褐色砂質土（中礫浮石混入）、第Ⅳ層黒褐色土（南部浮石混入）、地山の第Ⅴ層黄褐色粘質土（八戸火山灰最上層）の層序となる。

今回の調査区で、上記のような堆積状態を示す範囲は第1号壕跡と第2号壕跡の間の斜面部、O-30グリッドを中心とした沢地形の部分だけであるほか、壕跡が築かれている範囲は、第Ⅰ層が欠層している。丘陵頂部の平場では第Ⅰ層の厚さが異なり、調査区南側では約10cmほどだが、斜面部は20~40cmと厚くなる。また、第Ⅰ層は自然堆積の黒色土ではなく、攪乱移動などを受けた褐色土であり、平場西側斜面部に厚くなる。この層は出土遺物から近代~現代に動かされたものである。第Ⅱ~Ⅳ層は近世以前のものであり、第Ⅴ層は基本層の第Ⅴ層に対応する。さらに、平場内では、第Ⅴ層直下が第Ⅵ層ないしは灰白色粘土層（八戸火山灰最下層）になる範囲があるほか、丘陵の突端部は表土直下が基盤のチャートとなる部分が多く、この基盤岩は壕跡の北側端部に崩れている。（小田川）



(土層図Point=図30参照)

図4 平場斜面層序

第2節 遺構と遺物の概略

1次調査の結果では、館跡範囲外の低地部に弥生時代を中心に各時代の遺構が展開しており、河岸縁を断続的に利用していたことが判明している。

今回の調査区は第1次調査区の西側、河岸段丘上にある館跡本体の北端部にあたる。検出された遺構は、壕跡5条、溝跡3条、門跡2箇所、通路跡、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡4軒、柱穴多数、竪穴住居跡3軒、土坑61基、焼土跡6基、配石3基、性格不明遺構1基であり、壕跡や門跡・通路跡以外の大多数は段丘頂部の平坦面で検出されている。これら各遺構の時期は縄文時代・平安時代・中世・近世である。

本館跡は、調査以前から三重の壕跡が地表面で確認でき、中世のものと伝えられているが文献に記載はなく今まで帰属時期を得なかった。しかし少数ではあるが調査で出土した陶磁器や竪穴建物跡から館の機能時期とその後の使われ方や、壕跡が区画防御のほか、通路として利用されていたことが判明した。また今回、地表面では確認できなかった壕跡も検出された。

館跡に伴う遺構では壕跡のほか門跡や通路跡、溝跡、掘立柱建物跡などがある。通路跡は館の廃絶後も使われていたことがわかった。また、土塁は検出されていないがこれについても項目をもうけて記述する。

竪穴住居跡はすべて平安時代のものであり、新たに検出された壕跡との関係が指摘される。

土坑は、縄文時代のフラスコ状土坑から中世ないしは近世のものと思われる墓坑があり、平場の縁辺部につくられているものが多い。

配石は縄文時代とみられるもので、規模は小さく遺存状態はわるい。焼土遺構は時期を明確にできないが平安時代から中世のもので、なかに鍛冶遺構とみられるものがある。

遺物は、縄文時代の土器と石器、平安時代の土師器、中世から近世の陶磁器、帰属時期不明の鉄器や古銭、石製品があり段ボ - ル箱23箱分が出土した。大多数は縄文時代後期の土器でこれに他時期のものが少量加わる。平場のほか壕跡からの出土が多いが、原位置を保っているものは極端に少なく、しかも破片資料ばかりで完全に復元できるものはない。

以下に各遺構と遺物について記述するが、先に館跡に関連した遺構から順に記述する。また、竪穴住居跡については検出番号順に、土坑と焼土跡に関してはまとめて記載する。なお、各遺構番号については、壕跡と土塁は1次調査の報告書と同じであり、他の遺構は1次調査から連続して番号を付している。

出土遺物については各遺構毎の掲載を基本とするが、須恵器を含む陶磁器類・鉄製品・古銭と錢縵の説明については別個にまとめて掲載する。 (小田川)

第3節 土塁・壕跡・平場 (図5～14)

本館跡は、沼館愛三氏著書の『南部諸城の研究』(沼館：1977)に概略図(縄張り図)入りで規模や形態等が記述されており、その当時に個人踏査でこれだけの情報を得た観察力には敬服する次第である。しかし細部は別として、本調査で作成した地形図および配置図と比べ『南部諸城の研究』の掲載図とは方位にちがいがあり、『南部諸城の研究』の図の北は実際には東側である。また、記述にある三重堀も沼館氏のいう本郭と二ノ郭の位置関係が逆転している。写真6に示したように、雑草木を

払った調査区の東向き斜面には埋没した壕跡が3条の窪みとして、その間に土塁と思われる高まりが明瞭に観察でき、さらに農作業道に接して『南部諸城の研究』の記述にない壕跡も確認された。また、丘陵頂部は平らで地形が改変が明瞭であり、今回の発掘調査ではこの平場の縁辺に新たな壕跡を検出している。

土塁 (図5)

1次調査報告書では、第1号壕跡の東側に沿う尾根状の高まりを土塁として記載した。土を積み重ね築かれたものではなく本来の定義からはずれるが、現況では土塁に見えた。図5に示したように、地形測量の際に壕跡の間は土塁状の高まりとして捉えられた。調査によりこれらは、積み土により築かれたものではなく、斜面に壕を段状に重ねることによってその間が土塁の形態を成したものと判明した。このような効果を予め意図したものが不明であるが、必然的に土塁と同じ機能と景観をつくり出している。以下に現況で捉えた状況を記述する。また、出土遺物は遺構外としている。

第2号土塁

第2号壕跡の東側にあり、現況ではR-27・28～L-22グリッドまで調査区内に約35mの長さで確認された。頂部の幅は約1.5～2.5mで、約40～50cmの高まりであるが写真6に見えるように50cm以上の高さの部分もあり、壕跡と同じく傾斜している。現況での底辺部(下端ライン)は第2号壕跡と重なる。黄色ロームや灰白色粘土など、壕の掘り上げ土を積んだ状況は全く見られなかったが、黒色土を掘り残していた可能性があり、削平した可能性が高い。また、高まりはL22グリッドで途切れ、その北側は斜面と一体となるが、その部分に後述する通路の痕跡を検出している。

第3号土塁

第4号壕跡の東側にあり、現況ではR-24～M-16グリッドまで調査区内に約38mの長さで確認された。頂部の幅は約80cm～1.2mで、約60～80cmの高まりがあり、第3号壕跡地表面からは約2mの比高差がある。図8の土層1に示されるように、第12・13層とした土は、壕の掘り上げ土を盛ったものと考えたが、この部分だけのもので、積み上げを意識した可能性は低いものと思われる。第4号壕跡と同じく、門跡の部分までは傾斜するがそこから北側はほぼ平坦で水平になる。現況での底辺部は第4号壕跡と重なる。

第2・3号土塁間

現況では土塁状の高まりではなく、幅が約2～2.5mのいわゆる犬走り状の平坦面として確認された。R-25～G-16グリッドまで約60mの長さがあり、この部分が第3号壕跡となった。

第4号土塁

J-16～H-14グリッドに河川に突き出た切り立った尾根状地形を確認した。表土直下は岩盤で、北東側は急斜面、北側は河川へ落ちる急崖で、西側に平場状の小さな平坦部がある。(小田川)

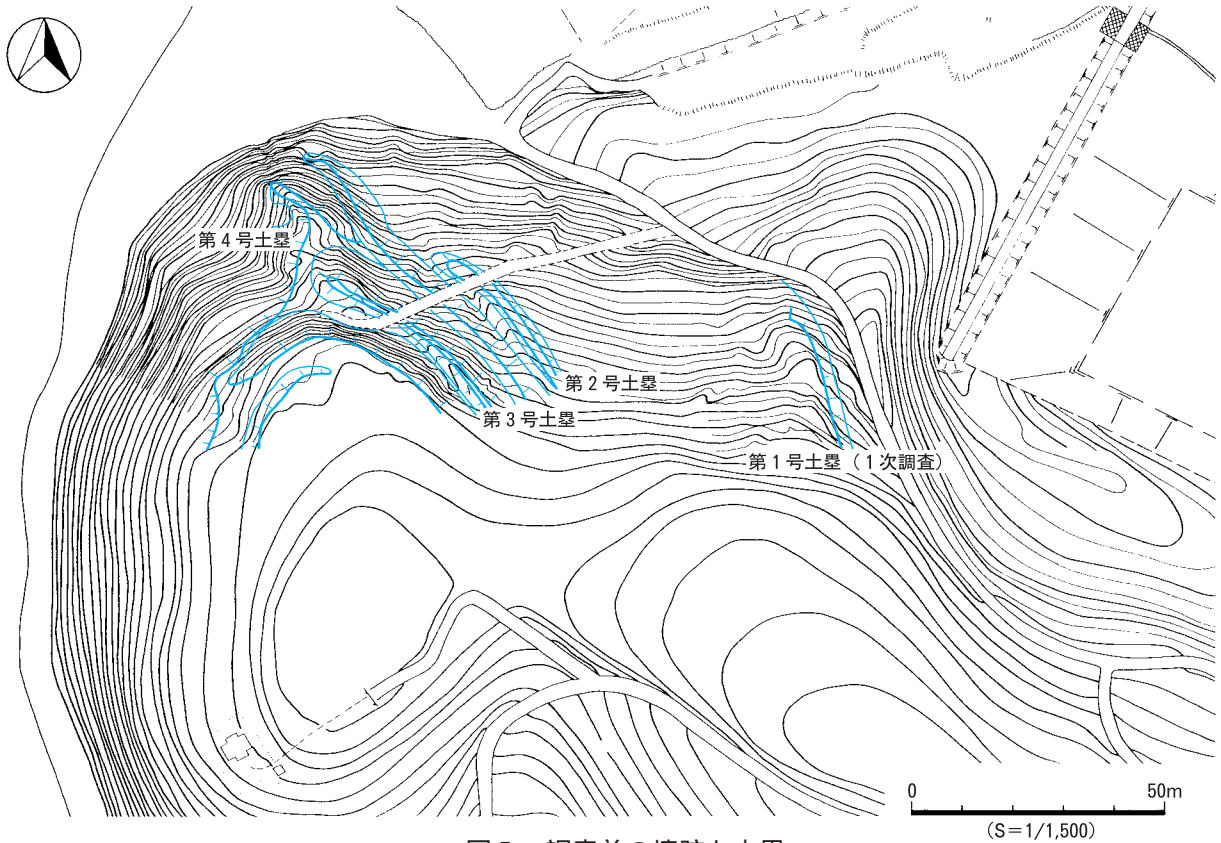
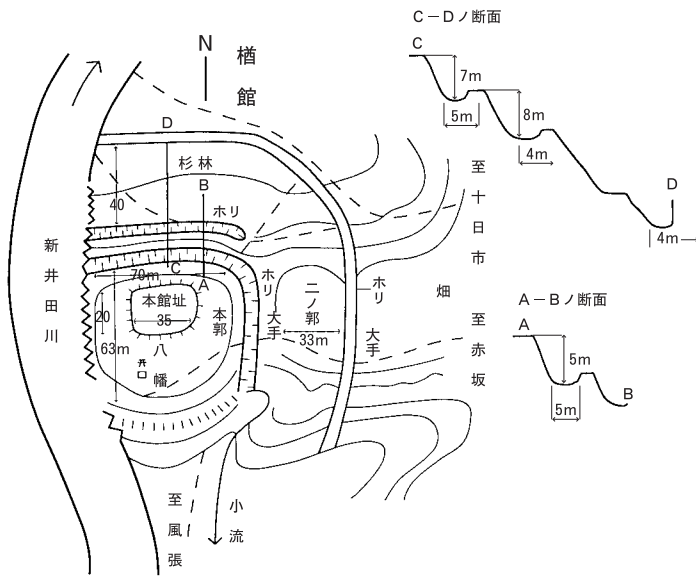


図5 調査前の壕跡と土塁



『南部諸城の研究』掲載 櫛館

平場 (図5・7)

『南部諸城の研究』では本館跡は二つの郭から成っており、河川に面した郭を本郭としている。記載では本郭の規模は東西70m、南北63mとあり、面積は4.410㎡ほどになる。本調査は、本郭の先端が対象で、郭面積の約1/8ほどである約580㎡を調査した。グリッドはP~U-12~21の範囲で、第4号壕跡からは最大約6mの比高差がある。熊笹撤去後は真っ平らな状態で、中央から西側には段差がみられ、段の北側はスロープ状に西に緩

やかに下り通路が想定され、調査により平場に入る通路の一つであったことが判明した。ほかに、後述する大多数の遺構はこの平場内に検出されている。

このほかに、突端に狭小な平場が確認された。範囲はH~J-14・15グリッドで、幅は約4m位の半月状に平坦になっている。北から西側は急崖に面し、第4号土塁からは約3mの比高差がある。表土直下は段丘基盤の岩で、内部に遺構は検出されなかった。自然地形であるかもしれないが、館の機能時に利用されていた可能性はある。

(小田川)

壕跡 (図6～14)

前述のように壕跡は5条検出されている。

第1号壕跡 (図6)

[位置と確認] 1次調査で調査区内の約半分の長さを調査しており、調査区南端のU - 42～G - 27グリッドまで農作業道に沿って延びている。確認状況は前回の報告書のとおりである。

[規模と方向] 調査区内に約95mの長さで確認され、農作業道と並行しN - 40グリッドから緩やかに曲がり北側に向かい下りながら延びている。調査区外の南側は、沼館氏のいう二ノ郭方向に折れていることが確認できる。地山の第 層面での開口部幅はU - 42～N - 40グリッド付近までは3～4mあるが、その先は最大で約1.7mと大きく変化する。これは掘り込み面の第 層の黒色土を撤去したため、壕跡の上部がすべて削平されており、土層G - Hのラインからは開口部3～4m幅の状態が想定される。断面形状は斜面上位側が箱葉研形であり、北側に下るにつれ大きく開いたV字状になる。底面幅は30～60cmと1次調査部分と変わらないため、今回調査した部分は一見して溝状であり、深さも感じられない。壕底は31～36グリッド間がほぼ水平で平坦だが、流水による起伏がみられる箇所も多い。

[土層] 自然埋没しており、覆土の上位層は中掬浮石や南部浮石を混入する黒色土と黒褐色土を主体にする。土層の中位から下位には砂層が介在している。砂層は流水性のもので薄い層で互層になっており、砂層の上下層には小礫が混じるほか部分的に粘土塊も混じる。砂層の上面および壕底は硬化している。また土層C - Dと土層G - Hの第6層は同じ砂層で、土層C - Dの断面から掘り返されているものと思われるが、間の土層E - Fでは確認できなかった。また、掘り込みは部分的に礫層に達しており、礫の出土は北側の低地に向かうほど多い。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

[小結] 『南部諸城の研究』に記載のない壕跡である。沼館氏のいう二ノ郭に延びていることから館を形づくる区画を意識した壕であったと思われる。出土遺物がなく構築および廃絶時期は不明である。

第2号壕跡 (図7～10)

[位置と確認] 第1号壕跡から約50m離れている。刈り払い後の現地地形上では約20～50cmの深さで窪んだ溝として確認された。検出時の壕幅は1～2.5mで調査区内に約40mの長さである。北側方向に傾斜して下り端部は斜面なりに一体となる。

[規模と方向] 完掘後の長さは約65mで、R - 27～F - 16グリッドまで斜面を北西方向に抜けるようにある。壕跡の上幅は2m～最大約3.5mあり、深さは約1.5～2mで北西端部は深さもなくなり細くなる。壕底は40～60cmの幅をもち、底面はほぼ平坦につくられているが、流水により抉られた起伏と筋状の蛇行した痕跡が著しく残る。土層3の底が段状になっているのも流水によるものと考えられる。また、壕底面直上付近の壁面の一部が抉れている箇所もある。断面形状は基本的に底面から直立した壁が中位で開くY字状であるが、調査区境界面である土層2では、底面から大きく開いたV字状である。いわゆる箱葉研形と捉えられ、壁面の勾配はおよそ50°～60°ほどである。壕跡北西端部と調査区南端部の比高差は約13mあり、南側調査区外に延びるが長さは明確に確認できない。

櫛館遺跡

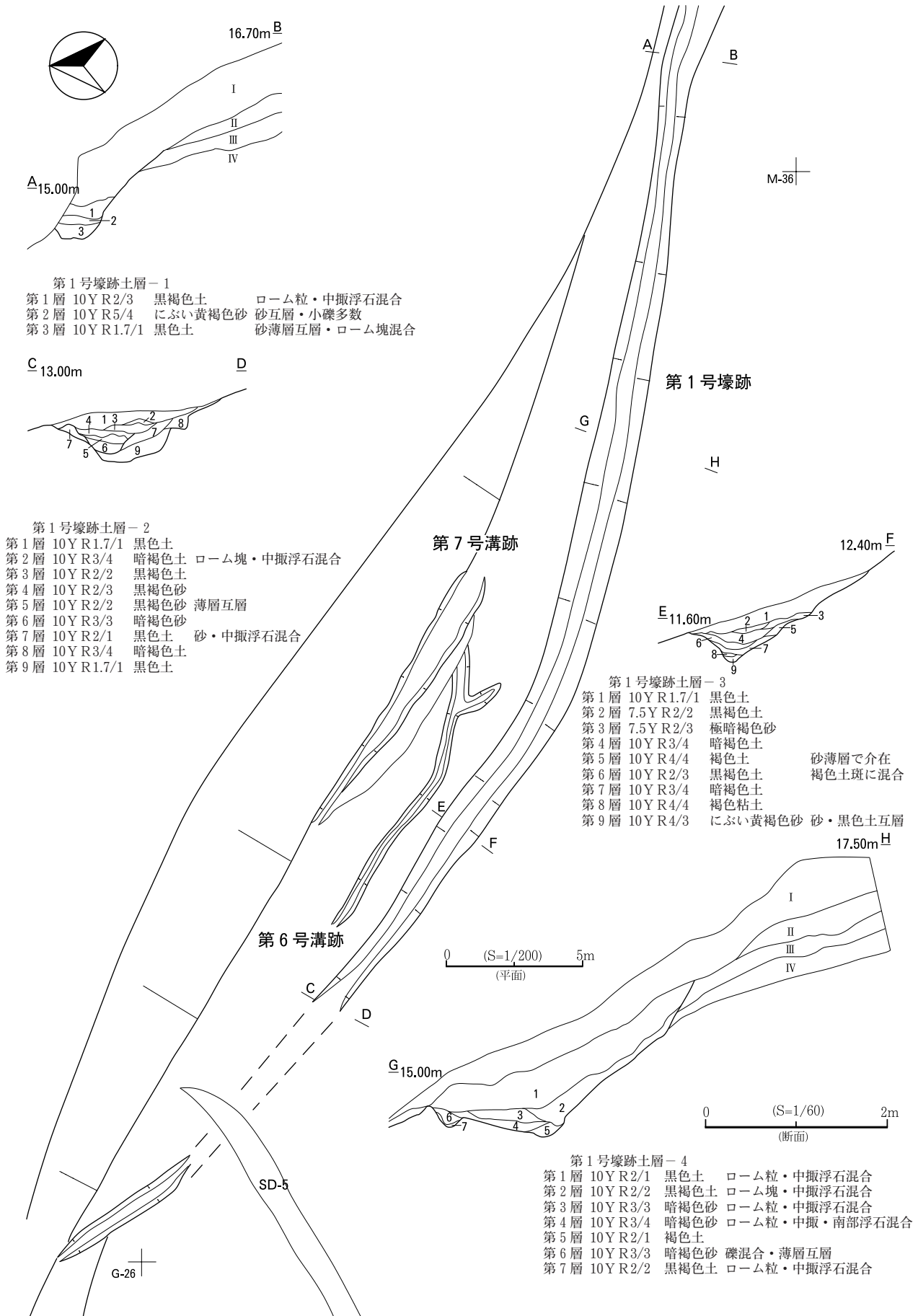


図6 第1号壕跡・第6・7号溝跡

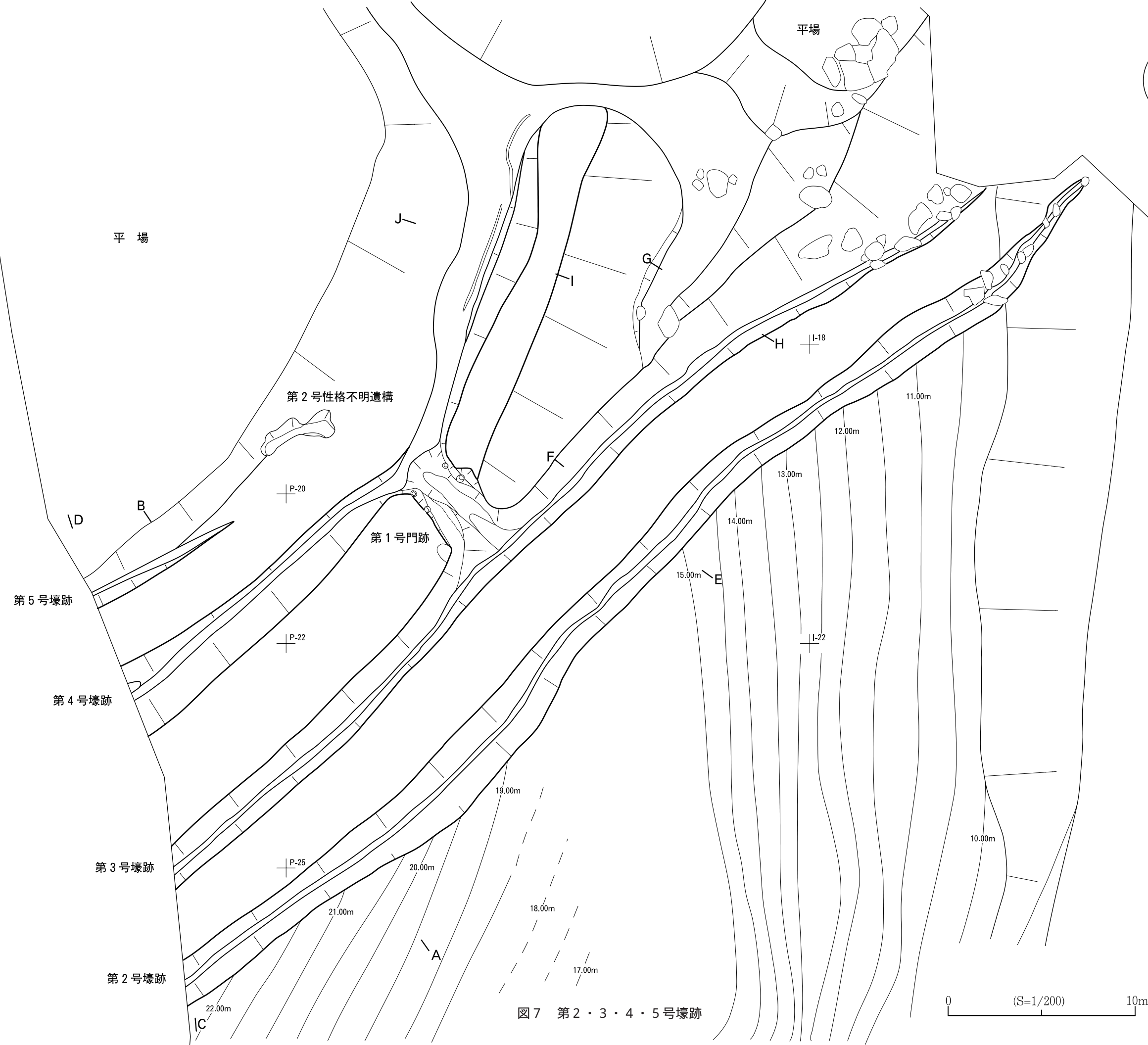
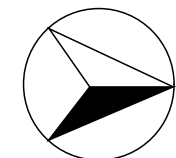


图7 第2・3・4・5号壕跡

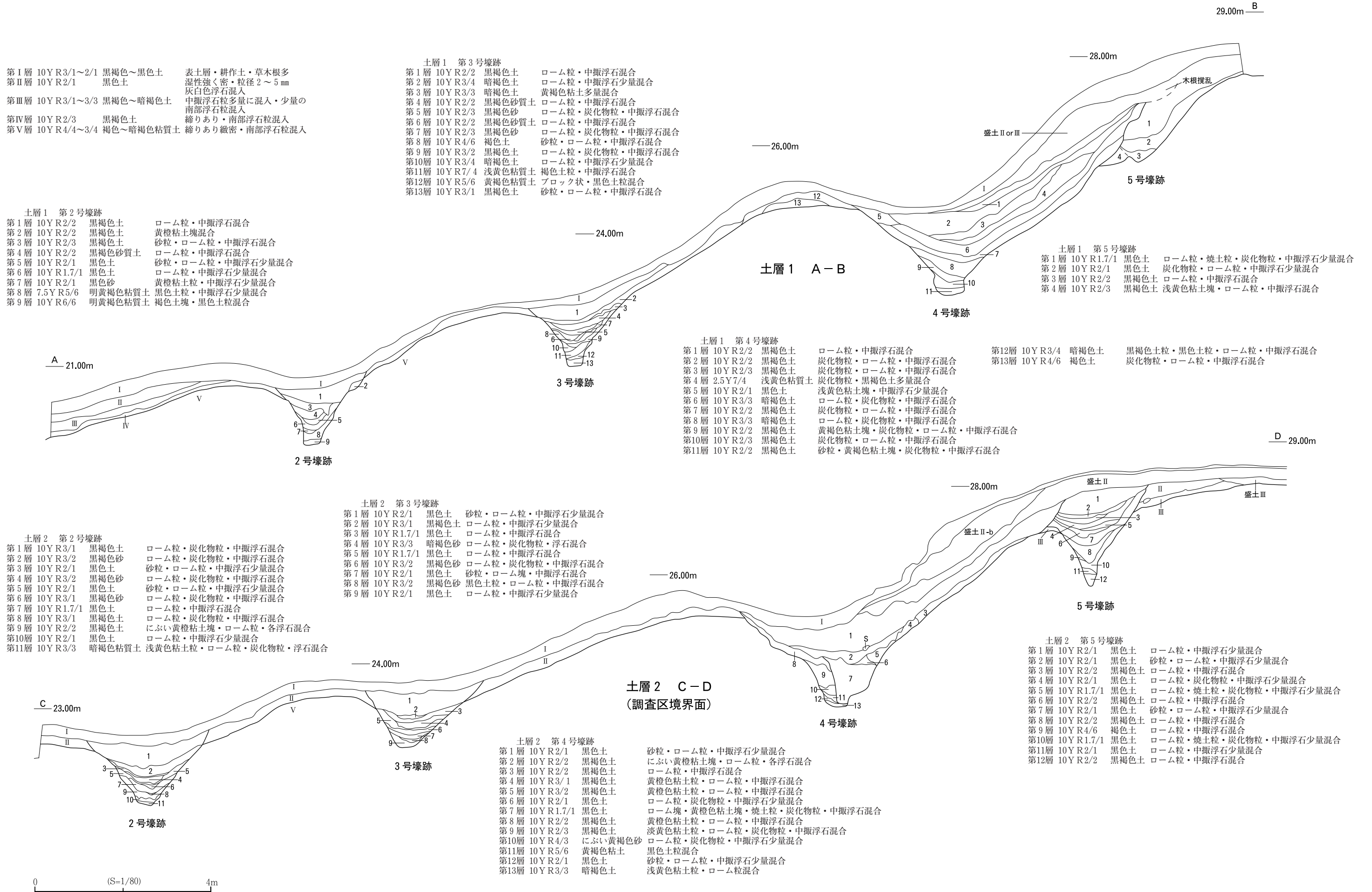
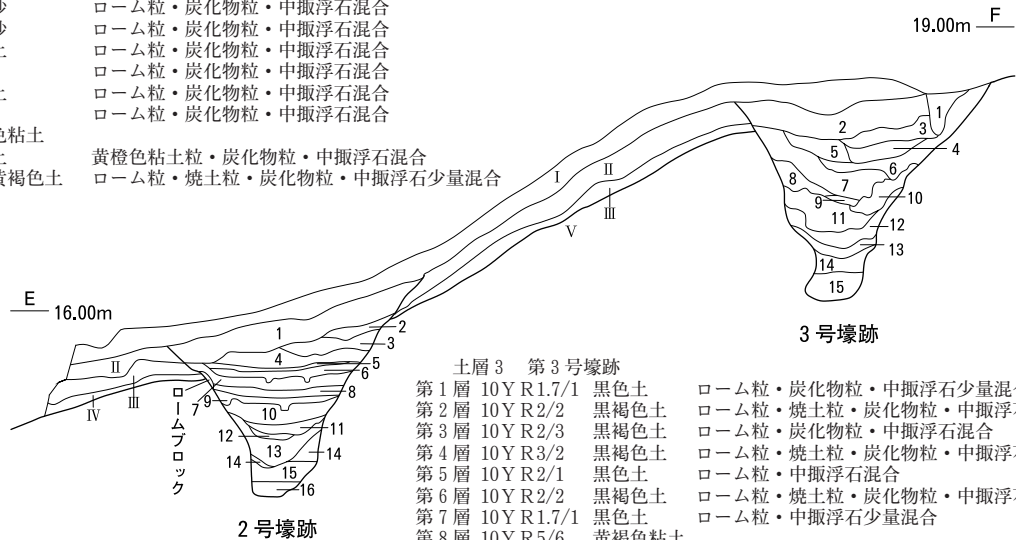


図8 第2・3・4・5号壕跡土層(1)

土層3 第2号壕跡

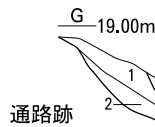
第1層	10Y R2/2	黒褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物粒・中振浮石混合
第2層	10Y R2/1	黒色土	ローム粒・中振浮石混合
第3層	10Y R3/3	暗褐色砂質土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第4層	10Y R6/4	にぶい黄褐色砂質土	明褐色粘土粒・炭化物粒・中振浮石混合
第5層	10Y R2/2	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第6層	10Y R3/3	暗褐色砂質土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第7層	10Y R2/2	黒褐色砂質土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第8層	10Y R3/3	暗褐色砂	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第9層	10Y R3/4	暗褐色砂	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第10層	10Y R2/2	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第11層	10Y R2/1	黒色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第12層	10Y R3/3	暗褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第13層	10Y R2/1	黒色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第14層	2.5Y6/6	明黄褐色粘土	黄褐色粘土粒・炭化物粒・中振浮石混合
第15層	10Y R3/4	暗褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物粒・中振浮石少量混合
第16層	10Y R5/4	にぶい黄褐色土	

土層3 E-F



土層3 第3号壕跡

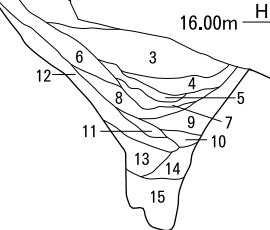
第1層	10Y R1.7/1	黒色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石少量混合
第2層	10Y R2/2	黒褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物粒・中振浮石混合
第3層	10Y R2/3	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第4層	10Y R3/2	黒褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物粒・中振浮石混合
第5層	10Y R2/1	黒色土	ローム粒・中振浮石混合
第6層	10Y R2/2	黒褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物粒・中振浮石混合
第7層	10Y R1.7/1	黒色土	ローム粒・中振浮石少量混合
第8層	10Y R5/6	黄褐色粘土	
第9層	10Y R2/3	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第10層	10Y R2/2	黒褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物粒・中振浮石混合
第11層	10Y R5/8	褐色粘土	砂粒・炭化物粒・中振浮石混合
第12層	10Y R4/6	褐色粘土	砂粒・黒色土混合
第13層	10Y R5/6	黄褐色粘土	
第14層	10Y R2/2	黒褐色土	砂粒・ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第15層	10Y R3/3	暗褐色土	砂粒・ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合



土層4 G-H

土層4 第3号壕跡

第1層	10Y R2/3	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第2層	10Y R2/2	黒褐色土	ローム粒・中振浮石混合・明褐色土互層
第3層	10Y R3/3	暗褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第4層	10Y R4/4	褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第5層	10Y R1.7/1	黒色土	ローム粒・中振浮石少量混合
第6層	10Y R4/6	褐色土	ローム粒・中振浮石混合
第7層	10Y R2/3	黒褐色土	砂粒・ローム粒・中振浮石混合
第8層	10Y R2/2	黒褐色土	砂粒・ローム粒・中振浮石混合
第9層	10Y R2/3	黒褐色土	褐色土・ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第10層	10Y R2/1	黒色土	ローム粒・中振浮石混合
第11層	10Y R2/3	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第12層	10Y R3/4	暗褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第13層	10Y R2/3	黒褐色砂質土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第14層	10Y R3/3	暗褐色砂質土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第15層	10Y R3/2	暗褐色砂	ローム粒・炭化物粒混合・小礫多数



土層4 通路跡

第1層	10Y R3/3	暗褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物粒・中振浮石混合
第2層	10Y R4/6	褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物粒・中振浮石混合

土層5 I-J

土層5 第4号壕跡

第1層	10Y R2/3	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第2層	10Y R4/4	褐色土	ローム粒・中振浮石混合
第3層	10Y R2/1	黒色土	黄褐色粘土塊・中振浮石混合
第4層	10Y R2/3	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第5層	10Y R4/6	褐色土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合
第6層	10Y R4/4	褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物粒・中振浮石混合
第7層	10Y R4/6	褐色砂	ローム粒・炭化物粒・中振浮石少量混合
第8層	10Y R4/3	にぶい黄褐色砂	ローム粒・炭化物粒・中振浮石少量混合
第9層	10Y R3/3	暗褐色土	砂粒・ローム粒・焼土粒・炭化物粒・中振浮石混合
第10層	10Y R5/6	黄褐色粘質土	砂粒・黒色土粒・炭化物粒少量混合
第11層	10Y R2/2	黒褐色砂質土	ローム粒・炭化物粒・中振浮石混合

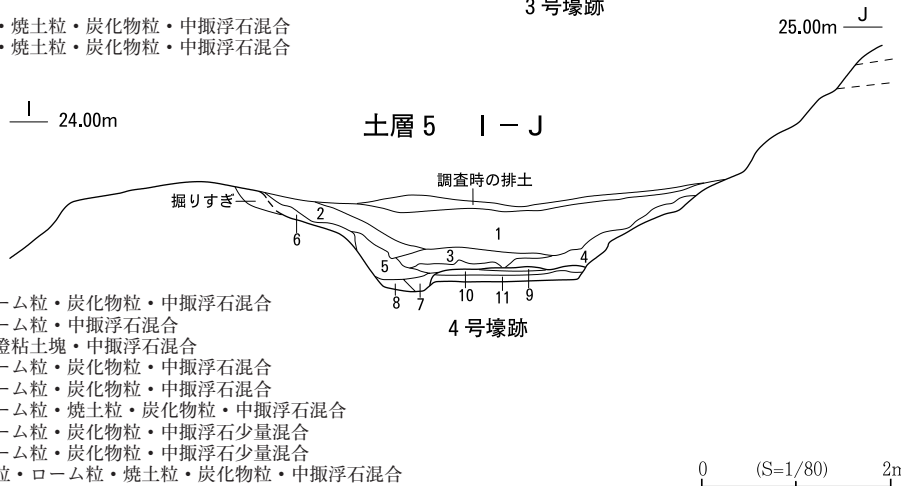


図9 第2・3・4号壕跡土層(2)

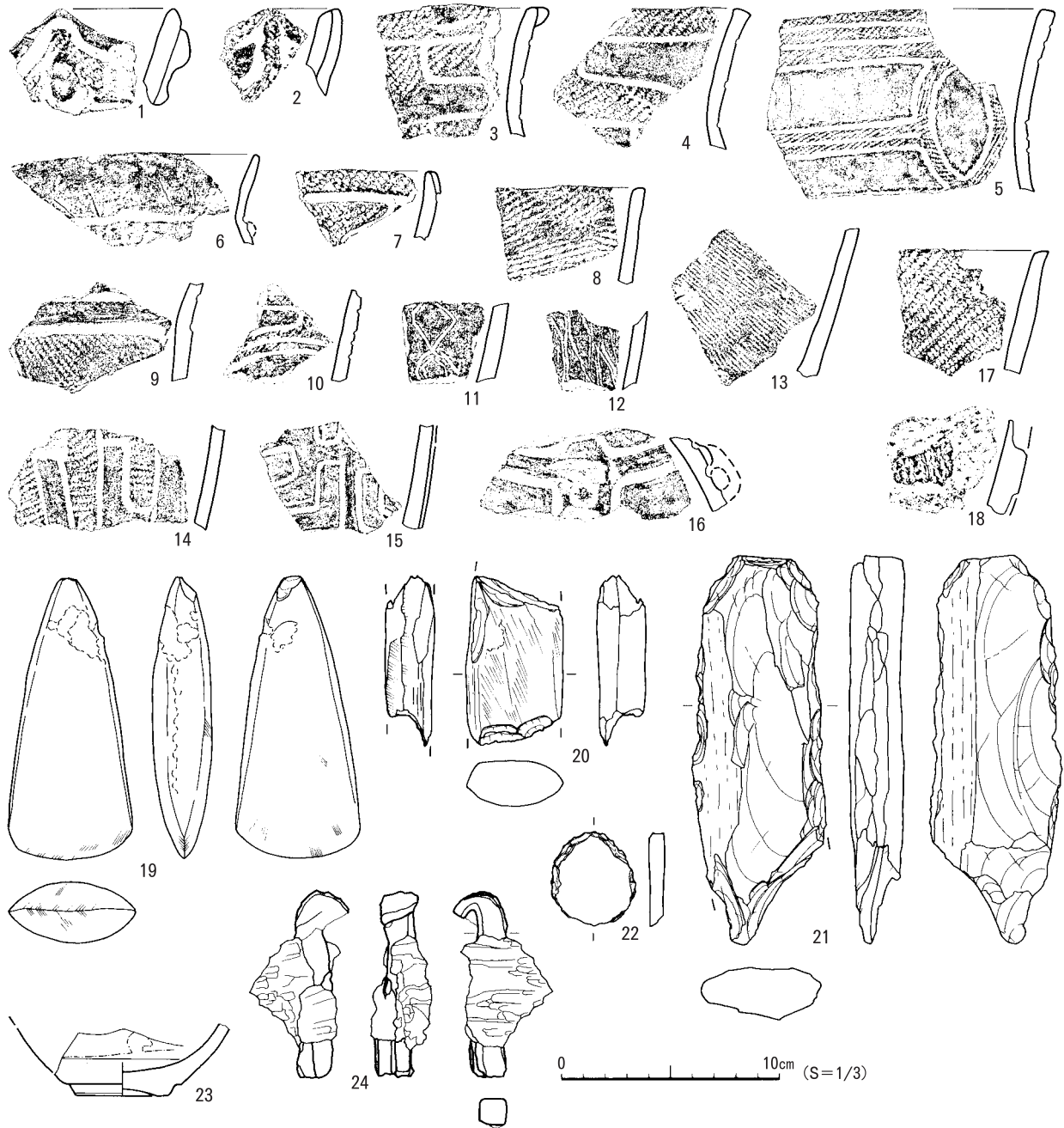


図10 第2号壕跡出土遺物

[土層] 壕は自然埋没している。黒褐色土を主体とし、おおよそは堆積土の上位に黒褐色土、中位に砂と砂の混合土、下位にロームや粘土塊を混合した黒色土で、最下層には礫を混入する。土層1の第4・7層、土層2の第2・4・6層、土層3の第4～11層は砂および砂を多量に混合する層でシルトを介して堆積している。特徴的なのは堆積層に硬化した層が複数面みられることである。土層1では第3・5層上面が特に硬く、ほかは上記の砂層の上面やその層中に、3～5mmほどの厚さで硬い面が形成されている。面的にあると思われるが捉えられず、硬化面は各地点によって異なる。硬化の要因は踏みしまりによるものと考えられる。また、土層3の第3～11層は水平に堆積している点で他の土層と堆積状況が異なる。砂の層が厚く、滞水または砂が止まりやすい状態であったものと思われる、位置的に門跡との関係が指摘される。ほかにH-18グリッドから北西側には崩落したと思われる角礫が

下位から壕底にかけて出土している。

[出土遺物] 埋没時に自然流入したものですべて堆積土中から出土している。縄文土器125点 (1905.3 g)、縄文時代の石器類8点、陶磁器1点、鉄製品1点がある。土器は、すべて小破片で形状および文様構成が判るものは無い。図10-1～16は第 群土器で、1・2は波状口縁でボタン状、懸垂状隆帯が付けられる。3～5・9・10・14は磨消縄文で、5は沈線で方形文と楕円形文を施文する。9の横位沈線は頸部の文様区画帯だろう。6は口縁部無文帯となるもので、7は口唇の隆帯上に施文される。10は方形および二重に弧状文が施文される。14は縦位のコ状文と思われる。15・16は壺形土器で無文地に長方形文ないしはコ状文が施文される。16は橋状把手が剥落した部位である。17は第 群土器で、18は第 群土器である。20は石刀の破損品で、21は石刀の未製品と思われるが、側縁の状態から削器および敲打具として使われた可能性がある。22は石製円盤である。陶磁器と鉄製品については後述する。

[小結] 『南部諸城の研究』の記載にある一番外側の壕跡に相当する。区画と防御を意識してつくられた施設であるが、堆積土中に踏み締まりによるものと考えられる硬化面が複数みられることから、埋没過程で通路として使用されているものと判断した。堆積土出土の陶磁器から16世紀中葉以前に廃絶している。

第3号壕跡 (図7～9・11)

[位置と確認] 第2号壕跡の西に隣接してある。現地形では窪みではなく、斜面上に細長い平坦な段として、調査区内に約60mの長さで確認された。

[規模と方向] 完掘後の長さは約65mで、R-26～G-17グリッドまで第2号壕跡に沿って斜面を北西方向に抜けている。第2号壕跡との間隔は約4mである。壕跡の上幅および壕底の幅、深さも第2号壕跡とほぼ同じであるが、土層4にみられるように門跡から北側は、壕の西側通路跡との比高差が大きく壕幅も広いものとなる。壕底と底付近の壁の状態もほぼ同様で、流水により抉られ筋状に蛇行した痕跡が残る。断面形状も同じで、調査区南側境界面では開いたV字状であるが、グリッドRラインから北側は中位で開くY字状となる。壁面の勾配はおよそ40～50°程で、西側法面の傾斜がやや緩くなる。端部の比高差も第2号壕跡と変わるところはなく、本壕跡も調査区外では明確に確認できない。

[土層] 壕は自然埋没しているが、一部埋められている箇所がある。堆積土の状態は基本的には第2号壕跡と変わらず砂層が介在しているほか、上面が硬化している層も複数の面にみられる。土層1では第4～7層、土層2では第6層が水平堆積を示し特に硬い。土層3では第4・6層上面が硬化している。土層4では第5～10層に前述の層ほどではないが硬化がみられる。第2号壕跡と同じく硬化の要因は踏みしまりと考えられる。堆積状況が他と異なるのは、土層3の第8～13層までが埋め土である点である。土層面にみられるように黄褐色ロームが厚く層をなしており、土層4までの間に壕を塞ぐように広がっていた。部分的な埋め土で当初は気づかなかったが、調査終盤に検出された門跡が壊されていることから、その際の排土の可能性が高い。土層3と4の間は大型の礫が下位から中位にかけて他よりも多く出土していることも関連しているものと思われる。また、北側端部付近は、第2号壕跡と同じく角礫が多く、大型の礫で塞がっている箇所もある。

[出土遺物] 堆積土中に流入したもので、縄文土器183点 (3018.9 g)、縄文時代の石器類11点、古銭1点と表土掘り下げ時に壕跡の西側斜面から緇銭が出土している。図11-1～18は第 群土器で、1

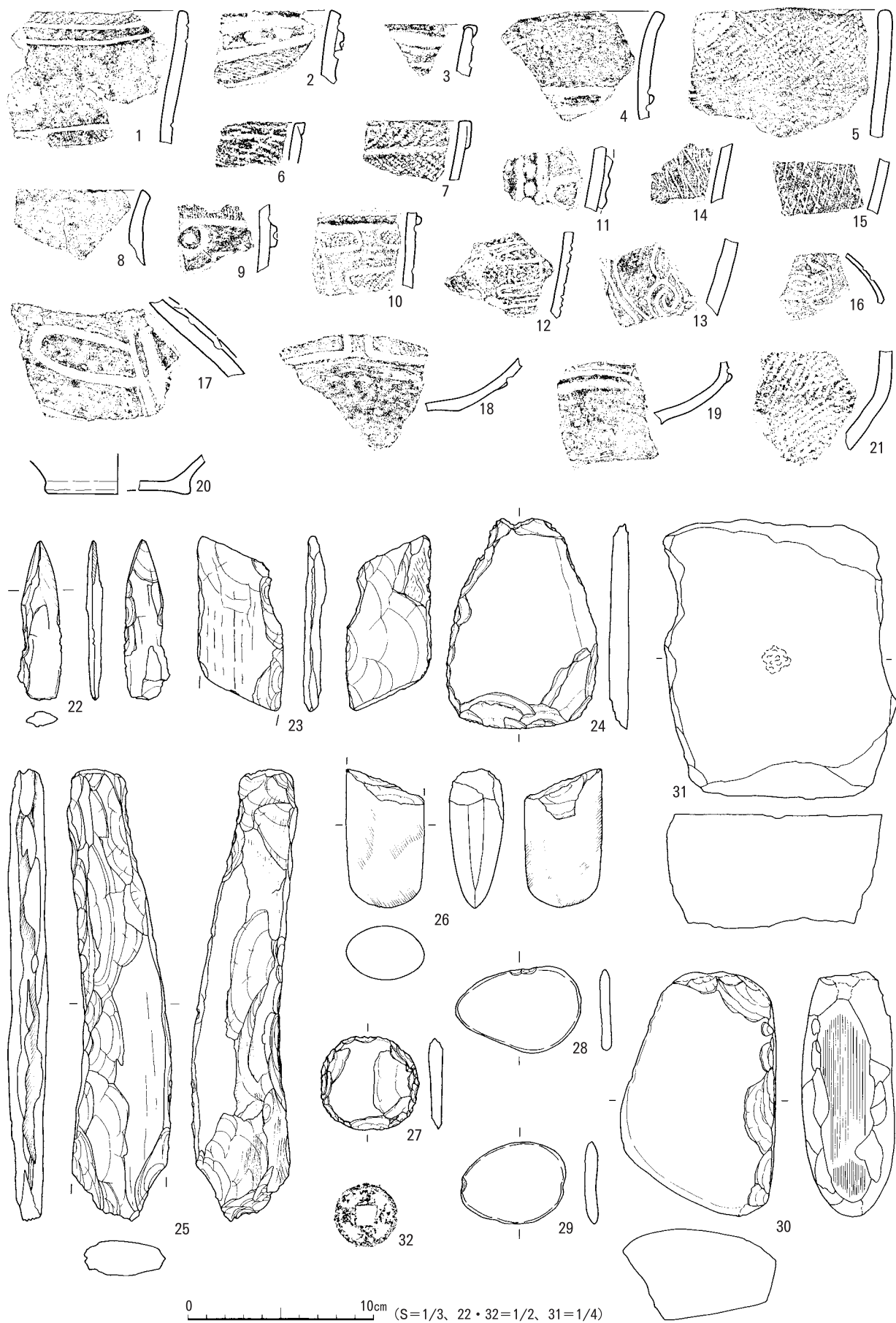


图11 第3号壕跡出土遺物

は横位沈線で文様帯を区画し口縁部無文帯となる。2は口縁部の横位隆帯の上下に沈線を施し、隆帯上には工具圧痕を施している。4は頸部に隆帯と沈線を施し口縁部無文帯としている。11は縦位の隆帯上に圧痕が付けられており、9はボタン状隆帯が付けられている。10は隆帯下に磨消縄文で方形文またはコ状文が施される。13は弧状文と連結渦巻文が施される。16～19は壺形土器で、17は垂下する隆帯の横に楕円形文が施される。18は底部直上に区画の隆帯を配し、胴部に長方形文が施されL Rが充填施文される。5～7・14・15は地文縄文で6は折り返し口縁にR縄文が、7はL R縄文が施文される。14・15は単軸絡条体第5類が施される。21は第 群土器でL Rが施文される。22は粘板岩製の刺突具で、先端を研磨して作り出している。25は石刀で先端を破損する。未製品と思われるが、側縁の敲打痕から使用されている可能性が高い。24・27～29は石製円盤の類で24は短冊状に整形されている。30は一側縁に幅広の磨り面をもつ。31は台石である。古銭類については後述する。

[小結] 『南部諸城の研究』の平面略図には表記されていないが、断面図と記載中にある二番目の壕跡に相当する。第2号壕跡と同じく区画・防御の他に、埋没過程で通路として使われている。また、一部に認められた埋め土から、門跡に連続した通路使用も考えられる。構築と廃絶後の利用は第2号壕跡と連動していたものと思われる。

第4号壕跡 (図7～9・12・13)

[位置と確認] 現況で確認できる最も内側の壕跡で、M - 15～R・S - 23グリッドに位置する。南側調査区境界から20mほどは第2号壕跡と同じ傾斜した溝として確認されるが、その先は壕幅も広いほぼ平坦な面で確認された。当初は、図2・5に波線で示した伐採木搬出用通路の敷設や使用で壊されたほか、一部を埋められたものとみられた。

[規模と方向] 調査区内には約40mの長さがあり、端部は急崖に向かい突き抜けている。第2・3号壕跡が斜面に沿って直進するようにつくられているのに対し、本壕跡は中間部分で西方向に傾き平場に沿うようにつくられている。断面形状は、Y字に開く点で第2・3号壕跡と同じだが、開きが大きく壕幅は5～6mと広がる。壕底の幅も約70～90cmと広いが、底面の傾斜は第2・3号壕跡に比べ緩く、後述する門跡を境にほぼ平坦となる。底面から直立する壁は高さを減じ、調査区境界から20mほどはかろうじてY字状であるが、門跡を境に断面形状は逆台形状に変化する。壕底幅も徐々に広くなり北西端部では約8mとなる。

[土層] 自然埋没しているが、一部埋められているものと思われる。壕跡の形状変化により、変化点である門跡の南側と北側では地積状況も異なる。南側の堆積はレンズ状を示しており第2・3号壕跡の状態と変わらないが、砂層の介在は少ない。踏み締まりにより硬化した面は土層1では第6～8層上面、土層2では第7層上面で認められる。また、土層1の第3層中から図13 - 35の陶磁器が出土していることから第3層から上位層は近世に流入または埋められたものであり、その上の盛土は平場西側土層の 層と同じであることから近代から現代のものと思われる。さらに、他の壕と異なる点として、調査区境界面である土層2の第7層部分がある。本壕跡がほぼ中位まで埋没した時点で掘り返されているもので、黒色土と黄色ローム・白色粘土が細かいブロックで混合する。単一層であることから、掘り返し後にすぐに埋め戻されていると判断される。この掘り返しにより西側壁面も広げられているようであるが、部分的なもので調査区境界から僅か1m足らずで掘り返しの痕跡は止まって

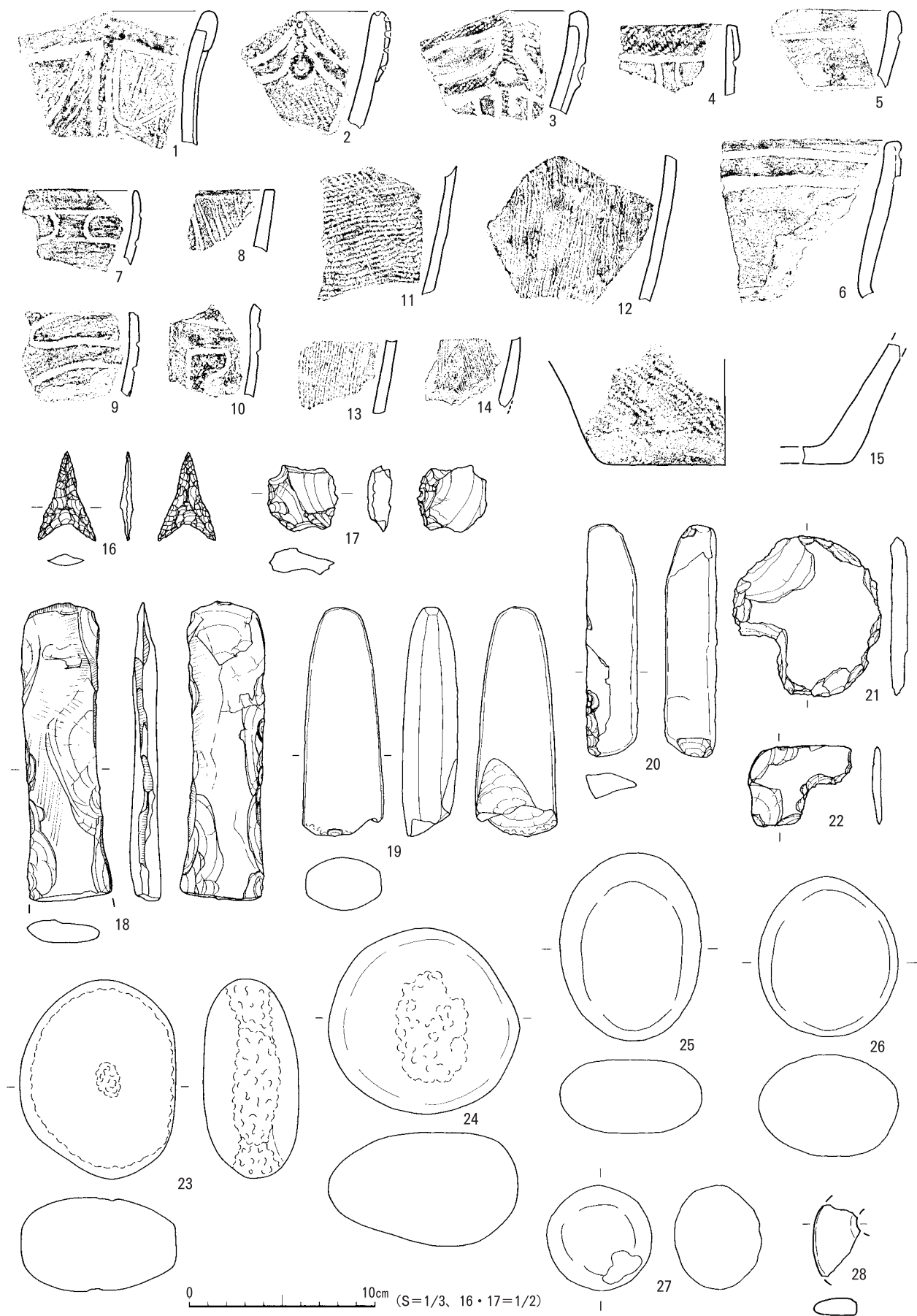


图12 第4号壕跡出土遺物(1)

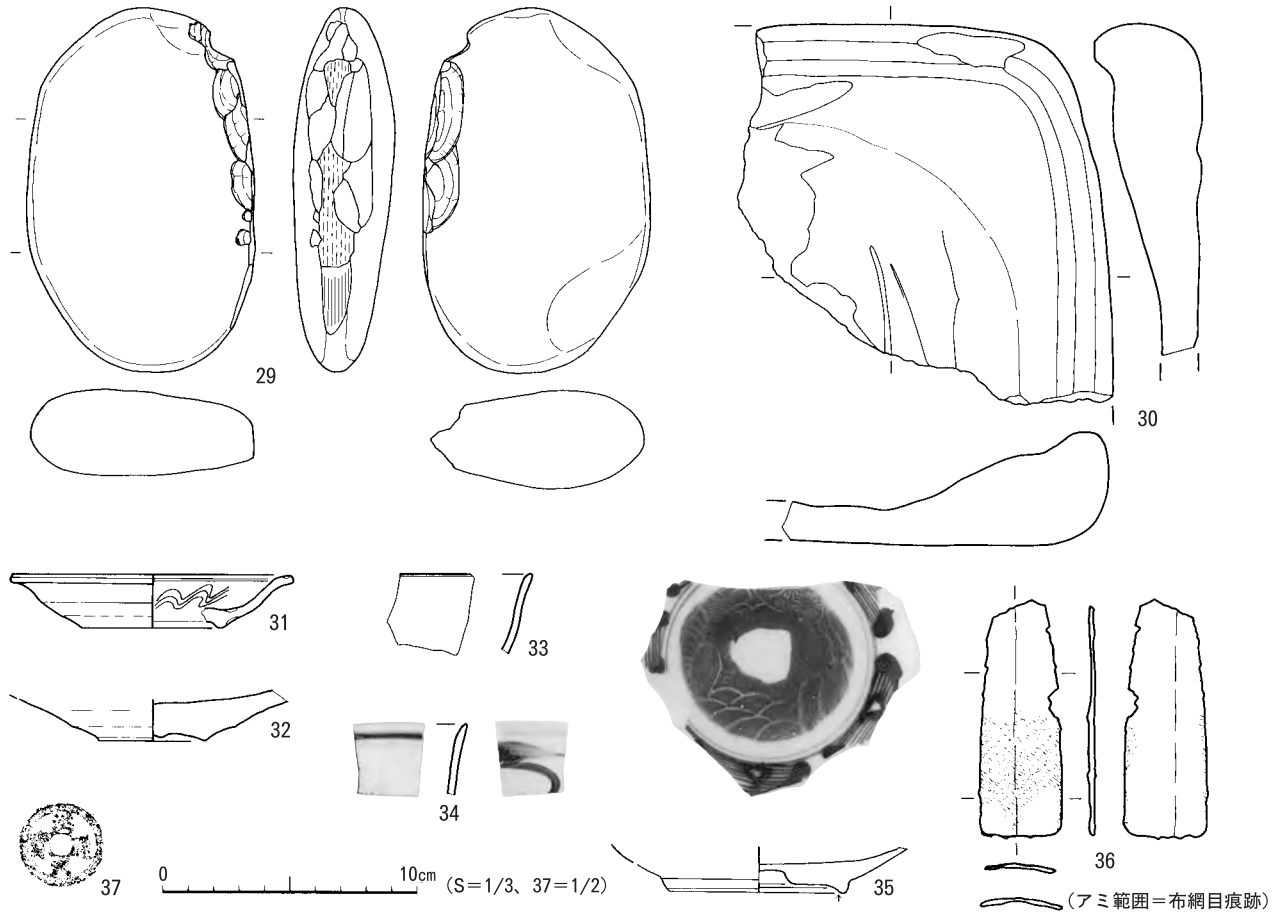


図13 第4号壕跡出土遺物(2)

いる。壕の形態が変化する南側の堆積は土層5に示した。第1～4層は黒色および黒褐色土で自然堆積なのか埋め土なのか判断しかねる。第9層以下は水平な層で、特に第10層は黄褐色粘土を貼り付けているようである。第9～11層と底面は硬く締まっており、底面には鉄分が沈着している。また、土層断面に示したが、壕底の北側に溝状の掘り込みがつくられてある。第9層を切り込んで段状に掘られた部分であり、その中の第7・8層が砂層であることから排水溝的機能を目的として掘られた可能性がある。底面の硬化と段状の掘り込み、第10・11層の硬化面から2期～4期の使用およびメンテナンスがあったものと考えられる。

[出土遺物] 堆積土中に流入したもので、縄文土器187点(3026.7g)、縄文時代の石器類15点、土製品1点、陶磁器5点、鉄製品1点、古銭1点が出土している。土器はすべて第 群である。図12-1～3は波状口縁で波頂部から垂下する隆帯が施される。1は口唇にも厚い隆帯が付けられており、口縁に三角形文が施される。2は隆帯の上にボタン状貼り付けがあり、連続刺突が施されている。3は楕円形文が施される。4は折り返し口縁で方形文が施されているようである。5・6は壺形土器の口縁部と思われる。7は鉢形の器形か、長方形文が施文されている。9は楕円形ないしは弧状文、10は方形文またはコ状文が施文される。8・12は単軸絡条体第1類が施されている。13・14は櫛歯状沈線が施されている。16の凹基無茎鏃は鏃身と同じ位の有脚状のカエシがつくられている。18は石刀の基部部分で擦痕が明瞭である。製作途中の破損品と思われるが、側縁の敲打痕から使用されている可能性が高い。20は棒状礫の端部を敲きに使用している。21・22は石製円盤の類で22は方形状である。23は円

礫の周縁が敲きに使用されている。25～27は磨石である。28は破損しているが、中央に孔があるドーナツ状の土製品と思われる。図13 - 29は一側縁に磨り面をもつ。30は縁付きの石皿で破損している。使用頻度が高かったのか中央に向かい大きく窪んでいる。陶磁器と鉄製品・古銭については後述する。

[小結] 『南部諸城の研究』の記載にある一番内側の壕跡に相当する。壕の形態変化から区画・防御はもとより景観的要素も含みつくられた壕で、門跡および通路と強く関連したものと考えられる。掘り返しが部分的で、メンテナンスであるものなのか他の要因があるものなのか検討の余地がある。出土陶磁器から16世紀後葉にはほぼ埋没している。

第5号壕跡 (図7～9・14)

[位置と確認] 現地地形では確認されていない新たに検出された壕跡で、平場東側縁辺のQ - 21～S - 22グリッドに位置する。第4号壕跡とは間に斜面を挟み約4 m離れている。完全に埋没しており、黒色土の溝状のプランで検出された。

[規模と方向] 第4号壕跡と平場の間に平行してある。北側を第4号壕跡に壊されており、南側は調査区外に延びるため全体は不明である。調査区内には約7 mほどの長さで遺存している。断面形状は調査区境界面の土層2では、ほぼV字形で法面の勾配は約60°であるが、土層1では、大きく開いたV字形となり勾配は約45°と緩やかになっている。壕幅はおよそ2～3 m程であったと思われるほか、深さも約1.5 mと他の壕跡に比べやや小さい。壕底幅も狭く、ほとんど傾斜していない。

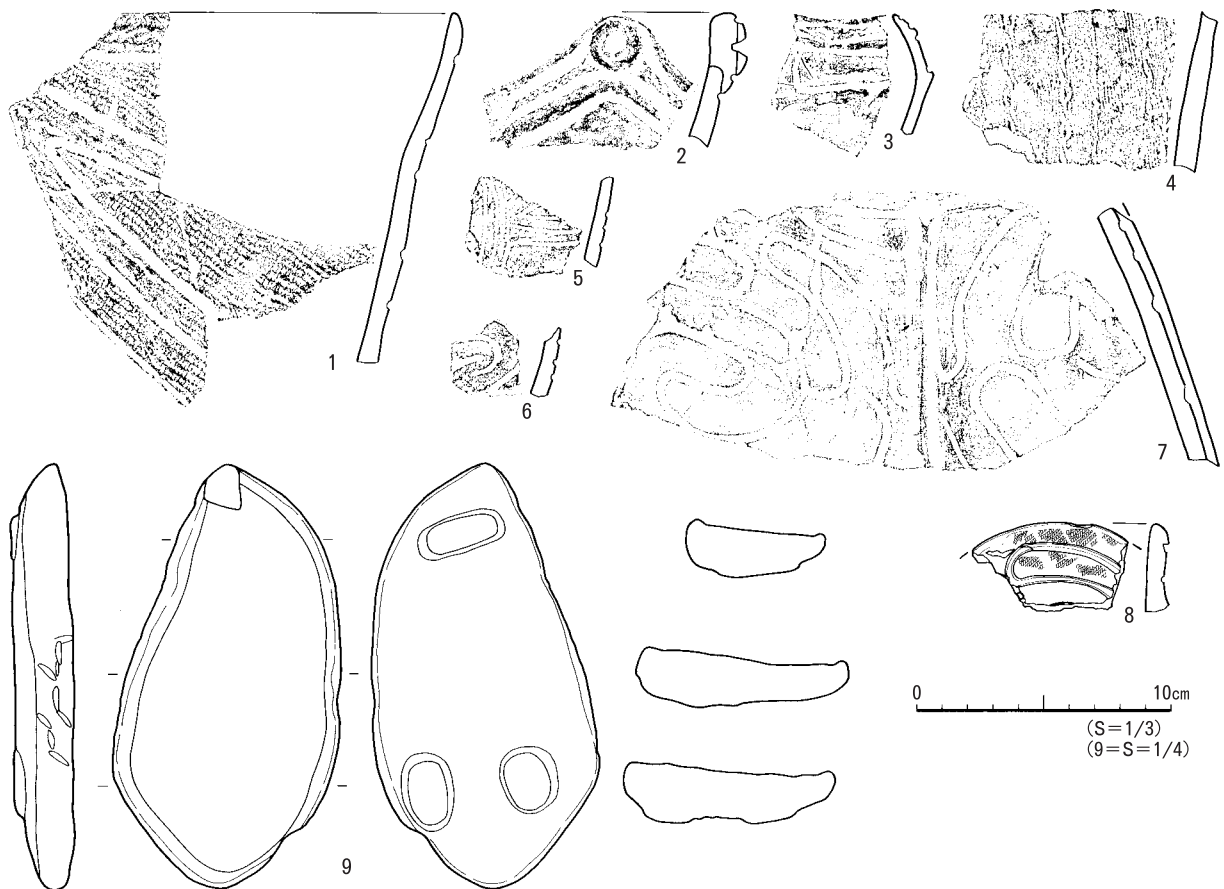


図14 第5号壕跡出土遺物

[土層] 僅かな距離で層分が異なっているが、自然堆積でほとんど黒色土で埋没している。

他の壕跡にみられた砂層や硬化した面は全くない。

[出土遺物] 堆積土中に流入したもので、縄文土器31点(832.4g)、縄文時代の石器類1点、土製品1点が出土している。すべて第 群土器である。図14-1は大型の深鉢形土器で、無文の折り返し口縁をもつ、胴部は地文LRに弧状文を施し磨消している。2は波状口縁で口唇に太い隆帯と沈線を施し、波頂部にボタン状隆帯を付けている。3は鉢型土器で長方形文が施される。4は単軸絡条体第1類で、その結節部も表出されている。7は大型の壺形土器で土器棺の可能性もある。縦位の隆帯を配し渦巻き文が施文される。8は蓋型土器で地文RLに楕円形文が施され磨消している。小さな穿孔がある。9は有脚縁付きの石皿で、側面の一部にクランク文状の刻みが施されている。

[小結] 『南部諸城の研究』の記載にない新たな壕跡である。完全に埋没しており、他の壕跡とはやや形態が違うことや、通路として使用された痕跡がないことから、第1～4号までの壕跡とは時期が異なる壕跡の可能性が高い。また、平場内に平安時代の竪穴住居跡も検出されていることと、付近に環壕を伴う平安時代の集落である風張遺跡があることから、古代の壕跡の可能性も否定できない。

(小田川)

第4節 溝跡 (図6・15)

本調査では3条の溝跡が検出された。

第5号溝跡 (図15)

[位置と確認] 斜面北端の低地部付近に位置する。第1号壕跡精査時に、壕跡と重複して南西斜面に延びる黒色土プランとして検出された。

[重複] 第1号壕跡と重複しており、本溝跡が新しい。

[規模と方向] 北方向に下る緩斜面地を斜めに方向に切るように、H-28～J-24グリッドまで約18mの長さがある。上幅は2m程と思われるが、南側の立ち上がりは斜面と一体となっているため正確にはわからない。底面幅は30～40cmで、ほぼ平坦である。断面形状は、逆台形状および大きく開いたU字状で、壁面には起伏がある。

[土層] 3層に分けられるが第2層は部分的なもので、全体ではほぼ第1・3層の堆積である。第3層は砂質土で上面は硬化している。また、底面も硬化している。この硬化は壕跡と同じく踏みしまりによるものと考えられる。

[小結] 出土遺物が無く時期は不明であるが、底面と堆積土中の硬化面から、通路としてつくられ壕跡と関連していた可能性が高い。約18mの長さで検出されたが、西側に延びていたものと思われる。

第6・7号溝跡 (図6)

[位置と確認] I-30～J-33グリッドに位置し、2条とも第1号壕跡の北側に近接してある。

[重複] 重複しているが関係は不明である。

[規模と方向] 2条とも第1号壕跡と平行して約10mの長さがある。幅は第6号溝跡が最大1.2m、第7号溝跡が約50～60cmで枝分かれしている。深さは約20～40cmで、底面には起伏がある。

[土層] 双方共に図化していないが、砂が多く黒色土に礫と黄色ローム塊が混合した層である。

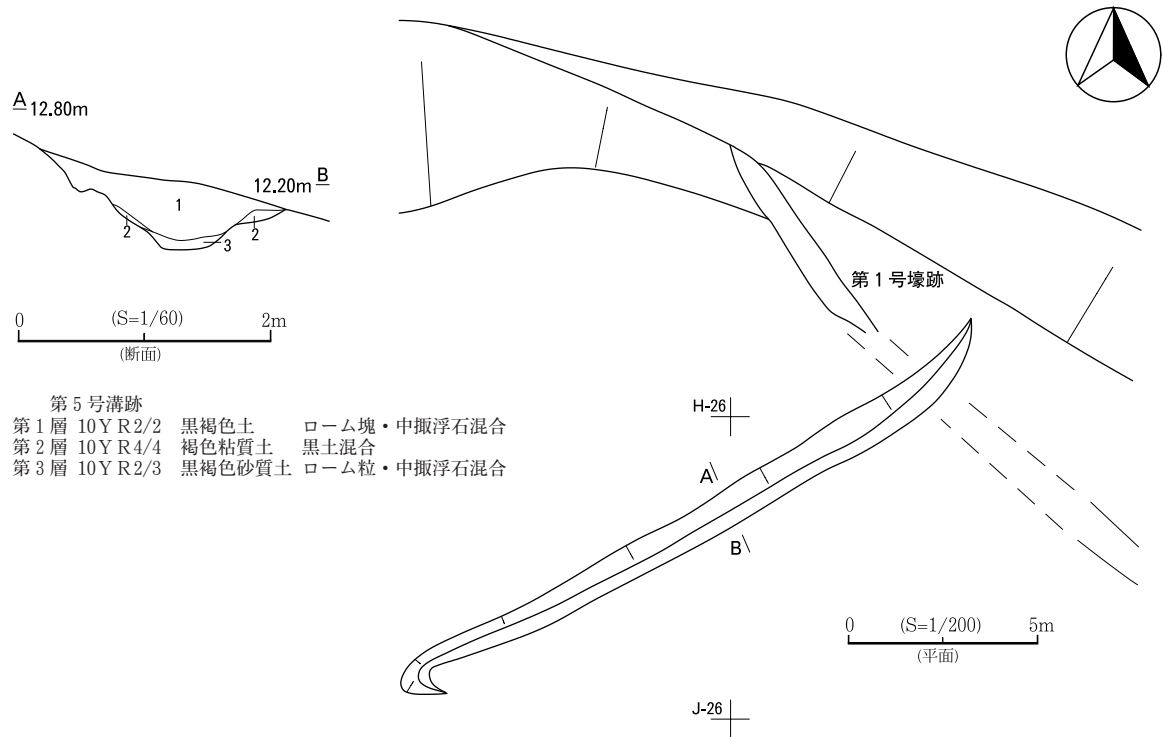


図15 第5号溝跡

[小結] 第1号壕跡に掘り返しまたは作り替えの痕跡があることから、それに繋がるものの可能性があるが部分的で詳細にない。緩傾斜地にあり第7号は流路の可能性もある。時期は不明である。

(小田川)

第5節 門跡

本調査では2箇所門跡を検出している。

第1号門跡 (図16)

[位置と確認] N・O・20・21グリッドに位置する。排土搬出路の真下にあり調査終盤まで気づかなかったが、第3号壕跡完掘時に壁面の一部に多量の礫を検出した。礫は溝状の窪みに、黒色土を主体にした混合土と混在しており、その時点では斜面であることから壕法面が流水により削られ、その流路補修のため充填されたものと思われた。

[規模] 門跡は第3号壕跡と第4号壕跡の間の、第4号壕跡が形態変化する箇所であり、第3号土塁のほぼ中間を約3×5mの箱形に掘り込んでつくられている。掘り込みの深さは約60cmで、南北両側には4個の柱穴が掘られている。各柱穴は円形で直径約30~40cm、深さは30~75cmある。柱穴の間隔はPit1とPit2の間が70cm、Pit3とPit4の間が75cm、Pit1とPit4の間が1.95m、Pit2とPit3の間が2.05mあり、ほぼ四角形に整然と配置されている。柱穴の間の底面は傾斜しており、前述の流路状の溝に切られているが、硬化した面も確認されている。

[小結] 掘り込み内の柱穴配置と硬化面から門跡としてよいだろう。第1~4号壕跡は埋没過程で通路として機能しており、関連していたと考えられる。特に、第3号壕跡中に埋め土が認められること

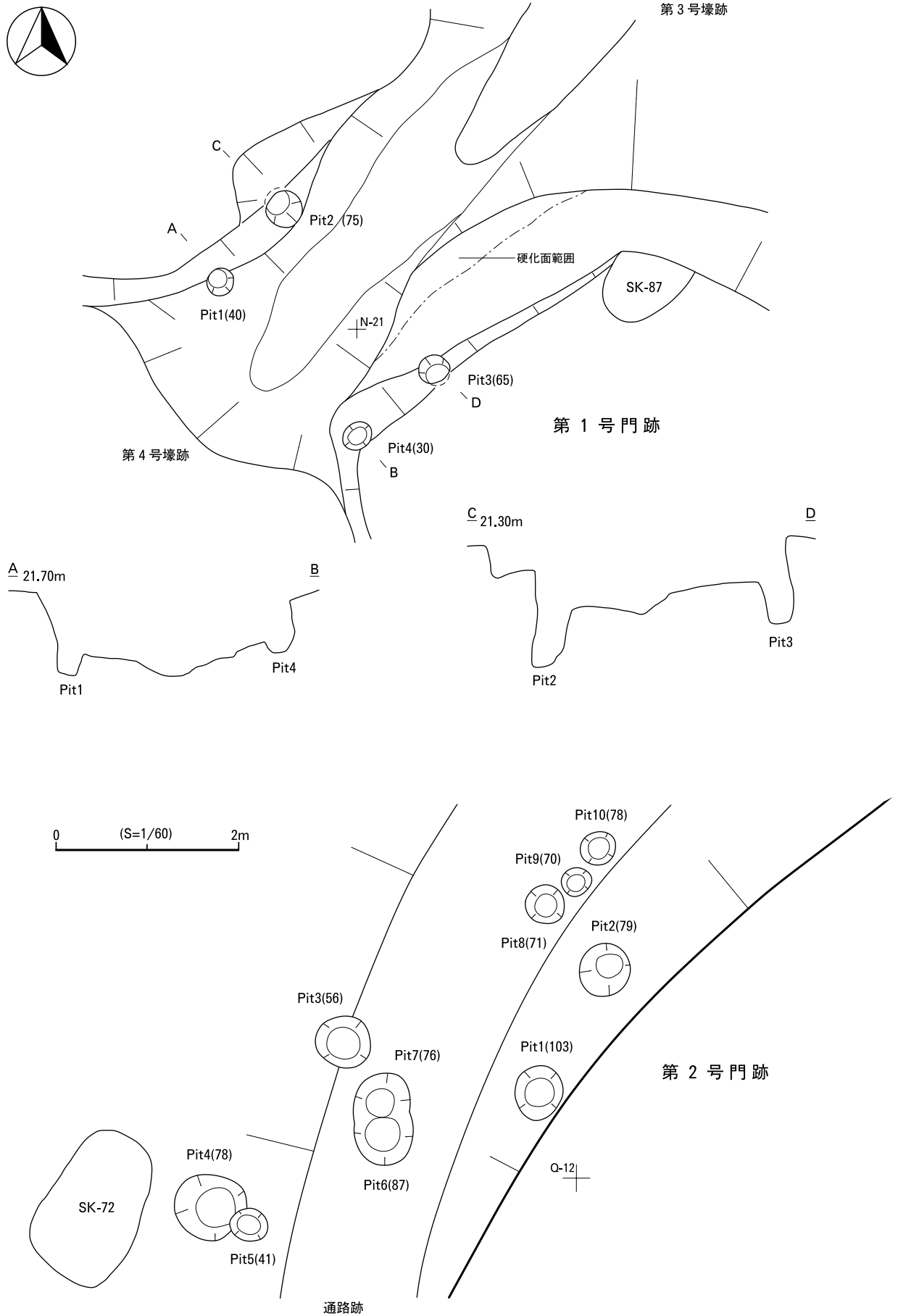


図16 第1・2号門跡

から、第3号壕跡埋没過程につくられた可能性が考えられる。門跡内部の硬化面を切り礫を充填する溝があることから、第3号壕跡の埋没途中の短い期間に機能し、壊され埋められた可能性も否定できない。いずれにしても出土遺物が無く構築および廃絶時期は不明である。また、平場斜面のP・Q-20グリッドにあるSX-2は当初は攪乱と判断されたものである。しかし平場縁辺のQ-20グリッドにある柱穴群と合わせてみると、門の面前に位置することから、推測であるが、斜面を斜めにショートカットして平場に登る通路または施設跡であった可能性もある。

第2号門跡 (図16)

[位置と確認] 平場北西部の急崖落ち際、Q-12グリッドに10基のPitを検出している。柱穴と考えられるPitはこの部分と平場以外にはなく、このPit数と位置からは建物跡は想定されず、通路跡に接してあることから門跡とした。

[規模] 各柱穴はほぼ円形で直径約30~80cm、深さは41cm~1.03mある。深さは平場内の掘立柱建物跡の柱穴と遜色はない。しかし全てが門柱であったとは思われず、門であれば通路を挟んで存在したものと考え、Pit1~4までがそれぞれ対峙して門柱となっていたものと思われる。門跡として4つの組み合わせができるが、どのPitがどれに対応するのかわかり不明であり、作り替えも想定される。Pit1とPit4の間は3.1m、Pit2とPit3の間が2.4m、Pit1とPit3の間が1.6mある。

[小結] 急崖に面した犬走り状の通路に伴う門跡で、第1号門跡と連動していたものと思われる。平場への出入り口であるが、規模から通用口的な門であったものと思われる。(小田川)

第6節 通路跡 (図17)

前述のように、壕跡は埋没途中に通路として使われており、壕底に通路の痕跡を確認できなく断言できないが構築当初からその機能も有していた可能性がある。この壕底道という通路は館内に入りするものであり、館の廃絶後も生活道として慣習的に使われていたものと考えられる。

硬化した通路の痕跡は第1~4号壕跡と第5号溝跡にみられ、通路に関連する第1号門跡は第3号土塁の上に第2号門跡は平場西側縁辺に検出されている。

このほかに、第2号土塁の北端にあたるK-21・22グリッドの第1層地山面には幅1m程の硬化面がみられるほか、通路とするため造成された箇所がある。一つは第2号壕跡と第3号壕跡の間に残る土塁状斜面のK・L-20グリッドで、約2mほどの幅で削平された傾斜の弱い箇所が認められる。次に、第3号土塁北側のK-15~18グリッドの部分で、平坦に第3号壕跡に向かい緩やかに傾斜している。緩傾斜の部分は図9の壕跡土層4に通路跡として示したように混合層が堆積している。さらに、平場北端と急崖の間のP-12~15グリッド範囲は、急傾斜の崖をさらに真っ直ぐに切り崩して幅1~1.5m程の平坦な面とし、第4号壕跡北端から西側に登るように造られている。この切り崩しは部分的に礫層に及んでいるが、一部に路肩を保護するためか礫を敷設している箇所がある。平場西側縁辺も同様に削平されており、その後に写真17に示したように張り土されている。平坦面を造る削平と貼り土は、平場を巡るように南側に延びるほか、貼り土は平場内のR-13グリッドまで延びている。

上記の通路の痕跡から、図17に示したような4つの経路があったと考えられる。第1号壕跡を壕底道とし、館を迂回して出入りする経路。第2号壕跡を壕底道とし、館の南側に直接出入りする経

路。は第3号壕跡を壕底道とするもので経路はさらに分かれる。 - 1は館の南側に直接出入りする経路。 - 2は第1号門跡を通り第4号壕跡南側に向かい館に出入りする経路。 - 3は第1号門跡から崖に向かい犬走り状の削平地を通り、第2号門跡から平場内に入出入りする、または平場西側を巡る経路。第5号溝跡を通路とし、埋没した第2・3号壕跡を横断して第4号壕跡の北端部に出て第4号壕跡を南に向かう経路と、第2号門跡から平場内に入出入りする、または平場西側を巡る経路である。通路の機能時期は詳細にないが、壕跡硬化面や第1号門跡のあり方から館廃絶後、近世においても使用されている。状況的にの経路が最も新しく、ないし - 1が初期のものであったと考えられる。また、～が同時に機能していたとも考えられるが確証はなく、第2・3号壕跡北端にみられる岩盤の崩落から、グリッドJラインから北側が通路として機能しなくなった時点でが使われだしたものと思われる。他に、これら通路の共通点は河川を起点としていることである。何らかのかたちの水利用に関連したものと考えられるが、さらに検討の余地がある。(小田川)



図17 通路跡

第7節 掘立柱建物跡・塀跡 (図18～20・41)

柱穴と考えられるPitは平場内から363基検出された。R～T-16～18グリッドに集中しており、これらから4軒の掘立柱建物跡を復元した。掘立柱建物跡はS・T-16～19グリッドに位置するが、ひろいきれなかった多数の柱穴の中にも建物跡として南側調査区外へ伸びるものがあると思われる。この他に、4つ以上の柱穴が等間隔で並ぶものを塀跡と推定した。塀跡の軸方向は掘立柱建物跡と同じものがあるが、総長や平均柱間寸法に規則性は見られない。

想定した第1～4号掘立柱建物跡および塀跡とした柱穴からは出土遺物が無く、年代は不明である。

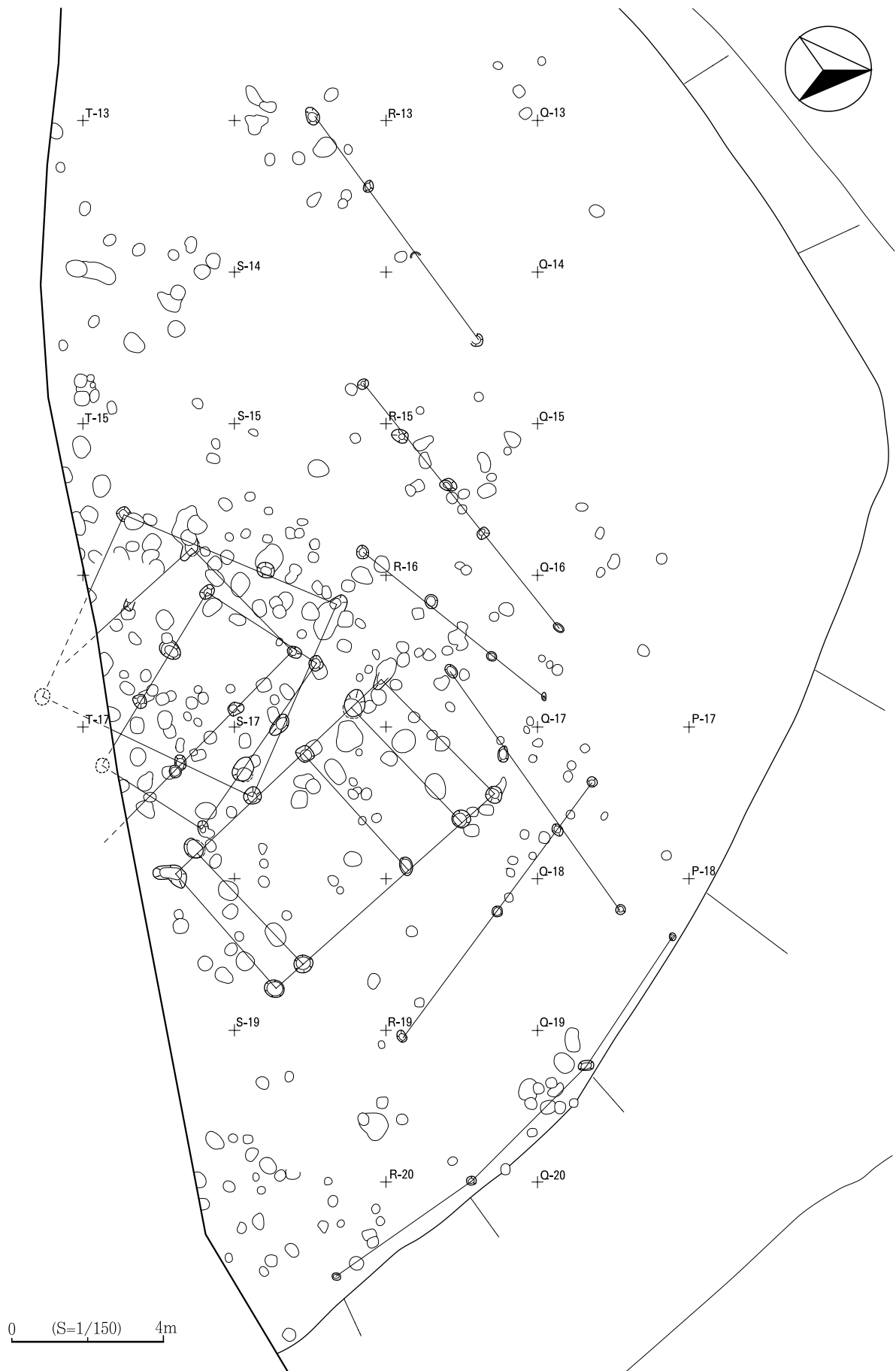


図18 掘立柱建物跡・塀跡

平場内には、縄文時代から近世までの遺構があることから、柱穴においても各時代のものが混在しているものと思われる。

第1号掘立柱建物跡 (図19)

[形態・規模] 梁行1間(約4m/約13.5尺)・桁行4間(約7.6m/約25尺)の北西-南東棟の建物である。建物の主軸方向はN-43.5°-Wである。

[柱穴] 柱穴の掘り方はほぼ円形で、径は40cm程、深さは46~80cmである。

[平均柱間寸法] 梁行は約4.1m(約13.5尺)である。桁行は寸法が異なり、北から約1m(約3.3尺)、約1.8m(約6尺)、約3.8m(約12.5尺)、約1m(約3.3尺)である。

第2号掘立柱建物跡 (図19)

[形態・規模] 検出できたのは建物の北半のみである。北西-南東棟の建物跡で、梁行1間(3.8m/約12.5尺)・桁行2間分(約4.4m/約14.5尺)を確認した。主軸方向はN-45.5°-Wである。

[柱穴] 柱穴の掘り方は円形を主体としている。径が30cm程、深さは51~68cmである。

[平均柱間寸法] 梁行が約3.8m(約12.6尺)、桁行が約2.2m(約7.3尺)である。

第3号掘立柱建物跡 (図19)

[規模] 梁行1間(約3.5m/約11.4尺)・桁行3間(約5.3m/約17.5尺)の北西-南東棟の建物である。南隅の柱穴は調査区域外に伸びると思われる。主軸方向はN-55°-Wである。

[柱穴] 柱穴の掘り方は、円形を基調とする。径は40cm弱で、深さは40~68cmである。

[平均柱間寸法] 梁行が約3.4m(約11.2尺)、桁行が約1.7m(約5.7尺)である。

第4号掘立柱建物跡 (図19)

[規模] 梁行1間(約5.6m/約18.3尺)・桁行3間(約6.1m/約20尺)の北東-南西棟の建物である。建物跡南端は調査区域外に伸びると思われる。建物の主軸方向はN-23.5°-Eである。

[柱穴] 柱穴の掘り方はほぼ円形である。径40cm程、深さは54~91cmと深い。

[平均柱間寸法] 梁行では約5.5m(約18.2尺)、桁行が約2m(約6.7尺)である。

平場柱穴出土遺物 (図41-160~177)

掘立柱建物跡や堀跡が組めなかった残りの柱穴からは、図41に図示したように縄文時代の土器や石器、古代から中世または近世に帰属する銭貨・金属製品が出土している。図41-160~162は第1群土器である。160はR L Rが施文される口縁部。161は底部付近の破片で0段多条L Rが施文される。同-163~171は第2群土器である。163・164・168・169は第3群4類の粗製土器である。165~167は第1群2類に比定される。170と171は第1群5類とした切断土器である。共に小型の壺形土器を用いており、170は屈曲部の直下から、171は胴部上半から切断されている。172は石製品の破損したものを砥石として再利用している。174は石製円盤である。176は釘、177は楔と思われる。このほかに図示しなかったが、瀬戸美濃の灰釉皿の小破片や肥前磁器が出土している。(平山・小田川)

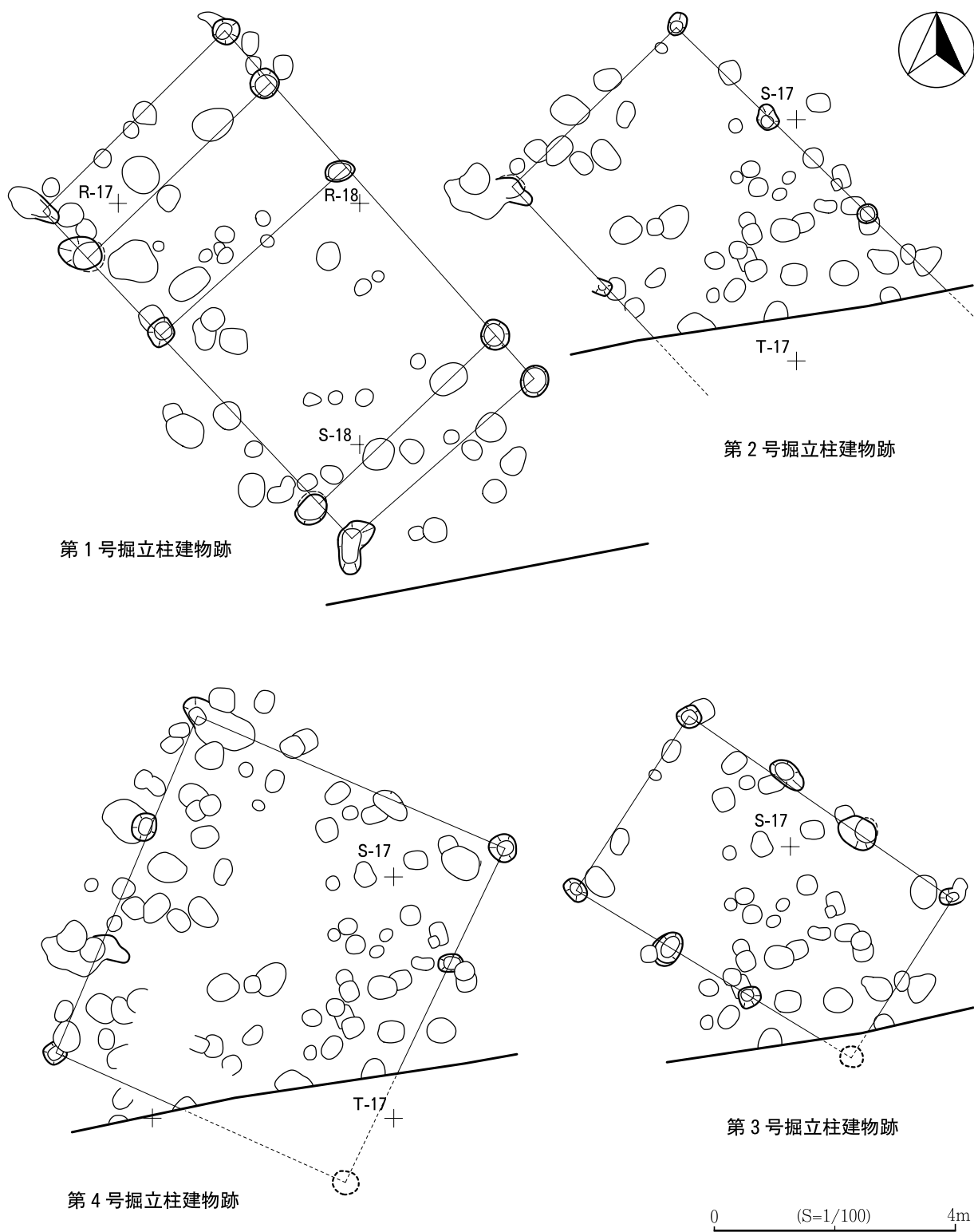


図19 第1・2・3・4号掘立柱建物跡

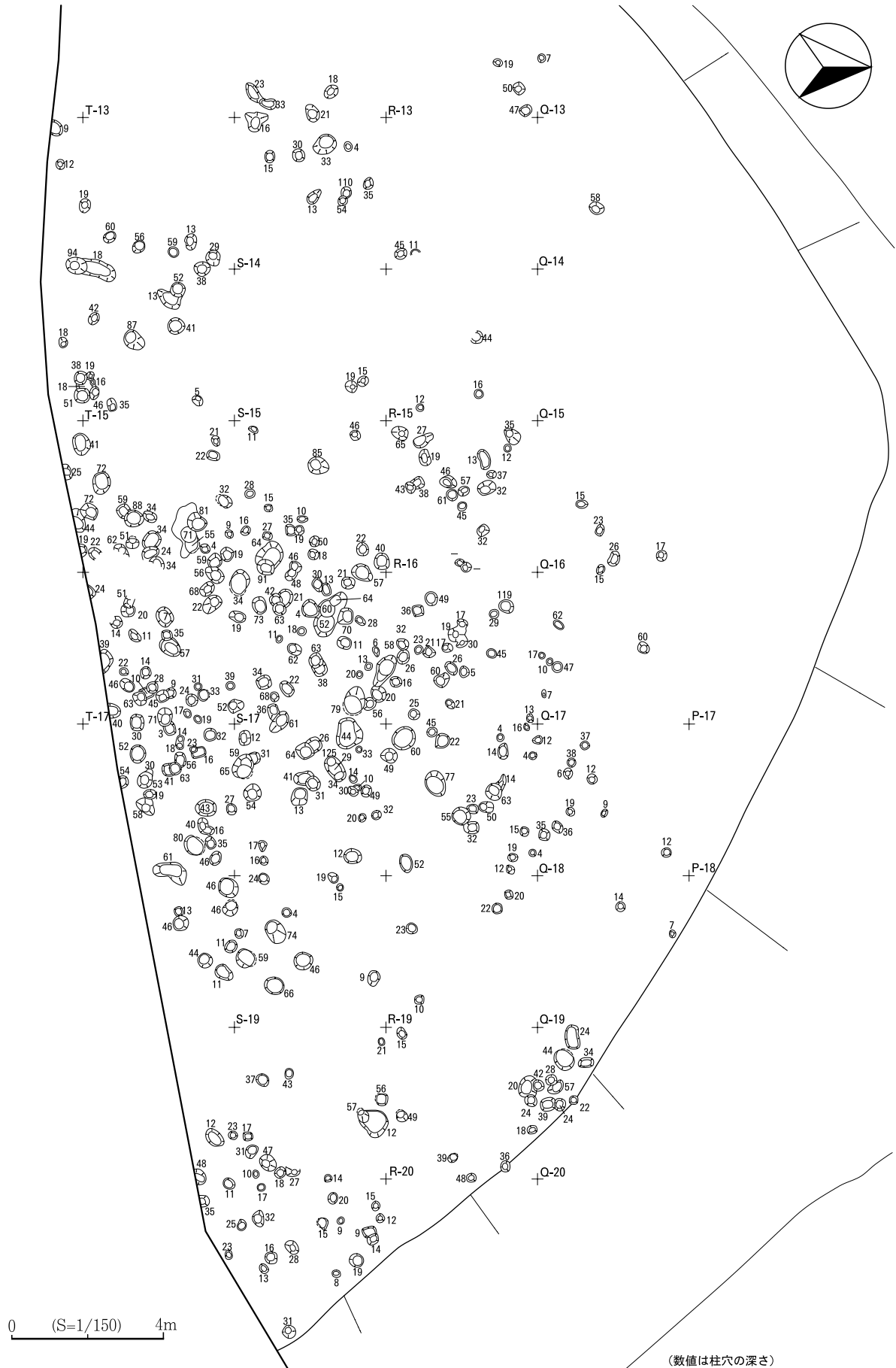


図20 調査区内柱穴全図

第8節 竪穴建物跡

竪穴住居跡とは異なる、倉庫ないしは工房や作業小屋等の機能を有したとされる遺構で、1軒検出されている。調査時にはS I 番号を付けて精査したが、竪穴住居跡とは分けて記述する。

第1号竪穴建物跡 < S I - 11 > (図21~23)

[位置と確認] 平場西側S - 15グリッドを中心に位置する。平場際から約10m離れており、平場内の段差際に配置している。黒褐色と粘土塊が混合する長方形の明瞭なプランで検出した。

[重複] 第62号土坑の上端と重複し、本遺構が新しい。他に小穴と重複するが新旧不明なものが多い。

[平面形・規模] 長方形に舌状の張り出しが付く形状である。長方形の竪穴部は長軸約4.5m、短軸約3.8mあり、北側短軸側に長さ約2.7mの張り出しが付く。竪穴部の断面形は箱形で深さは東側で最大約1mあり、張り出し部の横断面は皿状で深さは30~40cmある。

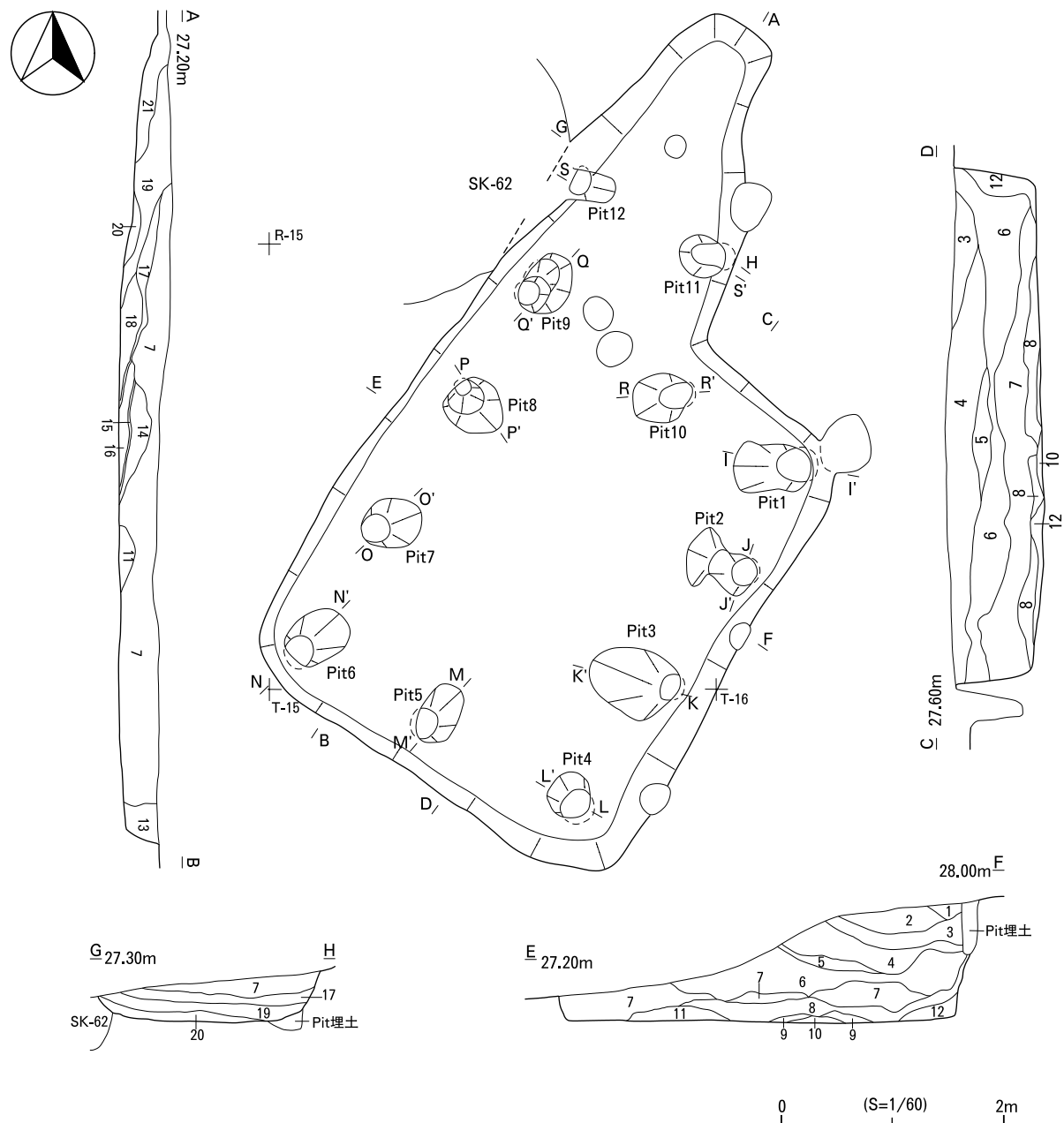


図21 第1号竪穴建物跡 (1)

[堆積土] 人為堆積で20層に分けられる。黒褐色土を主体にし黄色ロームや灰白色粘土の細ブロックを斑に混合しており、短時間に埋められた状態を示している。

[床・壁] 竪穴部の床面は平坦で掘り方埋土は見られない。張り出し部の床面も平坦で竪穴部に向かい緩やかに傾斜している。

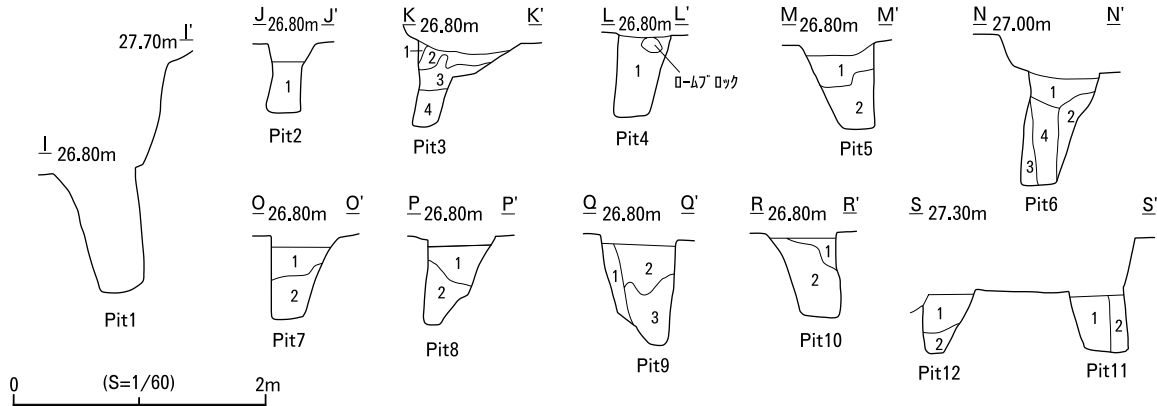


図22 第1号竪穴建物跡(2)

第1号竪穴建物跡			
第1層	10Y R4/3	にぶい黄褐色土	炭化物粒微量・ローム粒・中振・南部・灰白色浮石少量混合
第2層	10Y R4/4	褐色土	炭化物粒・中振・南部・灰白色浮石少量混合
第3層	10Y R5/4	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第4層	10Y R4/2	灰黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第5層	10Y R3/4	暗褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第6層	10Y R4/3	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第7層	10Y R5/4	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第8層	10Y R4/3	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第9層	5 Y R5/4	にぶい赤褐色粘土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第10層	7.5 Y R6/6	橙色粘土	高館火山灰粘土塊
第11層	10Y R7/1	灰白色粘質土	黒色土混合・粘土塊(八戸火山灰最下層)
第12層	10Y R4/4	褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第13層	10Y R2/3	黒褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第14層	10Y R3/3	暗褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第15層	10Y R1.7/1	黒色土	炭化物粒・南部浮石・中振浮石混合
第16層	10Y R4/6	褐色粘質土	ローム塊(八戸火山灰最上層)
第17層	10Y R2/2	黒褐色土	炭化物粒・南部浮石・中振浮石・灰白色浮石混合
第18層	10Y R3/3	暗褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第19層	10Y R2/2	黒褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第20層	10Y R4/4	褐色土	にぶい黄橙粘土塊・炭化物粒・各浮石混合
第21層	10Y R3/3	暗褐色土	炭化物粒微量・ローム粒・中振・南部浮石少量混合
Pit	10Y R3/3	暗褐色土	明黄褐色土・浅黄橙粘土混合・炭化物粒・焼土粒混合
Pit2			
第1層	10Y R4/4	褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
Pit3			
第1層	10Y R5/6	黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第2層	10Y R3/3	黒褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第3層	10Y R4/6	褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第4層	10Y R3/4	暗褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
Pit4			
第1層	10Y R2/3	黒褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
Pit5			
第1層	10Y R3/3	暗褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第2層	10Y R5/4	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
Pit6			
第1層	10Y R5/4	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第2層	10Y R4/3	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第3層	10Y R6/4	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第4層	10Y R4/2	灰黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
Pit7			
第1層	10Y R4/4	褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第2層	10Y R6/4	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
Pit8			
第1層	10Y R3/4	暗褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第2層	10Y R5/6	黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
Pit9			
第1層	10Y R7/6	明黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第2層	10Y R4/4	褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第3層	10Y R5/6	黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
Pit10			
第1層	10Y R5/8	黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第2層	10Y R4/3	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
Pit11			
第1層	10Y R3/3	暗褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第2層	10Y R4/4	褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
Pit12			
第1層	10Y R4/4	褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
第2層	10Y R5/6	黄褐色土	にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合

[柱穴] 竪穴部内に10個、張り出し部に2個の図示したPitが伴うものと思われる。Pitはすべて内転びに掘られており、開口部の形状から掘り替えられているものと思われ、建て替えが想定される。各Pitの間隔は約1~1.6mあるが、長軸列のPit1~4とPit6~9は約3.9m、短軸列のPit1~9とPit4~6は約2.9mと一致している。Pitの深さは、Pit1の95cmが最大で最小は張り出し部Pitの50cmである。竪穴部隅の各Pitは、Pit4を除き80~95cmの深さがあり、他は65~70cm代とほぼ均一である。Pit内の埋土の状態は図示したように様々である。Pit6の第4層は柱痕のようであるが途切れており、大半が水平な埋土であることから、建物の廃棄の際に柱が抜かれているものと思われる。

[出土遺物] 堆積土から縄文土器19点(181.5g)、磨製石斧1点、石製円盤1点、陶磁器2点、鉄製品4点と鉄滓1点、古銭1点、それと炭化した櫛が1点出土している。土器と陶磁器類はすべて破片である。図23-10は胎土に多量の繊維を含みLRが施文される第群土器である。11~16は第群土器で、11は横位の連続刺突が施されている。12・16は同一個体で地文にR単軸絡条体第1類施文後に沈線で方形文が施文される。14・15は壺形土器で14は赤彩されている。8は柱穴の埋土中から出土した横櫛である。炭化しており非常に脆く歯先を全て欠損している。端部だけで全体形は不明である。歯の根本の部分から、歯の枚数は1cmあたり12本と推測される。未分析のため樹種等は不明である。陶磁器・鉄製品・古銭は後述する。

[小結] 出土遺物から遺構の帰属時期を明確にできないが、本遺構の特徴的な形態から中世に属し館機能時に伴うものと判断される。(小田川)

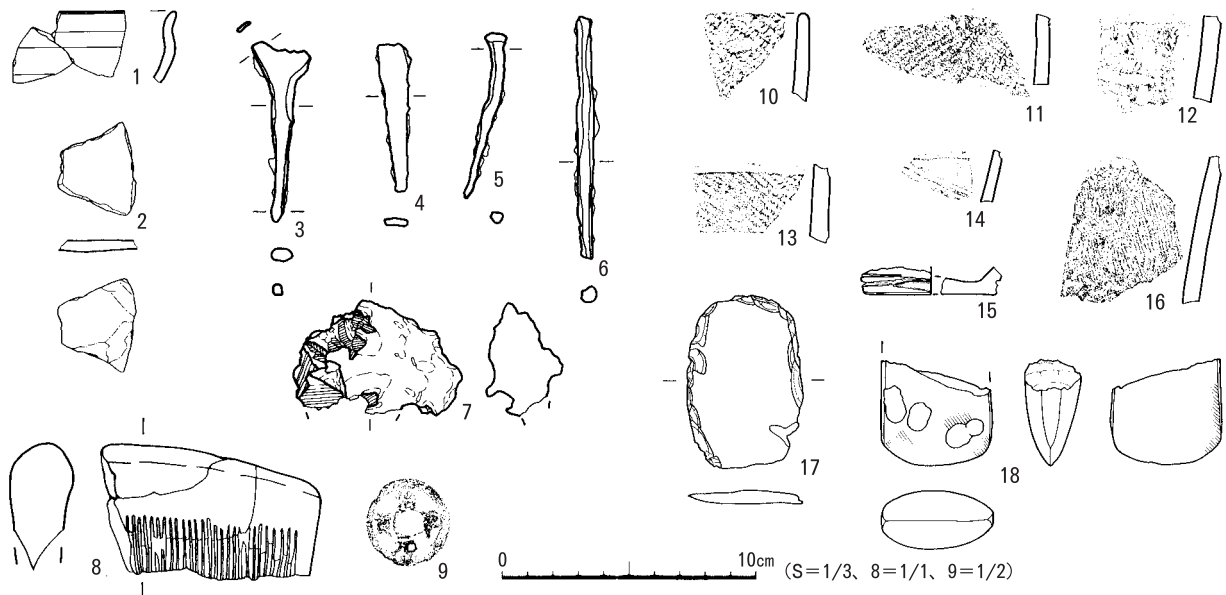


図23 第1号竪穴建物跡出土遺物

第9節 竪穴住居跡

本調査では3軒の竪穴住居跡を検出した。帰属時期は平安時代で、すべて調査区北西端の河岸段丘頂部の平場に検出された。1次調査で、異なる時期の7軒の竪穴住居跡を検出していることから、第8号から番号を付けている。以下に各竪穴住居跡について記述する。

第8号竪穴住居跡 < S I - 8 > (図24・25)

[位置と確認] 平場西端部S・T-13・14グリッドに位置する。新井田川に面した西側急崖の縁から約6m離れた緩傾斜地に造られており、盛土撤去後に楕円形のプランで検出した。

[重複] 第29号土坑と煙道部を重複し、本住居跡の方が新しい。

[平面形・規模] 傾斜地にあり、後世の地形改変により壊されていることから平面形および規模は不明である。検出部分のうち、カマド軸に直行した南北方向に約4.5mの長さがある。

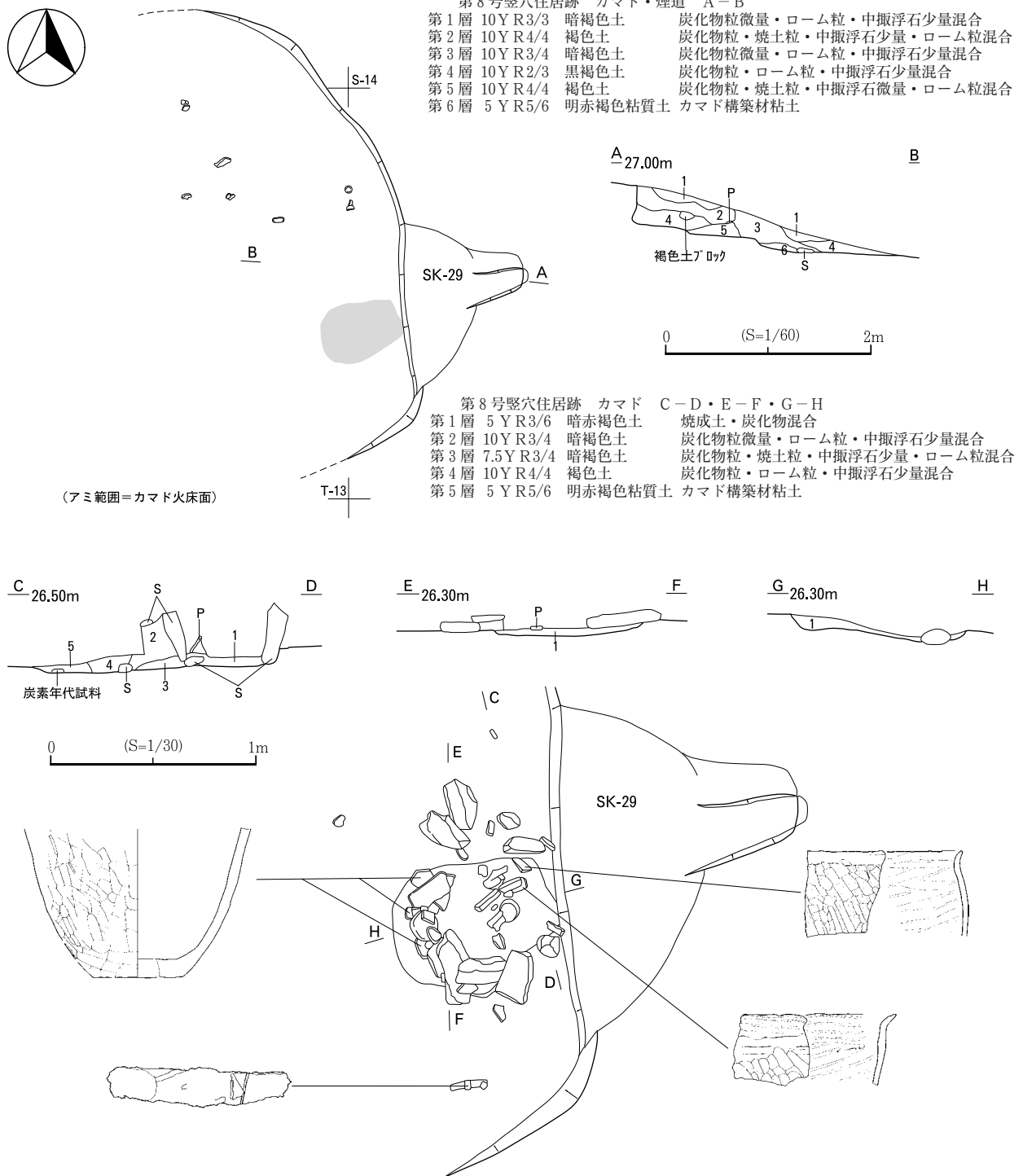


図24 第8号竪穴住居跡

[堆積土] 煙道部を含めた堆積土は6層に分けられる。このうち住居内堆積土の主体は、炭化物粒を含む第4層の黒褐色土である。

[床・壁] 床面はほぼ平坦で、特に硬化した面は見られない。壁は南東側で約30cmが残っている。

[カマド] 東壁の南東隅寄りに作られている。燃焼部は壊されており、袖部と天井部の芯材に使われたと思われる粘板岩を主体とした礫が、火床面上と周辺に散在して検出された。火床面は約70×90cmの大きさで、浅く掘り込んで埋め土をした基礎をもつ。煙道は、重複する土坑覆土と共に掘り下げたため明確ではないが、幅約30cmで長さは約1.2mある。カマド軸は北から東へ約73°傾いている。

[柱穴] 住居跡に伴うと思われる柱穴は検出されなかった。

[出土遺物] 土師器は床面およびカマド周辺から7点(231.3g)、堆積土から4点(47.6g)、縄文土器は堆積土から62点(1,230.2g)、他に床面から鉄製品1点、堆積土から磨石が1点出土している。

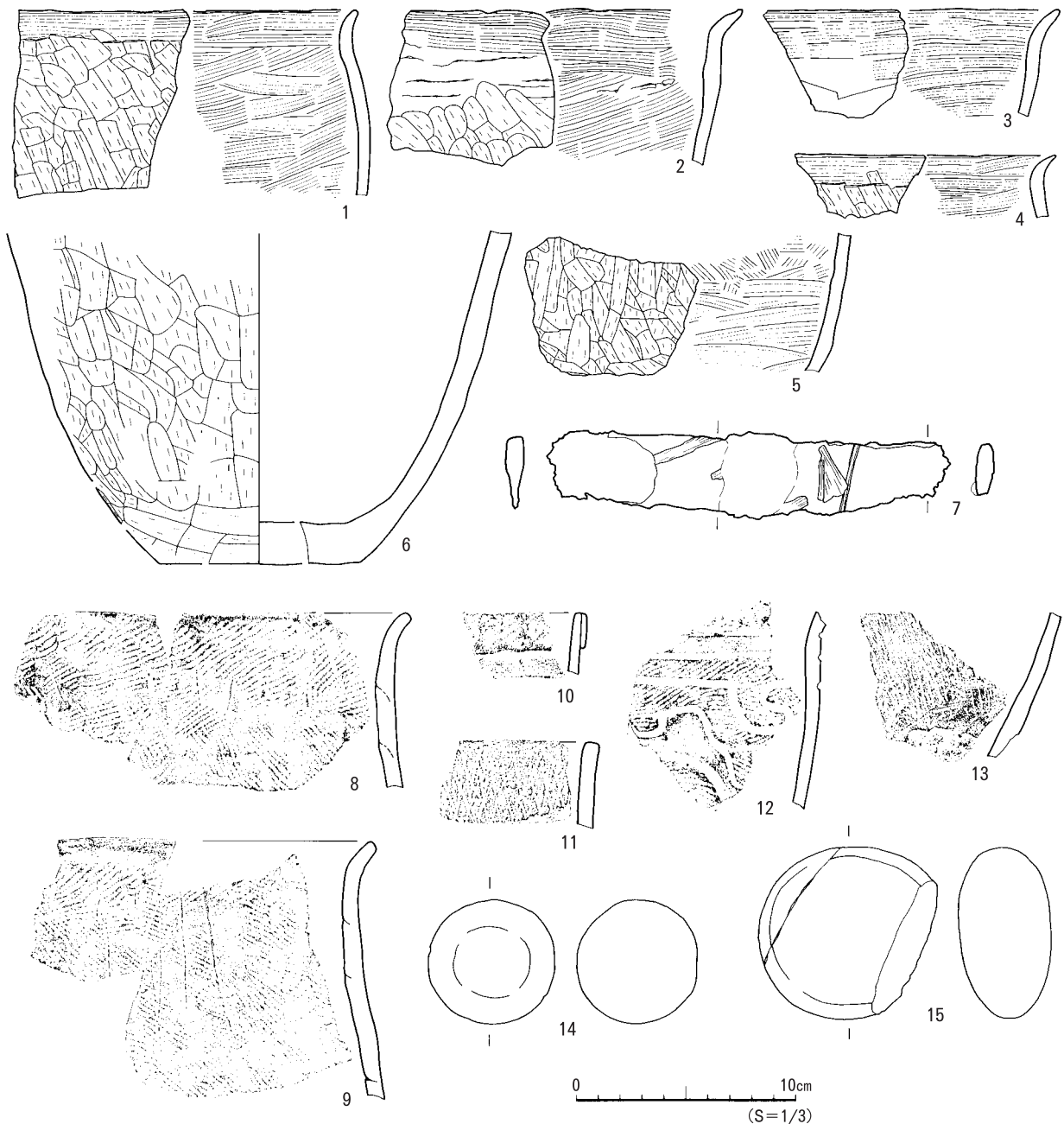


図25 第8号竪穴住居跡出土遺物

縄文土器の点数が多いのは、土坑との重複に気づかず同一に取り上げてしまったため、大多数の縄文土器は第29号土坑に帰属するものである。図25 - 1 ~ 6 はカマド出土の土師器甕で4個体分確認された。口縁部横ナデ、胴部外面ヘラケズリで内面ヘラナデされる。胎土には多量の細礫を含む。7の鉄製品は住居跡南東隅の床面から出土した刀子である。8~13は堆積土出土の第 群土器で、8・9は無節Lが施文される。内面には輪積み痕と指頭圧痕が明瞭である。12は地文RLに沈線文が施される。11は単軸絡条体第5類、13は単軸絡条体第1類が施文される。14は球状、15は扁平な磨り石である。

[小結] カマド出土遺物から10世紀後半以降の竪穴住居跡と思われる。

第9号竪穴住居跡 < S I - 9 > (図26・27)

[位置と確認] 平場北側Q・R - 16・17グリッドに位置する。平場際から約6m離れた平坦面に造られており、平場の層序確認ベルトで落ち込みを検出した。

[重複] 5基の土坑と重複している。本住居跡は第58号土坑より古く、第35・66・74号土坑より新しい。第34号土坑との関係は不明である。また、北東側の一部が攪乱されている。

[平面形・規模] 北西側の壁面を捉えられなかったため詳細にないが、南東壁の長軸が約4.5m、南西壁の短軸が約2.7m検出されていることから、およそ長方形であったものと思われる。

[堆積土] 住居内堆積土は2層に分けられる。炭化物粒や中掬浮石粒を含む褐色土を主体にする土で、黒色土の混入が無く層の状態から人為堆積の可能性が高いと思われる。第3層は掘り方埋め土である。

[床・壁] 床面は緩やかな起伏がある。壁は、南東側で約20~30cmの高さが遺存している。

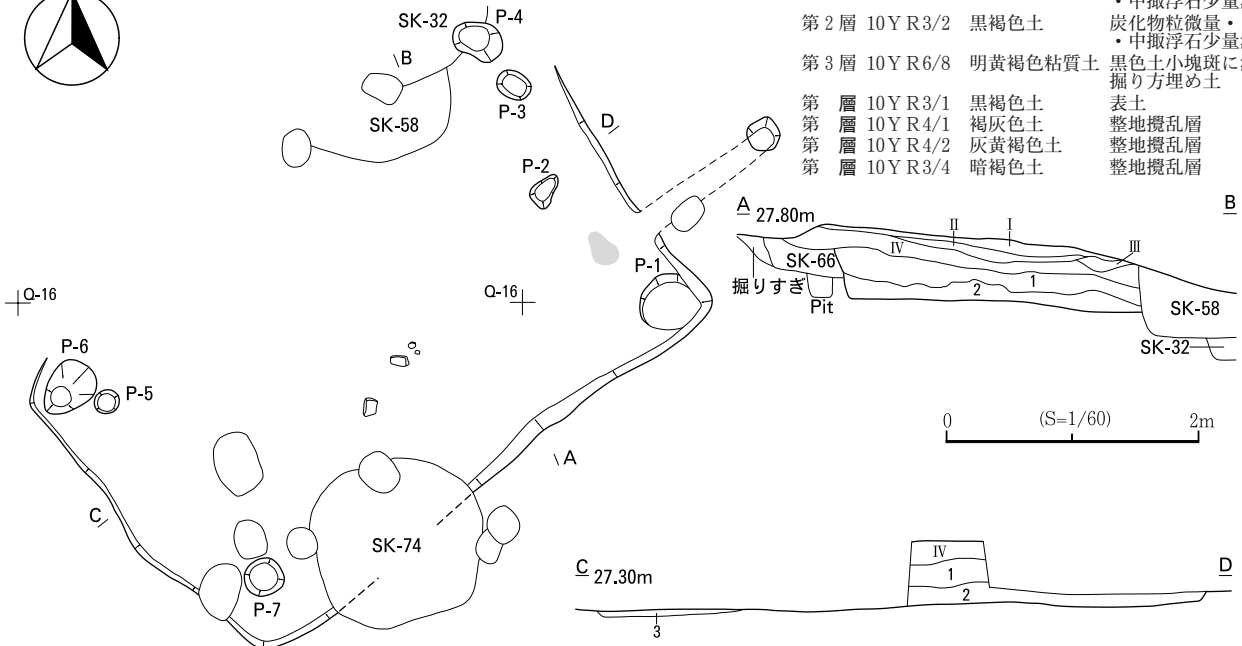
[カマド] 住居の南東隅から約60cm離れて作られている。燃烧部は壊されており、袖部と天井部の芯材に使われたと思われる粘板岩と円礫が、火床面上と周辺に土師器片と共に検出された。目に見えた火床面は約20×30cmの不整な形で、壁際から30cm程離れて検出された。しかし、芯材の量からみると小さく、調査時に焼成の痕跡を捉えきれなかったものと考えられ、実際には土層図E - Fに示した第7層の下位にまで広がっているものと思われる。煙道はトンネル式である。径が約20cmの円柱状で、煙出孔に向かい約1.2mの長さで掘り込まれている。カマド軸は北から東へ約54°傾いている。

[柱穴] 本住居跡内から14個のP i t を検出した。これらには後世に掘られたものが混在しており、遺物の下から検出されたP i t 1 ~ 3は伴うものと考えられ、P i t 1は浅い皿状であることから柱穴以外の機能が想定される。これ以外のP i tのうち、P i t 4 ~ 7は本住居跡の形状と位置から本住居の柱穴としてあった可能性がある。

[出土遺物] 土師器は床面およびカマド周辺から64点(2,395.7g)、堆積土から18点(137.9g)、縄文土器は堆積土から21点(246.9g)が出土している。図27 - 1 ~ 12は第 類の土師器で、すべてが甕類で7~8個体分ある。器形は最大径を胴部上半にもち、丸みをもつものが多く、口縁部の幅は狭い。口縁部はくの字に屈曲し口端は指で摘み上げられている。ほかに口縁部が直立気味のもの(7)、口端が平坦なもの(8)もある。調整は、胴部外面ヘラケズリ内面ヘラナデ調整が施される。1は底部外面もヘラケズリされている。13はLR0段多条、14はRLが施文される第 群土器である。15~17は第 群土器で、17は小型の壺形土器で横位と弧状沈線文が施文される。

[小結] カマド出土遺物から10世紀後半以降の竪穴住居跡と思われる。

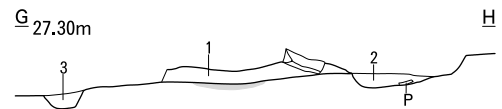
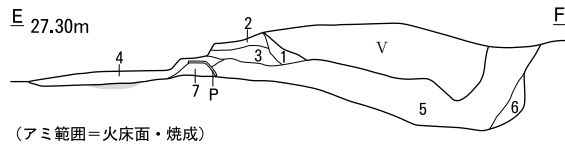
櫛館遺跡



- 第9号竪穴住居跡
- | | | | |
|-----|----------|---------|----------------------|
| 第1層 | 10Y R3/3 | 暗褐色土 | 炭化物粒微量・ローム粒・中振浮石少量混合 |
| 第2層 | 10Y R3/2 | 黒褐色土 | 炭化物粒微量・ローム粒・中振浮石少量混合 |
| 第3層 | 10Y R6/8 | 明黄褐色粘質土 | 黒色土小塊斑に混合、掘り方埋め土 |
| 第4層 | 10Y R3/1 | 黒褐色土 | 表土 |
| 第5層 | 10Y R4/1 | 褐灰色土 | 整地攪乱層 |
| 第6層 | 10Y R4/2 | 灰黄褐色土 | 整地攪乱層 |
| 第7層 | 10Y R3/4 | 暗褐色土 | 整地攪乱層 |

- 第9号竪穴住居跡 カマド・煙道 E-F
- | | | | |
|-----|----------|-------|------------------------|
| 第1層 | 10Y R2/3 | 黒褐色土 | 炭化物粒・ローム粒・中振浮石少量混合 |
| 第2層 | 10Y R4/4 | 褐色土 | 炭化物粒・中振浮石少量・ローム粒混合 |
| 第3層 | 10Y R3/3 | 暗褐色土 | 炭化物粒・焼土粒・ローム粒・中振浮石少量混合 |
| 第4層 | 10Y R2/3 | 黒褐色土 | 炭化物粒・焼土粒・中振浮石微量混合 |
| 第5層 | 10Y R2/3 | 黒褐色土 | 炭化物粒・焼土粒・中振浮石微量混合 |
| 第6層 | 10Y R5/6 | 黄褐色土 | 炭化物粒・焼土粒微量混合 |
| 第7層 | 10Y R5/6 | 黄褐色土 | 炭化物粒・焼土粒微量混合 |
| 第8層 | 5 Y R4/8 | 赤褐色焼土 | |
| 第9層 | 10Y R4/6 | 褐色粘質土 | 八戸火山灰最上層相当・地山 |

- 第9号竪穴住居跡 カマド G-H
- | | | | |
|-----|----------|-------|----------------------------|
| 第1層 | 10Y R2/3 | 黒褐色土 | 炭化物粒・焼土粒・中振浮石微量混合 |
| 第2層 | 10Y R3/2 | 黒褐色土 | 炭化物粒微量・ローム粒・中振浮石少量混合・住居内土坑 |
| 第3層 | 10Y R2/3 | 黒褐色土 | 炭化物粒・ローム粒・中振浮石微量混合・Pit埋め土 |
| 第8層 | 5 Y R4/8 | 赤褐色焼土 | |



(アミ範囲=火床面・焼成)

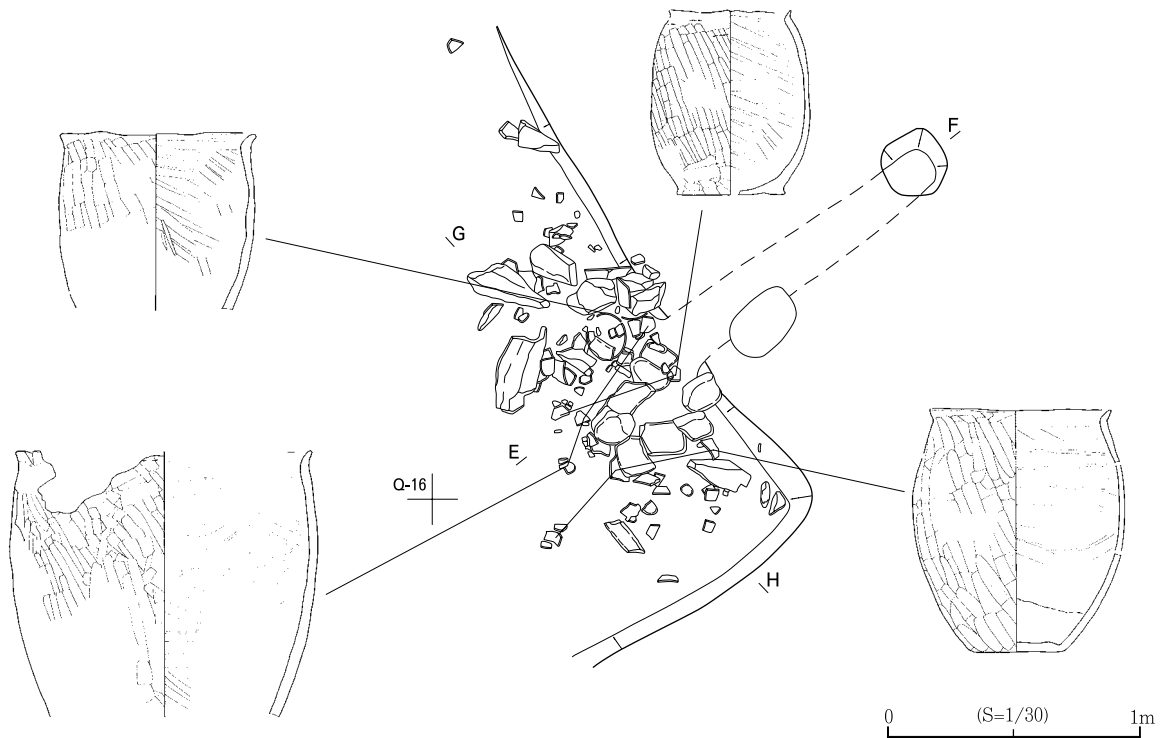


図26 第9号竪穴住居跡

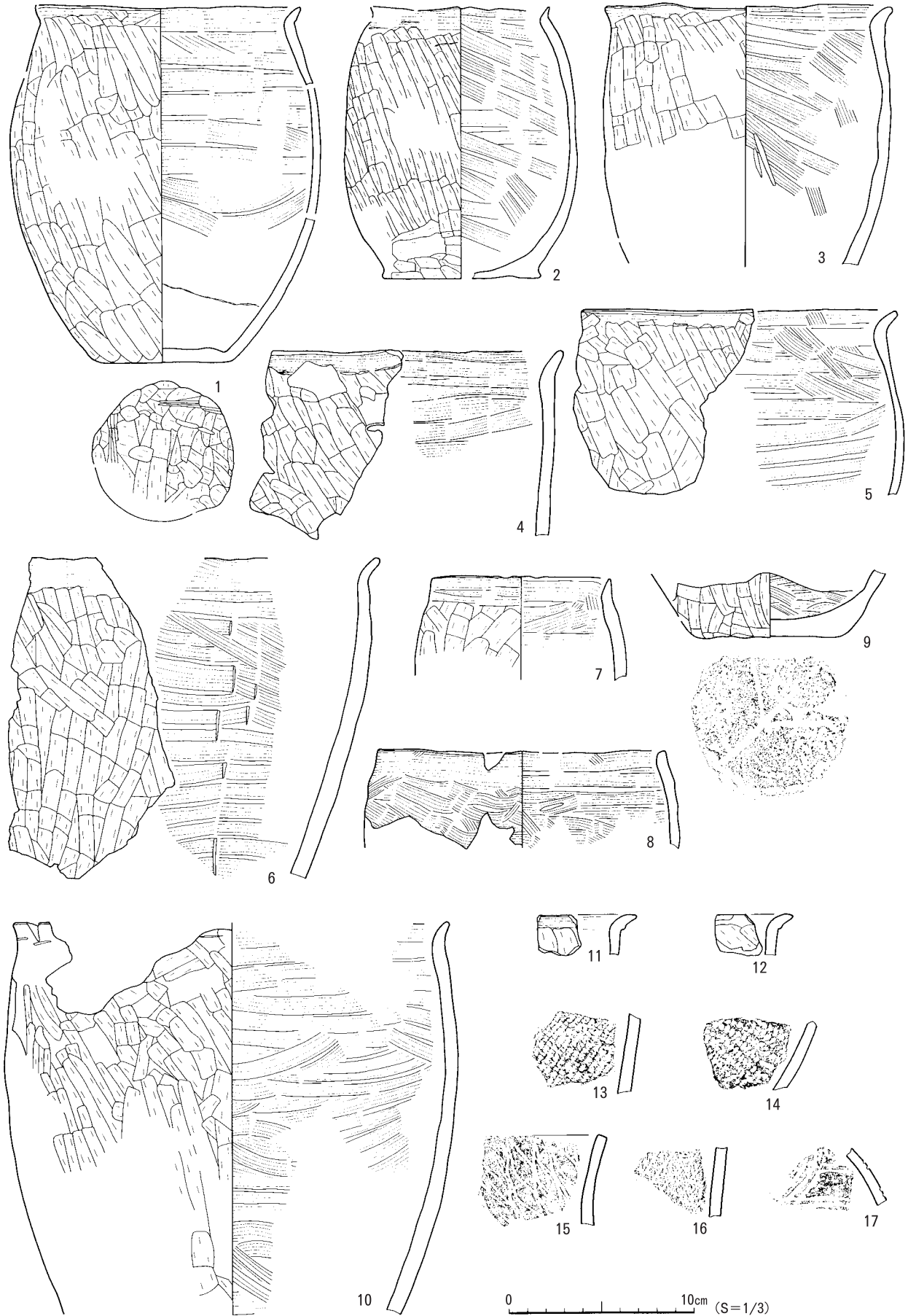


図27 第9号竖穴住居跡出土遺物

第10号竪穴住居跡 < S I - 10 > (図28・29)

[位置と確認] 平場南側の調査区境界、T・U - 15・16グリッドに位置する。2 m程の黒褐色のプランと周辺にピットと土坑を検出し、これらの精査時に硬化した面と同一レベル面で焼土も検出したことから、深さや形状から竪穴住居跡とした。

[重複] 4基の土坑と13個のP i t と重複している。本住居跡は第38・42号土坑より古く、第41・80土坑より新しい。P i t との関係は、土層図に示されている以外は不明である。

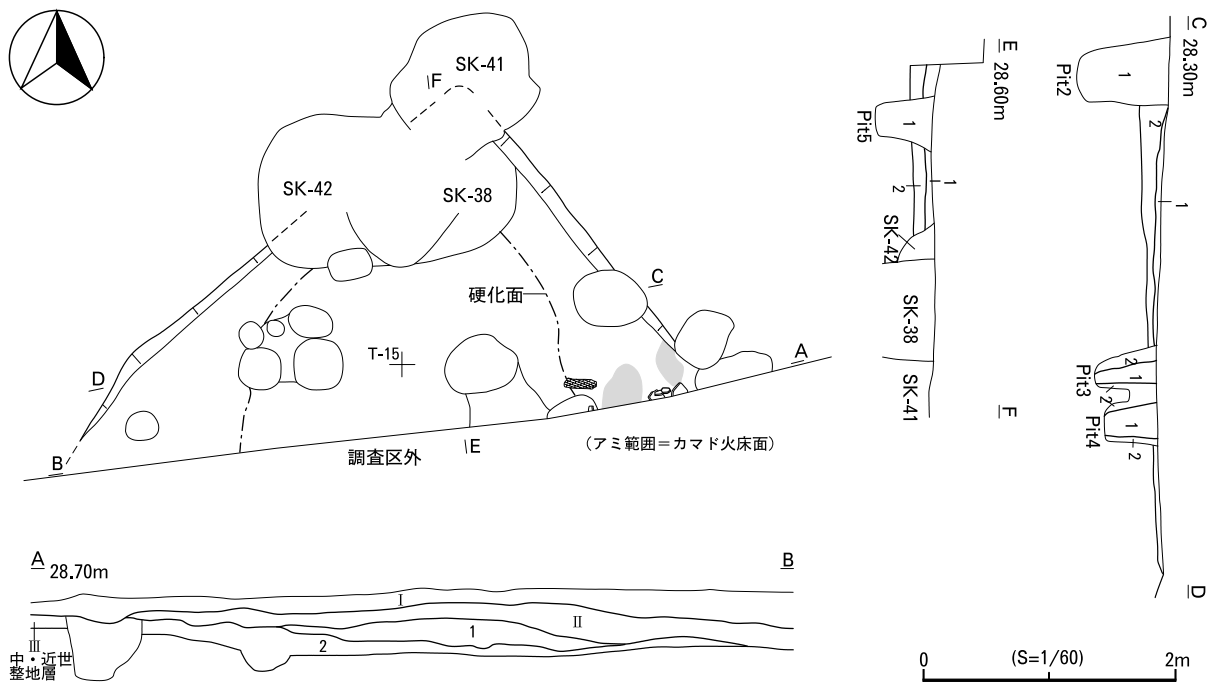
[平面形・規模] 大半が調査区外にあるため全体形は不明である。規模も重複した土坑と共に掘り下げたため明確ではない。検出した北東および北西壁で約2.5mある。土坑と重複した部分を含めると、北東壁で約3 m、北西壁で約4.5mの規模が推定され、第8・9号竪穴住居跡とほぼ同じ規模であったものと思われる。

[堆積土] 住居内堆積土は2層に分けられる。炭化物粒や中礫浮石粒を含む黒褐色土を主体にする土で、人為堆積の可能性が高いと思われる。

[床・壁] 床面はほぼ平坦で約2.5mの範囲で硬化した面が認められる。壁は、床面から10～15cmの高さで遺存している。

[カマド] 調査区境界に検出した焼土がカマドの一部と判断している。第2層掘り下げ時に多数の粘板岩片と礫が出土しており、ほかの竪穴住居跡と同じ、カマドの芯材であった可能性がある。

[柱穴] 本住居跡を壊すP i t 以外は新旧が不明であり、本住居跡に伴うP i t も捉えられない。



第10号竪穴住居跡

第1層 10Y R2/2 黒褐色土 炭化物粒微量・ローム粒・中礫・南部浮石少量混合	Pit 3-2 10Y R3/3 暗褐色土 炭化物粒微量・ローム粒・中礫・南部浮石少量混合
第2層 10Y R3/1 黒褐色土 炭化物粒・ローム粒・中礫浮石少量混合	Pit 4-1 10Y R2/2 黒褐色土 柱痕
Pit 1 10Y R3/3 暗褐色土 明黄褐色土・浅黄橙粘土混合・炭化物粒・焼土粒混合	Pit 4-2 10Y R2/3 黒褐色土 炭化物粒微量・ローム粒・中礫・南部浮石少量混合
Pit 2 10Y R3/4 暗褐色土 炭化物粒微量・ローム粒・中礫浮石少量混合	Pit 5 10Y R2/3 黒褐色土 炭化物粒微量・ローム粒・中礫・南部浮石少量混合
Pit 3-1 10Y R2/2 黒褐色土 柱痕	

図28 第10号竪穴住居跡

[出土遺物] 堆積土中から土師器5点(54.3g)、縄文土器17点(144.4g)、粘板岩の石器が2点出土している。土器は細片だけで形状および文様がわかるものはない。図29-1・2は土師器甕の破片で内外面ヘラナデ調整される。3～5は第 群土器で、3はRLに磨り消しの横位沈線が施される。5はR単軸絡糸体第5類が施文される。6・7は石刀の破損片またはその未製品で側縁の一部に敲打による潰れがある。ともに床面出土であるが混入したものと思われる。

[小結] 出土遺物から10世紀後半以降の竪穴住居跡と思われる。(小田川)

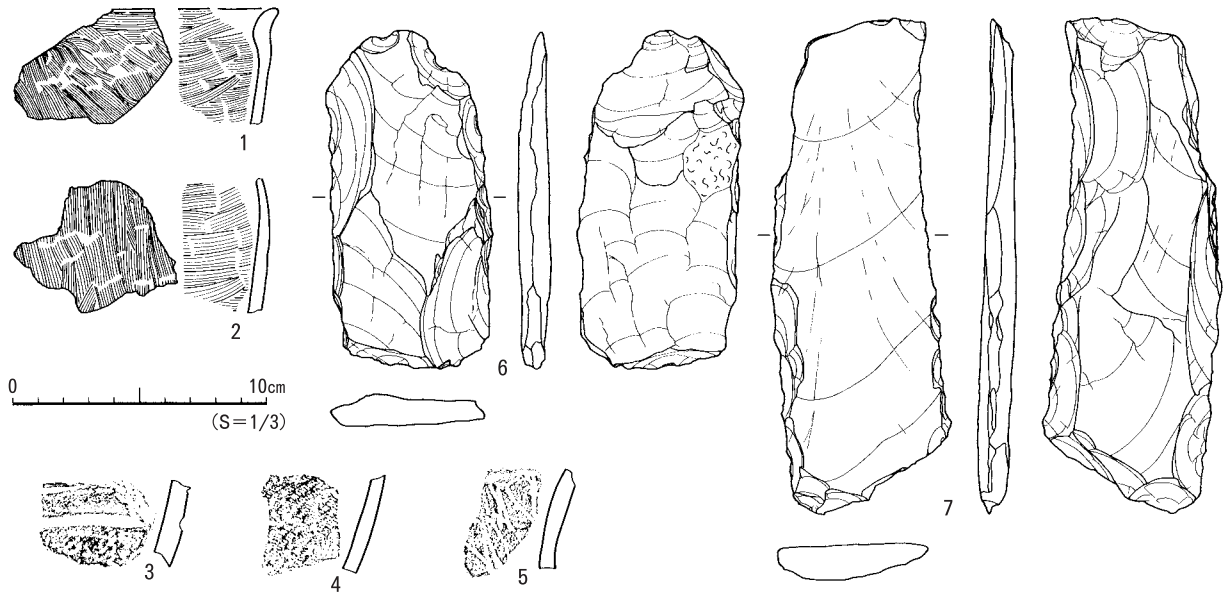


図29 第10号竪穴住居跡出土遺物

第10節 土坑 (図31～41)

今回の調査によって検出された土坑は61基である。第27・28・89・87号土坑以外は段丘頂部の平場とその斜面に検出されている。平場内全体に散在するが特に縁辺のP～Q-15～17グリッドに密にある。土坑の平面形には円形や楕円形・方形のものがあるが、円形のものが大半を占め、その中でも断面形状が台形のフラスコ状の土坑が主体となる。堆積土は黒褐色土および暗褐色土が主体で、炭化物・ローム粒や中掬浮石を混合するものが多い。

各土坑の帰属時期は出土遺物や堆積土から判断したが、時期が特定できないものも多い。遺構数が多いため、土坑を形態で分類し、分類ごとに特徴を記述するが、分類は前回の報告とは異なっている。個々の規模などは表(79P)にまとめた。表中や文章中の「()」は残存値、「-」は不明・計測不可である。土坑の分類は次のとおりである。

[平面形]

- 類：円形のもの
- 類：楕円形のもの
- 類：方形のもの
- 類：上記以外の平面形のもの

[断面形状]

- A型：台形 (壁が内傾して立ち上がるもの)
- B型：逆台形 (壁が外反して立ち上がるもの)
- C型：箱形 (壁が直立して立ち上がるもの)
- D型：皿形 (壁の立ち上がりが緩やかなもの)
- E型：断面形状が不明のもの

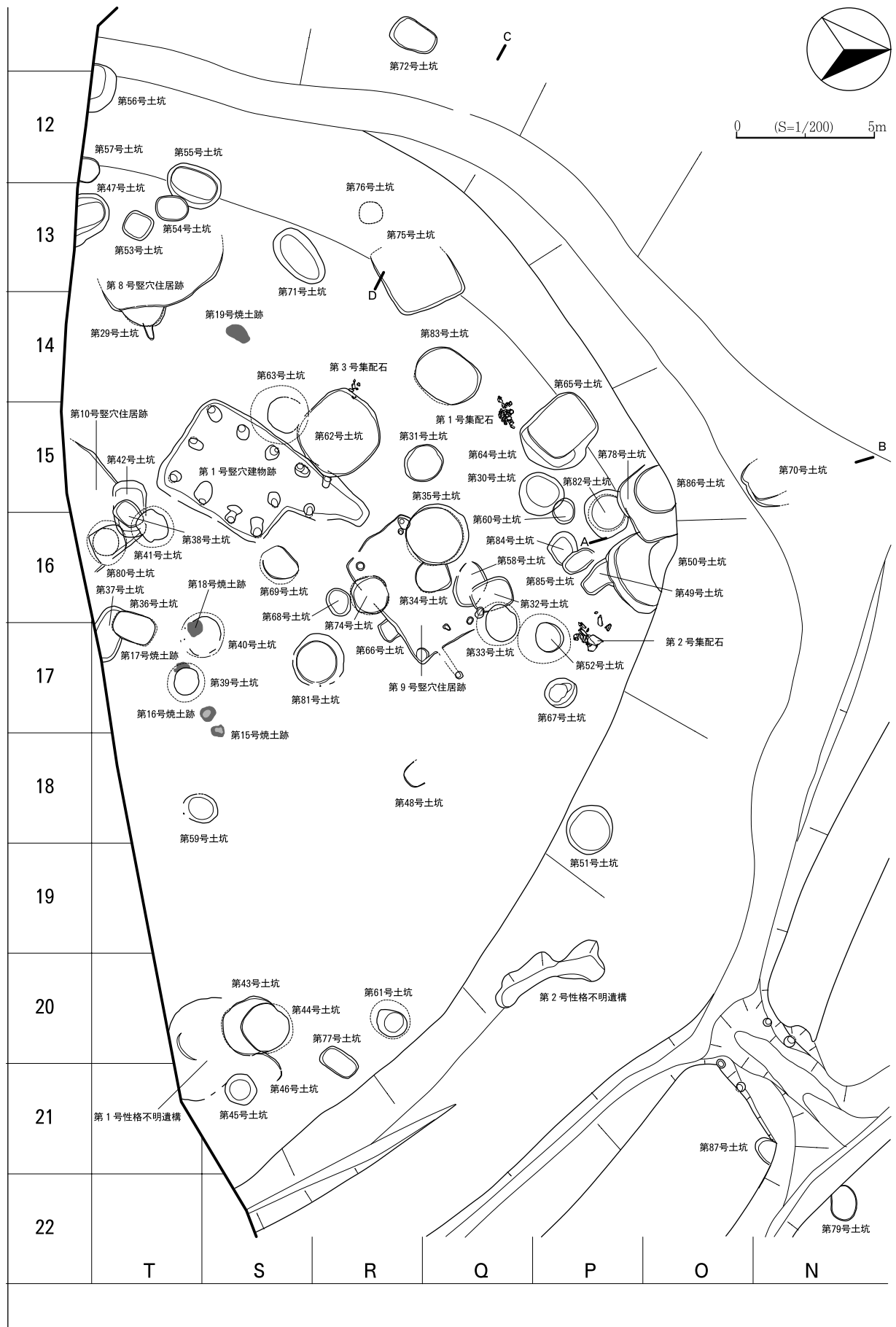


図30 平場内遺構配置

I類(図31~34) : 32基が該当し、土坑のほぼ半数を占める。断面形状はA~E型の5類がある。これらの約6割の土坑から遺物が出土している。

A型(図31・32) = 壁が内傾して立ち上がるフラスコ状土坑で、第29・33・35・39~41・44・52・61・63・69・74・80~82号土坑が該当する。第81号土坑の壁は内傾しないが、堆積土の観察から壁の上半が崩落したものと判断し本類に含めた。類の約半数の15基、検出土坑のほぼ四分之一を占める。開口部は径約1m(第40・41・52・61・63・69・80号土坑)、約1.4m(第29・33・39・74号土坑)、約1.6m(第44・82号土坑)、約1.9m(第81号土坑)、2m以上(第35号土坑)のものがある。底面はほとんどが径1.5~1.8m前後であるが、1.3m程の小さいもの(第29・40・82号土坑)や2m超のもの(第35・63号土坑)もある。深さは50cm以下(第29・69号土坑)、60~70cm前後(第33・39・40・44・74号土坑)・約1m(第63・80号土坑)・約1.2m(第35・41・52・61・81・82号土坑)に分けられる。第29・44・74号土坑は開口部と底面の規模がほぼ同じで、第82号土坑は開口部よりも底面が小さい。壁際の堆積土中にはロームが混入するものが多い。これは塊状に混入していることから壁の崩落土と思われる。また、壁には屈曲部がみられるものがある。屈曲部は開口部付近(第52・61・80号土坑)や、遺構中位(第29・35・41・74・69号土坑)・底面付近(第82号土坑)にみられる。フラスコ状土坑は貯蔵穴や墓坑としての利用が考えられているが、それらとして使用するにはやや浅いものがある。また、第29・40号土坑からは切断土器や土器片円盤などが出土しているが、積極的に用途を推定する遺物は出土していない。竪穴住居跡やPitに切られていることから古代以前で、出土遺物から縄文時代後期初頭の時期が推測される。

B型(図33) = 第27・28・51・86号土坑の4基が該当する。壁は途中で強く外反する。開口部は径1.7~2m前後・底面は径1~1.4m前後で、ほとんどが1m以上の深さをもつ。第27号土坑の底面にはPitが10個、乱雑に配置されている。同様の土坑は前回の調査でも検出され、縄文時代の落とし穴と思われる。中礫浮石が最上部に堆積することから、浮石降下時にはほぼ埋没していたと思われる。後述するD類の第79号土坑も底面にPitを有し、同様のものと思われる。その他の土坑の用途判断は難しい。第51号土坑は出土遺物から、第86号土坑は重複関係から縄文時代の可能性がある。

C型(図33) = 第31・34・43・57・60号土坑の5基が該当する。第57・60号土坑が開口部径約1m・底面径約0.8m・深さ約60cm、第31・34号土坑が開口部径約1.2~1.4m・底面径約1.2m・深さ30~40cm、第43号土坑が開口部・底面共に径約2m・深さ70cm程である。第60号土坑は土坑墓で、底面から人骨が検出された。頭骨が骨盤に接することから座位である。釘や木材は検出されなかったため棺は用いられなかったと推定される。自然科学的分析から被葬者は7~8歳程度の幼児と推測された。分析の結果は第3章にまとめた。出土遺物には縄文土器と銭貨があり、土器は埋め戻し時の混入と考えられる。銭貨は6枚、脚付近から出土した。銭貨の副葬位置が分かる好例である。その他の土坑は出土遺物が乏しく、用途や時期の判断は困難である。

D型(図34) = 第30・45・59・67・68・76・84号土坑の7基が該当する。開口部径約1~1.2m・底面径60~90cm前後と小さい。深さは30cm前後と浅く、堆積土も第67号土坑以外は単層か2層に分層される。第67号土坑は堆積土上~下面に焼土が形成されている。底面は起伏し炭化物が検出されているが被熱しないため、焼土は埋没後に形成されたものと考えられる。第76号土坑は硬化した底面が検出された。人骨取り上げ後に確認されたため土坑墓の可能性はあるが、遺物は出土していない。第84

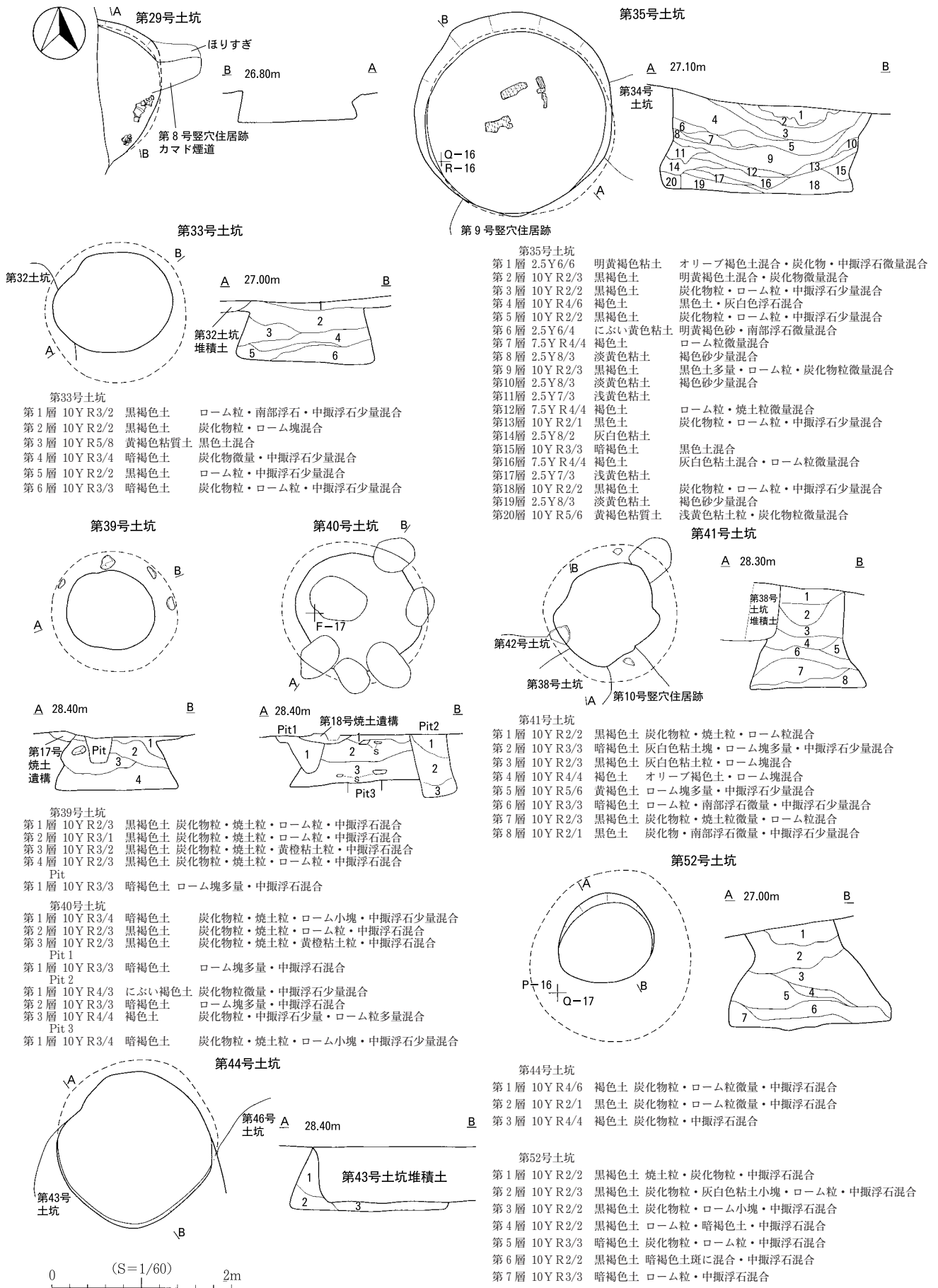
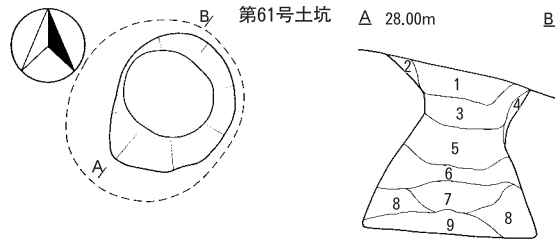
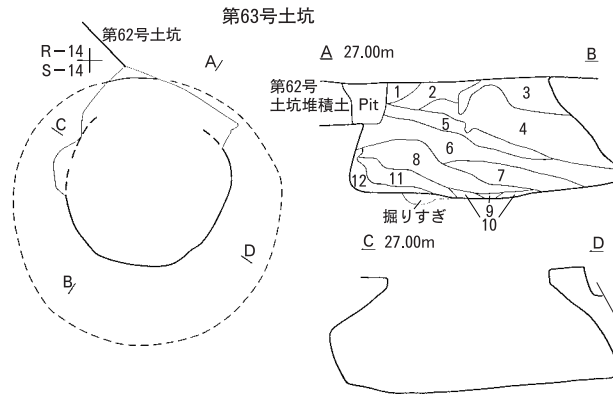


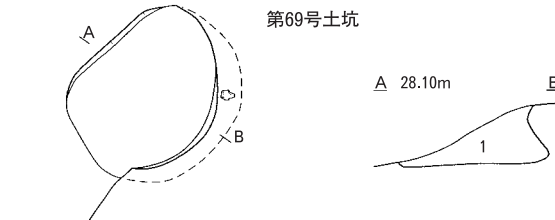
図31 土坑(1) I類A型



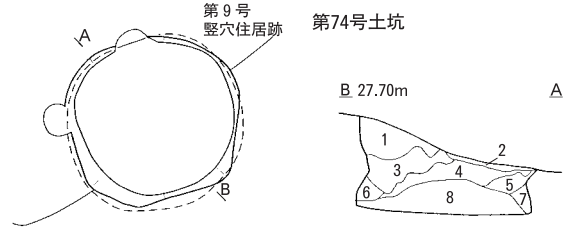
- 第61号土坑
- 第1層 10Y R2/1 黒色土 炭化物・ローム粒微量・中振浮石少量混合
 - 第2層 10Y R2/3 黒褐色土 炭化物粒微量・ローム粒・中振浮石少量混合
 - 第3層 10Y R2/2 黒褐色土 炭化物粒・ローム小塊・中振浮石混合
 - 第4層 10Y R3/4 暗褐色土
 - 第5層 10Y R2/2 黒褐色土 炭化物粒・褐色土小塊斑・中振浮石混合
 - 第6層 10Y R2/1 黒色土 炭化物・ローム粒・灰白色粘土・中振浮石混合
 - 第7層 10Y R2/2 黒色土
 - 第8層 10Y R2/3 黒色土 炭化物粒・暗褐色土小塊・中振浮石混合
 - 第9層 10Y R2/4 黒色土 炭化物・ローム粒・灰白色粘土・中振浮石混合



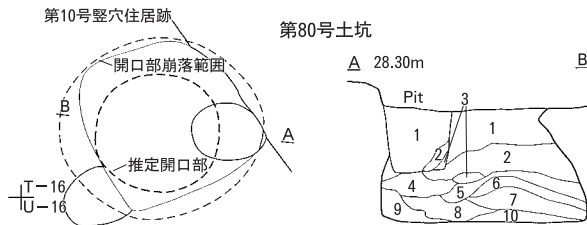
- 第62号土坑
- 第1層 10Y R3/4 暗褐色土 ローム粒・中振浮石少量混合
 - 第2層 10Y R6/1 褐灰色浮石
 - 第3層 10Y R6/2 灰黄褐色浮石 黒色土混合
 - 第4層 10Y R6/4 にぶい黄橙色粘質土 上位に褐灰色浮石混合
 - 第5層 10Y R3/2 黒褐色土 炭化物粒微量・ローム粒・中振浮石少量混合
 - 第6層 10Y R3/4 暗褐色土 にぶい黄橙粘土塊・ローム塊・炭化物粒・焼土粒・各浮石混合
 - 第7層 10Y R2/2 黒褐色土 炭化物粒・ローム粒混合
 - 第8層 10Y R4/4 褐色土 褐色砂・炭化物粒・ローム粒・中振浮石微量混合
 - 第9層 10Y R2/2 黒褐色土 炭化物粒・焼土粒・ローム粒混合
 - 第10層 10Y R3/3 暗褐色土 浅黄橙粘土混合
 - 第11層 10Y R6/1 褐灰色浮石
 - 第12層 10Y R7/3 にぶい黄橙色粘質土 灰白色浮石・砂少量混合



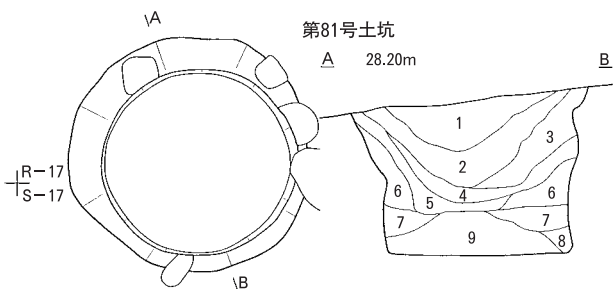
- 第69号土坑
- 第1層 10Y R3/3 暗褐色土 炭化物粒微量・ローム粒・中振浮石少量 南部浮石微量混入



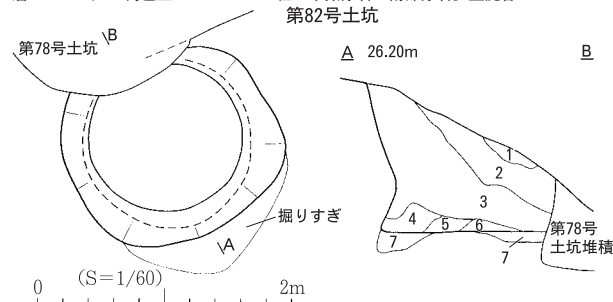
- 第74号土坑
- 第1層 10Y R5/6 黄褐色土 黄褐色砂・炭化物粒・中振浮石微量混合
 - 第2層 10Y R2/3 黒褐色土 炭化物粒微量・ローム粒・中振浮石少量混合
 - 第3層 10Y R4/4 褐色土 黄褐色砂・炭化物粒・ローム粒・中振浮石微量混合
 - 第4層 10Y R2/3 黒褐色土 炭化物粒微量・ローム粒・中振浮石少量混合
 - 第5層 10Y R3/4 暗褐色土 炭化物微量・中振浮石少量混合
 - 第6層 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土 ローム粒混合
 - 第7層 10Y R4/6 褐色土 黒色土・炭化物粒・ローム粒・中振浮石・南部浮石微量混合
 - 第8層 10Y R2/3 黒褐色土 炭化物粒微量・ローム粒・南部浮石・中振浮石少量混合



- 第80号土坑
- 第1層 10Y R4/6 褐色土 ローム粒・中振浮石・南部浮石少量混合
 - 第2層 10Y R3/2 黒褐色土 ローム塊・中振浮石・南部浮石少量混合
 - 第3層 10Y R5/8 黄褐色粘質土 ローム塊
 - 第4層 10Y R8/1 灰白色粘質土 一部に明黄褐色浮石・八戸火山灰最下層
 - 第5層 10Y R3/1 黒褐色土 炭化物粒多量・ローム粒・中振浮石・南部浮石少量混合
 - 第6層 10Y R4/4 褐色土
 - 第7層 10Y R3/1 黒褐色土 炭化物粒・ローム粒・中振浮石・南部浮石少量混合
 - 第8層 10Y R8/1 灰白色粘質土 一部に明黄褐色浮石・八戸火山灰最下層
 - 第9層 7.5Y R5/8 明褐色粘土 灰白色粘土混合・高館火山灰粘土
 - 第10層 10Y R3/1 黒褐色土 炭化物粒・ローム粒・中振浮石・南部浮石少量混合
- Pit
- 第1層 10Y R4/4 褐色土 ローム・灰白色粘土・南部浮石混合
 - 第2層 10Y R5/8 黄褐色粘質土 ローム塊
 - 第3層 10Y R4/6 褐色土 ローム粒・中振浮石・南部浮石少量混合



- 第81号土坑
- 第1層 10Y R2/3 黒褐色土 ローム塊・中振浮石少量・南部浮石多量混合
 - 第2層 10Y R4/6 褐色土 ローム塊・中振浮石・南部浮石少量混合
 - 第3層 10Y R5/6 黄褐色土 破碎ローム・南部浮石・黒色土粒微量混合
 - 第4層 10Y R3/4 暗褐色土 炭化物微量・砂粒・中振浮石少量混合
 - 第5層 10Y R4/6 褐色土 炭化物微量・中振浮石少量混合
 - 第6層 10Y R4/4 褐色土 破碎ローム・灰白色粘土塊・砂粒少量混合
 - 第7層 10Y R5/6 黄褐色土 灰白色粘土塊・砂粒少量混合
 - 第8層 10Y R6/4 にぶい黄橙粘質土 砂粒と粘土塊の混合
 - 第9層 10Y R2/2 黒褐色土 砂粒・ローム粒微量・南部浮石・中振浮石少量混合



- 第82号土坑
- 第1層 10Y R6/8 明黄褐色粘質土 南部浮石混合
 - 第2層 10Y R3/3 暗褐色土 炭化物粒微量・ローム粒・中振浮石少量混合
 - 第3層 10Y R5/8 黄褐色土 中振浮石・南部浮石少量混合
 - 第4層 10Y R4/6 褐色土 炭化物微量・中振浮石少量混合
 - 第5層 10Y R3/4 暗褐色土 炭化物微量・砂粒・中振浮石少量混合
 - 第6層 10Y R2/3 黒褐色土 ローム粒・中振浮石少量混合
 - 第7層 10Y R4/4 褐色粘質土 掘り方埋め土

図32 土坑(2) I類A型

櫛館遺跡

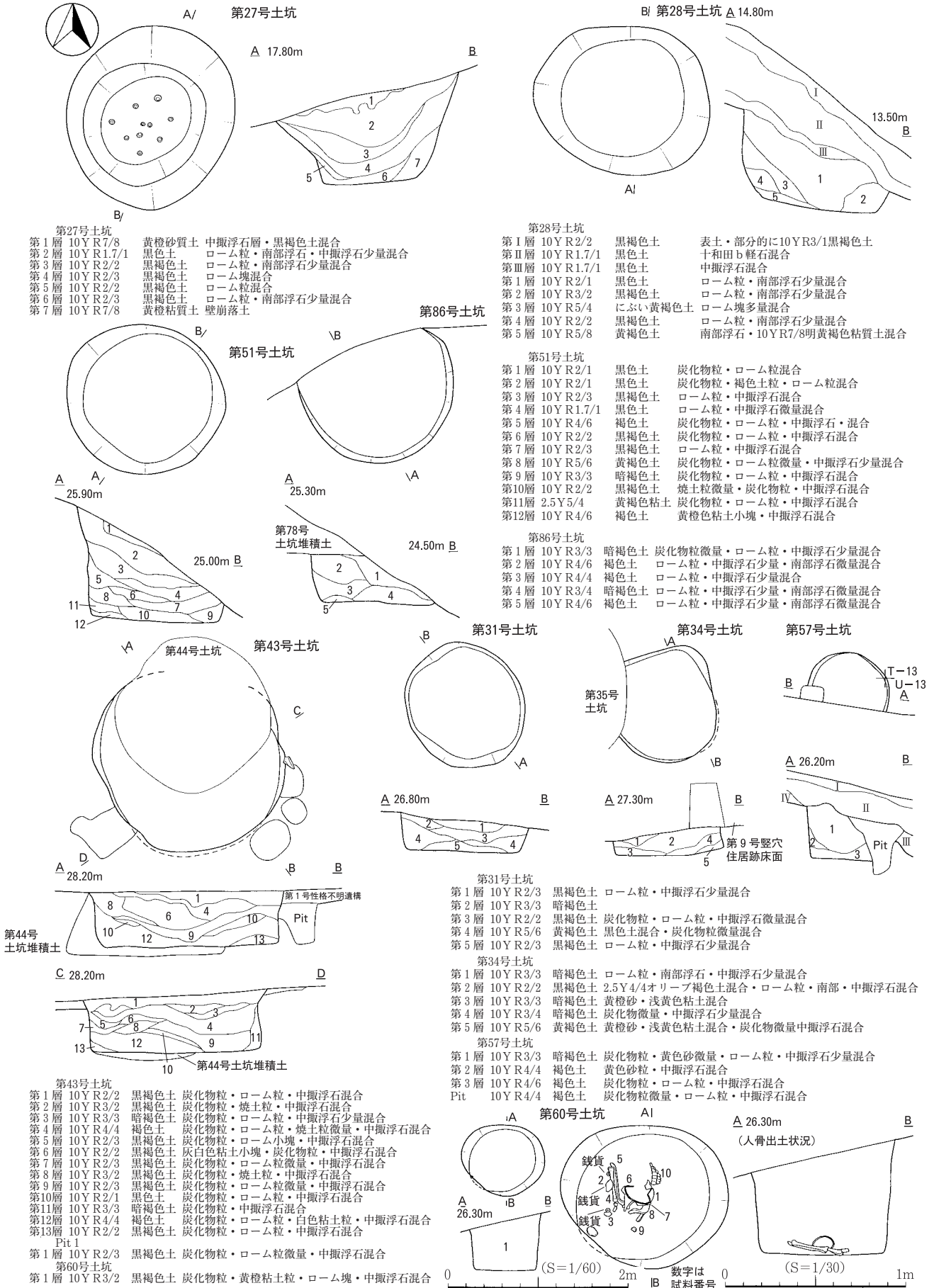


図33 土坑 (3) I類 B・C型

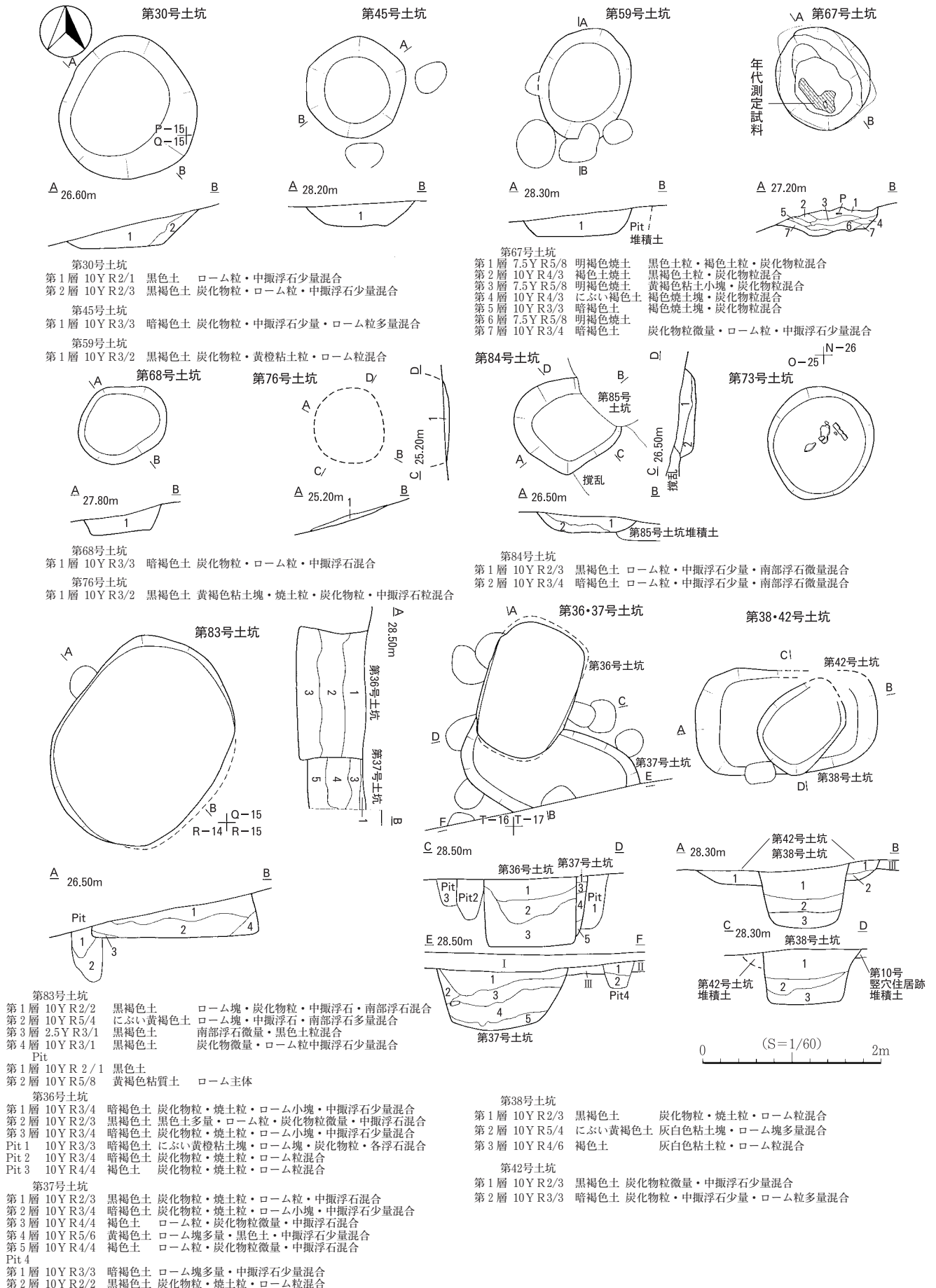


図34 土坑(4) I類D・E型 / II類A・B・D型

櫛館遺跡

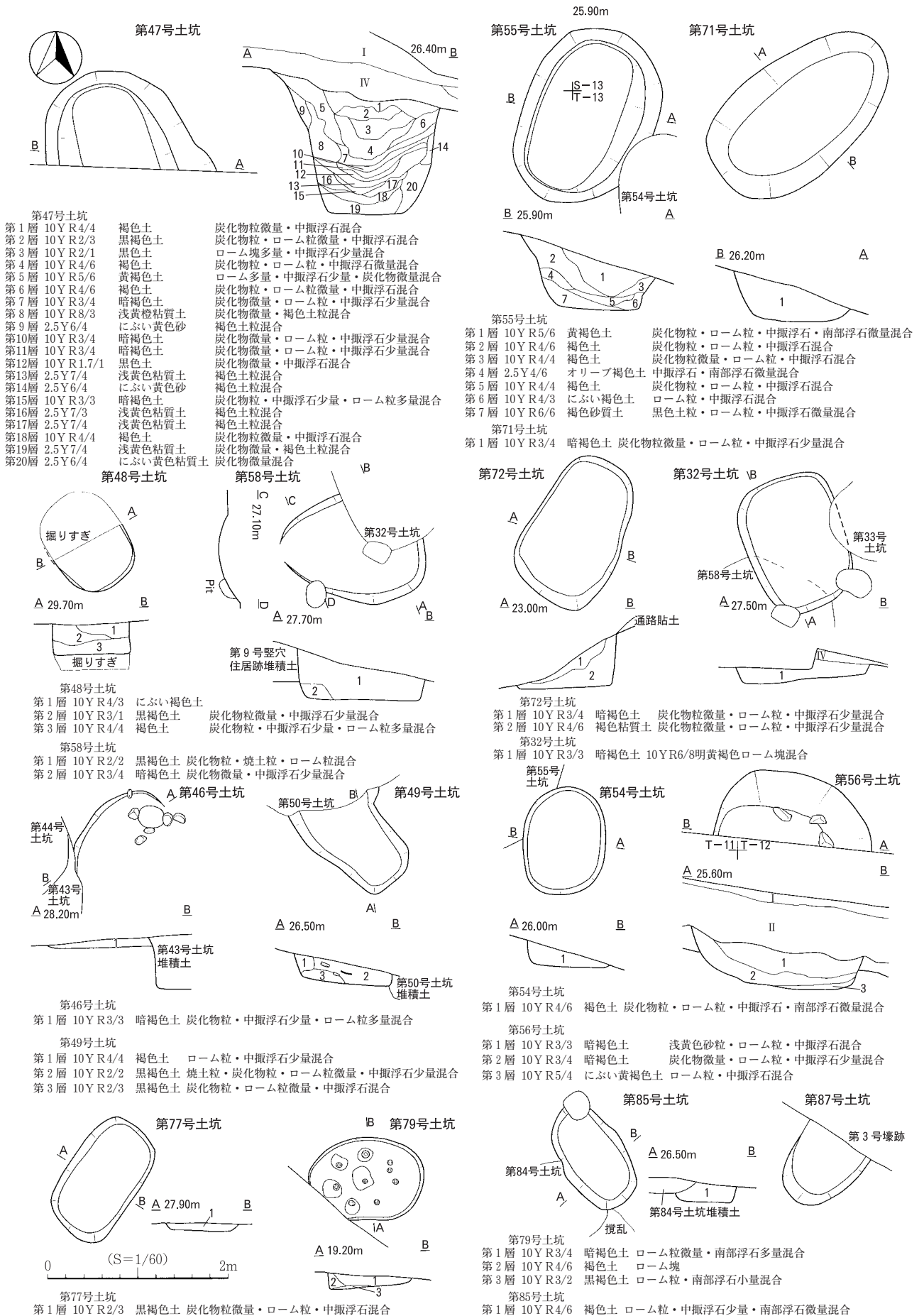


図35 土坑 (5) II類 B ~ E型

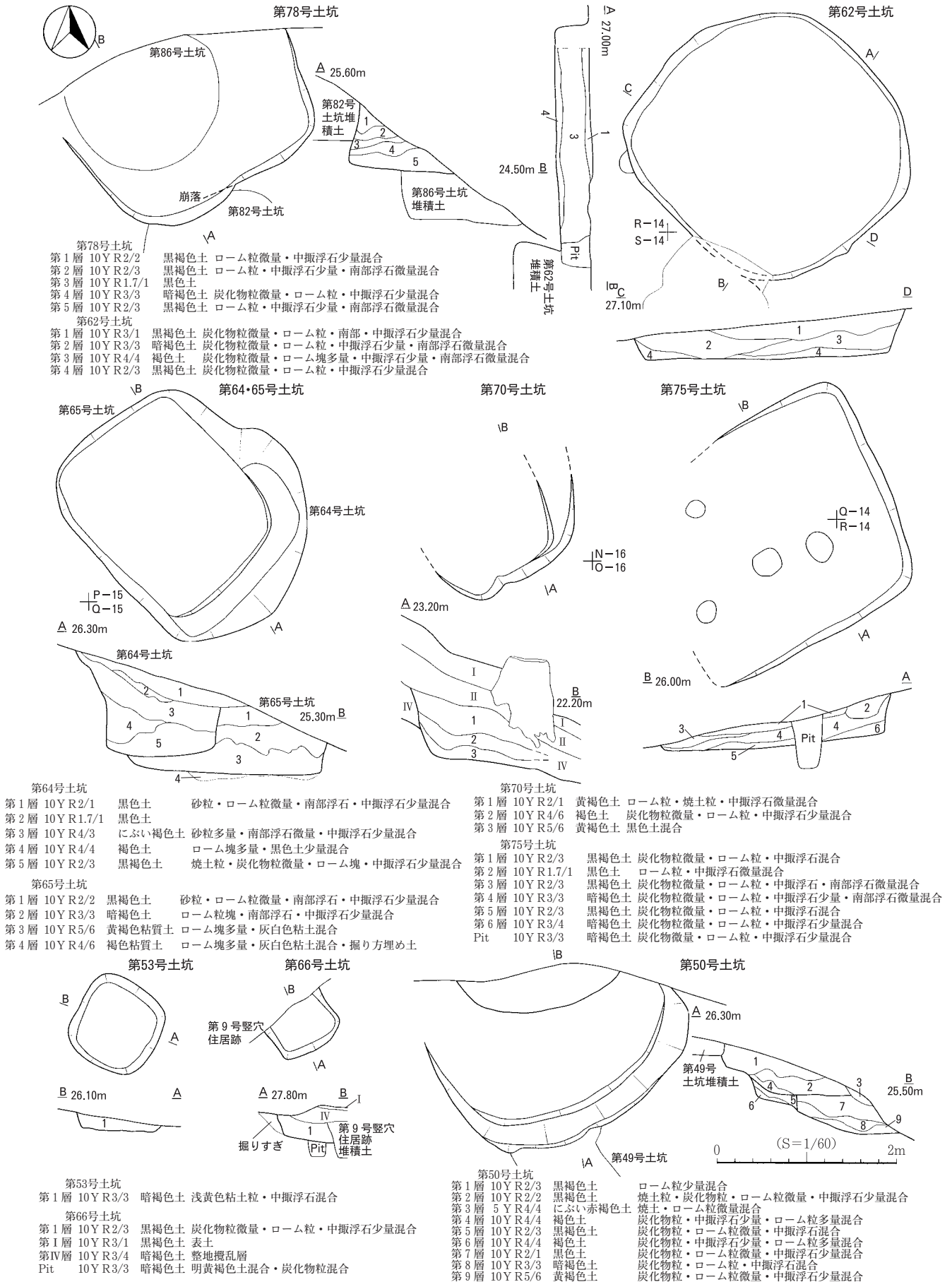


図36 土坑(6) II類B型/III類A・C型/IV類

号土坑は第85号土坑より新しいが、出土遺物がなく年代は不明である。その他の土坑も出土遺物が乏しく、用途や時期の判断は困難である。

E型(図34) = 第73号土坑が該当する。土層断面図を作成しなかったため堆積土や堆積状況は不明である。開口部径約1.2m・底面径約1.1mで、出土遺物から縄文時代後期の時期が考えられる。

II類(図34～36) : 21基が該当する。平面形は長方形に近いものもある。主軸は北西 - 南東軸か北東 - 南西軸のものが多い。断面形状はA～E型があり、約3割の7基から遺物が出土している。

A型(図34) = 第36・83号土坑の2基が該当する。第36号土坑は開口部151×105cm・底面158×100cm・深さ79cm、第83号土坑は開口部233×182cm・底面217×186cm・深さ51cmである。内傾するのは壁の一部で、第36号土坑は第37号土坑、第83号土坑は第43号土坑に形態に近い。第36号土坑は縄文土器・土師器が出土し、重複関係から第37号土坑よりも新しい。第83号土坑は縄文土器が出土しているが、Pitを切っていることから古代以降の年代が考えられる。

B型(図34～36) = 第37・38・47・55・64・71号土坑の6基である。調査区域外に延びるものや、重複により全長がわからないものがあるが、開口部長軸が2mを越える大型もの(第55・64・71号土坑)とそれ以下もの(第37・38号土坑)とに分けられる。第47号土坑は前者に推定される。底面短軸幅は80cm代のものが多く、規格性を予想させる。深さは1m以上(第47・64号土坑)とそれ以下(第37・38・55・71号土坑)に大別される。出土遺物が乏しく用途や時期の判断は困難である。

C型(図35) = 第48・58・72号の3基である。第58・72号土坑は開口部約1.6×1.1m・底面1.5×1m・深さ60cmであるが、第48号土坑は開口部114×86cm・底面(150)×86cm・深さ38cmと小さい。堆積土は2～3層に分層される。出土遺物に乏しく、用途や時期の判断は困難であるが、第58号土坑は第9号竪穴住居跡を切っていることから古代以降の年代が考えられる。

D型(図34・35) = 第32・42・46・49・54・56・77・79・85号の9基が該当する。平面形は隅円方形に近いものもある。ほとんどは開口部の長軸が1.2m前後だが、第42・56号土坑は2m近くと大きい。深さは上記2土坑以外は50cm未満で、特に第46・77号土坑は約10cmとかなり浅い。第79号土坑は底面からPitが検出された。Pitは9個で底面中央とその周辺に円を描くように配置され、縄文時代の落とし穴の可能性もある。第49号土坑は出土遺物から縄文時代、第56号土坑は白頭山 - 苫小牧火山灰の堆積から古代と考えられる。また、重複関係から、第32号土坑は縄文以降で古代以前、第42号土坑は古代以前の年代が考えられる。

E型(図35) = 第87号土坑が該当する。第3号壕跡に切られ半分ほどしか遺存していないが、開口部(85)×74cm・底面(69)×61cmで規模はD類に近い。土層断面図を作成していないため、堆積土の状況は不明である。遺物は出土していないが、重複関係から中世以前の年代が考えられる。

III類(図36) : 7基が該当する。北西 - 南東方向を主軸とし、堆積土中にローム塊を多量に混入するものが多い。遺物はほとんど出土しない。断面形状はA・C・D型がある。

A型(図36) = 第78号土坑が該当する。内傾するのは壁の一部である。開口部117×(203)cm・底面167×(187)cm・深さ79cmである。第82・86号土坑を切りこれらより新しいが、出土遺物がないため詳細な時期や用途の判断は困難である。

C型(図36) = 第62・65・70・75号土坑の4基が該当する。第65・75号土坑の平面形は長方形に近くしっかりした角をもつが、第62・70号土坑は隅円で円形に近い。第70号土坑以外は開口部・底面と

も一辺2mを越え、第62・75号土坑は3m近い。深さは60cm以上である。第65号土坑は掘り方をもつ。第75号土坑は土師器が出土していることから古代以降、重複関係から第62号土坑は中世以前の年代が考えられる。第65号土坑は第64号土坑より新しいが詳細な年代は不明である。

D型(図36) = 第53・66号土坑の2基が該当する。平面はほぼ正方形に近く一辺約1m、深さは約30cmで堆積土は単層である。出土遺物がないため用途や詳細な時期の判断は困難であるが、第66号土坑は第9号竪穴住居跡に切られていることから、古代以前と考えられる。

IV類(図36) : 第50号土坑が該当する。平面はU字状に近く断面はD型に分類される。規模は開口部289×(195)cm・底面246×(157)cm・深さ105cmで、壁面に形成された段や土層観察から、第1～4層、第5・6層、第7～9層の3基の土坑に分けられる可能性がある。出土遺物や重複関係から縄文時代の時期が推測される。(平山)

出土遺物(図37～41)

総数61基中、32基の土坑から遺物が出土している。大多数は堆積土中から散在した状態で出土しているが、第69・73号土坑では底面から、第29号土坑では底面直上から土器が出土している。出土土器のほとんどが破片と細片で復元できるものはなく、器形や文様のわかるものは少ない。土器の大多数は第群土器で、これに第群土器や、石器類、土製品、銭貨が混在して出土している。石器類と土製品はおおむね第群土器に伴うものと思われるが、数点の銭貨や第群土器などはすべて堆積層の上位から出土しており、縄文時代以降のそれらの帰属時期に、丘陵頂部が使われた際に混入したものと判断される。以下に特徴的な土器・石器の概略を記述し、銭貨については後述する。

図37-1・2は第29号土坑の底面直上から出土した。口縁部文様帯は波状口縁に添う長方形が施され、頸部は磨り消された無文帯となる。胴部文様帯は方形区画文内にS字が連結したコ状文が施文される。5は切断土器で上位の堆積土中から出土した。紐通し突起が付けられた小型の壺形土器で、方形文内に円形および方形文が施文されている。7は破損した石器で石篋とした。第31号土坑出土の9は早期貝殻文土器の細片である。第35号土坑の12・13・15は第群土器、14は第群土器である。第36号土坑出土の20は周縁を使用する敲き石である。第39号土坑出土の25は地文縄文の鉢形土器で、口縁部に隆帯が剥落した痕がみられる。32は複合機能をもつ礫石器で、内側に湾曲した磨り面をもつ。第40号土坑出土の図38-34は磨消縄文による弧状文または曲線文が施される。35と36は切断土器で、35は小型壺形土器の胴部上半が、36はほぼ底部付近から切断されている。39は方形区画文の土器である。第41号土坑出土の42は、無文の小型壺形土器でケズリだけの成形である。底部は低い台が付けられ、紐通し孔が施される。43と45は壺形土器の胴部破片で、方形またはコ状文が施文される。第43号土坑の48と51は第群土器、49と50は第群土器である。第49号土坑の60はボタン状の隆帯が貼付された胴部片である。第50号土坑の63はLRが施文され、胴部下半から底部はミガキがかけられている。底部は小さな高台状で、よく表されていないが直交する四方向に刻みが施されている。64は横位の沈線で区画し、磨り消しにより縄文施文帯と無文帯を交互に表出させている。第52号土坑出土の図39-68は波状口縁の鉢形土器である。口縁部と胴部下半に隆帯を貼付し、隆帯上にLR縄文が充填施文されている。胴部下半の文様帯区画の隆帯には紐通し突起が付けられている。頸部の横位沈線と胴部下半隆帯で文様帯が区切られ、口縁部文様帯には三角形文、胴部上半には長楕円形文とコ状文ないしは方形文、胴下半にも長楕円形文が施される。72は地文縄文に沈線で文様が施されている。第61号

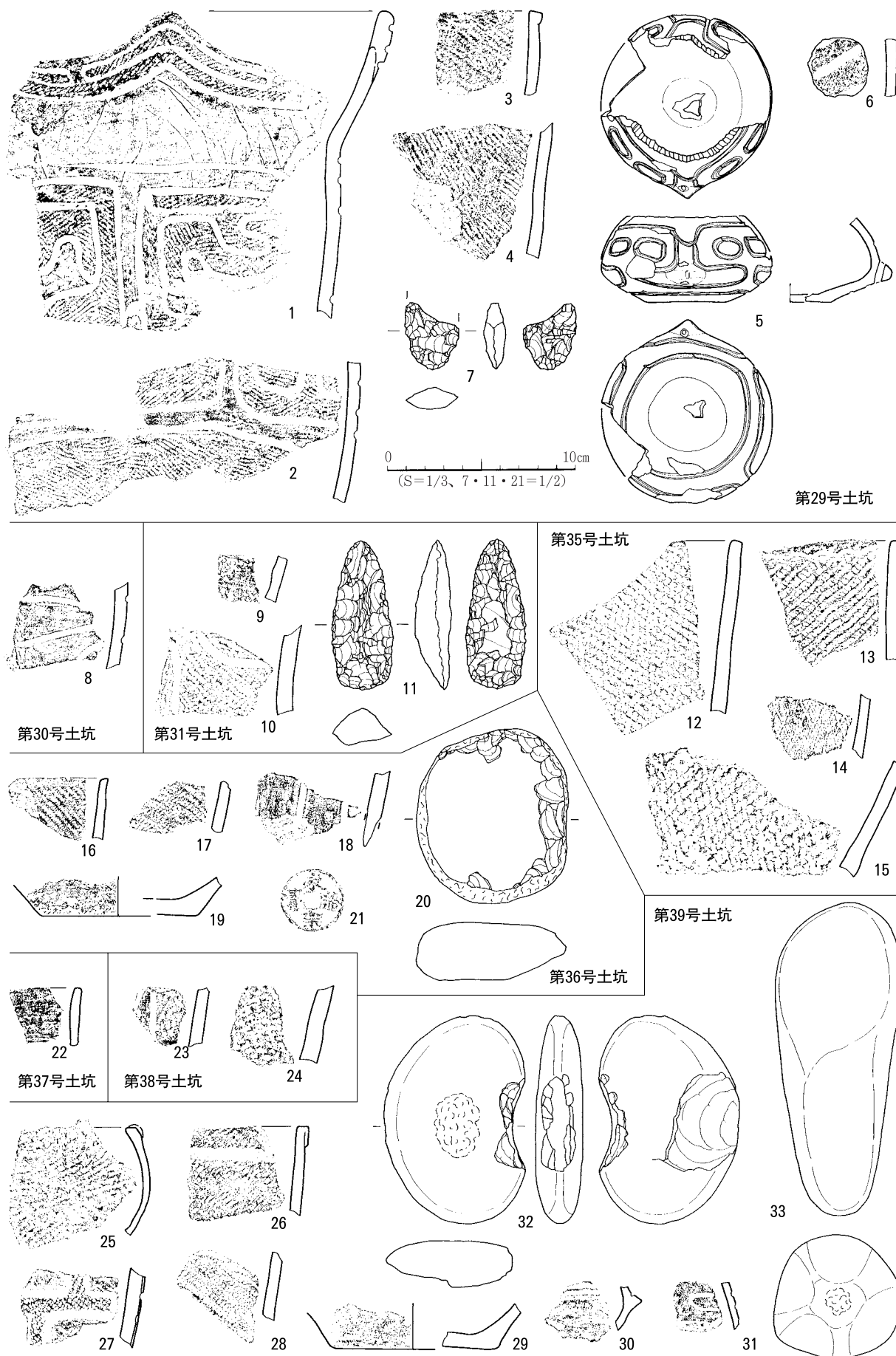
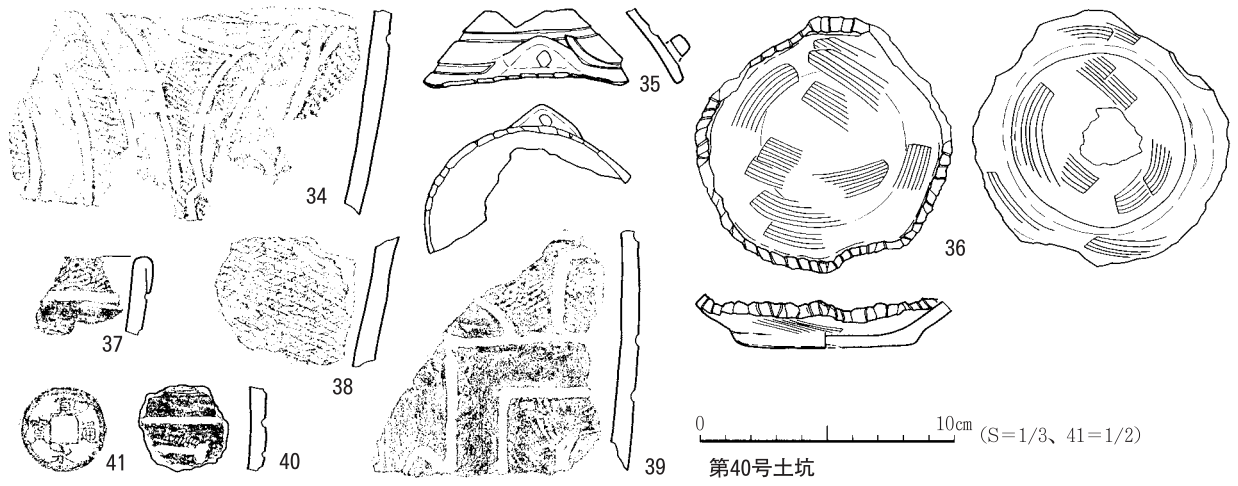
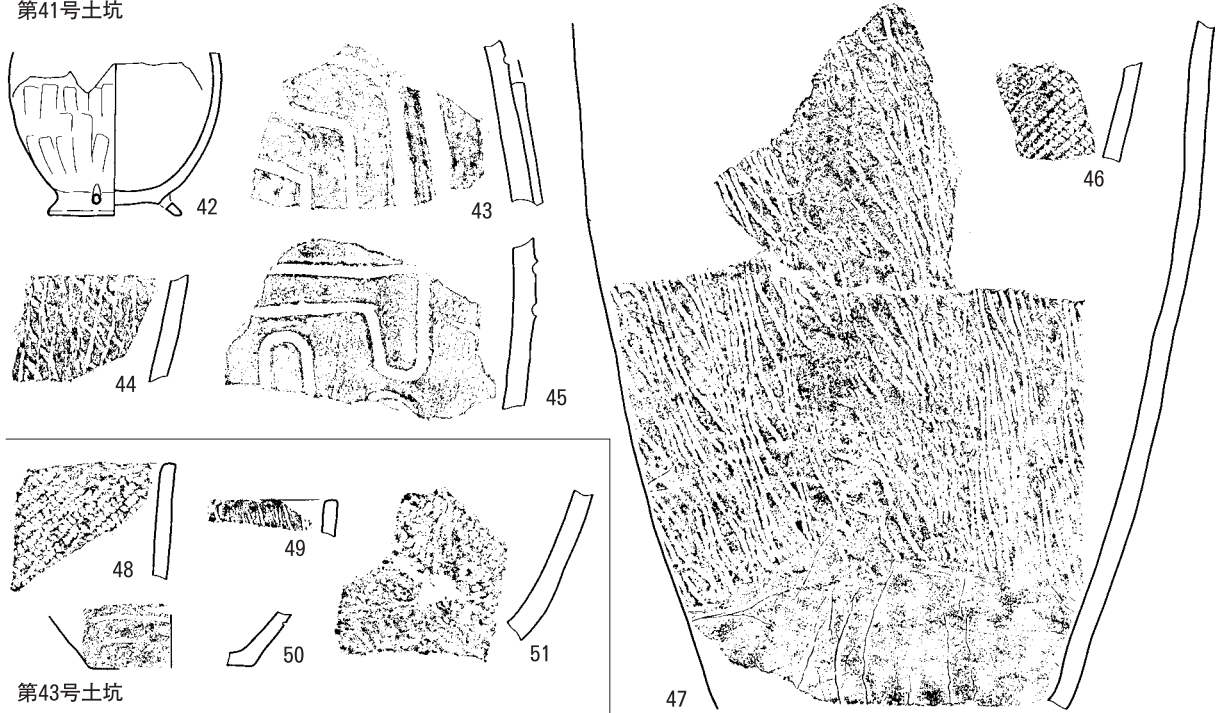


图37 土坑出土遺物 (1)



第41号土坑

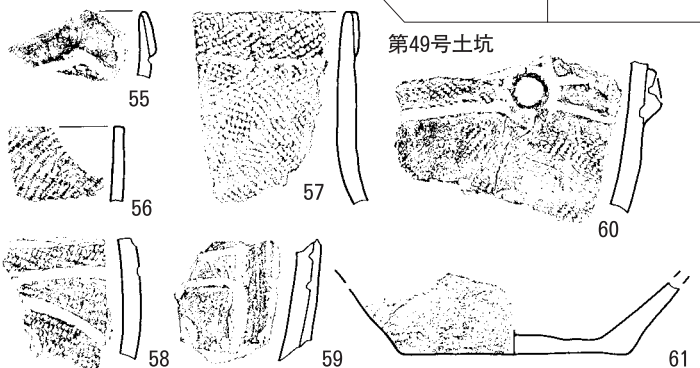


第43号土坑

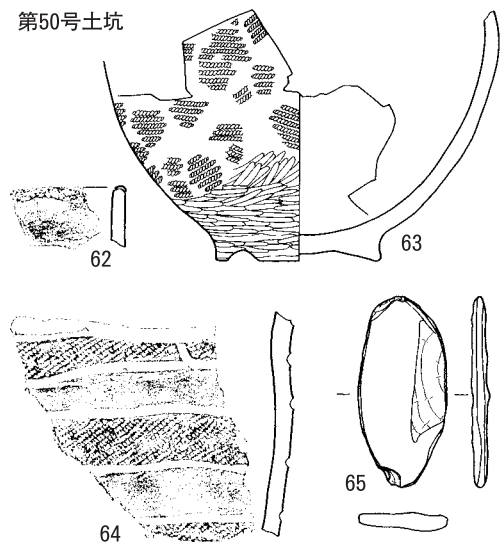


第45号土坑

第48号土坑



第49号土坑



第50号土坑

图38 土坑出土遺物 (2)

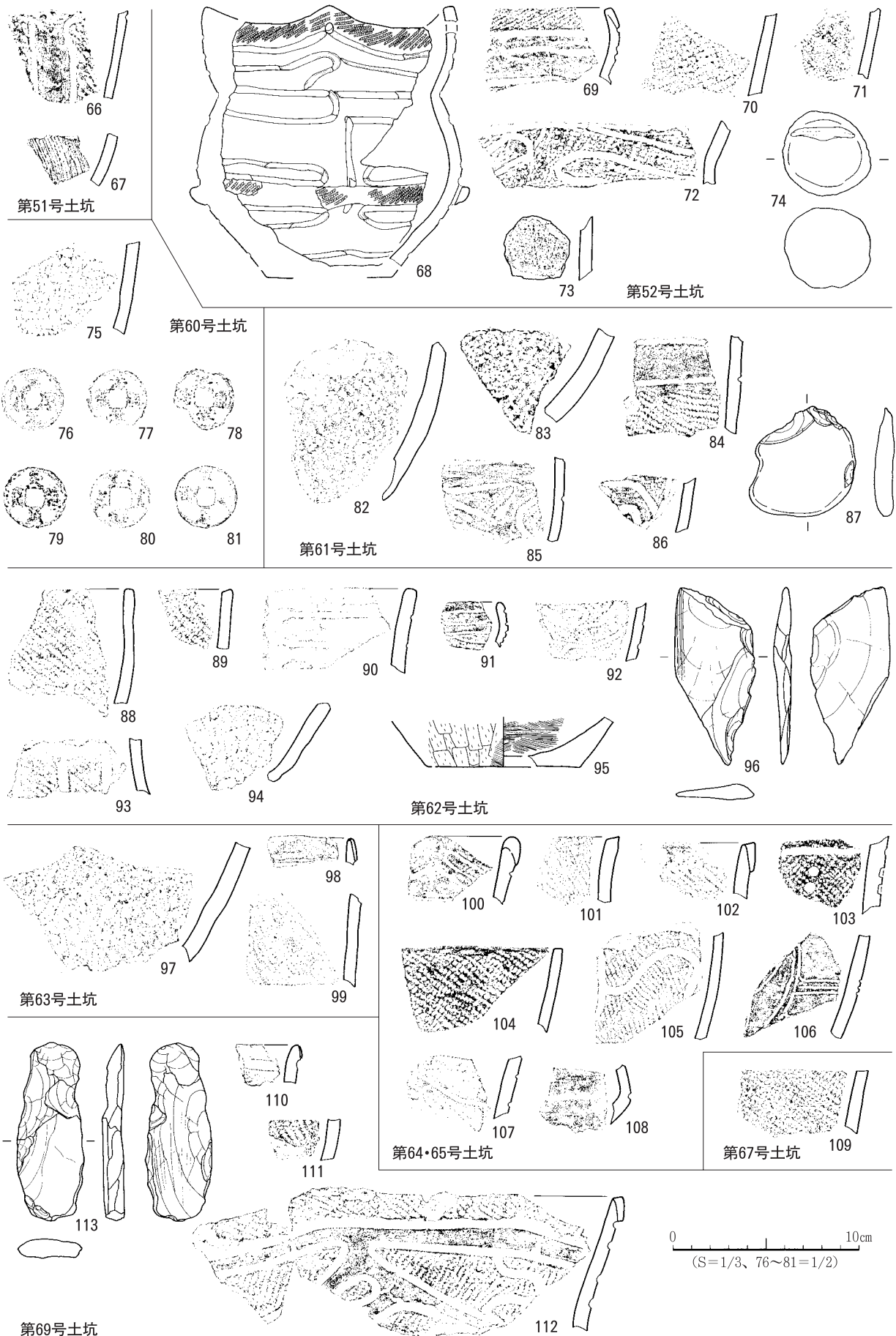


图39 土坑出土遺物 (3)

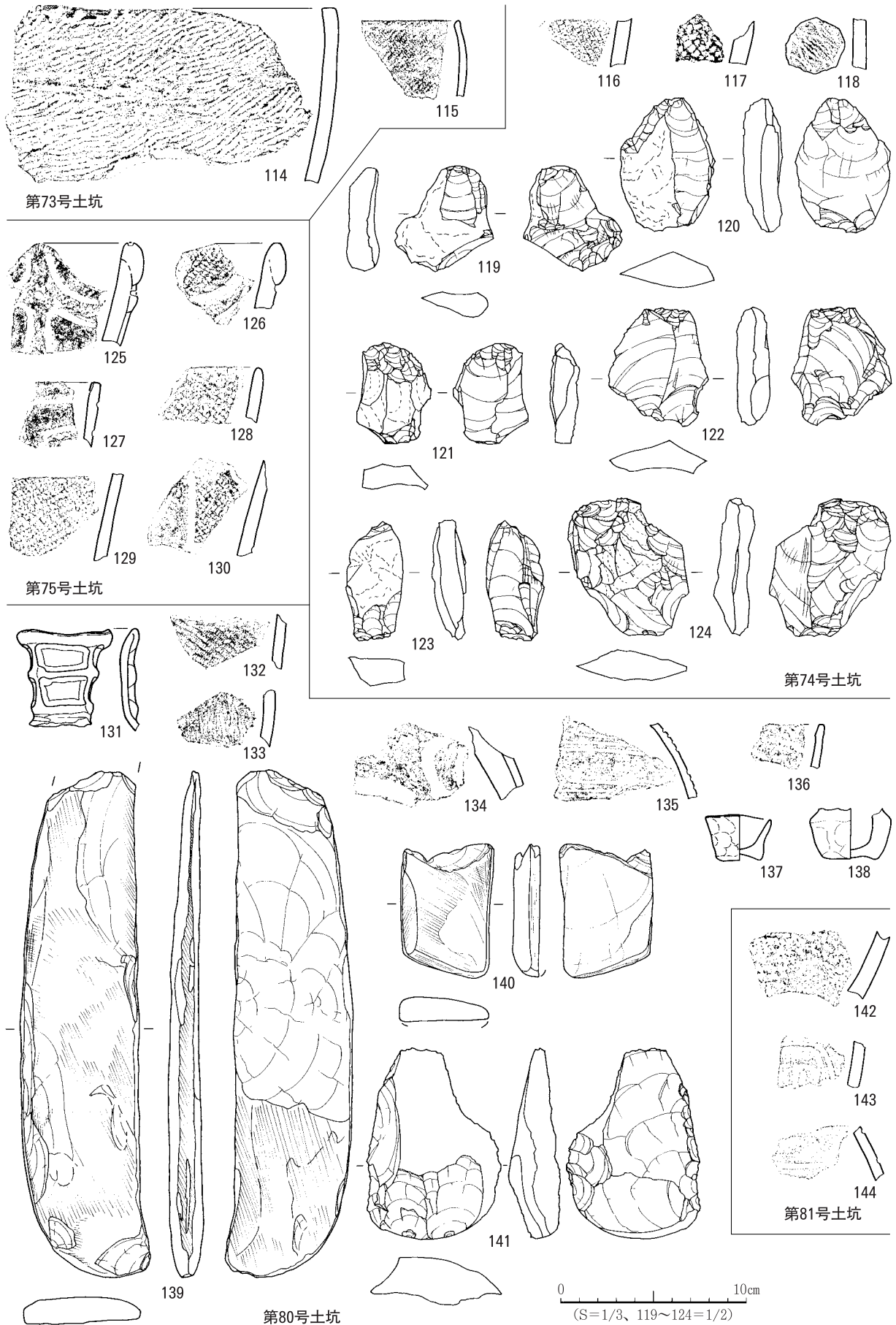


図40 土坑出土遺物(4)

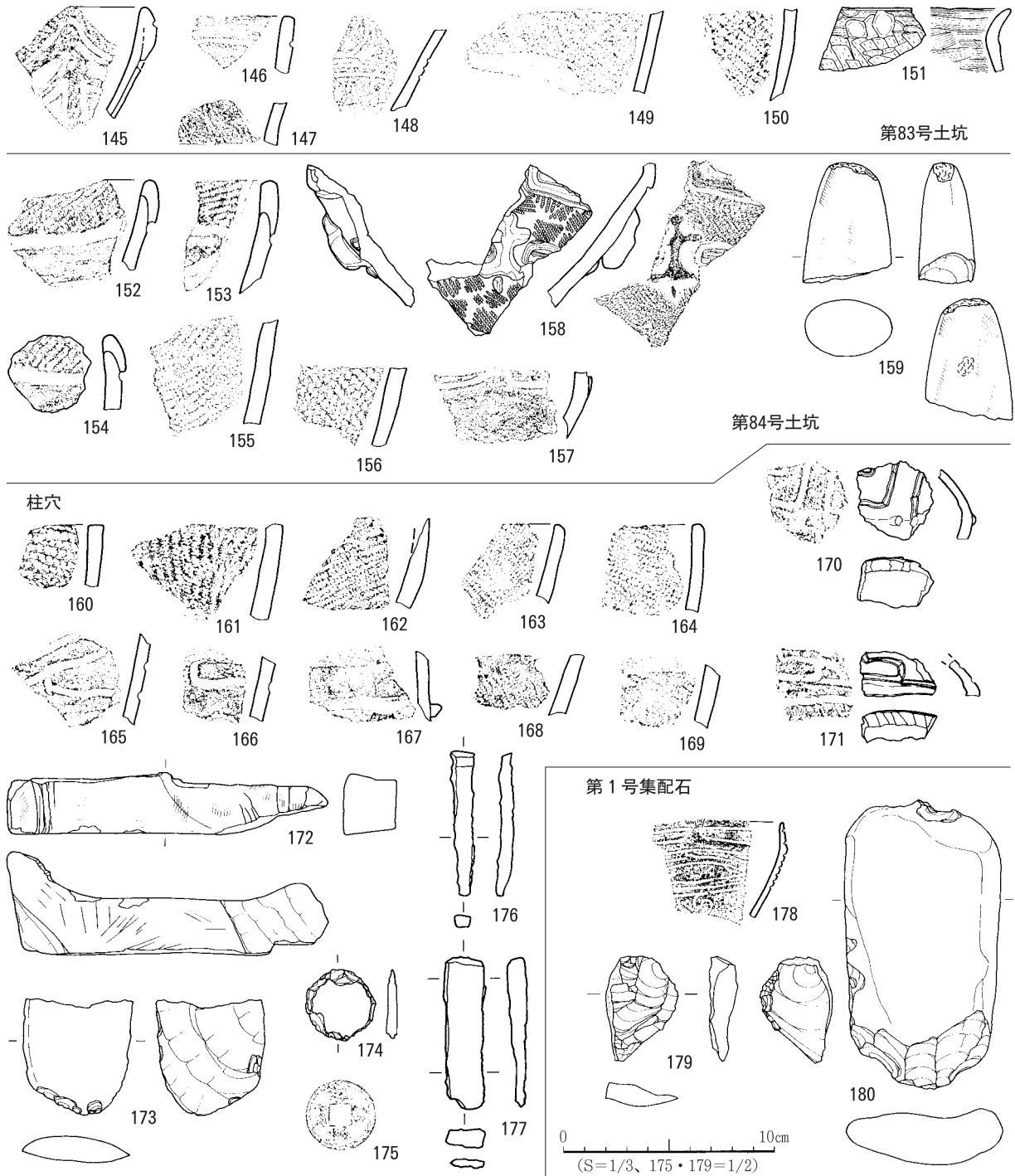


図41 土坑出土遺物（5）・柱穴出土遺物・集配石出土遺物

土坑の82と83は第 群土器の底部付近の破片である。85は磨消縄文で三角形文と楕円形文が施される。第62号土坑の88はR L、89は0段多条L Rが施文される。90は壺形土器の口縁部で長楕円形文が施文される。91は小型の鉢形土器か、細い沈線で施文されている。95は土師器の底部破片で、外面ヘラケズリ内面ヘラナデされ、外底面には木葉痕がみられる。第64・65号土坑の100は肥厚した無文の口縁部に長楕円形文が施される。103は竹管刺突が施されている。第69号土坑の112は隆帯貼付の厚い口縁部で、太い沈線により三角形文とS字状文が施されている。無文部は磨消による。第73号土坑の図40 -

114は無節Lが施文されている。第74号土坑の119～124は両極技法で割られた石器および剥片で、総数18点が堆積土中から散在して出土した。第75号土坑の125は波状口縁の波頂部から垂下する隆帯と横位の隆帯が貼付され、さらにボタン状の隆帯が付けられ刺突が施される。隆帯は太めの沈線で縁取られている。127と130は方形またはコ状文と思われる。第80号土坑の遺物もやはり破片ばかりであるが多様である。131は壺形土器の口縁部で、隆帯により二段の方形文が四面に表出されている。一部に赤彩の痕跡が残る。134と135は壺形土器で、134は太い隆帯と沈線で、135は細い沈線で長楕円形と円形ないしは弧状文が施文される。137と138はミニチュア土器で、138は壺形を模したものと思われる。139と140は石刀で、出土した石刀のなかでは比較的丁寧に成形されているほうである。製作途中に破損した可能性のほか、使用による破損も考えられる。第84号土坑の図41 - 158は動物意匠付き土器である。地文縄文が施された壺形土器の胴部下半に、粘土紐で四肢獣が表現されている。剥落しており確かではないが尻尾と思われる痕もみられる。胴部上半には方形文が施文されている。160～178は平場内の柱穴埋め土から出土した遺物で、第1群土器のほか石器や石製品、銭貨と鉄製品が出土している。170と171は切断土器で、共に小型の壺形土器が用いられている。170は方形文がコ状文、171は楕円形文が施文されている。(小田川)

第11節 焼土跡 (図42)

本調査では5基の焼土跡が検出された。1次調査では13基の焼土跡が検出されており、続けてSN - 14から番号を付したがSN - 14は土坑となった。SN - 15～19までをまとめて記述する。

[検出層位と位置] 焼土跡はすべて平場にあり、第15～18号までは八戸火山灰最下層の灰白色火山灰層面で、第19号は第1層面(第1層)で検出された。第15～18号まで4基の焼土跡は、柱穴が密集するS・T - 17グリッドにまとまってあり、これらから西側に約10m離れた平場内緩斜面のS - 14グリッドに第19号が位置する。第15～18号はほぼ一グリッド内にあり、第15号と第16号は約30cm、第16号と第17号は約1.4m、第17号と第18号は約1mの間隔でほぼ同一レベル面に近接している。

[重複] 第15号と第19号は柱穴に近接するが重複はない。第16号と18号は柱穴および土坑より新しく、第17号は第39号土坑に切られている。

[形状・規模] 形状はすべて歪んだ不整形である。規模は第15号が40×45cm、第16号が50×55cm、第18号が55×60cmでやや円形に近く、大きさも近似している。第17号は切られているが規模はこれらと同じくらいと推定される。第19号は50×90cmで楕円状である。

[焼成層] 焼成層の厚さは5～10cmで全てレンズ状に焼けており、地山面が黄橙色および赤褐色に変色している。第17号～第19号は単一の焼成層であるが、第15・16号は焼成層の上に3～5cmの厚さで、炭化物や焼土粒が混じる黄橙色の粘土が、焼土の中央部にのっている。また、第15号の焼成層の下の第4層は灰黄褐色で、八戸火山灰最下層の灰白色火山灰層が還元変色したものと思われる。

[出土遺物] 焼土内から遺物は出土していない。

[小結] 第15・16号は粘土層と還元面から単に火が焚かれたものとは思われない。焼土内および周辺から遺物は出土していないが、第1号竪穴建物跡の覆土から碗形滓が出土していることから鍛冶遺構の可能性が高い。また、第17・18号は焼成層だけであるが第15・16号と近接した位置にあり、規模等

櫛館遺跡

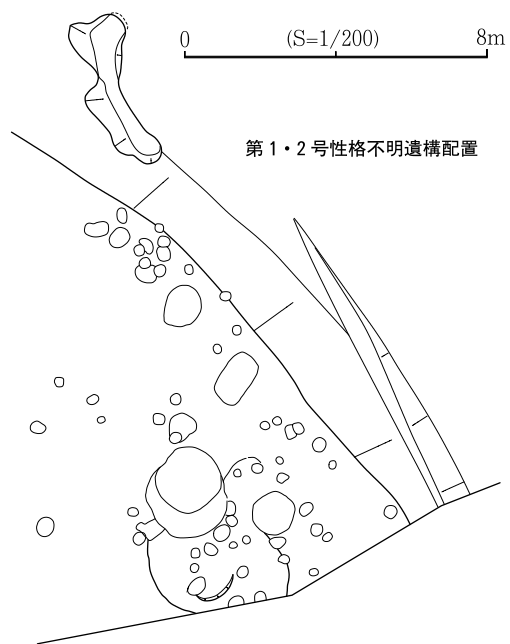
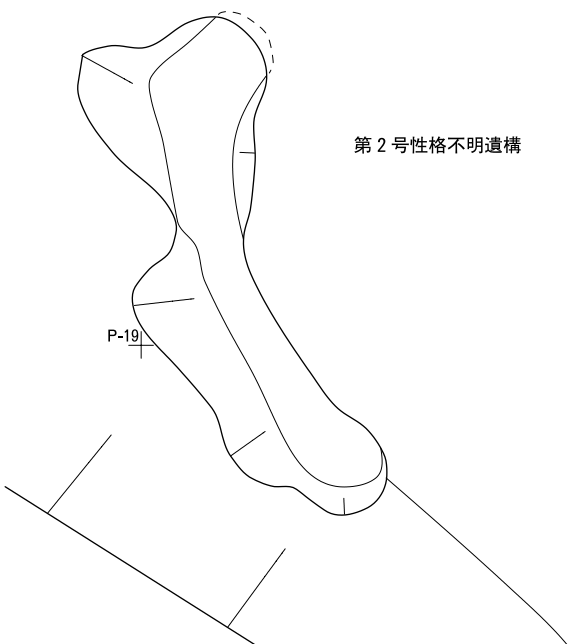
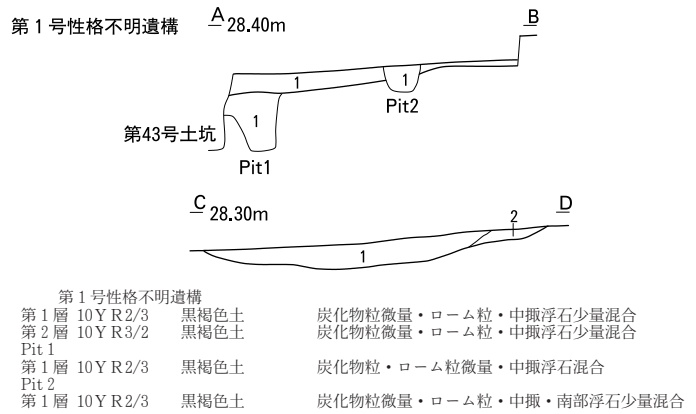
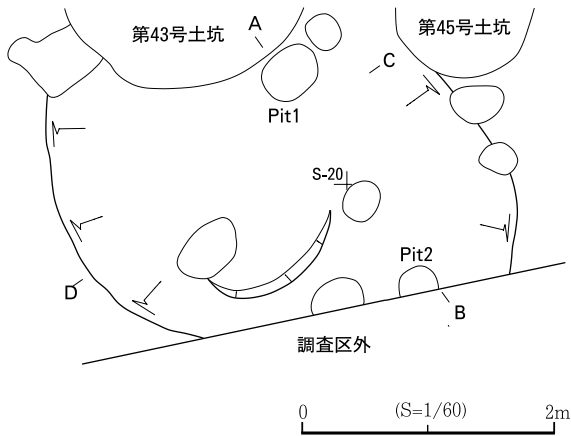
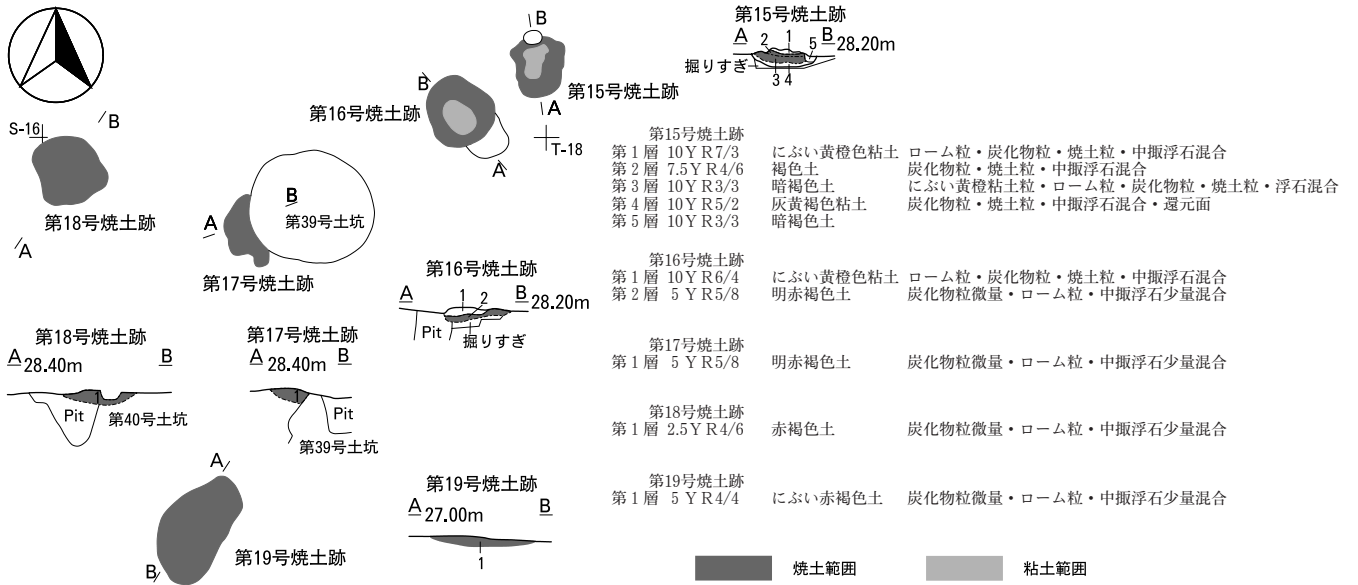


図42 焼土跡・性格不明遺構

からみて関連して機能した可能性もある。各焼土跡の帰属時期は不明であるが、重複および周辺遺構との関係から古代ないしは中世のものと思われる。(小田川)

第12節 性格不明遺構

掘り込まれているが、形状が不規則かつ不明瞭で機能性格も想定できないものを本類とした。

第1号性格不明遺構 (図42)

[位置と確認] T・S - 20・21グリッドの第 層面に黒褐色の不整な形状で検出した。

[重複] 第43号土坑および柱穴と重複するが新旧は不明である。

[規模] 一部調査区外に延びるが、平面形は約3～4mの楕円形と思われる。断面形は皿状で、深さは約10～20cmである。底面には起伏と一部に段がある。

[土層] 黒褐色土で2層に分けられる。人為に埋められている。

[小結] 竪穴住居跡の掘り方の可能性もあるが、断定できない。

第2号性格不明遺構 (図42)

[位置と確認] 平場北斜面のP・Q - 20グリッドに位置する。黒色土の不整形で確認され、土質も柔らかいため、当初は伐根跡ないしは攪乱と判断していた。

[規模] 長さ約4m、幅は約60cm～1.2mの溝状であるが形状は極めて不規則である。底面は起伏が激しく、壁面は壕跡と同じで抉れている。

[土層] 土層断面図は作成していないが、黒色土と黄褐色ローム塊が混合している。

[出土遺物] 縄文土器と土師器が数点出土したが、平場の遺物と混在してしまった。

[小結] 遺構と断定するには疑問も持たれるが、掘られているものであれば、第5節で記述したように門跡および通路との関係が指摘される。(小田川)

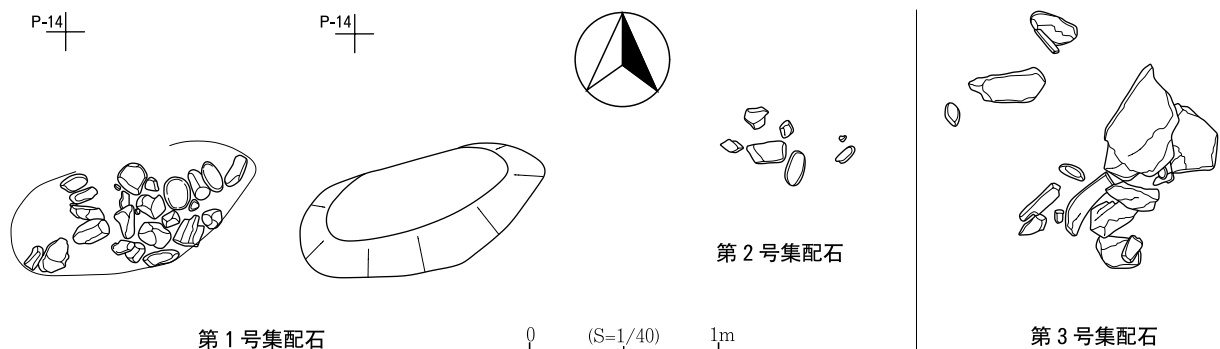


図43 集配石

第13節 集配石

調査区内からは大・小の自然礫が多数出土しているが、平場内に意図的に集められたと思われるものがあることから集配石として以下に記述する。

第1号集配石 (図43)

[位置と確認] Q - 15グリッドの第 層面 (層) に黒褐色の不整形な掘り込みと、掘り込み内にほぼ同一レベルで並んだ礫を検出した。

[重複] 平場に進入する通路跡と接しているが重複は不明、検出状況的には集配石が下位にある。

[規模] 礫は、20cm程の円礫 (河原石) を主体に角礫 (粘板岩) を含め総数23個集められている。東西方向に直線で9個が約1.3mの長さで並べられており、その中心部に直行して2個、さらに8個が南北方向に約60cmの長さで弧状に配置されているように見える。

[掘り方] 掘り込みは歪な溝状で深さは10cmに満たない、起伏が激しく、各礫は第 層面に接しているものと浮いているものがある。土層断面図は作成していない。

[出土遺物] 検出時に図41 - 178の赤彩された鉢型土器の破片と179の削器が出土しているほか、配置された礫のなかに180の礫器が含まれていた。

[小結] 十字状に配置された配石で北側は後世の攪乱により壊されている可能性が高い。出土遺物から縄文時代後期初頭期に構築されたものと思われる。

第2号集石 (図43)

[位置と確認] R - 14グリッドの第 層面に検出した。第1号集石から南に約8m離れて位置する。

[重複] 他遺構との重複はない。

[規模] 大きさが8～20cm程の扁平な円礫と角礫6個が、50cm程の範囲に集中している。

[掘り方] 掘り込みは明瞭ではなかったが、断ち割ったところ厚さ2～6cmの黒褐色土の上に礫が置かれていることが判明した。土層断面図は作成していない。

[出土遺物] 直接伴う遺物はない。

[小結] 遺構と断定するには疑問も持たれるが、他の出土礫と異なりほぼ同一レベルに集中することから、第1号集積と同様なものであった可能性があるともみている。

第3号集石 (図43)

[位置と確認] P - 17グリッドの第 層面に検出した。

[重複] 他遺構との重複はない。

[形状・規模] 50～60cmの板状礫2個が重なっており、その周囲に10～25cm程の角礫が15個程集中してある。取り上げてしまい図示されていないが、板状礫の東側から北側にかけても礫が散在していた。

[掘り方] 見られない。大型の礫は第 層面に接しているが他は浮いているものが多い。

[出土遺物] 直接伴う遺物はない。

[小結] 大小17個の礫が集められている。第1号集積と関連するもので、後世に壊されたものと思われるが、縄文時代以降のものである可能性もある。 (小田川)

第14節 遺構外出土遺物

2次調査で出土した遺物は、ダンボール箱で22箱個分である。土器類には、縄文時代早期・前期・中期・後期の土器、平安時代時代の土師器・須恵器、中世および近世の陶器・磁器があり、石器の大多数は縄文時代のものである。このほかに鉄製品・銭貨・銭縷があり、これらのほとんどが第2～4号壕跡の覆土と平場および平場法面から出土している。全体的にグリッドOラインから南側に散在し、グリッドMラインより北側からの出土は少ない。遺物の大多数が縄文時代後期のものであるが、上記の各時代のものが混在して出土している。

出土土器

土器類の大多数は破片および細片で復元されるものはなく、器形がわかるものも数点だけである。各時代ごとに以下のように大別し、遺構内出土土器もまじえて記述する。

- 第Ⅰ群－縄文時代早期の土器
- 第Ⅱ群－縄文時代前期の土器
- 第Ⅲ群－縄文時代中期の土器
- 第Ⅳ群－縄文時代後期の土器
- 第Ⅴ群－縄文時代晩期の土器
- 第Ⅵ群－弥生時代の土器（今回の調査では出土していない）
- 第Ⅶ群－奈良時代の土器（今回の調査では出土していない）
- 第Ⅷ群－平安時代の土器
- 第Ⅸ群－中世の陶磁器
- 第Ⅹ群－近世の陶磁器

第Ⅰ群－縄文時代早期の土器（図44 - 1）

遺構内を含め3点出土した。図44 - 1は尖底部の破片で無文である。器厚があり内外面には凹凸がみられる。胎土には多量の砂粒を混入する。型式は不明であるが、早期中葉頃のものと思われる。図10 - 18は外面単軸絡条第1類、内面条痕の土器で早稲田5類の可能性があり、図37 - 9は貝殻押し引きが施文され、内面は指頭圧痕が明瞭である。早期中葉頃のものと思われる。

第Ⅱ群－縄文時代前期の土器（図44 - 2～11）

1次調査で検出された捨て場の土器群に相当するもので、1次調査報告書で記載した第Ⅱ群2類と1類D種としたものは出土していない。斜縄文だけが施文されるもので、前回は原体別に分けたが今回は細分しない。前回と同じく原体には、単節と復節、組縄や0段多条がある。胎土には砂粒と繊維を混入し、酸化鉄を含むものもある。時期は前期初頭に位置づけられるものと思われる。図44 - 4の口縁部には結節回転文が施されている。10・11は底部片で丸底である。

第Ⅲ群－縄文時代中期の土器（図44 - 12）

1点の出土である。口縁部破片で波状口縁かもしれない。口唇の貼付帯に縄の側面圧痕が施され、その上に剥落しているが細い隆帯が貼付され、工具刺突が施されている。円筒上層c式に比定される。

第Ⅳ群－縄文時代後期の土器（図44 - 13～42、図45 - 43～98）

今回の調査で最も多く出土した土器群で、後期初頭から前葉に位置づけられる。1～5類まで分けられ、この内でも2類が主体を占める。しかし、前述のように破片が多く文様構成は判然としないも

のが多い。器種には、深鉢形、鉢形、壺形（大型・小型）、切断土器がある。

1類 - 蛭沢1・2群（葛西：1979）・弥栄平（2）式（成田：1989）に相当するもの（図14 - 1、図38 - 34・58、図39 - 92・105・112、図44 - 20・36・41・42、）図14 - 1と図38 - 34は、地文に大柄な弧状文が施文され、磨り消されている。前者の磨り消しは雑であり、後者は入り組んだ弧状文が配置されている。図38 - 58、図39 - 92・105は曲線文が施文される。図39 - 112は、隆帯が付けられた厚い平口縁で、内部にS字状文を繋げた三角形文が配置される。太く深めの沈線で2類かもしれない。図44 - 41・42は、三角形文の頂部からC字状文が配されたものを基調としている。図44 - 20は同一個体と思われるもので、20の口縁部だけをみれば2類的である。

2類 - 蛭沢3群（葛西：1979）・沖附（2）式（成田：1989）に相当するもの（図44 - 13～19・21～35・37～40、図45 - 53～58・60～72）遺構内は代表的なものを列記する。（図10 - 1～7・14～17、図11 - 1～4・9～12・17～19、図12 - 1～7、図14 - 2・3・8、図37 - 1・5、図38 - 35・39・45・60・64、図39 - 66・68・125～127・134、図40 - 125・131・135、図41 - 145・152～154・157・158・他）深鉢形土器では、波状口縁と平口縁があり、大多数は隆帯を貼り付けた肥厚した折り返し口縁となる。図44 - 15・19・21～23に代表されるような口縁部に縄文を施文するものと、図44 - 17の無文となるもの、図37 - 1や図44 - 13・14のように、口縁に沿うような長楕円形文・山形文が施文されるものがある。また、波状口縁のものでは、図10 - 1・2、図40 - 125、図41 - 145、図44 - 13・16のように波頂部から垂下する隆帯が付けられるものもあり、この垂下する隆帯は図44 - 29～32のように胴部上半まで付けられ、横位に延び文様帯を区画する。この内には指頭圧痕や刺突が施されるものがある。口縁部文様は磨り消し手法により、図44 - 19のような長楕円形文が施文されるものと、図44 - 37のような頸部まで含めた広い無文帯で構成されるものがある。胴部文様は、図10 - 14・15、図37 - 1、図38 - 39・45のような方形文およびコ状文、図44 - 31～34・39・40の楕円形文が基調となり、図10 - 5のように長方形文に楕円形文が組み合わせられるものや、図44 - 37の弧状文とコ状文の組み合わせられるものもある。さらに、これらの文様にはS字状文やC字状文が付加されるものもあり、磨り消し手法により表出されている。

鉢形土器は、図10 - 6の口縁部無文帯で胴部に文様が施文されるもの、図12 - 7の無文に沈線で文様施文されるものと、図39 - 68の波状口縁で部分的に縄文が施文されるものがある。文様には、方形文・円形文・楕円形文・コ状文がある。

壺形土器は、破片数が多いものの全体がわかるものは少ない。文様は深鉢形・鉢形土器と大きくは変わらない。図41 - 157、図45 - 60の波頭文が施文されるようなものもある。施文は、無文に沈線手法を基調とするが、図41 - 158の動物意匠付き土器のように縄文が施文されているものもあり、小型壺形土器では、胴部下半まで施文されるが、基本的に胴部下半は無文となる。

3類 - 十腰内 式土器（図11 - 13、図14 - 5～7、図39 - 106、図40 - 135、図41 - 178、図45 - 43～52・59）広義の十腰内 式として捉えた。図45 - 43～45は鉢形土器で、これ以外は壺形土器である。図11 - 13と図45 - 49は入り組み文が施文される。図14 - 7は大型で、胴部上半を縦位の隆帯で区画し、太めの沈線で入り組み文が施文されている。図45 - 51・52は三角形文が施文される。これ以外は、3本組沈線で曲線文とそれに連結する横位または斜位の沈線が施されている。

4類 - 地文縄文の土器（図45 - 73～96）

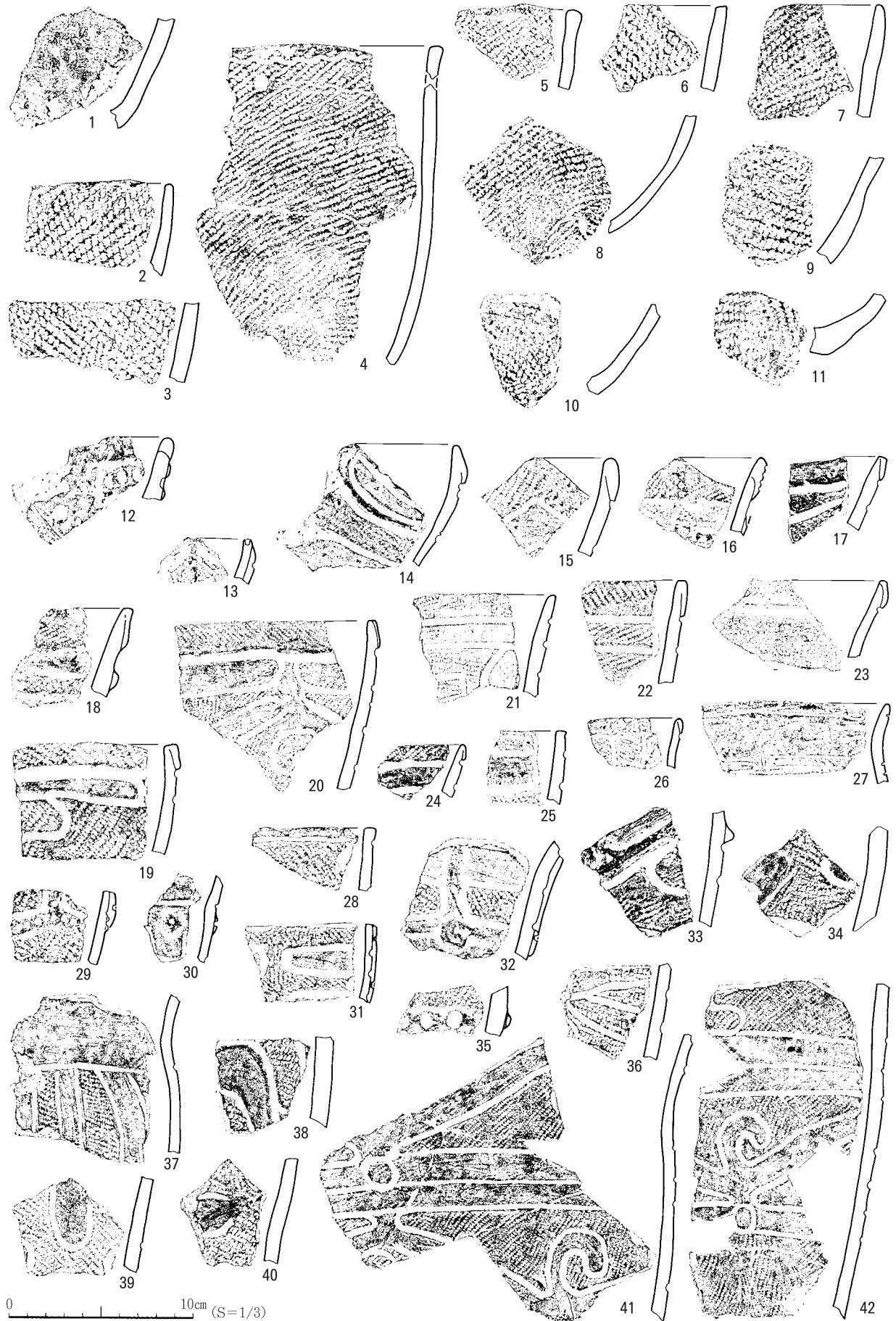


図44 遺構外出土遺物 (1) 縄文土器

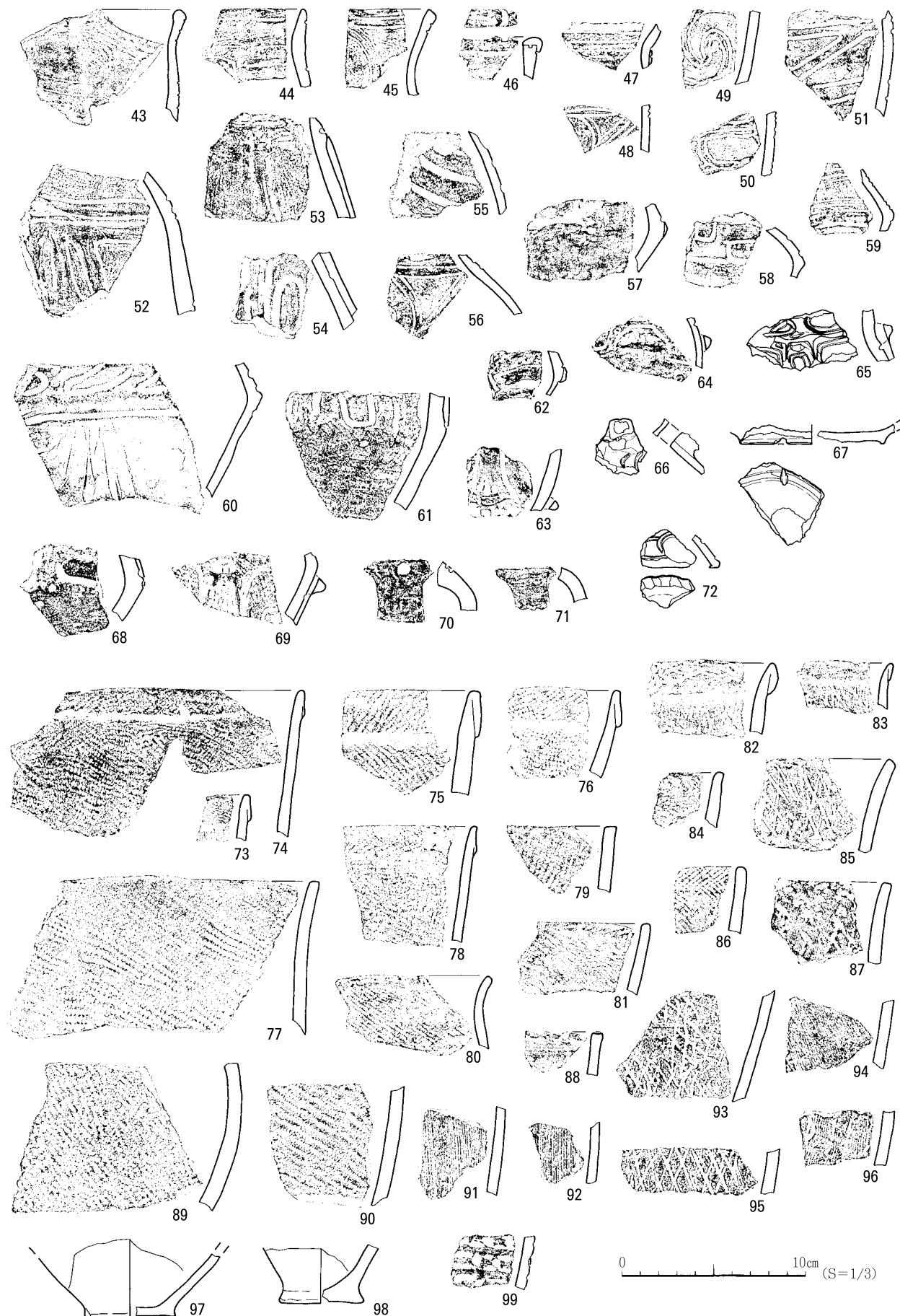


图45 遺構外出土遺物 (2) 縄文土器

縄文だけで文様構成されるもので大多数が深鉢形であるが、図45 - 80の鉢形のものもある。口縁は平口縁で、隆帯貼り付けで折り返し口縁となるものもある。図45 - 73・74は微隆帯状の口縁である。原体は単節LRの施文が多いが、RLや0段多条・無節のものも少数あり、他に単軸絡条体第5類が施文されるものが目立つほか、図45 - 73の単軸絡条体第1類が施文されるもの、図45 - 91・92の櫛歯状沈線が施文されるものもある。文様は単一であるが、図45 - 73・75・76・86のように施文の際に口縁部と胴部の回転方向を変えて装飾効果をだしているものもある。これら粗製土器の大多数は、1・2類土器に伴うものと思われる。図45 - 84は口唇直下に側面圧痕が施されており、先行するものかもしれない。

5類 - 切断土器 (図37 - 5、図38 - 35・36、図41 - 170・171、図45 - 72)

6点出土している。図37 - 5の略完形のほかに破片資料で、上下で対になるものはない。母体はすべて壺形土器で図38 - 36以外は小型である。切断箇所は、図38 - 36が底部立ち上がり付近、他は胴部上半である。切断は焼成前に行われており、切断手法は2通りみられる。図38 - 35は細い棒状工具で切断されるもので、2mmほどの間隔で湾曲した面が隙間なく連続する。おそらく、外面から突き切られたものと思われる。ほかの切断面は階段状となっていることから、薄い工具を用い、突き刺した後に横方向に押し切っているようである。切断は水平に行われるが、ズレ防止のためと考えられるV字状(5)・U字状(36 = 2箇所)の切り込みがみられる。(小田川)

第V群 - 縄文時代晩期の土器 (図45 - 99)

1点出土している。鉢または甕形土器の口縁部片で刻目文が施されている。晩期前葉と思われる。

第VIII群 - 平安時代の土器

土師器 (図25・27・29、図39 - 95、図41 - 151)

遺構外からは53点の土師器が出土している。ほかに第8～10号竪穴住居跡および第36・40・49・52・62・63～65・80・83号土坑、壕跡からも数点出土しているが、胴部細片であるため図化していない。器種は甕だけで坏は出土していない。甕は、口縁部が小さく外反するもので、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整されるもので、10世紀後半に比定される。

須恵器 (図46 - 1～3)

遺構外から出土した須恵器は3点である。全て破片であり器形が分るものはない。1は長頸瓶の肩部で、内外面にはロク口調整の痕跡がみられる。胎土が灰褐色で、五所川原産と推測される。2は甕の胴部、3も甕の底部片で丸底である。外面には平行タタキ、内面にはアテグ痕がみられる。

陶磁器 (図46・47 - 4～41)

今回の調査では87点の陶磁器が出土し、このうち46点を図示した。すべて破片・細片で復元できるものはない。ほとんどが平場からの出土で遺構内出土のものが少数であるため、まとめて器種ごとに記述する。

第IX群 - 中世陶器 (図46 - 4～8)

皿：皿は瀬戸美濃産の折縁皿と丸皿、志野皿がある。折縁皿(図13 - 31)は第4号壕跡から出土している。高台は断面が逆台形状の削り出し高台で、内面には櫛目波状文が施されている。灰釉は灰白～オリブ黄色で貫入が発達している。また、見込み内面は内ハゲになっている。大窯 期のものと

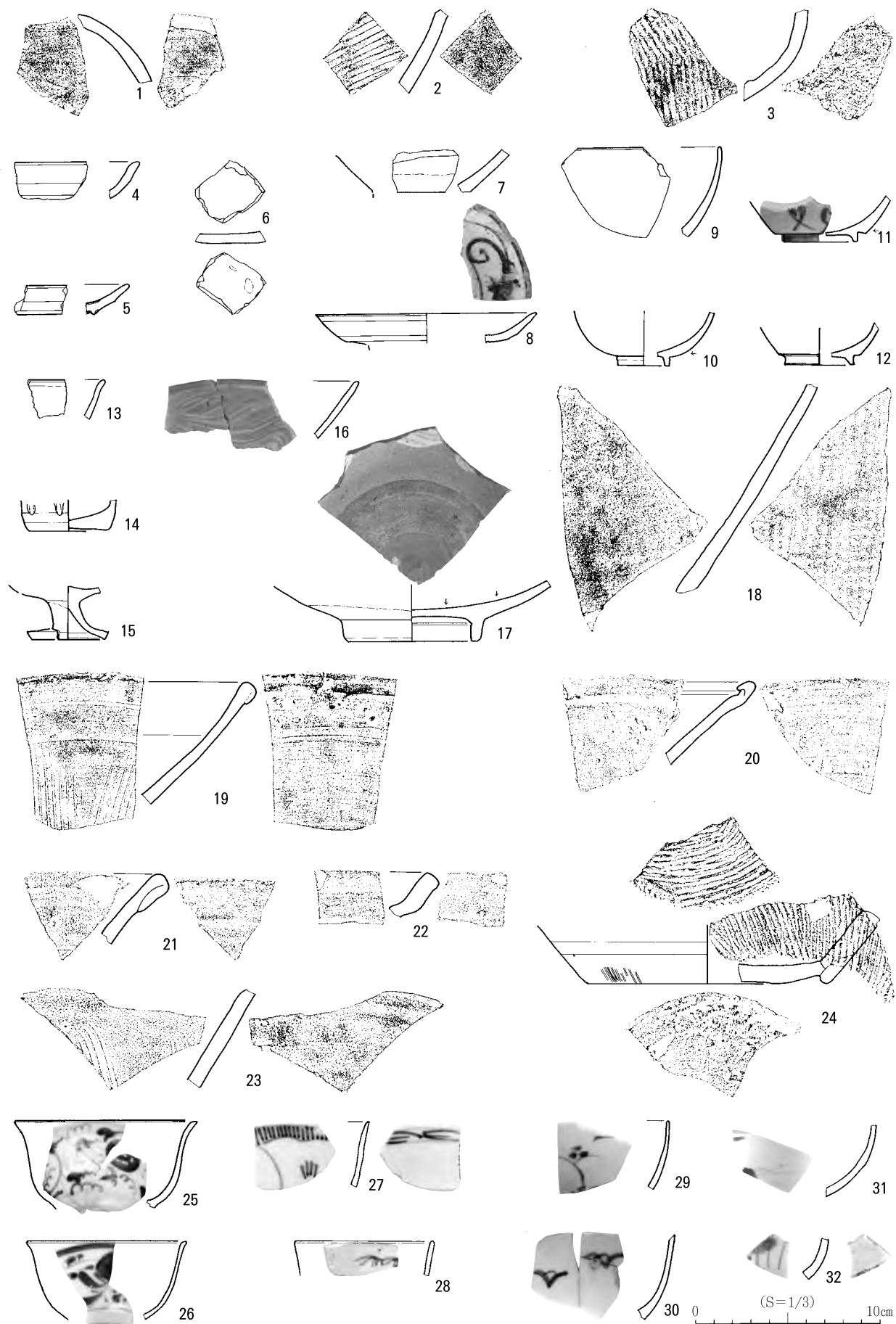


図46 遺構外出土遺物 (3) 須恵器・陶磁器

思われる。遺構外出土の丸皿4・5は同一個体と思われ、灰釉は灰黄色である。5の高台は逆三角形で付高台と思われる。第1号竪穴建物跡出土の丸皿(図23-2)は底部片で、外面にトチンの痕が見られる。これらは大窯～期の時期が考えられる。他に丸皿の破片が2点出土している。6・8は志野皿である。6は灰白色の器面の底部片、8は口縁部で内面口縁に鉄絵が描かれている。大窯期の時期に比定される。

天目茶碗：5点出土し3点を図示した。胎土は灰白色でやや粗いが硬く焼き締まっており、瀬戸美濃産と思われる。遺構外出土の7は胴部片で、下半は露胎である。胎土は黄色味が強く、鉄釉は黒色に発色する。他に2点出土している。第1号竪穴建物跡出土(図23-1)はS字状に外反する口縁部で、胎土は白味がかった。鉄釉は暗赤褐色で、口唇部は黒色に発色している。第2号壕跡出土(図10-23)は削り出し高台の底部片で、高台周辺は露胎になり高台内は内反りしている。鉄釉は暗赤褐色で、黒褐色の小粒が斑状にみられる。これらは釉調などから大窯～期の時期に比定される。

第X群 - 近世陶器 (図46-9~24)

碗：碗は口縁部片5点、底部片3点、胴部片2点の計10点出土した。器種は小杉碗・丸碗・端反碗があり、第4号壕跡出土の1点以外は遺構外出土のものである。9・10は丸碗で、9は大振りな口縁部である。胎土は灰白色で比較的緻密だが砂粒を若干混入する。焼成は良好で硬く焼き締まる。瀬戸美濃産と判断したが蟹沢焼の可能性もある。10は小振りな底部で高台は露胎である。器面に施された透明釉には細かい貫入が発達し、胎土や高台から京・信楽系と思われる。11・12も京・信楽系の小杉碗底部である。11の外面文様は簡略された松葉と思われ、18世紀後半の年代が考えられる。13は端反碗の口縁部で、オリーブ色主体の胎土はやや粗いが比較的焼き締まっている。器面全体に灰白色の海鼠釉が施され、胎土や釉の具合から小久慈焼と思われる。第4号壕跡出土(図13-33)も端反碗の口縁部片である。胎土は黄色味のある灰白色で、釉は緑色味に発色し細かい貫入が発達しており大堀相馬産の可能性もある。他に図示しなかった大堀相馬産と産地不明の碗片が3点出土ある。

灰吹：遺構外から1点出土した。14は回転糸切りの底部である。胎土は灰白色で粗く焼成もやや軟質である。沈線状の溝を縦位に刻み、黒褐色の鉄釉を施している。瀬戸美濃産である。

仏飯器：遺構外から1点出土した。15の高台は露胎で、高台内面は深く削り込まれている。見込み中央がかすかに盛り上がる。瀬戸美濃産である。

皿：4点あり、3点を図示した。全て肥前産と考えられる。遺構外出土の16は口縁部で、胎土の色調は灰白色で砂礫が混入して粗い。焼き締まっているがそれほど堅緻ではない。釉は灰褐色で、内面には白化粧土を塗った刷毛目文が施されている。17は底部片で、胎土や釉調が16と近似することから同一個体と考えられる。高台周辺は露胎で高台内は強く削られており、見込には蛇の目釉剥ぎが施されている。肥前～期に相当するものと思われる。他に同一個体と思われる胴部片が1点ある。第4号壕跡出土(図13-32)は高台付近の破片で、意図的に打ち欠いたものと思われる。削り高台で高台内には兜巾がみられ、露胎の外面にはロク口目が強く残る。胎土目であることから、肥前～期と思われる。他に図示しないが瀬戸美濃産と思われる胴部片が1点ある。

甕：3点あり、1点を図示した。遺構外出土の18は胴部下半で、内面に格子目状の当て具痕が残る。胎土は灰赤色主体で、灰白色や明赤褐色の粘土が縞状に混入し、緻密で硬く焼き締まっている。外面全面に鉄釉が施され、更に釉を掛け流されており17世紀後半以降の肥前産と思われる。図示しなかつ

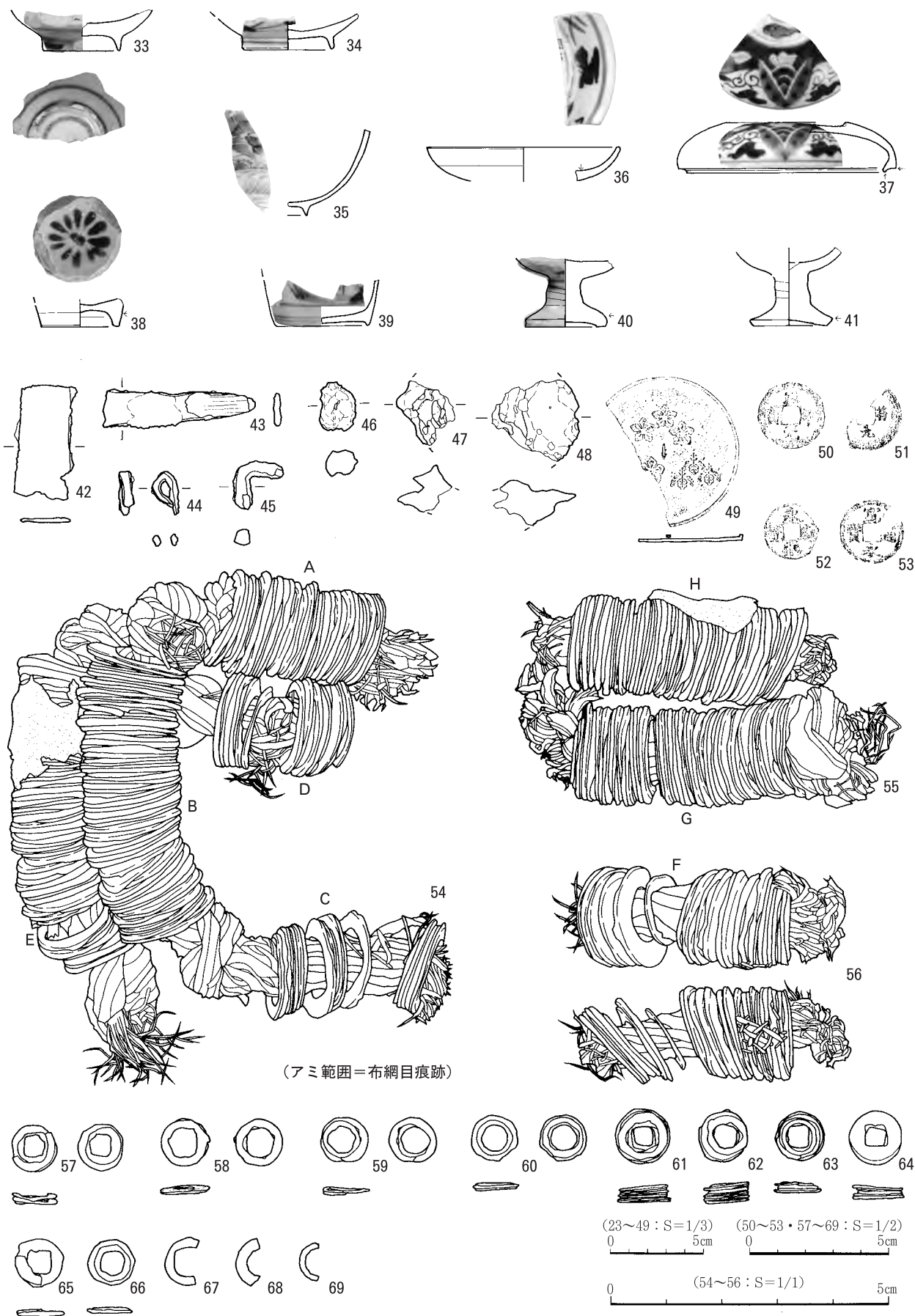


図47 遺構外出土遺物（4）陶磁器・金属製品

た同一個体破片の外面には横走する3条の筋が確認できる。ほかに、第4号壕跡から近代または現代の可能性のある瀬戸美濃産小甕の破片が1点出土している。

播鉢：遺構外出土で13点ある。口縁部片7点、胴部片5点、底部片1点で全てロク口成形である。胎土の特徴から、肥前産と瀬戸美濃産とに分けられる。19は肥前産と思われる口縁部片である。胎土は緻密で硬質に焼き締まり、褐灰色である。口縁部外側に丸い口縁帯を貼り付けて玉縁にし、口端部に鉄釉を施している。胴部は緩やかに内湾する。播目は櫛描きで、やや間隔を空けて施されている。播目1単位の本数は、確認できる範囲で8本である。口縁部内面はナデが施されているが、播目上端はナデ消されていない。口縁部や施釉から肥前期と思われる。20～24は瀬戸美濃産で、胎土は灰白色で粗く、焼成も軟質なものが多い。20～22は口縁部片である。20の胎土の色調は他よりも明るい。口端部を内側に折り返し内面に1条の沈線状の段差があり、外面には扁平な口縁帯をつくっている。口唇部は平坦にされていない。21は口端部を外側に折り返し外面に扁平な口縁帯をつくる。22は口端部付近が強く屈曲し、口縁直下が口縁帯状に張り出す。口唇部は平坦に整えられている。23は胴部片で、胎土はやや粗いが焼成は比較的良く焼き締まっている。底部から直線的に外反する器形と思われ、口縁部付近で更に強く外反するようである。播目は1単位4本で、やや間隔を空けて施されている。播目上端はナデ消されておらず、緩やかに湾曲している。同様なものが他に1点ある。24は糸切りの平底で、底部下端にタタキ痕と思われる短い筋痕がある。胎土の色調は灰白～褐灰色で、器壁は厚く見込みは平坦である。播目は1単位11本と思われ、見込みは同心円状に、胴部には放射状に隙間なく施されている。

磁器 (図46・47 - 25～41)

近世以降の国産品で28点出土した。第4号壕跡の2点以外は遺構外出土である。

碗：32は胎土から瀬戸美濃産と思われ、それ以外は肥前産である可能性が高い。25～30は口縁部片である。25～27は端反碗で、丸碗よりも器壁が薄く、器面の色調も明るい。25は外面に横線と花唐草・内面に横線、26は外面に草花?・内面に横線と帯線が施されている。27の外面文様は、短い縦線を横に並べられているが、どのようなモチーフなのかよく分らない。内面の口縁部直下の文様は雷文が崩れたものと思われる。また、第4号壕跡出土(図13 - 34)も端反碗で、外面に横線と草?・内面に横線と帯線が描かれている。これら端反碗の時期は肥前期と思われるが、27の時期はやや新しくなる可能性もある。28は直線的に立ち上がる口縁を持つものである。外面文様は笹と思われ、肥前期の時期に推定される。29・30は内湾する口縁部片で、丸碗と推測される。口唇部に連続した剥離の痕跡があり、意図的に打ち欠かれた可能性がある。29の外面には花卉文が、30は草と思われる文様が描かれている。時期はともに肥前期と考えられる。31は内湾して立ち上がることから、丸碗と推測される。文様は不明であるが、呉須の色調などから肥前期の時期が考えられる。32は腰部下端片である。内面に横線外面には草?が描かれている。18世紀後葉以降の年代が考えられる。33～35は底部片である。33は外面と高台内に横線が施されている。呉須中に小さな気泡が観察されることから熱を受けている可能性がある。施文の特徴から肥前期の年代が考えられる。34・35は細い線書きで文様が描かれている。34の外面には網目文?、35の外面には牡丹花が施されている。両者はともに高台にも横線が描かれている。34は見込みがかすかに盛り上がる。35は腰部が内湾することから丸碗と推定される。文様の特徴から、これらは肥前期の時期と考えられる。38も底部片で、碗か皿と思われるが明確で

ない。胎土は焼成が甘く陶質である。削り高台で、高台周辺は露胎となっている。高台内は釉が施されず、兜巾が観察される。灰白色の釉が厚めに施され、見込みには菊花が描かれており、初期伊万里の可能性はある。

皿：2点出土している。36は内湾気味に立ち上がる口縁部片である。内面の口縁部直下には圈線が巡り、圈線中には笹か草が描かれる。見込み付近に施釉されない箇所があることから、内面は蛇の目釉剥ぎが施されていた可能性がある。胎土から肥前産と考えられ年代は肥前期と思われる。第4号壕跡出土(図13-35)は蛇の目凹形高台の底部で、見込みの二重圈線内には型打ちで青海波が表現されている。割れ口の一部に剥離があり、意図的に打ち欠かれたものである可能性がある。胎土や呉須の発色から瀬戸美濃産と思われ、18世紀後葉以降の年代が考えられる。

段重：37は蓋で、取手は欠損している。外面には雲と蝉が描かれている。肥前期と思われる。

猪口：39は底面から直線的に立ち上がる器形と思われる。外面には横線と草が描かれている。肥前～期の年代が考えられる。

仏飯器：2点出土した。高台から坏部下半までの破片である。高台まで施釉され外面には横線が施されている。底部は削りだされ釉は施されていない。40の高台は垂直に立ち上がり見込み中央がかすかに盛り上がる。41の高台はくの字状に張り出し坏部が半球状である。これらの年代は肥前期相当と推測される。

その他に、図示しないが近代以降の印判手のものが15点出土している。(平山)

土製品類(図48-1~16)

縄文時代の土製品とミニチュア土器などを一括した。他に遺構内では、第4号壕跡からドーナツ状土製品、第5号壕跡から蓋が出土している。

図48-1~13は土器片円盤で、このほかに第29・40・52・74・84号土坑から各1点の、総数18点が出土している。土器の周縁を打ち欠き円形に整形しているもので、図48-4・8は四角形にも見える。大多数は胴部片が使われるが、2は口縁部片、9・10は底部が用いられている。また、10は打ち欠き後に研磨されている。12・13は未製品と思われるもので、12は沈線部分から打ち欠く予定だったものと推測される。大きさは、1や11の約6cm代が最大で、最小は第74号土坑出土の約3cmであり、3cm以上~4cm以内の大きさが主体である。土器はすべて第群土器である。

図48-14はミニチュア土器の底部である。他に第80号土坑からも2点出土している。

図48-15は完形の鐸形土製品である。無文で、上端の突起部のつくりは小さいが穿孔されている。

図48-16はミニチュア土器の底部破片または鐸形土製品の破片と思われる。(小田川)

出土石器

今回の調査では、遺構内および遺構外から総数147点の石器類が出土し、このうち103点を掲載した。大多数は縄文時代に帰属するが、中世または近世のものも数点ある。以下に遺構内出土もあわせて器種ごとに記述する。各石器の出土位置や石材等については観察表に記載した。

石鏃(図12-16、図49-1~4)遺構内を含め5点出土している。無茎鏃(図12-16、図49-1)

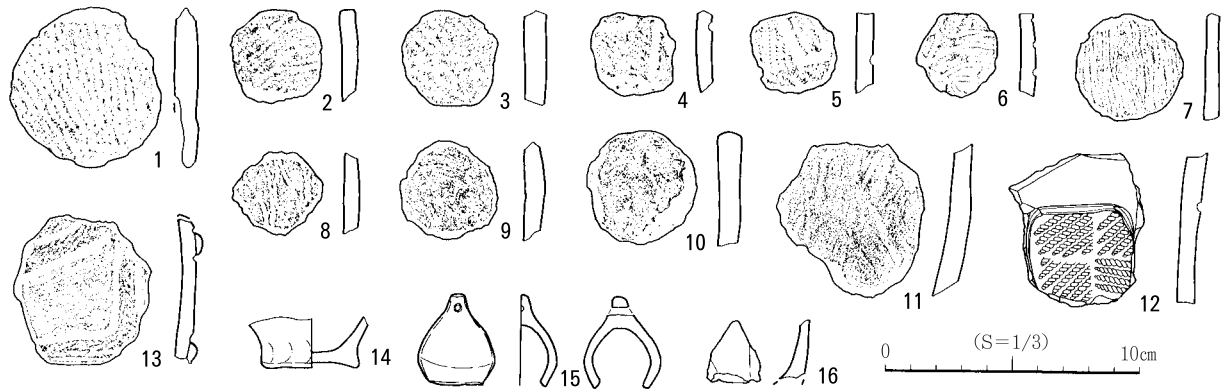


図48 遺構外出土遺物（5）土製品

と、有茎鏃（図49 - 2 ~ 4）がある。無茎鏃：2点とも凹基であるが、図12 - 16は前述のように有脚状のかえしで形態的に特異である。図49 - 1は五角形鏃で基部の挟りも弱い。形態的に縄文時代の古手のものである。有茎鏃：3点とも凸基である。2と4は長幅比が大きく鏃身が二等辺三角形で、4の茎は比較的小さめである。3は正三角形に近い鏃身で、茎は太い。また、被熱して器体の一部が爆ぜている。

尖頭器（図11 - 22）1点ある。粘板岩の端部を研磨して作られている。形態と整形から磨製石鏃とも呼べそうなもので分類に困るが、尖頭器としておく。

石匙（図49 - 5）1点出土している。横型剥片を素材とする縦型石匙で、腹面の側縁に背面調整用の打面調整剥離が施されている。全体形状はずんぐりとしており、刃部再生されている可能性がある。つまみ部の作りだしは弱く小さい。

石篋（図37 - 7・11、図49 - 6）遺構内を含め3点出土している。図37 - 7は破損品で不確実であるが本類に含めた。両面からの調整剥離は簡易である。11は撥形で刃部は丸みをもつ。厚手の縦長剥片を素材とし、背面の調整剥離は急角度調整である。図49 - 6は大きな剥離で器体を短冊形に仕上げている。刃部は直刃でトランシェ様である。

スクレイパー（図12 - 17、図41 - 179、図49 - 7・9・10）削器及び搔器として使用されたと思われるもので、遺構内を含め5点出土している。図12 - 17、図41 - 179、図49 - 9・10は素材の小剥片に簡易な調整剥離が加えられているもので、特に形状は意識されず側縁に刃部だけが作出されている。図49 - 7は黒曜石製の円形搔器である。腹面からの大雑把な周縁調整剥離で作られており、周縁には微細剥離がみられる。

楔形石器（図40 - 119 ~ 124、図49 - 8）楔形石器としたが両極剥片も含めて掲載した。図40 - 119 ~ 124は第74号土坑覆土中からまとめて出土したもので、他に8点の両極剥片と4点の剥片がある。掲載した6点は剥片の上下両端部に潰れがみられるものであるが、打割の際の潰れなのか使用によるものか明確に判断できない。すべてが打割されただけの未使用剥片の可能性もある。図49 - 8も同様である。

剥片・破片 掲載していないが8点出土している。厚さと形状は様々で、大きさが5 cmを越えるものはなく薄いものばかりである。第2号壕跡と平場から出土している。

磨製石斧（図10 - 19、図11 - 26、図12 - 19、図23 - 18、図41 - 159、図49 - 11・12）遺構内を含め

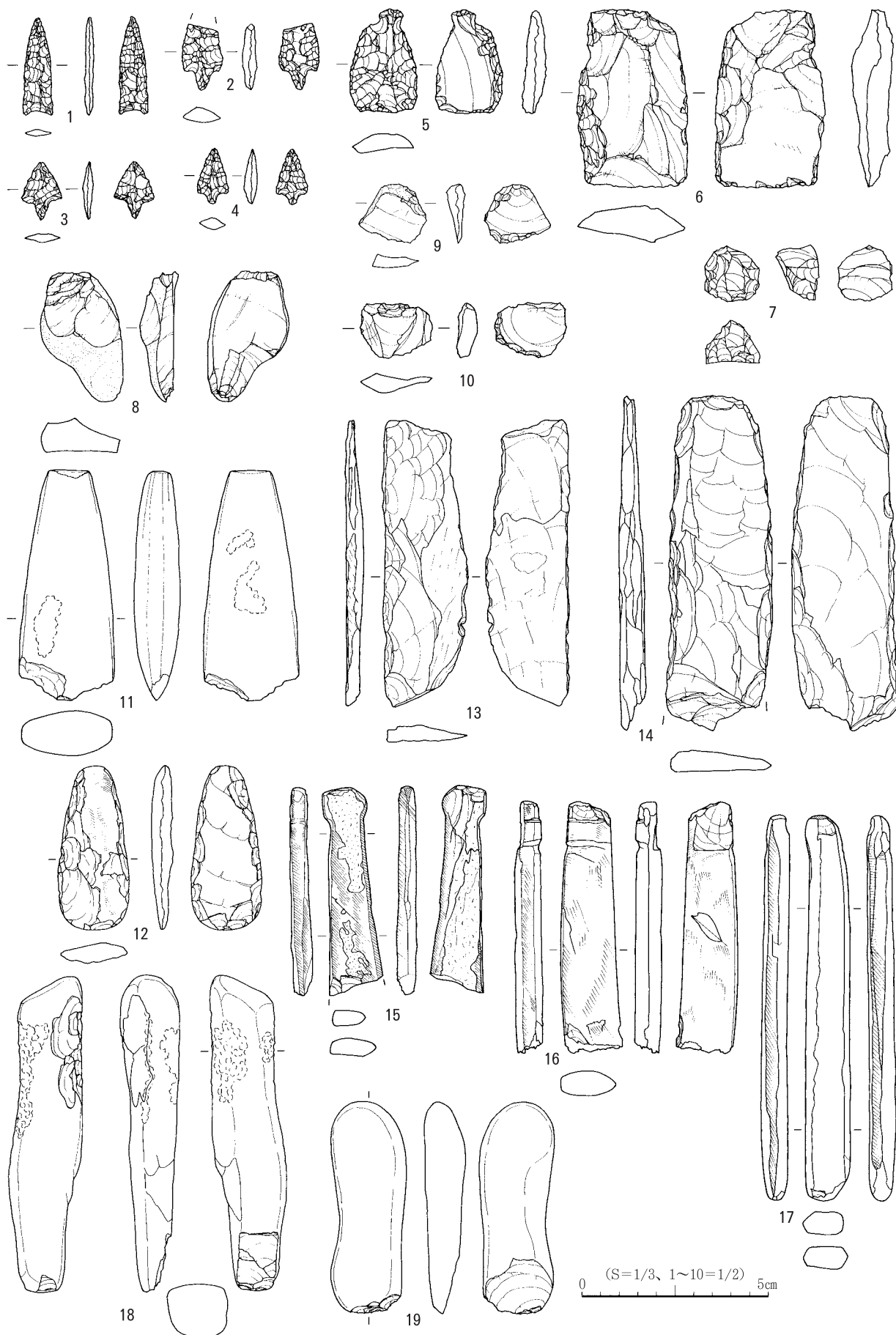


図49 遺構外出土遺物(6)石器

7点出土している。完形品は2点で、他は刃部または胴部から基部を破損している。図49 - 12以外は、いわゆる定角式磨製石斧であり、図10 - 19と図49 - 11は器体に製作時の敲打痕が、研磨では取りきれず残る。図23 - 18は被熱して器体の一部が爆ぜている。

石刀類 (図10 - 20・21、図11 - 23・25、図12 - 18、図29 - 6・7、図39 - 96・113、図40 - 139・140、図49 - 13～17) 遺構内を含め16点を本類としたが、石刀の形状を示し、未製品および破損品といえるものは、図10 - 20・図11 - 25・図12 - 18・図40 - 139・140・図49 - 15・16の7点である。石材はすべて粘板岩であり、これらは形状を整える粗割りと剥離調整が施された後に、最終工程の研磨整形が施される。図49 - 17は側縁の部分的な研磨だけで、未製品であろうか。完形品はなく、これらが製作途中の破損品および破砕片とみることできるが、ほとんどのものの側縁には敲打の痕跡が明瞭に残っている。とくに研磨痕跡の少ない図11 - 25・図12 - 18の内反り部分にはその痕跡が強く、整形時の敲打ではない、使用による痕跡の印象を強く受ける。祭祀および儀礼具として捉えられる石刀であるが、本遺跡出土のものは実用的な利器としての可能性も否定できない。従来的な石刀からは、逸脱するものもあるが、形状と石材から類似した破片も含めまとめた。

磨り石 (図11 - 30、図12 - 25～27、図13 - 29、図25 - 14・15、図37 - 32、図39 - 74) 9点あり、すべて遺構の堆積土内から出土した。扁平な楕円形礫および球状の礫の器表面全体が摩耗しているものと、一側縁に磨り面をもつものがある。図11 - 30は器体の一側縁に剥離面と幅の広い磨り面をもつ。また、器体の上下両端は敲打により潰れており、複合的に使われている。図13 - 29も一側縁に剥離と磨り面をもつ。この側縁の平坦な機能面は、平滑な部分と荒れた面があり最終的には敲き石として使われていたものと思われる。図37 - 32は一側縁に内側に湾曲した磨り面が形成されている点で特徴的である。機能面の両側に剥離面があり、器体にも大きな剥離と敲打による浅い窪みがある。

敲き石 (図12 - 20・23、図37 - 20・33、図49 - 18) 遺構内を含め5点出土している。図12 - 20・図37 - 33・図49 - 18は棒状の礫を用いており、図12 - 23・図37 - 20は円礫を用いている。棒状礫の敲き石は、端部または一端部の側縁部を使用しており、剥離面と潰れがみられる。円礫を用いる2点は扁平礫の周縁に敲打により潰れが帯状に巡る。

礫器 (図40 - 141、図41 - 173・180、図49 - 19、図50 - 39・40) 器種名的に適切では無いかもしれないが、礫の端部に連続した剥離調整が加えられているもので、遺構内を含め6点出土している。図40 - 141を除き、剥離稜が潰れていることから、これらは敲き石として使用し剥離した可能性もあるが、潰れの範囲が局所的で楔形石器の端部の潰れに似ている点で分けた。図40 - 141は側縁の調整剥離からみてスクレイパー的機能であったかもしれない。また、図41 - 173と同じく打割された礫を素材としている。

凹み石 (図12 - 24) 扁平な円礫の片面に敲打による浅い凹みをもつ。

石皿 (図13 - 30、図14 - 9) 壕跡覆土から2点出土している。図13 - 30は縁が加工により作り出されている。図14 - 9は低い縁と底部に3つの脚が削り出されている。前述しているが側縁の一部にクランク文状の刻みが施される。

台石 (図11 - 31、図50 - 41) 遺構内3点と遺構外から1点出土し、2点掲載した。図11 - 31は器体が被熱しており、片面中央に小さく浅い凹みが残る。図50 - 41は器体に擦られた痕跡ある。大型の礫だが縁辺には両面からの剥離がみられる。

砥石 (図41 - 172、図50 - 42) 2点の出土である。図41 - 172は平場の柱穴から出土している。両縁を残し中央を平滑に削り作られている。形状から硯の破損品とも捉えられるが断定できない。再利用と思われるが一側面を砥石として使用していることから本類に含めた。図50 - 42は四面使用の砥石で、一面だけ使用頻度が高く抉れている。擦痕のほかに鋭利な線状痕がみられる。

石臼 (図50 - 43) 破片で1点出土した。片面が擦り減っており、溝はみられないが粉挽き臼の下臼

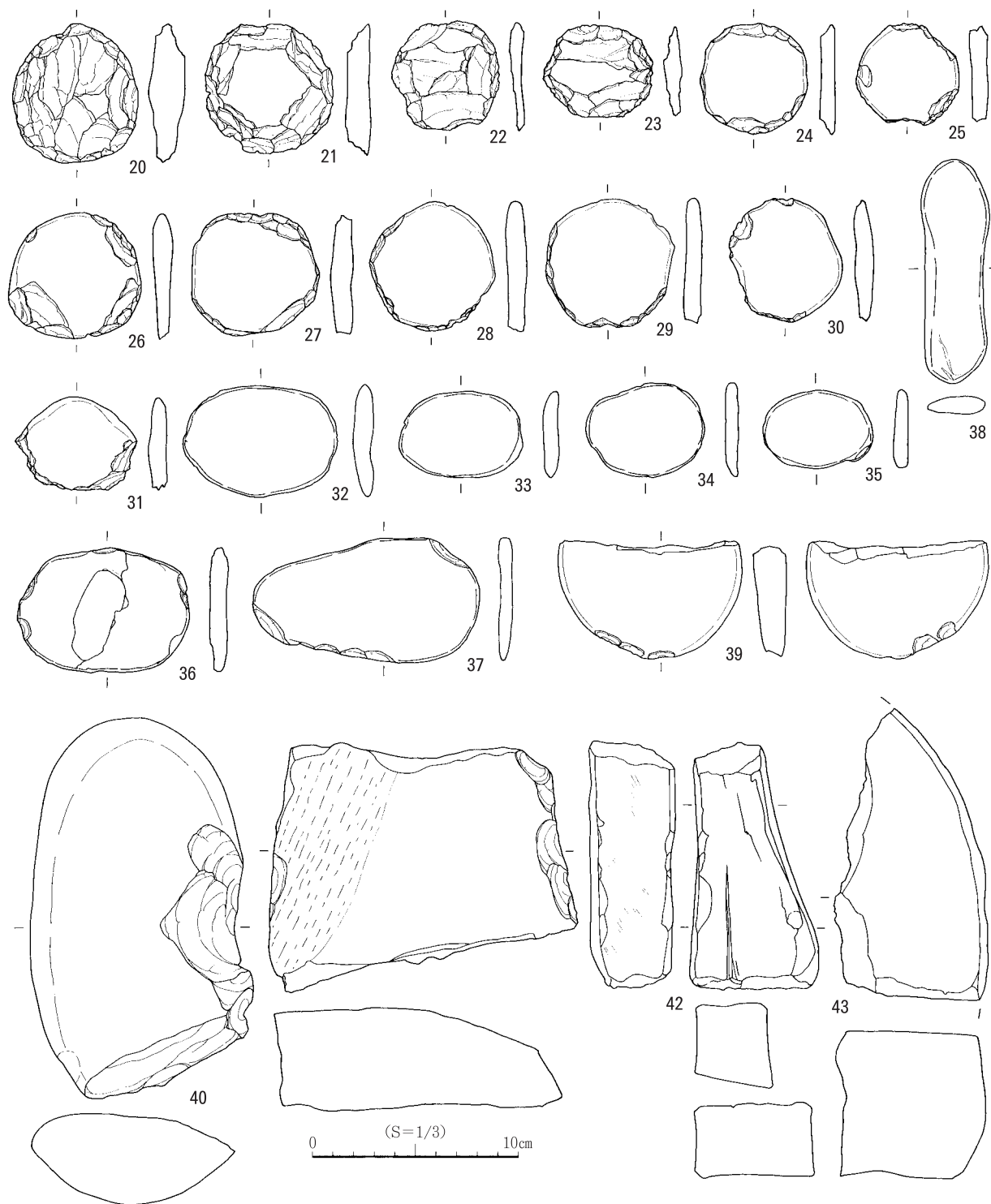


図50 遺構外出土遺物 (7) 石器・石製品

と思われる。

石製円盤（図10 - 22、図11 - 27～29、図12 - 21・22、図23 - 17、図38 - 65、図39 - 87、図41 - 174、図50 - 20～38）遺構内を含め44点出土している、そのうち30点を掲載した。粘板岩を剥離調整し、その後研磨されているものと、薄い円盤を剥離しているものがある。剥離調整は、大半のものが周縁に小剥離を施されるが、剥離が器面に広くおよんでいるものもあり図50 - 21は片面に、同図20と23は両面から調整されている。また、図11 - 28・29のように一部分だけ調整されるものもある。大多数は円形に整形されるが、図11 - 24の撥形、図23 - 17の四角形状、図50 - 31～37のような楕円形のものもある。掲載しなかったものの中には、円形だが剥離のないものもあり、単に河川から持ち込まれたものもある。
(小田川)

金属製品（図47 - 42～69）

鉄製品および鉄滓は24点、青銅製品は鏡と銭貨が出土している。遺構内を含めまとめて記述する。

鉄製品（図47 - 42～48）

刀：第8号竪穴住居跡の底面から1点出土した（図25 - 7）。全長が短く、厚みのあるものである。切先と茎尻を欠損し、刀身部はわずかに湾曲している。刃部と茎部との境もはっきりせず、断面形状以外は刀身部と茎部の区別はつけづらい。刀身部の表面に木質が残るが、鞘であるか不明である。

刀子：茎部片が第1号竪穴建物跡の堆積土中（図23 - 4）と遺構外（42）から出土している。遺構内出土の茎尻は直線的であるが、遺構外出土は円く茎自体も湾曲し、表面に木質部が残存している。

釘：6点中4点を図示した。断面方形で、頭部はL字状に折れ曲がるものが多い。第1号竪穴建物跡から2点出土した。図23 - 3は鏝の可能性もあるが、頭部が折れ曲がらない釘としておく。断面形状は基部が六角形、先端部は四角形である。P i t出土（図41 - 176）は頭部が細く薄くなる。第2号壕跡出土（図10 - 24）はかなり太く大きいもので先端は尖らない。木質部が残存している。

楔：P i tから出土している（図41 - 177）。平面形は厚みのある長方形の板状であるが、基部は他よりもわずかに幅が広い。また、基部から先はやや細くなっており、その境は若干すぼまっている。縦断面も、中央部の段差から先端に向かって薄くなっており、緩やかに先細りした形状をしている。

板状鉄製品：3点出土した。遺構外出土の42と第4号壕跡（図13 - 36）は形状や錆の状態が似ていることから同じ用途と思われる。壕跡出土のものは、上端幅よりも下端幅が広い札状の形状で、短軸方向に緩やかに湾曲しており、右側縁は左側縁に比べ薄い。表面および裏面の側縁には布の網目痕跡が付着していることから、袋状のもので包まれていた可能性がある。

棒状鉄製品：第1号竪穴建物跡跡（図23 - 6）から出土している。紡錘車の軸の可能性はある。

環状鉄製品：遺構外から2点出土し1点を図示した。44は細長い鉄板を折り曲げて環状にしたものである。形状は円よりも三角形に近い。先端が横にはみ出ているため図面上の幅は1.4cmであるが、本体の幅は0.6cmである。厚さは0.5cmで断面は楕円状をしている。飾り金具の可能性はある。

L字状鉄製品：遺構外から3点出土した。45は全長・全幅が2.7cm、本体の幅は1.0cmで、台形状の断面で厚さは0.9cmである。両端は円い。用途は飾り金具の一部である可能性がある。

鉄滓：4点出土した。遺構外出土は3点である。46は鍛冶滓である。磁着するが、メタルチェッカーには反応しないことから、錆化が進んだものと思われる。47・48は碗型鍛冶滓で、ガラス滓が付着し

ているものもある。第1号竪穴建物跡出土(図23-7)も碗型鍛冶滓である。

これら鉄製品の詳細な時代は不明であるが、古代から中近世の時間幅に収るものと思われる。

青銅製品 (図47-49~69)

鏡: 49は径8cm程の円鏡である。紐は棒状で、裏面には桔梗と桐が表現されている。近世である。

錢貨: 咸平元寶、祥符元寶・天禧通寶・治平元寶・熙寧元寶・洪武通寶・永樂通寶・寛永通寶・判読不明錢・無文錢・輪錢が出土した。ほとんどの錢貨は輪や郭の段差がなく平坦に近い。

遺構では壕跡・竪穴建物跡・土坑・Pitから出土している。第3号壕跡からは鉄錢の寛永通寶が(図11-32)、第4号壕跡から洪武通寶が出土している(図13-37)。穿形は円形である。第1号竪穴建物跡から治平元寶が出土した(図23-9)。背面の輪幅は一定で、穿形は楕円形で背側にバリが残る。第36号土坑から永樂通寶が出土している(図37-21)。錢銘が不明瞭で郭や輪の凹凸がはっきりしない。錢厚は0.7mm・重量1.5gと軽い。穿形は隅円方形である。第40号土坑からはいわゆる新寛永が出土している(図38-41)。第60号土坑からは錢貨が6枚出土した(図39-76~81)。天禧通寶(79)は骨の下から出土し、表面は非常に脆く錢銘は微かに残る程度である。背面の遺存状態は良く輪・郭ともにしっかりした厚みがあるが、幅が一定ではない。熙寧元寶(76)は前述の天禧通寶や判読不明錢と重なっていた。表面の遺存状態はよいが文字の一部が判読できない。穿形は円形である。洪武通寶(77・78)はともに無背で、表面の腐食が進み輪が剥落している。穿形は方形に近い。判読不明錢(80・81)の錢銘は僅かに盛り上がっている程度で読み取れず、輪や郭が不明瞭で段もほとんどない。表面は平滑で特に背面が顕著である。穿形は隅円方形である。Pit出土の洪武通寶(図41-175)は小さな凹凸が目立ち、一部穴が空いている。穿形は胴張の方形で僅かにバリが見られる。

遺構外出土の50は咸平元寶である。穿形は隅円方形で内側にバリが僅かに残る。51は祥符元寶と思われる。錢肌はかなり荒れ、穿形は隅円方形である。52の永樂通寶は錢銘が不明瞭で錢肌もかなり荒れている。錢径は約2cmと小さく輪幅も狭い。穿形は円形で内面にバリが残り、背面の郭の周辺は若干盛り上がる。53の寛永通寶はいわゆる古寛永である。54~69は無文錢・輪錢である。第2号壕跡付近のI-19グリッドから縷^{きし}で出土した。小さく、軽く、粗雑で、堰痕跡や切断痕が見られるものがある。総枚数は422枚である。周囲の土ごと取り上げたため、出土状況は図化できなかった。周辺を詳細に精査したが、これを納める遺構や掘り方等は検出されなかった。54~56は縷錢、57~66は無文錢と輪錢が密着したものである。錢貨の大きさなどから無文錢・輪錢のみの縷と考えられる。縷錢は端部や中間が結び目で区切られており、54は5縷(縷A~E)、55は2縷(縷G・H)で構成され、縷Aが37枚・縷Bが72枚・縷Cが26枚・縷Dが25枚・縷Eが67枚・縷Fが31枚・縷Gが59枚・縷Hが59枚である。縷B・Eと縷G・Hが完全な形で遺存している。縷Fは紐の末端や縷全体の構成から縷Eと繋がっていた可能性が高い。縷A・Dと縷B・Eが癒着していることや錢貨の表面に皮状・繊維状の物質が付着していることから、2束の縷錢を上下に重ねて布袋に収めていたと考えられる。57~69は54の縷から外れたものと思われる。縷の全長と重さを枚数で割ると、1枚の厚さは0.4~0.9mm、重さ0.2~0.4g程度である。無文錢の錢径は17mm前後、輪錢は15mm程度、穿の幅8~10mm前後である。輪錢の年代は中世末から近世初頭の時期が考えられており、縷紐の炭素年代測定の結果もそれに矛盾しない。元素分析も行っており、詳細は第3章を参照されたい。(平山)

土坑計測表

図版 番号	遺構名	グリッド	平面 形状	断面 形状	上端規模(cm)		下端規模(cm)		壁高 (cm)	深さ (cm)	出土遺物					時 期	備 考
					長軸	短軸	長軸	短軸			縄文 土器	剥片 石器	礫石 器	土師 器	その 他		
33	SK-27	M-26・27		B	203	184	101	94	119	127						縄文早期	底面にPit10個
33	SK-28	J-28		B	197	166	135	129	97	114						縄文?	
31	SK-29	T-14		A	132	(73)	130	(71)	35	35						縄文後期	SI-8重複(古)
34	SK-30	P・Q-15・16		D	163	155	117	106	40	45						古代?	
33	SK-31	Q・R-15		C	143	128	124	114	42	46						縄文or古代	
35	SK-32	Q-16		D	150	(108)	139	(98)	(46)	(46)						縄文	SK-58重複(古)・SK-33(新)
31	SK-33	Q-16・17		A	134	112	157	157	61	63						縄文後期	SK-32重複(古)
33	SK-34	Q・R-16		C	125	117	120	110	23	32						縄文	SI-9(不明)・SK-35重複(古)
31	SK-35	Q・R-15・16		A	224	221	206	210	113	120						縄文後期	SI-9号重複(古)・SK-34(新)
34	SK-36	T-16・17		A	151	105	158	100	76	79						中世～近代	SK-37重複(新)
34	SK-37	T-16・17		B	(164)	(96)	(153)	87	61	70						中世～近代	SK-36重複(古)
34	SK-38	T-15・16		B	(105)	82	(98)	65	28	30						古代以降	SI-10・SK-41・42重複(新)
31	SK-39	S・T-17		A	140	(120)	166	(154)	58	58						縄文?	SN-17重複(古)
31	SK-40	S・T-16・17		A	99	89	140	134	61	63						縄文?	SN-18重複(古)
31	SK-41	T-15・16		A	119	100	150	150	118	118						縄文後期	SI-10・SK-38重複(古)
34	SK-42	T-15・16		D	205	(116)	156	(95)	65	72						古代or中世	SK-38重複(古)・SI-10(新)
33	SK-43	S-20		C	216	190	(218)	191	67	72						古代～近世	SK-44・46重複(新)
31	SK-44	S-20		A	169	163	177	170	66	72						古代～近世	SK-43重複(古)
34	SK-45	S-21		D	113	108	73	75	30	30						古代～近世	
35	SK-46	S-20・21		D	(118)	-	116	-	12	12						古代～近世	SK-43重複(古)
35	SK-47	T・U-13		B	(189)	(107)	(86)	(88)	161	163						縄文早期?	
35	SK-48	Q・R-18		C	114	86	-	86	36	38						縄文or古代	
35	SK-49	P-16		D	(106)	84	(99)	68	25	37						縄文?	SK-50重複(新)
36	SK-50	O・P-16		D	289	(195)	246	(157)	105	105						縄文?	SK-49重複(古)
33	SK-51	P-18・19		B	177	166	140	139	112	131						縄文	
31	SK-52	P・Q-16・17		A	110	99	182	187	112	124						縄文後期	
36	SK-53	T-13		D	101	96	85	81	18	22						古代～近世	
35	SK-54	T-13		D	120	92	111	81	25	29						古代～近世	SK-55重複(新)
35	SK-55	S・T-12・13		B	204	148	169	87	79	83						縄文～中世	SK-54重複(古)
35	SK-56	T-11・12		D	(177)	(78)	(122)	(36)	65	73						古代	B-Tm堆積
33	SK-57	T・U-12・13		C	91	(59)	83	(59)	57	62						古代～近世	
35	SK-58	Q-16		C	163	(111)	152	(98)	54	59						不明	SI-9・SK-32重複(新)
34	SK-59	S・T-18		D	128	102	93	77	29	31						古代～近世	
33	SK-60	P-15・16		C	93	80	73	70	64	65						中～近世	土坑墓 座位
32	SK-61	R-20		A	116	96	150	130	137	145						縄文	
36	SK-62	R・S-14・15		C	295	278	272	265	54	62						中世以前	SI-11重複(古)・SK-63(新)
32	SK-63	S-14・15		A	(118)	125	212	209	81	98						縄文	SK-62重複(古)
36	SK-64	P・Q-15		B	232	-	(195)	-	109	121						縄文or古代	SK-65重複(新)
36	SK-65	P・Q-14・15		C	227	210	212	175	110	124						縄文or古代	SK-64重複(古)
36	SK-66	R-16・17		D	75	(55)	65	(46)	23	33						古代以前	SI-9重複(古)
34	SK-67	P-17		D	114	105	57	52	25	33						中～近世	
34	SK-68	R-16		D	104	86	85	67	30	36						古代～近世	
32	SK-69	S-16		A	-	106	141	114	38	48						縄文	
36	SK-70	N・O-15		C	162	-	151	-	-	-						不明	
35	SK-71	R・S-13		B	227	133	193	84	49	57						中～近世	
35	SK-72	Q・R-11		C	169	109	147	100	56	64						縄文or古代	
34	SK-73	O-25・26		E	127	117	111	100	-	-						縄文後期	
32	SK-74	R-16		A	143	139	143	138	75	79						縄文後期	SI-9重複(古)
36	SK-75	Q・R-13・14		C	(293)	258	(268)	245	44	65						古代?	
34	SK-76	R-13		D	(85)	(84)	-	-	10	29						中～近世	人骨取上げ後に検出
35	SK-77	R-20・21		D	137	81	125	67	8	10						古代～近世	
36	SK-78	O・P-15・16		A	271	(203)	265	(187)	67	79						縄文?	SK-82・86重複(新)
35	SK-79	N-22		D	128	92	123	86	19	19						縄文早期?	底面にPit9個
32	SK-80	T・U-16		A	-	-	165	144	88	94						縄文後期	SI-10重複(古)
32	SK-81	R・S-17		A	(192)	187	143	143	131	134						縄文後期	
32	SK-82	P-15・16		A	164	(130)	124	(120)	118	118						縄文?	SK-78重複(古)
34	SK-83	Q-14・15		A	233	182	217	186	43	51						古代?	
34	SK-84	P-16		D	(113)	104	(80)	70	23	23						中～近世?	SK-85重複(新)
35	SK-85	P-16		D	122	70	105	52	27	29						中～近世?	SK-84重複(古)
33	SK-86	O・P-15		B	172	(134)	161	(128)	(88)	(94)						縄文?	SK-78重複(古)
35	SK-87	N-21		E	(85)	74	(69)	61	-	-						古代?	SD-3重複(古)

(遺構名は略号を使用)

第3章 自然科学的分析

第1節 櫛館出土一括出土銭の年代と素材について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

青森県八戸市櫛館遺跡は、新井田川右岸に形成された河岸段丘上に立地する。館跡は戦国期と考えられているが文献資料には記載が無く、館主や存続期間は不明である。今回の発掘調査では、縄文時代から近世までの断続的な複合遺跡であることが判明している。

今回は、櫛館遺跡から出土した一括出土銭の材質や年代観に関する情報を得ることを目的とし、1. 蛍光X線分析による出土銭貨の材質、2. 放射性炭素年代測定および灰像分析による縶紐（縄）の使用年代や素材、3. 顕微鏡観察による一括出土銭の付着布（繊維）の素材について、それぞれ調査を実施する。

1. 試料

試料は、材質調査に用いる銭貨3枚、放射性炭素年代測定及び灰像分析に用いる縶紐（縄）1点のほか、付着布観察用の銭縶2点である。

材質調査用の銭貨を写真1に示した。さらに、両面を記録したことから試料名に続けてA、Bのラベルを付している。なお、当初3枚の銭貨とされていたが、銭貨58は緑青によって2枚の銭貨が固着したものであったため、材質調査時に両者を分離し、各々分析を行った。したがって、材質調査は銭貨58-A、銭貨58-B、銭貨67、銭貨68の計4枚を対象とした。各銭貨の内孔の形状は銭貨58-A、銭貨68が円孔、銭貨58-B、銭貨67が方孔である。

写真2には、放射性炭素年代測定及び灰像分析に用いた縶紐（縄）と顕微鏡により付着布（繊維）を観察する銭縶2点について記録した。縶Hは長さ約5.3cmの縶紐に銭貨が59枚あり、銭貨の側面に約1.3×2.3cmの布状の物質が付着した状態にあり、縶Fは、長さ約4.5cmの縶紐に銭貨が31枚あり、銭貨の側面に約1cm×0.5cmの格子状の繊維が付着した状態にあった。

2. 分析方法

(1) 蛍光X線分析

蛍光X線分析では試料にX線（一次X線）を照射した時に発生する各元素の固有X線（二次X線）を測定するために、構成元素およびその概略の含有量を同時に求めることが可能であり、組成未知の試料分析には極めて有効な手段となる。ただし、この分析法は通常、比較的表面に近い層の分析となることから、錆の発生した銭貨を対象とした場合には本来の元素組成を得ることが難しい。また、銭貨は鑄造時の冷却過程で偏析を起こすことが金属組織学的に指摘されており、元素組成を求める上で、表裏や測定部位の違いが誤差を増大させる要因となる。したがって、ここでは銭貨の概略の元素組成が求められる点に留意されたい。さらに、計測されたスペクトルは元素同定を実施した後、ファンダメンタルパラメーターを用いて含有率計算を行うが、同定（検出）可能元素は9F～92Uの元素（希ガスを除く）に限られ、超軽元素等はこの範疇に含まれないことに留意する必要がある。

測定は理学電気工業製波長分散型蛍光X線分析装置（RIX1000）を用い、本装置に内蔵されるFP（ファンダメンタルパラメーター）法によるオーダー分析プログラムを利用した。装置条件及び測定

条件の詳細については表1・2に示す。なお、銭貨表面に付着した緑青は研磨除去し、可能な限り内部の新鮮な面を磨きだした後、四ホウ酸リチウムを加圧成形して作成した試料ホルダーに設置し、蛍光X線スペクトルを計測した。

(2) 放射性炭素年代測定

縹紐（縄）の放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

(3) 灰像分析

珪化組織片（灰像）の産状に注目し、縹紐（縄）の素材鑑定を行う。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物遺体中には珪化組織が残されている場合が多い。そのため、珪化組織片の産状により植物繊維の種類が明らかになると考えられる。縹紐（縄）の一部を採取し、400倍の光学顕微鏡下で観察し、イネ科葉部（葉身と葉鞘）に由来した植物珪酸体を包含する珪化組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて調べた。

(4) 顕微鏡観察

繊維の観察に対しては、電子顕微鏡を用いた断面観察が有効であるが、銭縹の全長は電子顕微鏡の試料室にようやく入る大きさであり、試料室内で視野を動かすことができない。付着布（繊維）を一括出土銭本体から剥がさずに電子顕微鏡で観察を行うことが難しいことに加え、縹Fでは付着布（繊維）が緑青と置換しており、たとえ付着布（繊維）を剥がして観察したとしても素材の同定ができるとは断定できない。そのため、今回の付着布（繊維）については、実体顕微鏡で可能な範囲で繊維の構造等について観察を行う。

3. 結果

(1) 蛍光X線分析

各出土銭貨の蛍光X線スペクトルを図1～4に、元素組成を表3に示す。古銭の材質は、金、銀、青銅、鉛、鉄、黄銅など、その種類が多いが、特に銅と錫・鉛の合金である青銅の貨幣が大半を占める（山口，1994）。今回調査した銭貨から検出された元素は、主として銅（Cu）、錫（Sn）、鉛（Pb）であることから、いずれも青銅貨幣であることが確認される。なお、銭貨58-Aではこれら3元素によって全体の92%程度が占められているのに対し、銭貨58-B、銭貨67、銭貨68では鉄（Fe）、砒素（As）、亜鉛（Zn）、硫黄（S）が多く含まれることによって83%程度となっている。

一方、主成分となっている銅-錫-鉛の3元系について見ると、内孔形状が円孔の銭貨58-A、銭貨68はおよそ75:10:15の比率であるのに対し、方孔の銭貨58-B、銭貨67ではおよそ95:1:4と銅の構成比率が極端に高い傾向にある。

その他検出成分としては、近年注目されている元素であるアンチモン（Sb）のほか、銀（Ag）、クロム（Cr）、珪素（Si）、アルミニウム（Al）といった元素が確認されている。ただし、これら成分については検出量が僅かであるなどのことから、ここでは有益な情報を与える指標とはなり得ないと思われる。

(2) 放射性炭素年代測定

縷紐（縄）の放射性炭素年代測定結果を表4・5に示す。測定年代（補正年代）は、350BPの17世紀頃に相当する値を示す。

(3) 灰像分析

縷紐（縄）の珪化組織（灰像）を写真3に示す。イネ属の葉部に形成される短細胞列や周囲の珪化組織が観察され、縷紐（縄）の素材として稲藁が利用されていたことが確認される。

(4) 顕微鏡観察

各一括出土銭に付着した布（繊維）の顕微鏡写真を写真4に示し、観察結果を以下に記す。

・縷H

肉眼で布状を呈し、表面は微細な繊維が集まった状態が観察できる。編んだような構造は認められないが、1ヶ所のみ繊維を多数集めた糸を2本撚っている部分が認められる。他の部分で構造が全く認められない点を考慮すると、糸と布片は異なる素材に由来する可能性があるが、実体顕微鏡下でさらなる詳細は不明である。

・縷F

肉眼で格子状を呈する。実体顕微鏡による観察でも糸を編んだ構造が認められる。糸は多数の微細な繊維で構成されており、一部で撚った部分がある。

4. 考察

今回、一括出土銭や縷紐（縄）を対象とした調査を行った結果、銭縷に利用された縷紐（縄）にはイネ属の珪化組織が見られ、稲藁を材料として用いていたことが確認された。稲藁は古くから燃料材や住居構築材、農業資材に利用されており、米を収穫した後で容易に手に入れやすい素材である。そのため、縷の材料には適していたと思われる。また、縷紐（縄）の測定年代（補正年代）は、350BPの17世紀頃に相当する値を示す。複合遺跡である本館跡が、この時期に機能していたことを支持すると共に、出土銭貨が当該時期もしくはこれ以前の時期に製造されたことを示唆する。

なお、発掘調査時に縷紐（縄）からはづれていた銭貨数枚について材質調査を行ったところ、青銅製であることが確認された。主成分である銅 - 錫 - 鉛の3元系によって示される材質的な特徴は、円孔銭貨と方孔銭貨とで大きく異なる傾向を示すが、一方で銭貨58 - B、銭貨67、銭貨68に関しては、粗銅に含まれる鉄 (Fe)、砒素 (As)、亜鉛 (Zn)、硫黄 (S) といった不純成分が多く (佐々木, 1997a)、主成分となる銅、錫、鉛の構成比率が少ないことが指摘される。

なお、佐々木 (1997b) は銭貨の国内模鑄が盛んになる室町中期から戦国末の限定した時代範囲において、輸入明銭と国内模鑄銭の化学組成を比較し、[鉄 + 砒素 + アンチモン] 量の多いものは、日本国内産としている。今回、材質調査を実施した銭貨は、いずれも内孔が大きく広がっていること、緑青によって正確には観察できないが無文銭と思われる銭貨であることから、「鑄写し」を踏み返した模鑄銭である可能性が高い。また、銭貨58 - B、銭貨67、銭貨68において、[鉄 + 砒素 + アンチモン] 量が多い特徴は、国内模鑄銭であることを裏付けるものと捉えることができる。一方、銭貨58 - Aについては、材質的には公鑄銭とも捉えられるが、模鑄銭と推察される銭貨68と銅、錫、鉛の構成比率が同じ特徴にある点から、青銅製品を鑄潰して再加工された可能性も高い。これらの推論に関しては今後、材質的特徴以外に鉛同位体比による原料の供給源推定や形態的特徴による型式分類などの

情報を踏まえ、明らかにする必要がある。

一方、一括出土銭に付着した布（繊維）に関しては、実体顕微鏡により低倍率で観察した限りでは、擦りなどについて所見を得たが、その素材について十分な情報は得られなかった。さらに情報を得るためには、今後付着布（繊維）を剥離した上で、電子顕微鏡観察や研磨薄片を利用し、組織構造を詳しく観察する必要がある。

引用文献

近藤 鍊三・佐瀬 隆,1986,植物珪酸体分析,その特性と応用,第四紀研究,25,31-64.
 佐々木稔,1997a,出土銭貨の自然科学的解析法について,出土銭貨,7,93-105.
 佐々木稔,1997b,近世以前の青銅製銭貨の原材料と化学組成,わが国における銭貨生産,出土銭貨研究会第4回大会報告要旨,10-19.
 山口誠治,1994,中世古銭の科学的調査について,中世の出土銭,兵庫埋蔵銭調査会,260-265.

写真1

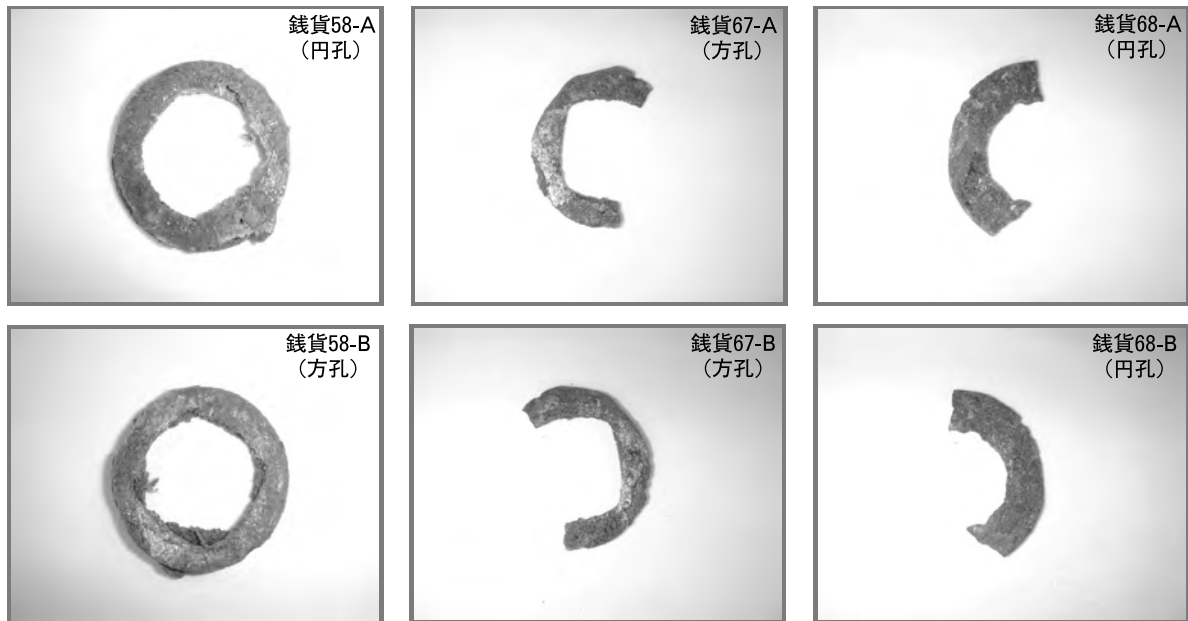


表1. 蛍光X線装置条件

ターゲット	Cr
管電圧(KV)	50
管電流(mA)	50
試料マスク	30mm
試料スピンの	OFF
ダイヤフラム	20mm
測定雰囲気	真空

表2. 蛍光X線定性測定条件

測定元素	測定スペクトル	1次フィルタ	アッテネータ	スリット	分光結晶	検出器	PHA		スキャン条件			
							LL	UL	開始(deg)	終了(deg)	ステップ(deg)	測定時間(sec)
HEAVY	K	OUT	1/1	Std.	LIF1	SC	100	300	5.000	90.000	0.02	0.1
Cr	K	IN	1/1	Std.	LIF1	SC	100	300	67.000	72.000	0.02	0.4
Mn	K	IN	1/1	Std.	LIF1	SC	100	300	61.000	65.000	0.02	0.4
Ca	K	OUT	1/1	Std.	GE	PC	100	300	59.000	65.000	0.05	0.4
K	K	OUT	1/1	Std.	GE	PC	100	300	67.000	73.000	0.05	0.4
P	K	OUT	1/1	Std.	GE	PC	150	300	138.000	144.000	0.05	0.4
Si	K	OUT	1/1	Std.	PET	PC	100	300	106.000	112.000	0.05	0.4
Al	K	OUT	1/1	Std.	PET	PC	100	300	140.000	147.000	0.05	0.4
Mg	K	OUT	1/1	Std.	TAP	PC	150	250	42.000	48.000	0.05	1.0
Na	K	OUT	1/1	Std.	TAP	PC	150	250	52.000	58.000	0.05	1.0
S	K	OUT	1/1	Std.	GE	PC	150	300	108.000	114.000	0.05	0.4

表3. 出土銭貨の元素組成

成分名	スペクトル	銭貨58-A		銭貨58-B		銭貨67		銭貨68	
		X線強度(kcps)	分析結果(wt%)	X線強度(kcps)	分析結果(wt%)	X線強度(kcps)	分析結果(wt%)	X線強度(kcps)	分析結果(wt%)
Cu	Cu-KA	93.2926	69.93	131.2262	79.16	137.3598	76.96	118.0199	63.22
Sn	Sn-KB1	2.1640	8.81	0.4964	1.57	0.2730	0.80	2.1592	6.28
Pb	Pb-LB1	7.6437	13.46	1.7707	3.04	3.4918	5.41	10.8997	13.89
Sb	Sb-KA	0.2601	0.27	0.3451	0.29	0.2588	0.20	0.0769	0.06
Fe	Fe-KA	0.7869	0.84	6.6882	4.44	7.2651	4.60	4.9509	3.75
As	As-KB1	0.1413	0.58	1.5234	5.95	1.3918	4.92	1.8717	5.29
Zn	Zn-KA	0.2252	0.12	0.5744	0.25	0.4756	0.19	0.5470	0.21
Ag	Ag-KA	0.2933	0.20	0.9878	0.55	0.6631	0.34	0.5900	0.29
Cr	Cr-KA	0.0113	0.13	0.0112	0.07	0.0057	0.04	0.0063	0.05
S	S-KA	0.2911	0.35	0.8401	0.96	1.0179	1.06	1.0518	0.92
Si	Si-KA	1.0678	5.19	0.7544	3.62	1.2653	5.41	1.6959	5.91
Al	Al-KA	0.0218	0.11	0.0189	0.09	0.0143	0.06	0.0333	0.12
Total	-	-	99.99	-	99.99	-	99.99	-	99.99

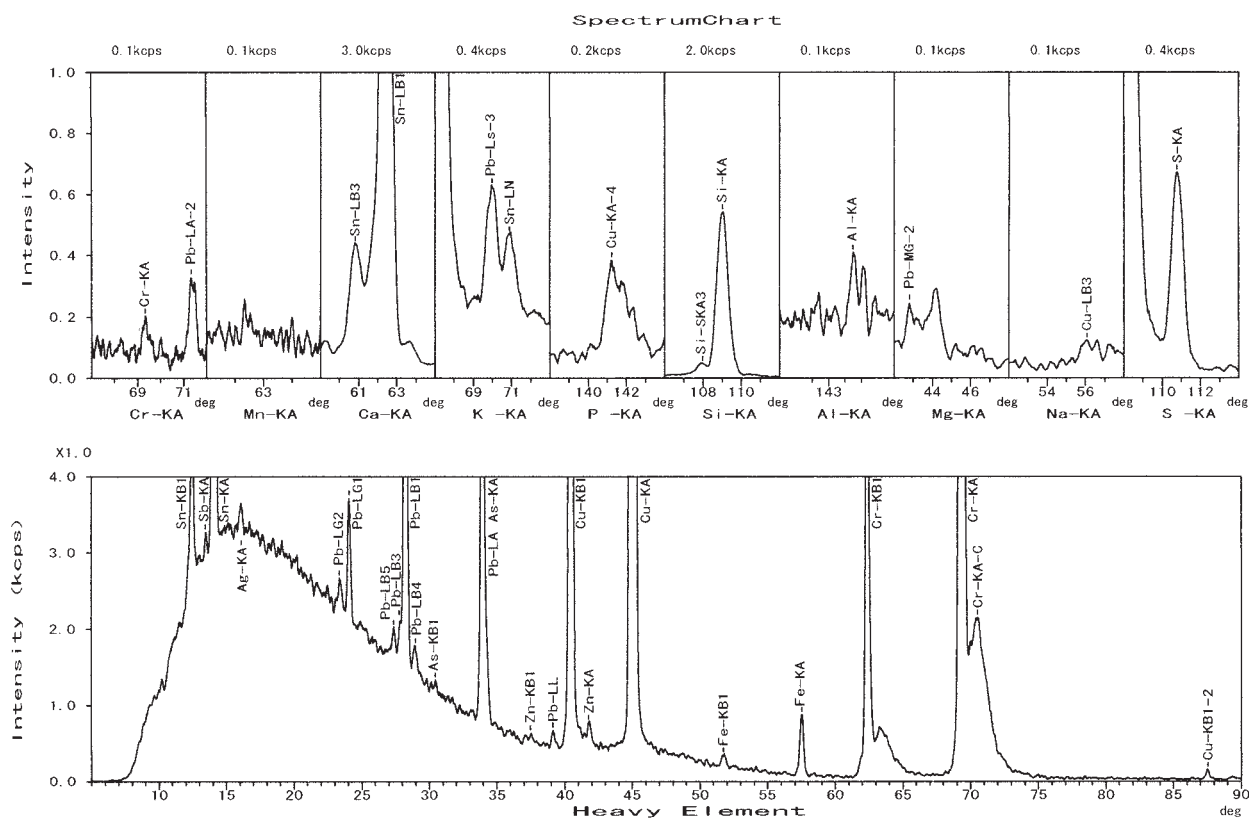


図1 銭貨58-Aの蛍光X線スペクトル

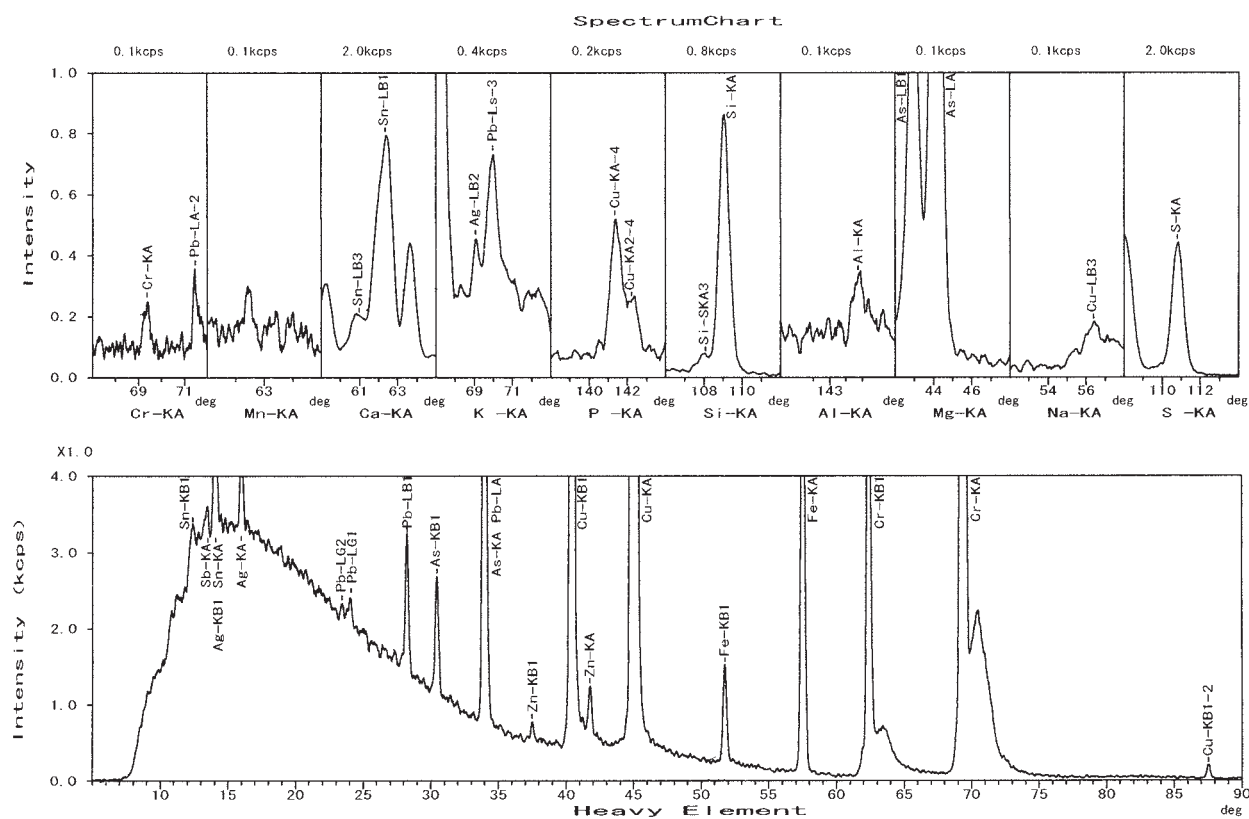


図2 銭貨58-Bの蛍光X線スペクトル

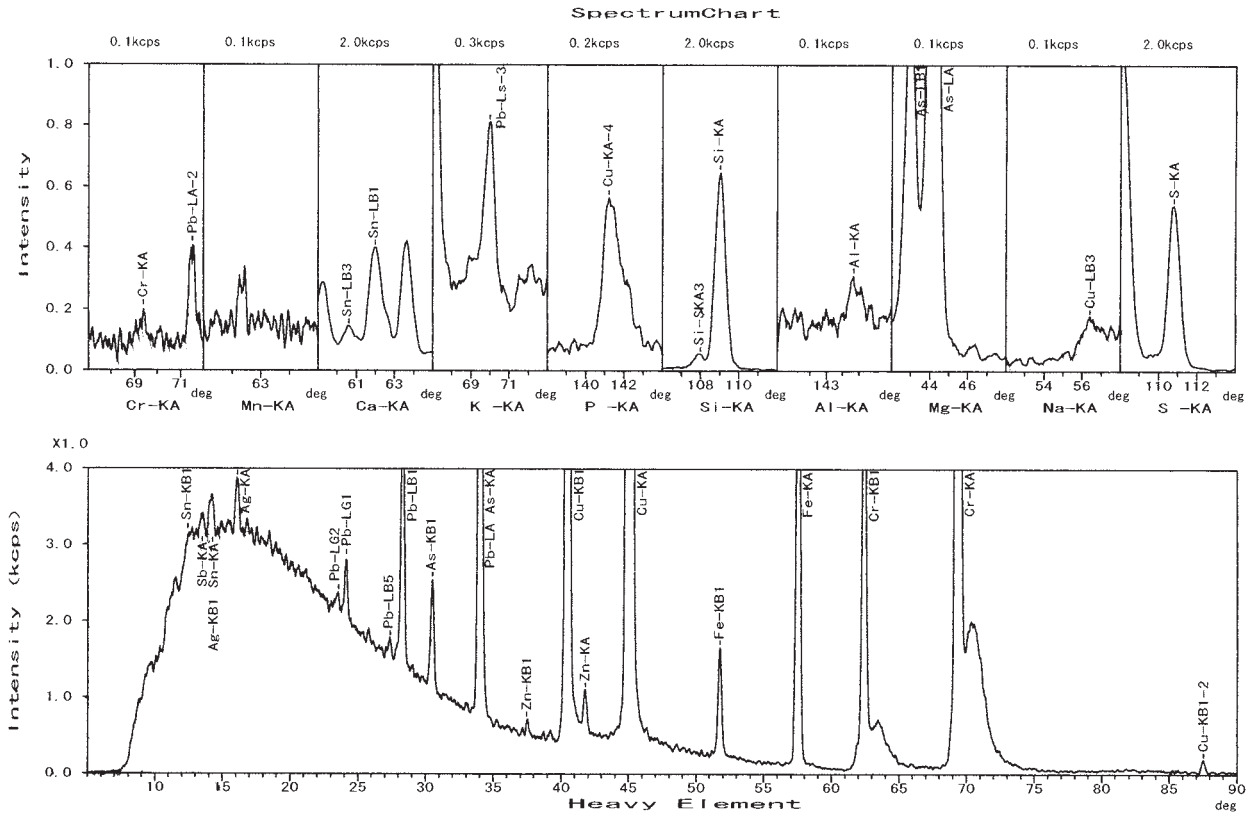


図3 銭貨67の蛍光X線スペクトル

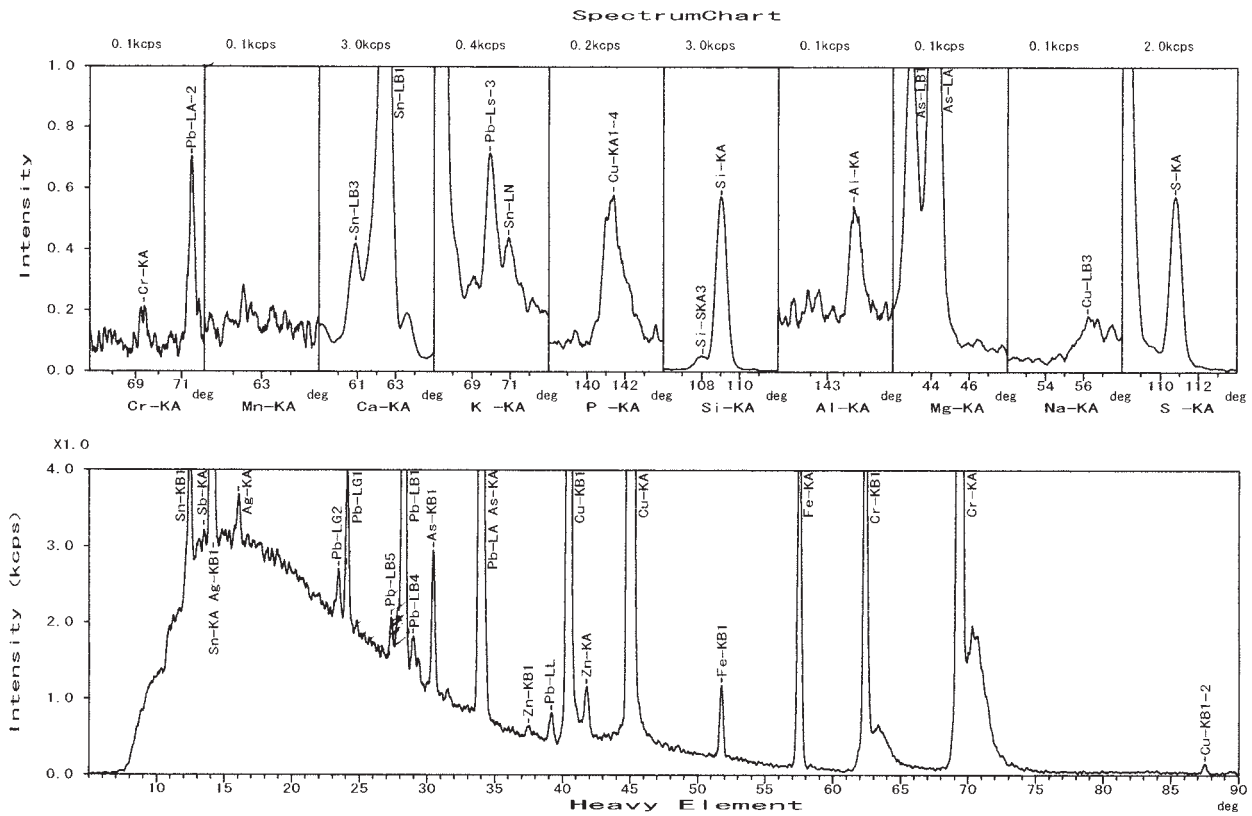


図4 銭貨68の蛍光X線スペクトル

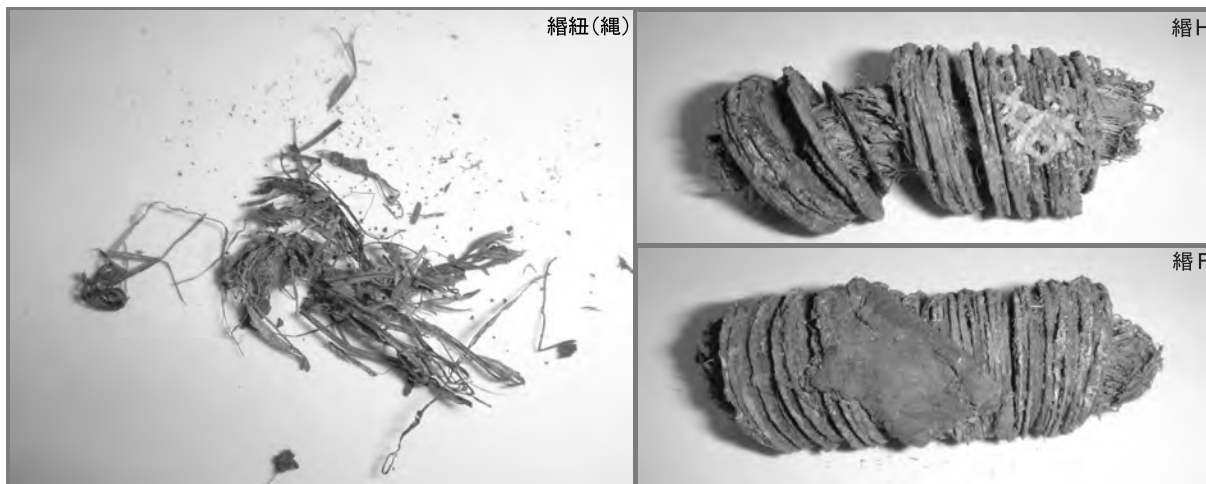


表4. 放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質	補正年代 BP	¹³ C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
縄紐(縄)	植物遺体	350 ± 30	-28.88 ± 0.72	410 ± 30	IAAA-41524

- 1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3)付記した誤差は、測定誤差（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表5. 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)								相対比	Code No.		
		cal	AD	1,487	cal	AD	1,523	cal	BP			463	427
縄紐(縄)	348 ± 33	cal	AD	1,487	cal	AD	1,523	cal	BP	463	427	0.364 0.636	IAAA-41524
		cal	AD	1,563	cal	AD	1,628	cal	BP	387	322		

- 1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3)付記した誤差は、測定誤差（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

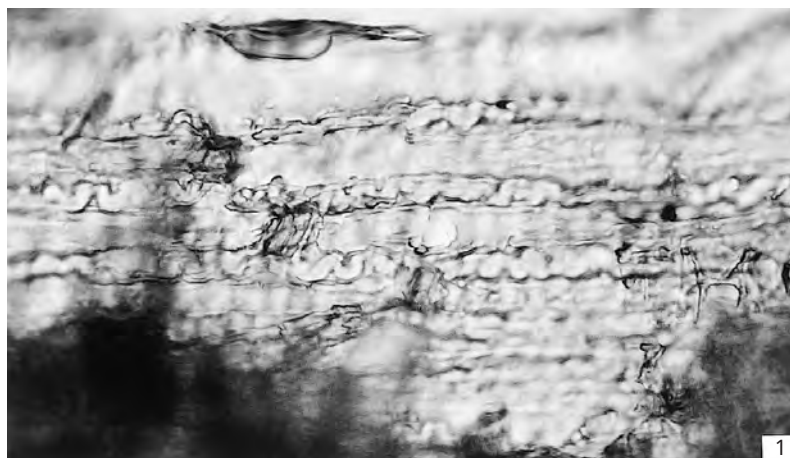
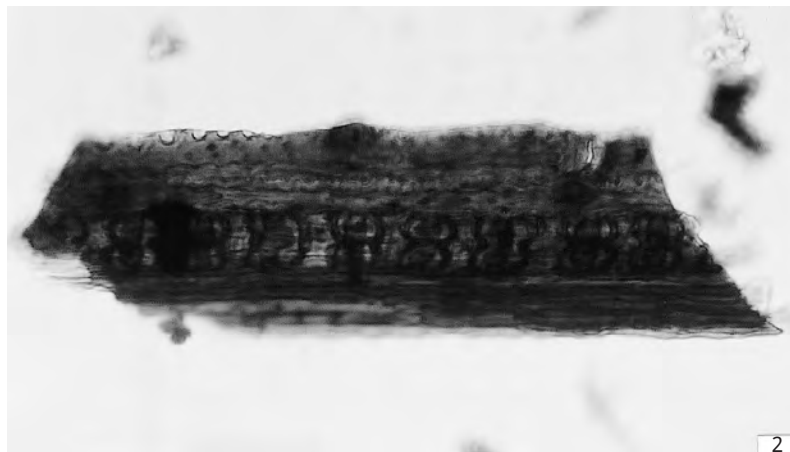


写真 3

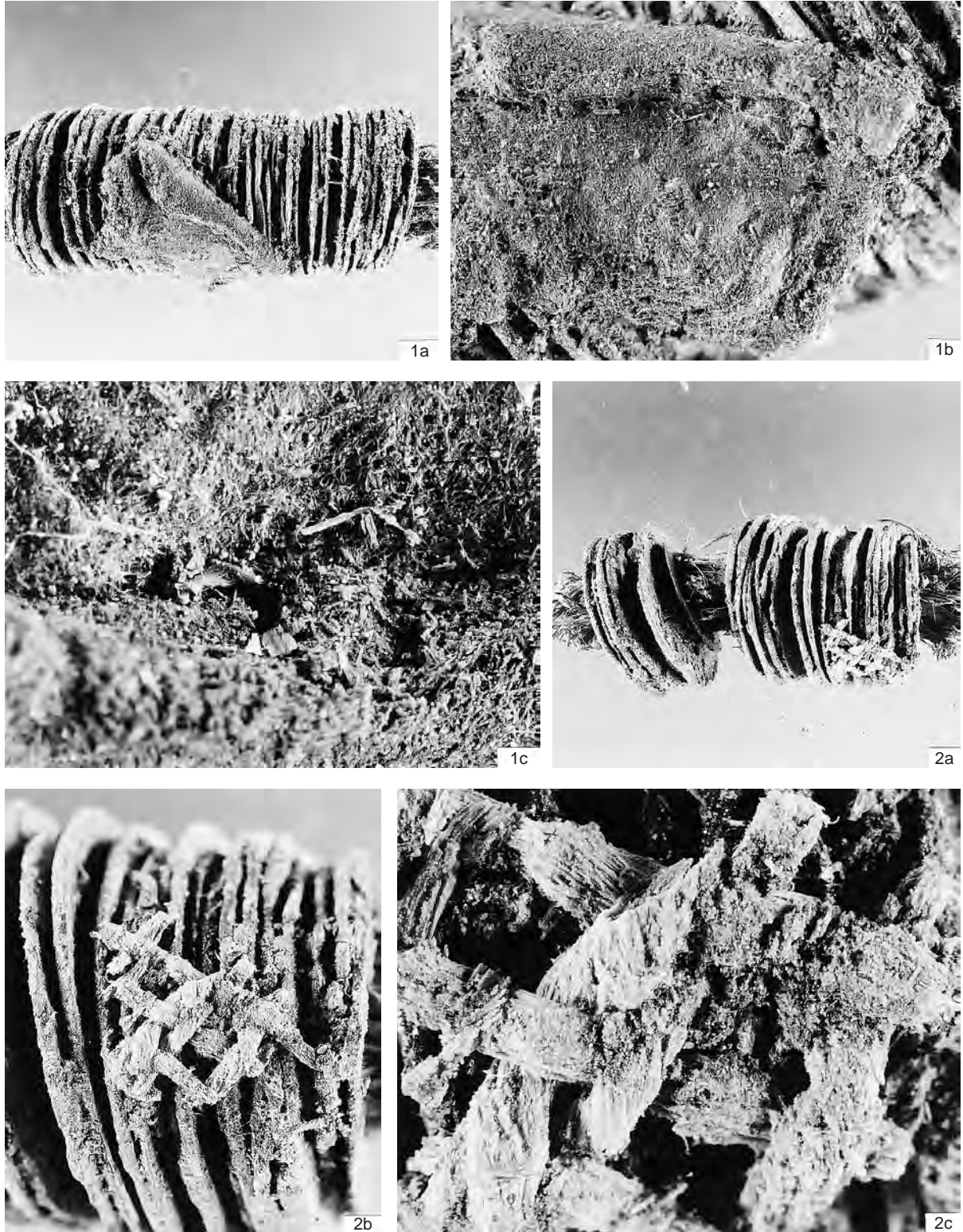
1. イネ属珪化組織片(縄)



2. イネ属短細胞列(縄)

50 μm

写真4



1. 縹F

2. 縹H

1cm:1・2a

2mm:1・2b

1mm:1・2c

a. 全景, b - c: 繊維部分の拡大写真

第2節 櫛館遺跡出土人骨について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

櫛館遺跡は、青森県八戸市是川字櫛館に所在し、新井田川右岸の河岸段丘上に位置する。本遺跡は三重塚、土塁などが存在する中世城郭跡であるが、丘陵頂部の平坦面に多数の遺構が確認され、縄文時代から近代までの複合遺跡であることが明らかにされている。今回は古代～近世に埋葬されたとみられる人骨について、個体情報を得ることを目的として、同定を行った。

1. 試料

試料は、R - 13グリッドおよび第60号土坑で出土した人骨である。R - 13は、伸展葬とみられる状態で人骨が出土した。副葬品、棺材とみられる木材、釘等が認められない。人骨を取り上げた後に検出された土坑が、墓坑の可能性があるとされる。第60号土坑は開口部径約1m、深さ約60cmの円形土坑で、底部から人骨が出土した。埋葬形態が座位で、頭骨が落ちて横向きになるとされている。棺材とみられる木材や釘等が出土していないが、副葬品として銭貨が出土している。R - 13、第60号土坑ともに出土人骨は部位別に10試料（試料番号1～10）採取されている。この内、第60号土坑試料番号2・3は、微細な破片が僅かに認められる程度である。他の試料は、1試料中に複数点の骨片が認められ、形状を保つ骨の他に破片がみられる。同定は、形状を保つ骨について行う。第60号土坑試料番号2からは、貨幣3枚が出土する。貨幣3枚を除く人骨は、当社で保管している。

2. 分析方法

試料に付着していた土壌を筆、竹串等を用いて除去する。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、部位の同定を行う。歯牙の計測は、藤田（1949）に従う。なお、同定・報告には、奈良貴史先生の助言を得た。

3. 結果および考察

（1）各人骨の特徴

同定結果を表1、部位別数量を表2に示す。以下、結果を示す。

R - 13グリッド

上顎中切歯、胸椎、腰椎、仙骨、左肩甲骨、左上腕骨、左尺骨、左右寛骨、右大腿骨などが確認される。仙骨は、仙椎の癒合が進んでおらず、化石化していない。上顎中切歯は、エナメル質の咬耗が僅かに認められる程度である。胸椎は、第1胸椎が確認され、その他に錐体片がみられる。腰椎は、第5腰椎が仙骨と関節した状態で出土する。左上腕骨は、近位端が欠損し、また骨体も著しく破損する。右上腕骨は、遠位端部の破片である。左尺骨は、近位端部であり、破片となっている。寛骨は、臼部周辺が残り、また左寛骨で大坐骨切痕部が残る。大坐骨切痕は、一部破損しているため詳細不明であるが、狭いと思われる。また、大腿骨骨頭が比較的大きく頑丈である。これらのことから、本人骨は男性的である。年齢に関してみれば、左上腕骨の遠位端が化石化することから成人に達していると考えられる。ただし、仙骨が完全に化石化しておらず、仙椎の癒着が弱いことから、本人骨は、成年前半程度の可能性がある。また、被熱を受けた痕跡がみられず、火葬されていないことがわかる。埋葬形態は、発掘調査所見から伸展葬と推定されている。これは、確認される骨格がほぼ解剖学的位置を保つことから想定される。ただし、左上顎中切歯のみ胸椎の近くで認められ、頭骨の大部分が

認められないため詳細不明であるが、埋葬後に攪乱を受けている可能性もある。

第60号土坑

頭骨、第1～2頸椎、頸椎、第6～12胸椎、第1～5腰椎、第1～4仙椎、胸骨、肋骨、左上腕骨、左橈骨、左尺骨、中手骨?、左右腸骨、左右坐骨、右恥骨、左右大腿骨、右脛骨、左膝蓋骨が確認される。頭骨は、頭頂部、右側頭部、後頭骨、上顎部が破損しており、前頭骨-左上顎骨-左頬骨-左側頭骨が残る。下顎骨も骨体が破損する。このため、一部の歯牙が遊離した状態で検出される。頸椎は、破損した状態であり、部分的に残される程度である。胸椎および腰椎も椎体や棘突起などが破損する状態であるが、一括して採取されており、第6胸椎から第5腰椎までが連なる状態で出土する。上肢骨は、左側のみが出土する。左上腕骨および左橈骨は、近位端を欠損するが、遠位端の化石化しておらず、骨端が外れる。また、左尺骨も両骨端が外れる。寛骨は、腸骨、坐骨、恥骨が癒合しておらず、それぞれ分離した状態で出土する。また、右側の寛骨臼部に大腿骨骨頭が残存して出土する。大腿骨は、左側が近位端部、右側が骨体が確認され、左右とも骨端が未化石である。右脛骨は、両端が未化石の骨体と、外れた近位骨端が確認される。左膝蓋骨は、破片である。本人骨は、頭骨の縫合が癒合しておらず、また四肢骨の骨端や仙椎が化石化していないことから、若い個体と考えられる。また、歯牙も乳歯と永久歯が認められる(表3)。切歯はいずれも永久歯が萌出し、上顎歯牙で歯根部の形成状態をみると、中切歯が2/3程度、側切歯が1/2程度形成される段階にある。また、乳犬歯、乳臼歯、また永久歯の第1大臼歯が植立した状態にある。永久歯の犬歯、小臼歯、第2大臼歯は、未萌出である。この歯牙の萌出状況から、本人骨は、小児とみられ、7～8歳前後と考えられる。なお、性別不明である。本人骨も被熱を受けた痕跡がみられず、火葬されていないことがわかる。本人骨は、頭骨が土坑中央部付近にあり、頭骨の下側から四肢骨や体幹部が出土していることから、埋葬後に軟部組織が腐敗・分解して崩れたと考えられる。よって、埋葬形態は、発掘調査所見どおり座位であったと推定される。

(2) まとめ

本遺跡から出土した2体分の人骨は、両人骨ともに被熱の痕跡は見られず、R-13が伸展葬、第60号土坑が座位で埋葬されたとみられている。第60号土坑の一部に灰状物質が付着していたが、両人骨とも骨自体に被熱を受けた痕跡がみられず、土葬されたと考えられる。また、R-13出土人骨は、骨の出土量が少ないことから詳細を明らかに出来なかったが、成年前半の可能性があり、男性的であった。また、第60号土坑出土人骨は、性別不明であるが、7～8歳程度の小児であることが明らかにされた。

引用文献

藤田 恒太郎,1949,歯の計測基準について.人類学雑誌,61,27-31.

表3. 歯式および計測結果

(単位:mm)

SK-60		右										左			
上顎	永久歯	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²
		歯冠幅	10.57	12.38				7.59	8.0±	7.9±	7.0±				11.93
	歯冠厚	11.75	12.06				6.28	7.2±	7.2±	6.67				11.33	12.78
下顎	乳歯			dm ²	dm ¹	dc	di ²	di ¹	di ¹	di ²	dc	dm ¹	dm ²		
	歯冠幅			9.7±	6.8±	5.3±					5.9±	6.9±	10.23		
	歯冠厚			10.3±	8.9±	4.8±					5.9±	8.71	10.02		
	乳歯			dm ²	dm ¹	dc	di ²	di ¹	di ¹	di ²	dc	dm ¹	dm ²		
	歯冠幅			9.6±	7.8±	6.5±					6.0±	8.1±	9.8±		
	歯冠厚			8.2±	6.8±	5.8±					5.6±	7.0±	8.2±		
	永久歯	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²
	歯冠幅	12.48	12.75				5.4±	4.9±	5.6±	5.22				12.40	12.46
	歯冠厚	10.14	11.42				5.5±	5.5±	5.9±	6.49				11.07	9.80

凡例) : 植立 : 未萌出 : 遊離 : 未萌出遊離

櫛館遺跡

表1. 骨同定結果

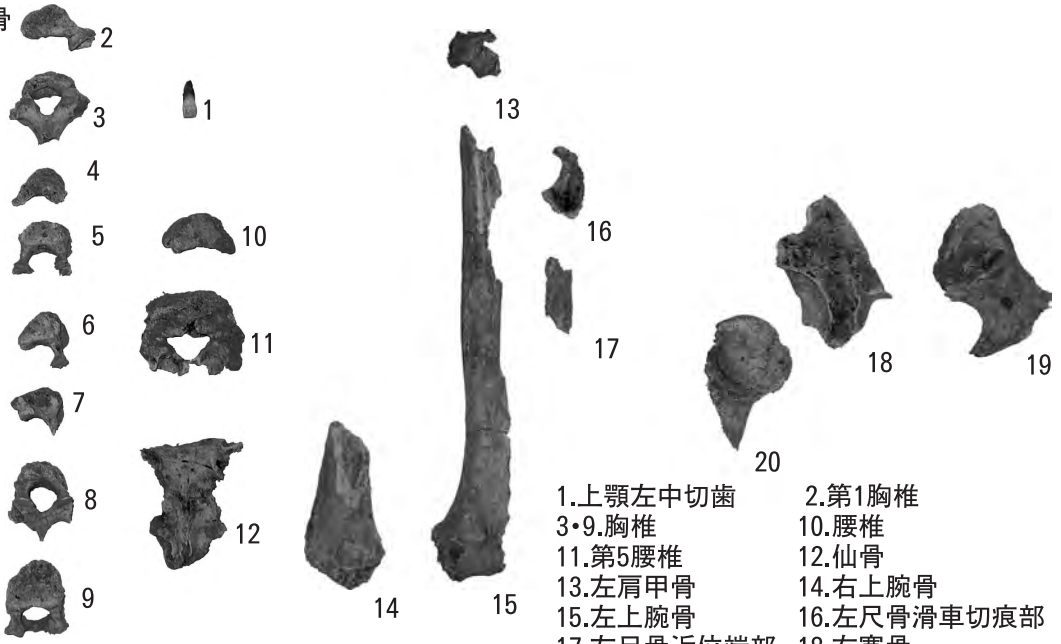
採取地点	番号	部位	左右	部分	数量	備考
R-13	1	第1胸椎		破損	1	
		肩甲骨	左	破片	1	
	2	上腕骨	左	近位端欠	1+	骨体部破損
	3	尺骨	左	滑車切痕部	1	
			左	近位端部	2	
	4	四肢骨		破片	5+	
	5	胸椎		椎体	5	
	6	胸椎		破損	2	
				棘突起	1	
	7	上顎中切歯	左	ほぼ完存	1	エナメル質僅かに咬耗
	8	上腕骨	右	遠位端	1	
		寛骨	右	臼部周辺	3	
		大腿骨	右	大腿骨頭	1	
	9	腰椎椎骨		椎体	1	
			破片	3		
10	第5腰椎		破損	1		
	仙骨		破片	1	未癒合,他破片有	
	寛骨	左	腸骨部	1		
			大坐骨切痕部	1	湾曲緩やか	
			臼部周辺	2		
SK60	1	頭骨	左	破片	1	前頭骨-左上顎骨-左頬骨-左側頭骨
		頭頂骨	左	破片	1	
			左右	破片	1	
		後頭骨		破片	1	
		篩骨		破片	1	
		下顎骨		破片	1	右下顎頭破損
			左	下顎孔付近	1	
			右	下顎頭	1	
		上顎歯牙	左	中切歯	1	萌出途中(歯根2/3形成)
			左	側切歯	1	萌出途中(歯根1/2形成)
			左	第2大臼歯	1	未萌出
			右	中切歯	1	萌出途中(歯根2/3形成)
			右	側切歯	1	萌出途中(歯根1/2形成)
			右	第2大臼歯	1	未萌出
		下顎歯牙	右	第2大臼歯	1	未萌出
		頭骨		破片	8	
		第2頸椎		破片	1	
		頸椎		椎体	2	
				破片	2	
		胸骨		骨体	1	
		肋骨		胸骨端	1	
		中手骨?		骨体1/2	2	
		指骨		破片	7	
	2	不明		破片		貨幣(3)検出
	3	不明		不明		土中に微細片(灰?)が混じる程度
	4	脛骨	右	近位骨端	1	骨端未化骨
				骨体	1	両端未化骨
	5	肋骨		破片	2	
			右	遠位端外れ	1	両端未化骨
				遠位骨端	1	骨端未化骨
		肋骨/四肢骨		破片	2	
	6	橈骨	左	骨体	1	近位端欠,遠位端外れ
			左	骨体	1	両端未化骨
	7	上腕骨	左	骨体	1	近位端欠,遠位端外れ
8	第1-4仙椎		破損	4		
		左	破損	1		
		右	ほぼ完存	1	腸骨稜未化骨,坐骨切痕緩	
	坐骨	左	破損	1		
		右	ほぼ完存	1		
	恥骨	右	ほぼ完存	1		
	大腿骨	右	大腿骨頭	1		
	不明		破片	4		
9	大腿骨	左	近位端	1	骨端未化骨,骨端外れ	
	膝蓋骨	左	破片	1		
10	第6-12胸椎		破損	7		
	第1-5腰椎		破損	5		
	胸骨		胸骨体片	1		
	肋骨		破片	11+		
	骨	右	破片	1		
	側頭骨	右	破片	1		
	片	不明	破片	3		

注)数量において数字のあとの「+」は、他に微細片が含まれることを示す。

表2. 出土人骨部位別数量表

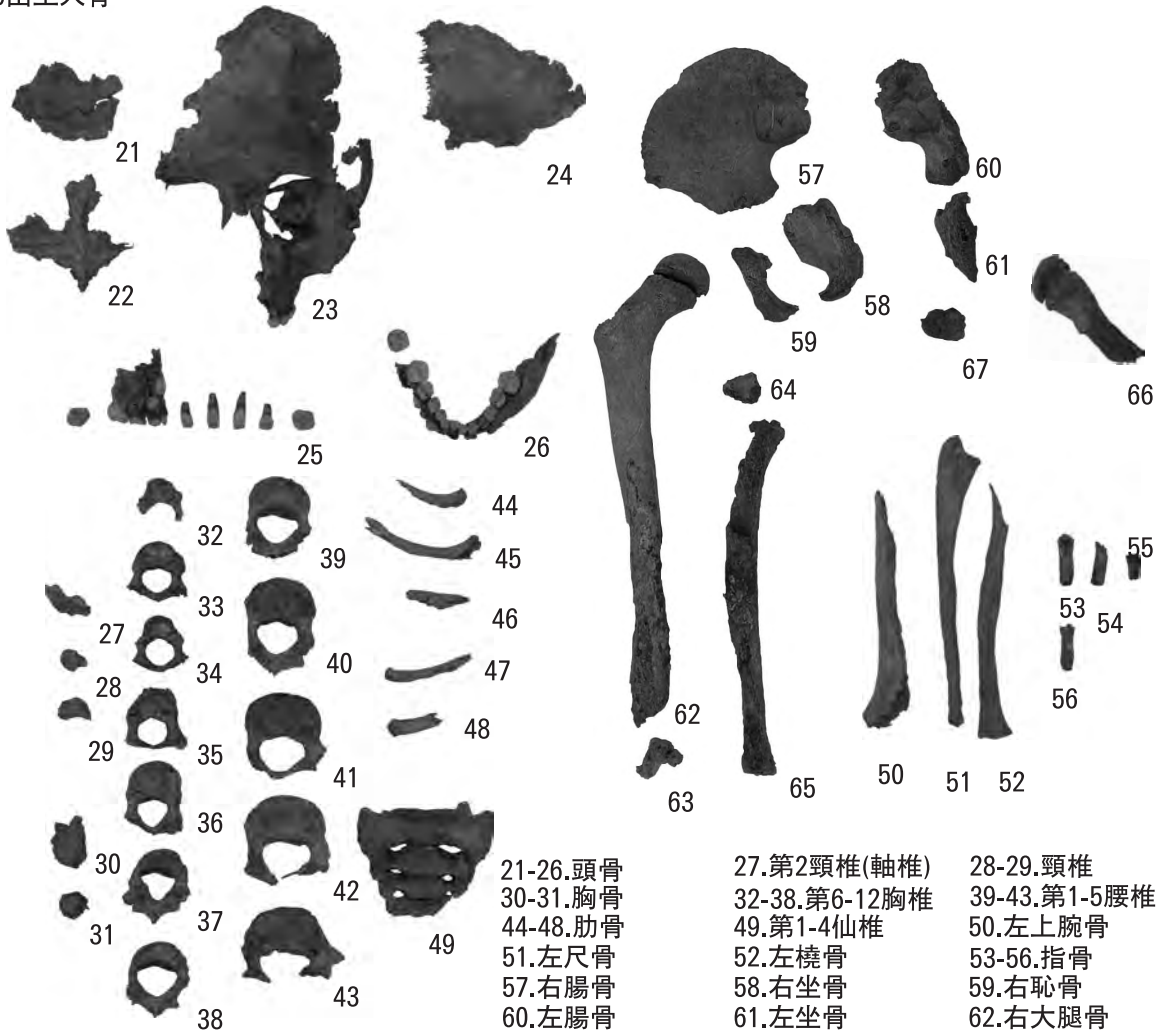
出土地点		R-13		SK60			
性別		男性?		不明			
推定年齢		成年前半		小児(7-8歳程度)			
部位		数量・状態		数量・状態			
		右	左	右	左		
頭蓋	脳頭蓋	頭頂骨			左側1 2		
		側頭骨			1		
		後頭骨			1		
		篩骨			1		
	顔面頭蓋	上顎骨	破片		1		
			歯牙		1 1	3 1,1,2,M2	
		下顎骨	破片			1	下顎頭
			歯牙			1	M2
	体幹	頸椎	第2			1	
			椎体			2	
			破片			2	
		胸椎	第1	1			
			椎体	7			
			破片	1			
腰椎		第1				1	
		第2				1	
		第3				1	
		第4				1	
		第5	1			1	
不明		椎体	1				
		破片	3				
仙骨		第1				1	
	第2				1		
	第3				1		
	第4				1		
胸郭	胸骨				2		
	肋骨				14		
上肢	腕部	肩甲骨		1	破片		
		上腕骨	1	遠位端	1	近位端欠	
		橈骨				1	近位端欠,骨端未化骨
手部	尺骨		1	近位端片(他破片2)	1	両端未化骨	
	中手骨	破片			2		
	指骨	破片			7		
下肢	下肢帯	寛骨	1	臼部周辺	1	腸骨部(他破片1)	
						1	1
						1	1
	腿部	大腿骨		1	大腿骨頭	1	骨端未化骨
膝蓋骨						1	
	脛骨				1	骨端未化骨	
四肢骨	破片		5+				
肋骨/四肢骨					2		
不明	破片				7		

R-13出土人骨



- 1.上顎左中切齒
- 2.第1胸椎
- 3•9.胸椎
- 10.腰椎
- 11.第5腰椎
- 12.仙骨
- 13.左肩甲骨
- 14.右上腕骨
- 15.左上腕骨
- 16.左尺骨滑車切痕部
- 17.左尺骨近位端部
- 18.右寬骨
- 19.左寬骨
- 20.右大腿骨

SK60出土人骨



- 21-26.頭骨
- 27.第2頸椎(軸椎)
- 28-29.頸椎
- 30-31.胸骨
- 32-38.第6-12胸椎
- 39-43.第1-5腰椎
- 44-48.肋骨
- 49.第1-4仙椎
- 50.左上腕骨
- 51.左尺骨
- 52.左橈骨
- 53-56.指骨
- 57.右腸骨
- 58.右坐骨
- 59.右恥骨
- 60.左腸骨
- 61.左坐骨
- 62.右大腿骨
- 63.右大腿骨遠位端
- 64.右脛骨近位端
- 65.右脛骨
- 66.左大腿骨
- 67.左膝蓋骨

0 10cm

写真図版1 出土人骨

第3節 青森県櫛館遺跡出土試料の¹⁴C年代測定

小林謙一¹⁾・坂本 稔¹⁾・尾寄大真¹⁾・新免歳靖¹⁾・松崎浩之²⁾

1) 国立歴史民俗博物館

2) 東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門

青森県八戸市櫛館遺跡出土試料の¹⁴C年代測定を試みた。試料は、第29号土坑堆積土出土の縄紋時代後期初頭の土器(図37-1)付着物である。試料番号はAOMB17とした。試料は、胴部内面にお焦げ状に多量に付着していた。なお、外面に付着していた煤状の炭化物も処理を行ったが、炭素量が不足で測定できなかった。

1.炭化物の処理

試料については、以下の手順で試料処理を行った。(1)の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林・新免、(2)(3)は、坂本・尾寄が行った。

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄(AAA処理)。

AAA処理は、土器付着物については、アセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した(2回)。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液(1N-HCl)で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去(2回)し、さらにアルカリ溶液(NaOH、1回目0.001N、4回目以降0.01N)でフミン酸等を除去する。5回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理(240分以上)を行い中和後、水により洗浄した(4回)。

試料の重量は、AAA前処理を行った量(処理量)68.61mg、処理後回収した量(回収量)38.73mg、二酸化炭素化精製に供した量(精製)4.19mg、二酸化炭素の炭素相当量2.50mgである。処理した量に対するAAA処理後に回収された試料の重量による重量比は56.4%(含有率1)、二酸化炭素に精製した際の炭素含有率は59.7%(含有率2)、含有率1と2を掛けて処理した量に対する炭素量の重量比は33.7%(含有率3)である。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を酸化(二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化：鉄(またはコバルト)触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともにバイコールガラス管に投げ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともにバイコールガラス管に封じた。これを電気炉で650℃で12時間加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに60kgfの圧力で充填した。

2.測定結果と暦年校正

AMSによる¹⁴C測定は、東京大学原子力研究総合センターのタンデム加速器施設(MALTIM、機

関番号MTC)で行った。

年代データの ^{14}C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した ^{14}C 年代(モデル年代)であることを示す(BPまたはyrBPと記すことも多いが、本稿では ^{14}C BPとする)。 ^{14}C の半減期は国際的に5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差(1標準偏差、68%信頼限界)である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比により、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比に対する同位体効果を調べ補正する。 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は、標準体(古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比)偏差値に対する千分率 ^{13}C (パーミル, ‰)で示され、この値を-25‰に規格化して得られる $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比によって補正する。補正した $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、 ^{14}C 年代値(モデル年代)が得られる(英語表記ではConventional Ageとされることが多い)。 ^{13}C 値は、東京大学測定分については、加速器による測定を参考として付す。

測定値を較正曲線INTCAL98(暦年代と炭素14年代を暦年代に修正するためのデータベース、1998年版)(Stuiver, M., et al. 1998)と比較することによって実年代(暦年代)を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、OxCal Programに準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦cal BCで示す。()内は推定確率である。図は、各試料の暦年較正の確率分布である。

3 年代的考察

較正年代は、紀元前2455~2195年の間に納まり、縄紋後期初頭から前葉の年代である。

この分析は、平成16年度科学研究費補助金(学術創成研究)「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築」(研究代表 西本豊弘)の成果を用いている。国立歴史民俗博物館今村峯雄教授には、暦年較正についてご協力を得ている。

参考文献

Stuiver, M. et al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon 40 (3), 1041-1083.

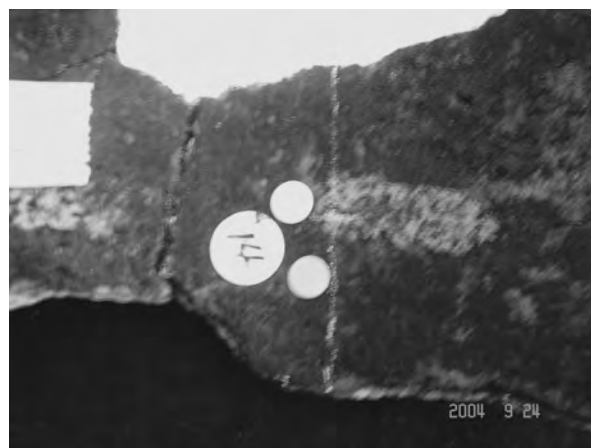
測定結果と暦年較正年代

試料番号	測定機関番号	^{13}C ‰	^{14}C BP (補正值)	暦年較正cal BC (2) (%) は確率密度
AOMB17a	MTC-05216	-25.3	3485 ± 40	2455-2195 95.1%

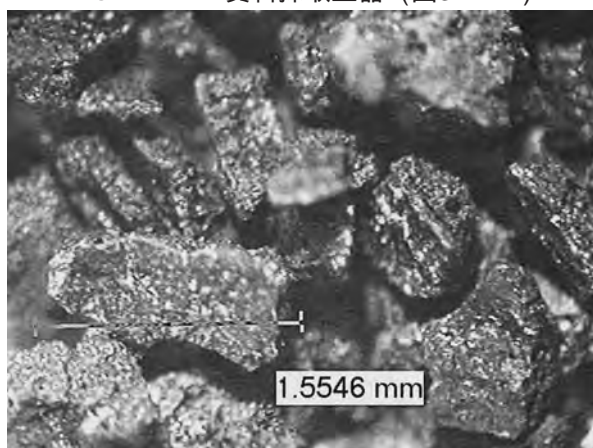
註 *) ^{13}C 値は、加速器による測定である。



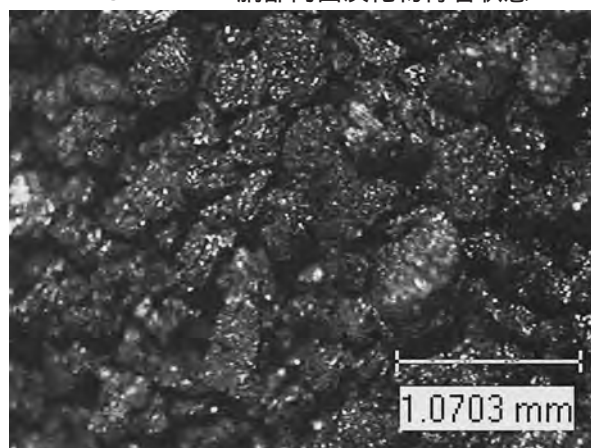
AOMB17 資料採取土器 (図37-1)



AOMB17 胴部内面炭化物付着状態

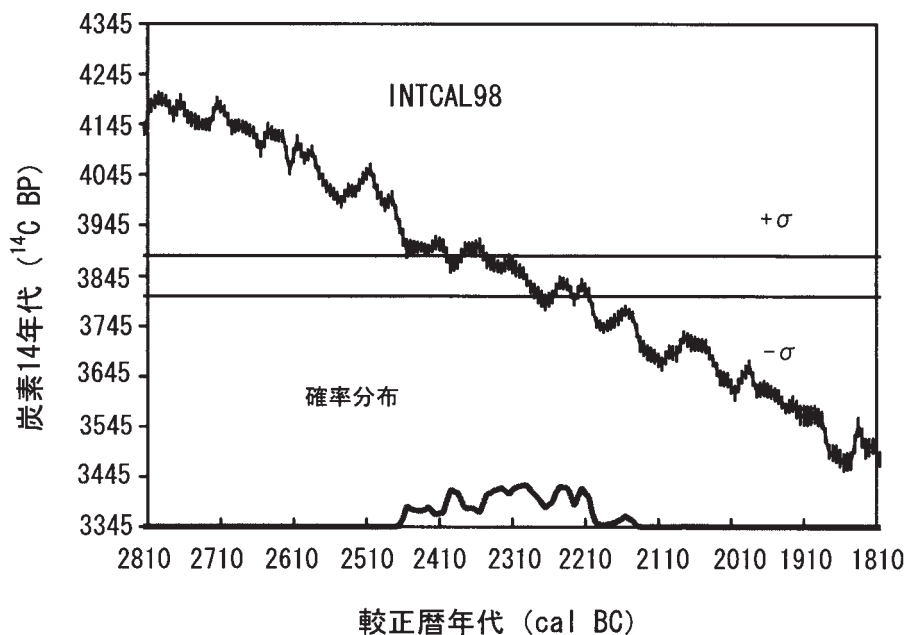


AOMB17 資料AAA処理前



AOMB17 資料AAA処理前

AOMB-17a 3845 ± 40 (1σ) 14C BP



解析結果

t_{mediar}	=	2310 cal BC
95% range		2455 cal BC ~ 2195 cal BC (95.1%)

第4節 放射性炭素年代測定

檜館遺跡放射性炭素年代測定

No.1409
 地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の概観

未補正14C年代 (BP) : (同位体分別未補正) 14C年代 "measured radiocarbon age"
 試料の 14C / 12C 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前 (BP) を計算した年代。

14C年代 (BP) : (同位体分別補正) 14C年代 "conventional radiocarbon age"
 試料の炭素安定同位体比 (13C / 12C) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、14C / 12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
 試料の 13C 値を 25 (‰) に標準化することによって得られる年代値である。
 (Stuiver, M. and Polach, H.A. (1977) Discussion Reporting of 14C data. Radiocarbon, 19 を参照のこと)
 暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

13C (permil) : 試料の測定 14C / 12C 比を補正するための 13C / 12C 比。
 この安定同位体比は、下式のように標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表現する。

$$13C (‰) = \frac{(13C / 12C)_{\text{試料}} - (13C / 12C)_{\text{標準}}}{(13C / 12C)_{\text{標準}}} \times 1000$$

 ここで、13C / 12C (標準) = 0.0112372 である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンプルの 14C 年代と 14C 年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース ("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al., 1998, Radiocarbon 40(3)) による 19000 yBP までの換算が可能となった。

*但し、10000 yBP 以前のデータはまだ不完全であり、今後改善される可能性が高いので、補正前のデータの保留を推奨します。
 *The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talamo and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results.

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析
Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる -線計数法

処理 情報 その他 : 試料の前処理、調整などの情報
 前処理: acid-alkali-acid : 酸・アルカリ・酸洗浄
 acid washes : 酸洗浄
 acid etch : 酸によるエッチング
 none : 未処理

調整 その他
 Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理
 Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出
 Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出
 Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.
 4965 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A. 33155

試料名	試料採取地	層位	種類
NARADATE 3	第67号土坑	底面	木炭
NARADATE 4	第8号竪穴住居跡	床面	木炭

C14年代測定結果

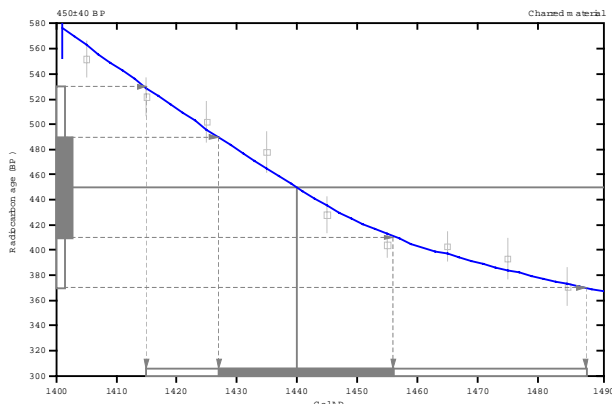
青森県埋蔵文化財調査センター 様 No.1409

試料データ	未補正14C年代(y BP) (measured radiocarbon age)	13C(permil)	14C年代(y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta- 186371	460 ± 40	-25.9	450 ± 40
試料名 (24019) NARADATE3			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material		acid/alkali/acid
Beta- 186372	1060 ± 40	-23.5	1080 ± 40
試料名 (24020) NARADATE4			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material		acid/alkali/acid

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic Acidの C14濃度の 95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

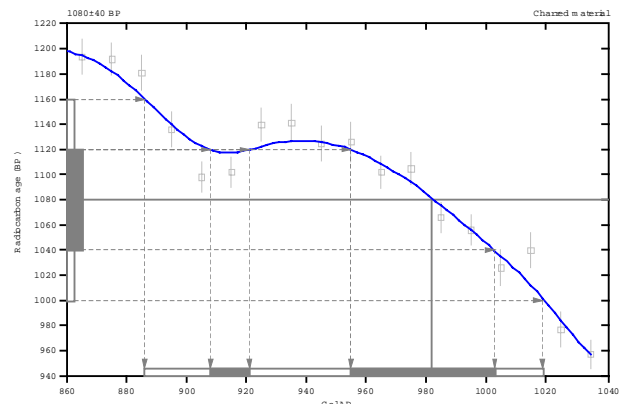
(Variables: C13/C12=-25.9 ‰, m.u.l.=1)
 Laboratory number: Beta-186371
 Conventional radiocarbon age: 450±40 BP
 2 Sigma a calibrated result: CalAD 1420 to 1490 (CalBP 540 to 460)
 (95% probability)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: CalAD 1440 (CalBP 510)
 1 Sigma a calibrated result: CalAD 1430 to 1460 (CalBP 520 to 490)
 (68% probability)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxiis-dii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talamo, A.S., Vogel, J.C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-23.5 ‰, m.u.l.=1)
 Laboratory number: Beta-186372
 Conventional radiocarbon age: 1080±40 BP
 2 Sigma a calibrated result: CalAD 890 to 1020 (CalBP 1060 to 930)
 (95% probability)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: CalAD 980 (CalBP 970)
 1 Sigma a calibrated result: CalAD 910 to 920 (CalBP 1040 to 1030) and
 CalAD 960 to 1000 (CalBP 1000 to 950)
 (68% probability)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxiis-dii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talamo, A.S., Vogel, J.C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

第4章 まとめ

櫓館遺跡は、新井田川南岸の標高約31～35mの段丘に立地している。2次にわたる発掘調査対象は、段丘の突端部と河川に面した低地部の約9,300㎡である。

1次調査について

1次調査では、雑草木に覆われた館跡の現状地形の把握と、館の範囲外とされる低地部を主体に発掘調査を行った。検出された遺構は、縄文時代早期の落とし穴、縄文時代前期の土器捨て場、縄文時代後期と弥生時代前期・後期、奈良時代の竪穴住居跡、これらいずれかの時期に属する土坑などである。また、弥生時代前期と後期の遺物も良好な状態で包含されており、植物珪酸体分析から、弥生時代前期の砂沢式期に水田稲作が行われていたことが推定されている。このように各時代の人々が河岸低地部に進出し、新井田川を利用した活動的な営みが看取される。(青埋文報第342集櫓館遺跡参照)

2次調査について

これまで、三重の壕跡が巡ることで周知された館跡であるが、文献資料に名前は無く、『南部諸城の研究』および『青森県の中世城館』に記されている「-根城南部氏の家臣、櫓館左衛門の居館-」も伝承にすぎない。今回の調査は館跡の本体とはいえ縁辺の一部だけであり、館の構造や構築および機能時期については不明な点が多い。

館の立地と構成

中世城館の多くが、河川や街道に沿って築かれていることでは本館跡も例外ではなく、河岸段丘のなかでも眺望が効き、より急崖な地形を用地として選定している。段丘の北側と西側は新井田川に面した55度にもおよぶ急崖であり、さらに東側の斜面に壕を築き、地続きの南側の尾根も東西に分断することで段丘突端を隔離した空間につくり変えている。尾根を分断した痕跡は僅かな窪地として確認され、『南部諸城の研究』では二つの郭で構成されているとしているが、窪地よりさらに南側は緩傾斜地で、地形の状況だけでは二郭構成は断言できず、単郭の可能性も否定できないものの、地形的にみた郭配置は、佐々木が分けたA-2タイプ(佐々木：2002)からはずれない。自然の要害を利用した、単純な郭構成からなる山城型の館といえる。

壕・通路・門について

県内に多重壕を有するといわれる館跡は多く、発掘調査により複数の壕跡が検出される例もあるが、その多くは二重壕(同時に存在し機能した壕)であり、三重の壕跡が築かれるものは少ない。発掘調査された内では階上町小沢館跡、五戸町(旧倉石村)中市館跡がある。本館跡を含め、これら三重の壕の状態をみると、壕が館を全周することはなく、部分的な普請であること、また、地形的に河川に面して壕が開けている点で共通する。

小沢館跡の場合、三重の壕は構築から廃絶まで同時存在と考えられている。本館跡では、第2～4号壕跡の構築が同時であったかは確証にないが、壕の形態が同じであることと、自然埋没の状況(第4号壕跡は掘り返し前の状態)が同じであることから、3条が同時の構築で同時に埋没しているものと捉えている。

しかし、各壕の最終的な廃絶と機能には時間差があると考えられ、これには第1号門跡の存在が関わる。第1号門跡が壕の間に位置するのは一見して不自然であるが、門が機能した時点で、第2・3

号壕跡がほぼ埋まりきり、壕本来の機能を喪失していたとすればこの点は解消される。

つまり、3条の壕は埋まりきる直前までは同等な状態にあり、第2・3号壕跡はそのまま完全に自然埋没するが、第4号壕跡は機能回復のため掘り返され、これに付随して第1号門跡が作られたと考えられ、この時点では第2・3号壕跡は窪地の状態にあり、埋没土の上と第4号壕跡北側がそのまま通路として使用されたと思われる。その後、第4号壕跡の埋め戻しに付随して第1号門跡も破壊され、その際の排土を埋没過程にある第3号壕跡の北側に廃棄したと解釈でき、第1号門跡が機能した時点では、門の東側は階段状の窪地が残る斜面地であったと考えられ、館の最終段階では1条の壕が巡る景観だったと思われる。

このことを、壕の自然埋没と考え合わせると、本館跡の壕は防御区画を機能目的として築かれたものの、その後放置されたことが伺われる。普請施設の整備が館主の指揮下で行われるものであれば、壕は構築後に何の措置も取られない状態にあったもので、第1号門跡が作られ第4号壕跡が機能を回復するまで、一時期の間、館主不在であった可能性がある。

三重の壕をもつ館として構築され、その後一旦廃城となり、壕跡は通路として使用される。再度館として機能する際に、壕跡は一部改変されながらも通路としての使用が続けられたものと思われる。これらの通路については、第2章6節に記述した経路が考えられるが、単に館内への出入りだけなのか、河川交通を用いた他の要因があるものか今後の課題である。

館の年代

各壕跡の出土遺物をみると、第2号壕跡の上位堆積層から大窯～期に比定される遺物が出土している。陶磁器の年代から16世紀中葉にはほぼ埋まっており、それ以前に機能を停止している。第3号壕跡からは時期を探れる遺物の出土はないが、第2号壕跡と連動していたと思われ廃絶時期も同じと捉えている。第4号壕跡からは、近世の陶磁器のほか大窯～期および肥前～期に比定される陶磁器が出土しており、壕の廃絶は16世紀中葉以降、または16世紀末～17世紀初頭にかけてと考えられる。近世陶磁器は盛土層中のもので、後世の地形改変による混入と捉えている。また、平場内の遺構出土遺物をみると、第1号竪穴建物跡の埋め土から大窯～期の陶磁器が出土していることから、16世紀中葉に平場内が整理されているものと考えられる。

狭小な調査区で僅かな遺物から推論すれば、館跡は第1号竪穴建物跡出土遺物から16世紀前葉以前に構築され、第2号壕跡出土遺物から16世紀中葉以前に一旦機能を停止している。16世紀中葉以降に再度館として機能し、第4号壕跡出土遺物と第1号門跡廃棄から16世紀末～17世紀初頭に廃城しているものと考えられる。本調査では、廃城の時期が天正20年の奥羽再仕置の年代とほぼ符合するが、本館のような小規模城館までその影響にあったものか確証にない。

近世の様相

近世の陶磁器類は、破片数では中世の陶磁器類を上回る量が出土している。時期は近世全期にわたり、その内でも肥前～期のものが主体を占める。時期により産地や器種構成は変化するが、特定器種への偏重はみられない。近世期の遺構は明確に把握できないものの、このような陶磁器の様相から、館は、管理集約的機能を失った17世紀初頭以降に無人と化したわけではなく、居住地として継続されている。破却令後の根城跡でも南部氏が遠野移転前まで城内に居住していたことから、本館跡もそれに同様な状態であったものと考えられる。

(小田川・平山)

引用参考文献

- 青森県教育委員会 1983 『青森県の中世城館』 青森県埋蔵文化財調査報告書
- 青森県教育委員会 1984 『弥栄平(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第81集
- 青森県教育委員会 1984 『葦窪遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第84集
- 青森県教育委員会 1984 『牛ヶ沢(3)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第86集
- 青森県教育委員会 1986 『今津遺跡・間沢遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第95集
- 青森県教育委員会 1986 『沖附(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
- 青森県教育委員会 1996 『洞内城跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第196集
- 青森県教育委員会 1997 『小沢館跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第220集
- 青森県教育委員会 2003 『櫛館遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第342集
- 八戸市教育委員会 1987 『丹後谷地遺跡』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集
- 八戸市教育委員会 1991 『風張(1)遺跡』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集
- 八戸市教育委員会 1993 『根城 - 本丸の発掘調査 -』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第54集
- 八戸市教育委員会 1997 『新井田古館遺跡』 土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書
八戸市埋蔵文化財調査報告書第70集
- 八戸市教育委員会 1998 『八戸城跡』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第76集
- 八戸市教育委員会 2002 『新井田古館遺跡』 土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書
八戸市埋蔵文化財調査報告書第94集
- 青森市教育委員会 1996～2003 『小牧野遺跡発掘調査報告書 ~』
青森市埋蔵文化財調査報告書第30・35・40・45・50・55・60・70集
- 青森市蛭沢遺跡発掘調査団 1979 『蛭沢遺跡発掘調査報告書』
- 青森県 2003 『青森県史 資料編 考古 4 中世・近世』 青森県史編さん考古部会
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 1999 『大鳥 遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第290集
- 鹿角市教育委員会 1981 『鹿角市新斗米館跡第 次発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料16
- 沼館 愛三 1977 『南部諸城の研究』 青森県文化財保護協会
- 山内 清男 1979 『日本先史土器の縄文』 先史考古学会
- 本間 宏 1987 『縄文時代後期初頭土器群の研究(1)』 『よねしろ考古』 第3号
よねしろ考古学研究会
- 本間 宏 1988 『縄文時代後期初頭土器群の研究(2)』 『よねしろ考古』 第4号
よねしろ考古学研究会
- 成田 滋彦 1989 『入江・十腰内式土器様式』 『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』 小学館
- 栗村 知弘 1989 『天正期の根城 - 破却(城わり)の実態について』 『八戸市博物館研究紀要第5号』
八戸市博物館
- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧』 兵庫埋蔵銭調査会
- 小笠原善範 1997 『縄文時代後期以前の石刀・石剣類について』 『八戸市博物館研究紀要第12号』
八戸市博物館
- 嶋谷 和彦 1998 『中世の無文銭とその成分組成』 『季刊考古学』 第62号 雄山閣
- 本澤 慎輔 1998 『東北地方に分布する鋳写しビタ銭について』 『紀要』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 鈴木 公雄 1999 『出土銭貨の研究』 東京大学出版会
- 平山 明寿 1999 『青森県の出土貨幣』 『東北地方の中世出土貨幣』
東北中世考古学会第5回研究集会資料
- 九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会
- 永井久美男他 2000 『中世の出土模鋳銭』 東北中世考古学会第6回研究集会資料
- 鈴木 克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』 雄山閣
- 東北中世考古学編 2001 『中世の出土模鋳銭』 東北中世考古学叢集 1 高志書院
- 工藤 清泰 2002 『出土銭貨研究の地域的現状北海道・東北地方』 『季刊考古学』 第78号 雄山閣
- 佐々木浩一 2002 『扇の要 - 東北地方北部における中世城館の曲輪配置 -』 『海と考古学とロマン』
市川金丸先生古稀記念献呈論文集
- 永井久美男 2002 『出土銭貨調査の課題』 『季刊考古学』 第78号 雄山閣
- 平山 明寿 2002 『銭を納めるところ』 『青森県考古学会30周年記念論集』 青森県考古学第13号
- 海峽土器編年研究会編 2003 『東北・北海道の十腰内 式再検討』 海峽土器編年研究会
- 東北中世考古学編 2003 『遺跡と景観』 高志書院
- 嶋谷 和彦 2003 『模鋳銭の生産と普及』 『戦国時代の考古学』 高志書院
- 橋口 定志 2003 『埋納銭をめぐる諸問題』 『戦国時代の考古学』 高志書院
- 本澤 慎輔 2004 『東北地方における無文銭の様相』 『中近世移行期の無文銭』
第11回出土銭貨研究会資料

出土遺物観察表

壕跡出土土器

図番号	遺物番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	分類	備考
10	1	第2号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	波状口縁・ボタン状貼付・指頭押圧・R L		細砂	-2	
10	2	第2号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	波状口縁・長楕円形文・L R		細砂	-2	口端部平坦
10	3	第2号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	口唇部突起貼付・コ状文・L R 充填		砂・石英	-2	口端部平坦
10	4	第2号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	コ状文・L R 充填	ミガキ	砂・石英	-2	口端部平坦
10	5	第2号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	長方形文・楕円形文・R L・磨消	ミガキ	砂多・金雲母	-2	口端部平坦
10	6	第2号壕跡	覆土	壺形	口縁部	無文・突起剥落	ミガキ	細砂	-2	
10	7	第2号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	折り返し・地文縄文・曲線文・L R	ミガキ	細砂	-2	
10	8	第2号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	地文 L		砂・金雲母	-4	
10	9	第2号壕跡	覆土	深鉢形	頸部	三角形文・R L		粗砂	-2	
10	10	第2号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	曲線文 or 弧状文・L ?		粗砂	-2	
10	11	第2号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	円形文・方形文	ナデ	砂多	-3	
10	12	第2号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	R 単軸絡糸体第5類?		砂多	-4	
10	13	第2号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	L R		砂・酸化鉄	-4	
10	14	第2号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	縦位コ状文・L R 充填		粗砂	-2	
10	15	第2号壕跡	覆土	壺形	胴部	コ状文・区画隆帯	ミガキ	粗砂	-2	
10	16	第2号壕跡	覆土	壺形	胴部	方形文?指頭圧痕・把手剥落	ミガキ	細砂	-2	
10	17	第2号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	R 多線L R		砂・繊維	-2	口端内傾
10	18	第2号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	R 単軸絡糸体第1類	条痕	繊維	-2	
11	1	第3号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	口唇L R 磨消・幅広の無文帯		粗砂	-2	
11	2	第3号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	弧状文?・隆帯上指頭圧痕・爪形刺突		粗砂・酸化鉄	-2	口端平坦で外傾
11	3	第3号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	無文 or 磨消・横位沈線	ミガキ	砂少	-2	
11	4	第3号壕跡	覆土	壺形	口縁部	無文・区画隆帯		砂多・金雲母	-2	
11	5	第3号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	L R		粗砂	-4	
11	6	第3号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	折り返し・R	ナデ	砂多	-4	
11	7	第3号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	折り返し・L R		砂多	-4	
11	8	第3号壕跡	覆土	壺形	口縁部	無文	ミガキ	砂多	-2	
11	9	第3号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	ボタン状突起・方形文・単軸絡糸体第1類		細砂	-2	
11	10	第3号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	コ状文・L R 磨消		砂	-2	
11	11	第3号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	円 or 楕円形文・指頭圧痕		粗砂・酸化鉄	-2	
11	12	第3号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	コ状文・地文無節 or 絡糸体		粗砂	-2	
11	13	第3号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	渦巻文		砂・石英	-3	
11	14	第3号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	単軸絡糸体第5類		砂・針状物	-4	
11	15	第3号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	単軸絡糸体第5類		砂	-4	
11	16	第3号壕跡	覆土	壺形	胴部	コ状文に楕円形文 or 二重楕円形文	ミガキ	砂	-2	
11	17	第3号壕跡	覆土	壺形	胴部	楕円形文	ミガキ	砂・石英	-2	
11	18	第3号壕跡	覆土	壺形	胴部	方形文・L R	ミガキ	砂	-2	
11	19	第3号壕跡	覆土	壺形	胴下半	突帯状隆線	ミガキ	砂	-2	
11	20	第3号壕跡	覆土	鉢形?	底部	無文・ミガキ		細砂多	-2	
11	21	第3号壕跡	覆土	深鉢形	胴下半	L R		繊維	-2	
12	1	第4号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	波状・区画隆帯・三角形文・R L 磨消	ミガキ	砂・金雲母少	-2	
12	2	第4号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	波状・ボタン状突起・刺突・R L 充填	ミガキ	砂・石英	-2	口端平坦で内傾
12	3	第4号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	波状・区画隆帯・長楕円形文・R L	ミガキ	砂	-2	口端平坦で内傾
12	4	第4号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	折り返し・方形文?磨消・L R・	ミガキ	砂・石英	-2	口端平坦
12	5	第4号壕跡	覆土	鉢形?	口縁部	横位沈線・無文	ミガキ	砂	-2	
12	6	第4号壕跡	覆土	壺形	口縁部	横位沈線・無文	ミガキ	砂	-2	
12	7	第4号壕跡	覆土	鉢形	口縁部	無文・長楕円形文	ミガキ	細砂	-2	
12	8	第4号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	単軸絡糸体 R ?		粗砂	-4	
12	9	第4号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	楕円形文		砂・酸化鉄	-2	
12	10	第4号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	コ状文・L R		粗砂	-2	
12	11	第4号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	R L	縦位ミガキ	砂	-4	
12	12	第4号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	R 単軸絡糸体第1類		砂・酸化鉄	-4	
12	13	第4号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	櫛歯状沈線		砂	-4	
12	14	第4号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	櫛歯状沈線		砂・石英	-4	
12	15	第4号壕跡	覆土	深鉢形	底部	L R	ナデ	砂	-4	
12	28	第4号壕跡	覆土	土製品		無文・ドーナツ状		細砂		(38mm)・(25mm)・9mm
14	1	第5号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	三角形文? or 弧状文・L R		砂	-1	
14	2	第5号壕跡	覆土	深鉢形	口縁部	波状・ボタン状貼付刺突・R L	ミガキ	砂	-2	
14	3	第5号壕跡	覆土	鉢形	口縁部	横位区画隆帯(線)・長方形文	ミガキ	砂・石英	-3	
14	4	第5号壕跡	覆土	深鉢形	胴部	R 単軸絡糸体第1類・結節回転		砂	-4	
14	5	第5号壕跡	覆土	壺形?	胴部	弧状文		粗砂	-3	
14	6	第5号壕跡	覆土	壺形	胴部	渦巻文		粗砂	-3	
14	7	第5号壕跡	覆土	壺形	胴部	入り組み文	ナデ・ミガキ	細砂・石英	-3	
14	8	第5号壕跡	覆土	蓋		長方形文・R L・穿孔	ナデ	砂		

竪穴建物跡出土土器

図番号	遺物番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	分類	備考
23	10	第1号竪穴建物跡	覆土	深鉢形	口縁部	L R		繊維		
23	11	第1号竪穴建物跡	覆土	深鉢形	胴部	L R・刺突		砂・石英	-4	
23	12	第1号竪穴建物跡	覆土	深鉢形	胴部	方形文・R 単軸絡糸体第1類・結節	ミガキ	砂	-2	
23	13	第1号竪穴建物跡	覆土	深鉢形	胴部	横位沈線・R L		砂・酸化鉄	-3	
23	14	第1号竪穴建物跡	覆土	鉢形	胴部	三角形文?・ミガキ		砂	-3	赤彩
23	15	第1号竪穴建物跡	覆土	壺形	底部	横位沈線		細砂	-3	
23	16	第1号竪穴建物跡	覆土	深鉢形	胴部	R 単軸絡糸体第1類・結節		砂・針状物	-4	

竪穴住居跡出土土器

図番号	遺物番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	分類	備考
25	1	第8号竪穴住居跡	カマド	甕	口縁部	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
25	2	第8号竪穴住居跡	カマド	甕	口縁部	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
25	3	第8号竪穴住居跡	カマド	甕	口縁部	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
25	4	第8号竪穴住居跡	カマド	甕	口縁部	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
25	5	第8号竪穴住居跡	カマド	甕	胴部	ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
25	6	第8号竪穴住居跡	カマド	甕	底部	ヘラケズリ		粗砂		
25	8	第8号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	口縁部	L・一部交差施文	指頭圧痕	砂多	-4	9 同一個体・輪積痕
25	9	第8号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	口縁部	L・一部交差施文	指頭圧痕	砂多	-4	
25	10	第8号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	口縁部	折り返し・L R		砂	-4	
25	11	第8号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	口縁部	R 単軸絡糸体第5類		砂・金雲母	-4	
25	12	第8号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	胴上半	コ状文・R L 磨消		砂・石英	-2	

櫛館遺跡

図番号	遺物番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	分類	備考
25	13	第8号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	胴下半	R単軸絡条体第1類		粗砂・金雲母	-4	
27	1	第9号竪穴住居跡	カマド	概	略完形	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		外底面ヘラケズリ
27	2	第9号竪穴住居跡	カマド	概	略完形	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
27	3	第9号竪穴住居跡	カマド	概	口縁胴部	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
27	4	第9号竪穴住居跡	カマド	概	口縁胴部	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
27	5	第9号竪穴住居跡	床	概	口縁胴部	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
27	6	第9号竪穴住居跡	床	概	口縁胴部	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
27	7	第9号竪穴住居跡	床	概	口縁胴部	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
27	8	第9号竪穴住居跡	床	概	口縁部	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
27	9	第9号竪穴住居跡	床	概	底部	ヘラケズリ	ナデ	粗砂		外底面木葉痕
27	10	第9号竪穴住居跡	床	概	口縁胴部	ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
27	11	第9号竪穴住居跡	床	概	口縁部	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
27	12	第9号竪穴住居跡	覆土	概	口縁部	ヘラケズリ		粗砂		
27	13	第9号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	胴部	L R		砂・繊維		
27	14	第9号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	胴部	R L		砂・繊維		
27	15	第9号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	口縁部	R単軸絡条体第5類		砂・金雲母	-4	
27	16	第9号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	胴部	R単軸絡条体第5類		砂・石英	-4	
27	17	第9号竪穴住居跡	覆土	壺形	胴部	弧状文 or 楕円形文		砂多	-3	
29	1	第10号竪穴住居跡	覆土	概	口縁部	ナデ	ユビナデ	粗砂		
29	2	第10号竪穴住居跡	覆土	概	胴上半	ナデ	ナデ	粗砂		
29	3	第10号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	胴部	横位沈線・L R		砂	-2	
29	4	第10号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	胴部	0段多条 R L		砂	-4	
29	5	第10号竪穴住居跡	覆土	深鉢形	胴部	R単軸絡条体第5類		砂	-4	

土坑出土土器

図番号	遺物番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	分類	備考
37	1	第29号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	波状・三角形文・無文帯・方形区画文・コ状文・L R磨消	ミガキ	砂・金雲母	-2	
37	2	第29号土坑	覆土	深鉢形	胴部	方形区画文・コ状文・L R磨消	ミガキ	砂・金雲母	-2	1と同一個体
37	3	第29号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	L R	ミガキ	砂・酸化鉄	-4	口端平坦外傾
37	4	第29号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L	ミガキ	粗砂	-4	
37	5	第29号土坑	覆土	壺形	略完形	紐通し突起・長方形文・円形文		砂・金雲母	-5	切断土器・内外赤彩
37	6	第29号土坑	覆土	土器片円盤		沈線・0段多条 L R		砂		31mm x 34mm
37	8	第30号土坑	覆土	壺形?	胴部	曲線文?		粗砂・石英	-3?	
37	9	第31号土坑	覆土	深鉢形	胴部	貝殻押し引き	指頭圧痕	砂		
37	10	第31号土坑	覆土	深鉢形	胴部	楕円形文?・L R磨消		砂・石英	-2	
37	12	第35号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	R L R組縄		繊維		
37	13	第35号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	R L組縄・結節回転		繊維		
37	14	第35号土坑	覆土	深鉢形	胴部	単軸絡条体第5類		粗砂	-4	
37	15	第35号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R L組縄		粗砂・繊維		
37	16	第36号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	0段多条 L R	ミガキ	砂	-4	
37	17	第36号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R・沈線	ミガキ	砂	-4	
37	18	第36号土坑	覆土	深鉢形	胴部	沈線	ミガキ	砂	-3?	壺形土器?
37	19	第36号土坑	覆土	深鉢形	底部	無文	ミガキ	砂		
37	22	第37号土坑	覆土	壺形	口縁部	無文	ミガキ	砂		内外面赤彩
37	23	第38号土坑	覆土	深鉢形	胴部	沈線・R L充填		砂	-2	
37	24	第38号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R L		繊維	-4	
37	25	第39号土坑	覆土	鉢形	胴上半	L R・隆帯剥落痕	ナデ	粗砂	-4	
37	26	第39号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	折り返し・L	ミガキ	砂・金雲母	-4	口端平坦
37	27	第39号土坑	覆土	深鉢形	胴部	方形区画文・コ状文・R L・磨消	ミガキ	砂・金雲母		
37	28	第39号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R	ミガキ	砂・金雲母	-2	
37	29	第39号土坑	覆土	深鉢形	底部	無文・ミガキ	ミガキ	粗砂・石英	-4	
37	30	第39号土坑	覆土	壺形	胴部	区画隆帯(断面三角)	ミガキ	細砂	-2	
37	31	第39号土坑	覆土	壺形	胴部	楕円形文		砂	-2	
38	34	第40号土坑	覆土	深鉢形	胴部	弧状・曲線文・L磨消	ミガキ	砂・石英	-1	
38	35	第40号土坑	覆土	壺形	胴上半	紐通し突起・長方形文	ケズリ	砂	-5	切断土器
38	36	第40号土坑	覆土	壺形	底部	無文	ナデ・ケズリ	粗砂・酸化鉄	-5	切断土器
38	37	第40号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	折り返し・L R	ミガキ	砂・石英	-2	
38	38	第40号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L	ナデ	粗砂	-4	
38	39	第40号土坑	覆土	深鉢形	胴部	方形区画文・コ状文・L・磨消	ミガキ	砂・石英	-2	
38	40	第40号土坑	覆土	土器片円盤		コ状文・L R		砂	-2	34mm x 36mm
38	42	第41号土坑	覆土	壺形	胴底部	ケズリ・台付き・紐通し孔	ナデ	砂		
38	43	第41号土坑	覆土	壺形	胴部	区画隆帯・方形・コ状文	ミガキ	砂	-2	45と同一個体・赤彩
38	44	第41号土坑	覆土	深鉢形	胴部	R単軸絡条体第5類	ミガキ	粗砂	-4	
38	45	第41号土坑	覆土	壺形	胴部	方形・コ状文	ミガキ	砂	-2	43と同一個体・赤彩
38	46	第41号土坑	覆土	深鉢形	胴部	R L	ミガキ	砂・石英	-4	
38	47	第41号土坑	覆土	深鉢形	胴部	単軸絡条体第1類・ミガキ	ミガキ	砂・金雲母	-4	
38	48	第43号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	L R		繊維		
38	49	第43号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	R単軸絡条体第1類	ミガキ	砂・酸化鉄	-4	
38	50	第43号土坑	覆土	壺形	底部	横位沈線		砂	-2	
38	51	第43号土坑	覆土	深鉢形	胴部	R L R		繊維		
38	52	第45号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R		砂・繊維		
38	53	第45号土坑	覆土	深鉢形	胴部	R L	ミガキ	砂・酸化鉄	-4	
38	54	第48号土坑	覆土	深鉢形	胴部	沈線・L R		砂	-2	
38	55	第49号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	波状・無文帯・沈線	ミガキ	砂	-2	
38	56	第49号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	0段多条 R L		砂多	-4	
38	57	第49号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	折り返し・L R	ミガキ	砂・金雲母	-4	
38	58	第49号土坑	覆土	深鉢形	胴部	地文 R L・曲線文		細砂	-1	
38	59	第49号土坑	覆土	壺形	胴部	区画隆帯・方形・コ状文	ミガキ	砂・石英	-2	
38	60	第49号土坑	覆土	深鉢形	胴部	ボタン状突起・横位沈線・R L	ミガキ	砂	-3	
38	61	第49号土坑	覆土	深鉢形	底部	ミガキ	ミガキ	粗砂・金雲母		
38	62	第50号土坑	覆土	壺形	口縁部	無文	ミガキ	砂	-3?	外面赤彩
38	63	第50号土坑	覆土	壺形	胴底部	L R・ミガキ	ミガキ	砂・酸化鉄	-2?	
38	64	第50号土坑	覆土	深鉢形	胴部	沈線・L R磨消	ミガキ	砂	-2	
39	66	第51号土坑	覆土	深鉢形	胴部	逆U字状?	ミガキ	砂	-2	
39	67	第51号土坑	覆土	深鉢形	胴部	櫛歯状沈線		砂	-4	
39	68	第52号土坑	覆土	鉢形	口胴下	波状・三角形文・長楕円形文・方形文・L R充填・紐通し突起	ミガキ	砂	-2	
39	69	第52号土坑	覆土	鉢形	口縁部	L R充填	ミガキ	砂	-2	68と同一個体
39	70	第52号土坑	覆土	深鉢形	胴部	R L		繊維		

観察表

図番号	遺物番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	分類	備考
39	71	第52号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R	ミガキ	砂・酸化鉄	-4	
39	72	第52号土坑	覆土	深鉢形	胴部	楕円形文・曲線文・L R	ミガキ	砂・酸化鉄	-2	
39	73	第52号土坑	覆土	土器片円盤		無文		砂・金雲母		35mm × 36mm
39	75	第60号土坑	底面	深鉢形	胴部	L R		繊維		
39	82	第61号土坑	覆土	深鉢形	胴部	R L R		繊維・針状物		
39	83	第61号土坑	覆土	深鉢形	胴下半	R L R		繊維		
39	84	第61号土坑	覆土	深鉢形	胴部	沈線・L R	ミガキ	砂	-2	
39	85	第61号土坑	底面	深鉢形	胴部	三角形文・R L		砂・石英	-1	
39	86	第61号土坑	覆土	深鉢形	胴部	曲線文・R L		砂	-2	
39	88	第62号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	R L		繊維・酸化鉄		
39	89	第62号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	0段多条L R		砂・繊維		
39	90	第62号土坑	覆土	壺形	口縁部	楕円形文	ミガキ	細砂	-2	
39	91	第62号土坑	覆土	鉢形	口縁部	沈線・ミガキ	ミガキ	砂・金雲母	-3	
39	92	第62号土坑	覆土	深鉢形	胴部	曲線文		砂	-1	
39	93	第62号土坑	覆土	深鉢形	胴部	縦位沈線	ミガキ	砂・石英	-2	
39	94	第62号土坑	覆土	深鉢形	胴下半	L R		砂・繊維		
39	95	第62号土坑	覆土	甌	底部	ヘラケズリ・ヘラナデ	ナデ	粗砂		外底面木葉痕
39	97	第63号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R L		砂・繊維		
39	98	第63号土坑	覆土	壺形	口縁部	無文・ミガキ	ミガキ	砂	-2	赤彩
39	99	第63号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L・沈線		細砂	-4	
39	100	第64・65号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	波状・長楕円形文		砂	-2	
39	101	第64・65号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	R単軸絡糸体第5類		砂	-4	口端内傾
39	102	第64・65号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	0段多条L R		砂	-4	
39	103	第64・65号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R 交差施文・竹管刺突		砂	-2	
39	104	第64・65号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	L R		細砂	-4	
39	105	第64・65号土坑	覆土	深鉢形	胴部	地文R L・曲線文	ナデ	細砂	-1	
39	106	第64・65号土坑	覆土	壺形?	胴部	曲線文	ミガキ	砂・石英	-3	
39	107	第64・65号土坑	覆土	壺形?	胴部	曲線文	ミガキ・ナデ	細砂	-3?	
39	108	第64・65号土坑	覆土	壺形	胴部	区画沈線		細砂	-2	
39	109	第67号土坑	覆土	深鉢形	胴部	R L		繊維・酸化鉄		
39	110	第69号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	沈線		砂	-2	
39	111	第69号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R	ミガキ	砂	-4	
39	112	第69号土坑	底面	深鉢形	口縁部	隆帯・三角形区画文・S字状文・R L 磨消	ミガキ	細砂	-1	
40	114	第73号土坑	底面	深鉢形	口縁部	L	ミガキ	粗砂多	-4	
40	115	第73号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	L R		砂	-4	小型
40	116	第74号土坑	覆土	深鉢形	胴部	0段多条L R		砂	-4	
40	117	第74号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R		砂・繊維	-4	
40	118	第74号土坑	覆土	土器片円盤		R単軸絡糸体		砂	-4	30mm × 32mm
40	125	第75号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	波頂部竹管刺突・隆帯・ボタン状貼付刺突・L R	ミガキ	砂・石英	-2	
40	126	第75号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	口縁隆帯・L R・沈線	ミガキ	細砂	-2	
40	127	第75号土坑	覆土	鉢形?	口縁部	コ状文		細砂	-2	
40	128	第75号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	L R	ミガキ	砂	-4	
40	129	第75号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R		砂	-4	
40	130	第75号土坑	覆土	深鉢形	胴部	沈線・L R 磨消	ミガキ	砂・石英	-2	
40	131	第80号土坑	覆土	壺形	口縁部	隆帯・長方形文		砂・石英	-2	赤彩
40	132	第80号土坑	覆土	深鉢形	胴部	0段多条L R		砂・金雲母	-4	
40	133	第80号土坑	覆土	深鉢形	胴部	無文・ミガキ		砂・酸化鉄	-4	
40	134	第80号土坑	覆土	壺形	胴部	長楕円形・曲線文・把手剥落痕	ミガキ	砂	-2	
40	135	第80号土坑	覆土	壺形	胴部	長楕円形・曲線文	ミガキ	砂・酸化鉄	-3	赤彩
40	136	第80号土坑	覆土	ミニチュア	口縁部	無文	ケズリ	粗砂		
40	137	第80号土坑	覆土	完形	指頭圧痕			細砂		上げ底
40	138	第80号土坑	覆土	ミニチュア	胴底部	指頭圧痕		砂・酸化鉄		上げ底
40	142	第81号土坑	覆土	深鉢形	胴部	R L		砂・繊維		
40	143	第81号土坑	覆土	深鉢形	胴部	コ状文・円形文		砂・金雲母	-2	
40	144	第81号土坑	覆土	壺形	胴部	長楕円形		砂	-2	
41	145	第83号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	波状・三角形文・刺突・隆帯上R L	ミガキ	細砂	-2	
41	146	第83号土坑	覆土	壺形	口縁部	沈線	ミガキ	砂	-3?	赤彩
41	147	第83号土坑	覆土	深鉢形	胴部	R単軸絡糸体第5類		砂・金雲母	-4	
41	148	第83号土坑	覆土	壺形	胴部	曲線文・3本沈線		砂	-3	
41	149	第83号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R	ミガキ	砂・金雲母少	-4	
41	150	第83号土坑	覆土	深鉢形	胴部	0段多条L R		砂・繊維		
41	151	第83号土坑	覆土	甌	口縁部	ヨコナデ・ヘラケズリ	ナデ	粗砂		
41	152	第84号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	口縁隆帯・0段多条L R・沈線	ミガキ	砂・金雲母少	-2	
41	153	第84号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	口縁隆帯・0段多条L R・沈線	ミガキ	砂・金雲母少	-2	152と同一個体
41	154	第84号土坑	覆土	土器片円盤		152・153と同一個体		砂・金雲母少	-2	37mm × 40mm
41	155	第84号土坑	覆土	深鉢形	胴部	L R		砂多・繊維少		
41	156	第84号土坑	覆土	深鉢形	胴部	R L R 組縄		砂・繊維多		
41	157	第84号土坑	覆土	壺形	胴下半	沈線	ミガキ	砂多	-2	
41	158	第84号土坑	覆土	壺形	胴下半	方形・楕円形文・R L・動物意匠貼付	ミガキ	細砂	-2	
41	160	柱穴	覆土	深鉢形	口縁部	R L R		砂・繊維多		
41	161	柱穴	覆土	深鉢形	胴部	0段多条L R		砂・繊維多		
41	162	柱穴	覆土	深鉢形	胴部	L R		繊維多		
41	163	柱穴	覆土	深鉢形	口縁部	L R		砂	-4	
41	164	柱穴	覆土	深鉢形	口縁部	L R		砂	-4	
41	165	柱穴	覆土	深鉢形	胴部	曲線文		砂	-2	
41	166	柱穴	覆土	壺形?	胴部	長方形文・円形文		砂	-2	赤彩・被熱
41	167	柱穴	覆土	壺形	頸部	無文・隆帯		砂	-2	
41	168	柱穴	覆土	深鉢形	胴部	R L		砂	-4	
41	169	柱穴	覆土	深鉢形	胴部	R L		砂	-4	
41	170	柱穴	覆土	壺形	胴部	方形文・細通し突起剥落	ナデ	砂	-5	切断土器・赤彩痕
41	171	柱穴	覆土	壺形	胴部	長方形文	ナデ	砂	-5	切断土器
41	178	第1号集配石	検出面	壺形	口縁部	楕円形文・S字状文	ミガキ	砂・石英	-3	赤彩

遺構外出土土器

図番号	遺物番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	分類	備考
44	1	S - 15	層	深鉢形	底部	無文		砂多		
44	2	Q - 16	層	深鉢形	口縁部	L R L 組縄		繊維・酸化鉄		
44	3	R - 19	層	深鉢形	胴部	R L R 組縄		砂少・繊維少		

櫛館遺跡

図番号	遺物番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	分類	備考
44	4	T - 15	層	深鉢形	口縁部	R L・結節回転・補修孔		砂少・繊維		
44	5	Q - 18	層	深鉢形	口縁部	0段多条 L R		砂・繊維		
44	6	平場		深鉢形	口縁部	R L R組縄		砂・繊維多		口端内傾
44	7	Q - 12	層	深鉢形	口縁部	L R L組縄		砂少・繊維少		
44	8	T - 15	層	深鉢形	胴下半	R L		繊維・酸化鉄		
44	9	平場		深鉢形	胴下半	L R L組縄		砂・繊維		
44	10	Q - 18	層	深鉢形	底部	R L組縄		砂・繊維多		
44	11	Q - 12	層	深鉢形	底部	L R		砂・繊維多		
44	12	T - 12	層	深鉢形	口縁部	縄側面圧痕・隆帯・工具刺突	ナデ	細砂・石英		
44	13	R - 12	層	深鉢形	口縁部	波状・弧状沈線・竹管刺突		砂多	-2	
44	14	O - 21	層	深鉢形	口縁部	波状・楕円形文・L R充填	ミガキ	砂	-2	
44	15	S - 23	層	深鉢形	口縁部	口縁隆帯折り返し・山形沈線・L R	ミガキ	砂・石英	-2	
44	16	H - 18	層	深鉢形	口縁部	波状・竹管刺突・L R		砂・石英	-2	
44	17	T - 10	層	深鉢形	口縁部	波状・折り返し・三角形文・L	ミガキ	砂	-2	
44	18	R - 24	層	深鉢形	口縁部	隆帯・L R	ミガキ	砂・石英	-2	
44	19	表探		深鉢形	口縁部	口縁隆帯折り返し・長方形文・C字文・R L	ミガキ	砂・石英	-2	
44	20	平場法面		深鉢形	口縁部	楕円形文・三角形入り組み文?・R L磨消	ミガキ	細砂	-1	
44	21	Q - 12	層	深鉢形	口縁部	方形区画・コ状文・L R磨消	ミガキ	細砂	-2	
44	22	P - 15	層	深鉢形	口縁部	折り返し・沈線・R L充填?		砂	-2	
44	23	Q - 12	層	深鉢形	口縁部	口縁隆帯折り返し・L R	ミガキ	砂	-2	
44	24	表探		深鉢形	口縁部	口縁隆帯折り返し・L R	ミガキ	砂	-2	
44	25	平場		深鉢形	口縁部	沈線・L R		細砂	-2	口端平坦
44	26	R - 14	層	深鉢形	口縁部	折り返し・縦長方形文?・L	ミガキ	砂・針状物	-2	
44	27	R - 12	層	深鉢形	口縁部	細い沈線	ミガキ	砂	-2	
44	28	T - 15	層	深鉢形	口縁部	沈線・L		砂	-2	
44	29	T - 16	層	深鉢形	胴部	方形?コ状文?・R L・刺突	ミガキ	砂	-2	
44	30	S - 21	層	深鉢形	胴部	ボタン状貼付・刺突・方形文	ミガキ	砂	-2	
44	31	R - 12	層	深鉢形	胴部	長楕円形文・竹管刺突・L R	ミガキ	細砂	-2	
44	32	Q - 12	層	深鉢形	胴部	区画隆帯・長方形文・L R磨消	ミガキ	砂	-2	
44	33	O - 21	層	深鉢形	胴部	隆帯・楕円形文?・L	ミガキ	砂・石英	-2	
44	34	J - 30	層	深鉢形	胴部	楕円形文・L R	ミガキ	細砂	-2	
44	35	P - 26	層	深鉢形	胴部	隆帯上指頭圧痕・R L		砂	-2	
44	36	Q - 12	層	深鉢形	胴部	三角形文?入り組み文?・L R		砂・石英	-2	
44	37	O - 21	層	深鉢形	胴部	楕円形文・L R磨消	ミガキ	細砂・石英	-2	
44	38	R - 24	層	深鉢形	胴部	コ状文・L R	ミガキ	細砂	-2	
44	39	平場		深鉢形	胴部	楕円形文・L R磨消	ミガキ	細砂・石英	-2	
44	40	Q - 12	層	深鉢形	胴部	楕円形文・L R磨消	ミガキ	細砂・石英	-2	39と同一個体
44	41	Q - 20	層	深鉢形	胴部	三角形区画文・円形文・C字文・R L磨消	ミガキ	細砂	-1	
44	42	Q - 20	層	深鉢形	胴部	三角形区画文・円形文・C字文・R L磨消	ミガキ	細砂	-1	41と同一個体
45	43	表探		鉢形	口縁部	波状・無文・楕円形文		砂・石英	-3	
45	44	T - 10	層	鉢形	口縁部	楕円形文	ナデ	砂・酸化鉄	-3	
45	45	Q - 12	層	鉢形	口縁部	3本沈線楕円形文	ミガキ	細砂	-3	
45	46	Q - 12	層	鉢形	口縁部	口唇隆帯にR L・口端沈線		粗砂	-3	
45	47	R - 12	層	鉢形	頸部	沈線		砂	-3	
45	48	S - 12	層	壺形	胴部	楕円形文	ミガキ	砂	-3	
45	49	S - 19	層	壺形	胴部	S字状文	ミガキ	砂・石英	-3	
45	50	T - 12	層	壺形	胴部	楕円形文		砂	-3	
45	51	Q - 16	層	壺形	胴部	三角形文	ミガキ	砂・酸化鉄	-3	
45	52	P - 15	層	壺形	胴部	長楕円形文・三角形文?	ミガキ	砂	-3	
45	53	T - 12	層	壺形	胴部	無文・区画隆帯	ミガキ	砂	-2	
45	54	平場		壺形	胴部	無文・区画隆帯・楕円形文	ミガキ	細砂	-2	
45	55	Q - 12	層	壺形	胴部	弧状文		砂	-2	
45	56	P - 16	層	壺形	胴部	三角形文	ナデ	砂・酸化鉄	-3	
45	57	T - 14	層	壺形	胴部	隆帯	ミガキ	砂	-2	赤彩痕
45	58	R - 15	層	壺形	胴部	楕円形文・方形文?	ミガキ	細砂・金雲母	-2	
45	59	S - 12	層	壺形	胴部	弧状文	ミガキ	細砂	-3	
45	60	P - 26	層	壺形	胴部	沈線・波頭文?		砂・石英	-2	
45	61	Q - 20	層	壺形	胴部	区画隆帯・長方形文		粗砂	-2	
45	62	表探		壺形	胴部?	沈線	ミガキ	砂	-2	赤彩・底部?
45	63	平場		壺形	胴部	曲線文・紐通し突起		砂	-2	
45	64	不明		壺形	胴部	曲線文・紐通し突起	ミガキ	砂	-2	
45	65	平場		壺形	胴部	方形区画・紐通し突起	ナデ	砂・石英	-2	赤彩痕
45	66	S - 23	層	壺形	注口	曲線文?		砂	-2	
45	67	T - 10	層	壺形	底部	台付き		細砂	-2	
45	68	T - 14	層	壺形	胴部	区画隆帯・刺突		砂	-2	
45	69	P - 16	層	壺形	胴部	方形・楕円形文・R L	ミガキ	細砂	-2	動物意匠付と同一個体
45	70	T - 15	層	把手		刺突		砂・石英		
45	71	R - 15	層	把手		ミガキ		砂		
45	72	T - 15	層	壺形	胴部	曲線文・表面剥落		砂	-5	切断土器
45	73	T - 12	層	深鉢形	口縁部	折り返し・R単軸絡条体第1類	ミガキ	砂	-4	
45	74	不明		深鉢形	口縁部	折り返し・微隆帯・R L	ミガキ	砂・金雲母	-4	
45	75	T - 10	層	深鉢形	口縁部	幅広隆帯折り返し・0段多条 L R	ミガキ	粗砂	-4	
45	76	I - 21	層	深鉢形	口縁部	折り返し・L R	ミガキ	砂	-4	
45	77	平場		深鉢形	口縁部	L R		砂・金雲母	-4	
45	78	不明		深鉢形	口縁部	折り返し・微隆帯・R L		砂・金雲母	-4	74と同一個体
45	79	Q - 12	層	深鉢形	口縁部	L R		砂・酸化鉄	-4	口端ミガキ
45	80	Q - 12	層	深鉢形	口縁部	0段多条 L R		細砂	-4	
45	81	T - 15	層	深鉢形	口縁部	L		細砂	-4	
45	82	平場		深鉢形	口縁部	R単軸絡条体第5類	ミガキ	砂	-4	
45	83	T - 15	層	深鉢形	口縁部	R単軸絡条体第5類	ミガキ	砂	-4	
45	84	Q - 16	層	深鉢形	口縁部	L側面圧痕・L		砂	-4	
45	85	Q - 12	層	深鉢形	口縁部	R単軸絡条体第5類		砂・金雲母	-4	
45	86	表探		深鉢形	口縁部	L交差施文		砂	-4	
45	87	T - 10	層	深鉢形	口縁部	R単軸絡条体第5類		細砂	-4	
45	88	T - 10	層	深鉢形	胴部	無文・口端指頭圧痕		砂	-4	
45	89	R - 18	層	壺形	胴部	L R	ミガキ	粗砂	-4	
45	90	S - 11	層	深鉢形	胴部	0段多条 L R	ミガキ	砂	-4	
45	91	T - 10	層	深鉢形	胴部	櫛歯状沈線	ミガキ	砂	-4	

観察表

図番号	遺物番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	分類	備考
45	92	Q - 12	層	深鉢形	胴部	櫛歯状沈線	ミガキ	砂	-4	
45	93	表探		深鉢形	胴部	R単軸絡糸体第5類		細砂	-4	
45	94	Q - 19	層	深鉢形	胴部	R単軸絡糸体第1類	ナデ	粗砂	-4	
45	95	R - 12		深鉢形	胴部	R単軸絡糸体第5類		砂	-4	
45	96	T - 15	層	深鉢形	胴部	R単軸絡糸体第5類・結節		砂・酸化鉄	-4	
45	97	R - 12		壺形?	底部	無文・切り込み		砂・金雲母		
45	98	平場		小型	底部	無文	ケズリ	砂・石英		
45	99	S - 12	層	鉢形?	胴部	刻目文	ミガキ	砂		

縄文時代土製品

図番号	遺物番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	分類	備考
48	1	表探		土器片 円盤		L R		砂・石英		60mm x 63mm
48	2	平場		土器片 円盤		口縁部口端を残す・L R		砂・石英		36mm x 37mm
48	3	R - 15	層	土器片 円盤		L R		砂・石英		38mm x 38mm
48	4	T - 15	層	土器片 円盤		方形文・L R		砂		33mm x 34mm・四角形
48	5	S - 15	層	土器片 円盤		方形文・R L		砂多		32mm x 34mm
48	6	F - 20	層	土器片 円盤		弧状文		砂少		33mm x 33mm
48	7	T - 15	層	土器片 円盤		R単軸絡糸体第1類		砂		43mm x 44mm
48	8	P - 15	層	土器片 円盤		R単軸絡糸体第5類		砂・金雲母		33mm x 35mm・四角形
48	9	R - 19	層	土器片 円盤		底部片使用・木葉痕		砂少		39mm x 39mm
48	10	P - 26		土器片 円盤		底部片使用		粗砂		43mm x 45mm
48	11	S - 15	層	土器片 円盤		無文		砂		59mm x 61mm
48	12	Q - 18	層	土器片 円盤		方形文・R L・未製品		砂・石英		53mm x 61mm
48	13	Q - 20		土器片 円盤		三角形文・隆帯・R L・未製品		砂・針状物		55mm x 59mm
48	14	Q - 12	層	ミニチュア		底部・指頭圧痕・ナデ		砂		
48	15	Q - 12	層	鐙形土製品		完形		細砂		高さ37mm・幅31mm
48	16	P - 12		ミニチュア		土器底部?・鐙形土製品破片?		砂少		

遺構内出土陶磁器

図版番号	遺物番号	出土位置	層位	種類	器種	部位	外面文様	内面文様	底部	分類	備考
10	23	第2号壕跡	覆土	瀬戸美濃	天目茶碗	胴~底部	鉄釉	鉄釉	ケズリ		底径4.2cm 大窯 ~ 期
13	31	第4号壕跡	覆土	瀬戸美濃	折縁皿	口縁~底部	灰釉	灰釉	灰釉		推定口径11.2cm・底径5.7cm・器高2.1cm 大窯 期
13	32	第4号壕跡	覆土	肥前	皿	底部	ケズリ	灰釉?			胎土目・周縁打欠 底径4.2cm 肥前 ~ 期
13	33	第4号壕跡	覆土	大塚相馬	碗	口縁	灰釉	灰釉			推定口径12.6cm 18c末~19c初頭
13	34	第4号壕跡	覆土	肥前系	碗	口縁部	横線・草?				推定口径12.4cm 肥前 期
13	35	第4号壕跡	覆土	瀬戸美濃系	皿	底部	-	横線・帯線	-		被熱? 底径7.0cm 18c後葉
23	1	第1号竪穴建物跡	覆土	瀬戸美濃	天目茶碗	口縁部	鉄釉	鉄釉			R - 15 層と接合 大窯 ~ 期
23	2	第1号竪穴建物跡	覆土	瀬戸美濃	皿	底部	灰釉	灰釉			重ね焼きの跡 大窯 ~ 期

遺構外出土須恵器

図版番号	遺物番号	出土位置	層位	種類	器種	部位	外面文様	内面文様	底部	分類	備考
46	1	I - 21	層		長頸瓶	肩部	ロクロ	ロクロ	-		
46	2	表探			甕	胴部	同心円アテグ?	平行タタキ	-		傾き不明
46	3	平場北法面			甕	底部?	?	平行タタキ	-		

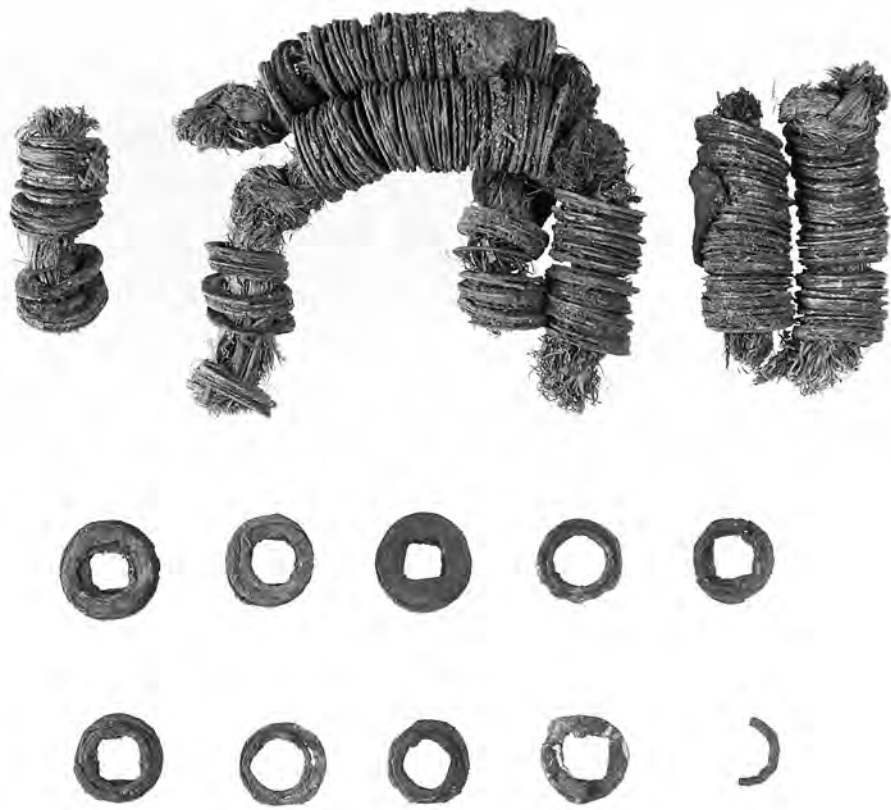
遺構外出土陶磁器

図版番号	遺物番号	出土位置	層位	種類	器種	部位	外面文様	内面文様	底部	分類	備考
46	4	R - 16	層	瀬戸美濃	皿	口縁	灰釉	灰釉			5と同一個体 推定口径10.7cm 大窯 ~ 期
46	5	R - 16	層	瀬戸美濃	皿	口縁~底部	灰釉	灰釉	灰釉		4と同一個体 推定底径6.6cm 大窯 ~ 期
46	6	T - 18	層	志野	皿	底部					外底面釉なし・重ね焼きの跡 大窯 期
46	7	S - 14	層	瀬戸美濃	天目茶碗	胴部下半	鉄釉・ケズリ	鉄釉			大窯 ~ 期
46	8	Q - 17	層	志野	皿	口縁~胴部					推定口径12.0cm 大窯 期
46	9	S - 19	層	瀬戸美濃	碗	口縁	灰釉	灰釉			蟹沢焼の可能性あり 18c後半?
46	10	平場北法面		京・信楽系	碗	底部	灰釉・ケズリ	灰釉	ケズリ		小杉碗 推定底径2.8cm 18c後半
46	11	T - 18	層	京・信楽系	碗	底部	灰釉・ケズリ	灰釉	ケズリ		小杉碗 推定底径4.0cm 18c後半
46	12	T - 19	層	京・信楽系	碗	底部	灰釉・ケズリ	灰釉	ケズリ		小杉碗 推定底径3.8cm 18c後半
46	13	R - 19	層	小久慈?	碗	口縁	灰釉	灰釉			19c以降?
46	14	S - 18	層	瀬戸美濃	灰吹	底部	鉄釉・鎊		回転系切		外底面釉なし 底径4.5cm 18c後半?
46	15	S - 18	層	瀬戸美濃	仏飯器	底~脚部	-	-	-		底径2.0cm 18c後半?
46	16	T - 18	層	肥前	皿	口縁部	灰釉	灰釉・刷毛目			17と同一個体 肥前 ~ 期
46	17	S - 17	層	肥前	皿	底部	灰釉・ケズリ	灰釉・蛇の目釉剥ぎ			16と同一個体 底径7.0cm 肥前 ~ 期
46	18	P - 16		肥前	甕	胴部	鉄釉	格子状叩き目			同一個体片あり 17c後半以降
46	19	U - 14	盛土	肥前	播鉢	口縁部	鉄釉(口唇部)	鉄釉			折り返し口縁(玉縁状) 肥前 期
46	20	T - 17	層	瀬戸美濃	播鉢	口縁部	鉄釉	鉄釉			折り返し口縁 推定口径30.5cm 18c第1四半期
46	21	S - 19	層	瀬戸美濃	播鉢	口縁部	鉄釉	鉄釉			18c第1四半期
46	22	R - 18	層	瀬戸美濃	播鉢	口縁部	鉄釉	鉄釉			18c第2四半期
46	23	J - 16	層	瀬戸美濃	播鉢	胴部上半	鉄釉	鉄釉			18c第2四半期
46	24	T - 18	層	瀬戸美濃	播鉢	底部	鉄釉	鉄釉			同一個体片あり 推定底径13.0cm 18c?
46	25	R・S - 19	層	肥前系	碗	口縁~胴部	横線・花唐草	横線	-		同一個体片あり・被熱・ガラス接ぎ 肥前 期
46	26	S・T - 18	層	肥前系	碗	口縁~胴部	草花?	横線・帯線	-		肥前 期
46	27	T - 19	層	肥前系	碗	口縁部	短縦線	雷門?	-		端反・被熱? 肥前 期
46	28	T - 18	層	肥前系	碗	口縁部	篋	-	-		口縁直立 肥前 期
46	29	U - 14	盛土	肥前系	碗	口縁部	花卉	-	-		同一個体片あり・口縁部打ち欠き 肥前 期
46	30	T - 17・18	層	肥前系	碗	胴部下半	草?	-	-		口縁部打ち欠き 肥前 期
46	31	表探		肥前系	碗	胴部下半	不明	-	-		肥前 期
46	32	R - 16	層	瀬戸美濃系	碗	胴部下半	草?	横線	-		被熱? 18c後半?
46	33	R - 17	層	肥前系	碗	底部	横線	-	横線		被熱? 底径4.0cm 肥前 期
46	34	S - 18	層	肥前系	碗	底部	横線・網目?	-	-		推定底径4.6cm 肥前 期
46	35	R - 16	層	肥前系	碗	胴~底部	横線・牡丹花?	横線・青海波?	-		肥前 期
46	36	T - 18	層	肥前系	皿	口縁部	-	圈線・笹か草	-		肥前 期
46	37	T - 15	層	肥前系	蓋	口縁部	雲・蟬?	-	-		肥前 期
46	38	平場北法面		肥前系	碗or皿	底部	灰釉・ケズリ	見込みみ菊花	ケズリ?		初期伊万里? 底径4.2cm 肥前 期?
46	39	Q - 17/R - 22	層・盛土	肥前系	猪口	底部	横線・草	-	不明		底径5.0cm 肥前 ~ 期
46	40	R - 17	層	肥前系	仏飯器	底~脚部	横線(一部帯状)	-	-		底径4.2cm 肥前 期
46	41	T - 18	層	肥前系	仏飯器	底~脚部	横線	-	-		底径4.0cm 肥前 期

出土石器

図番号	遺物番号	器種	出土位置	層位	石質	器長・mm	器幅・mm	器厚・mm	重量・g	備考
10	19	磨製石斧	第2号壕跡	覆土	輝綠凝灰岩	130	58	28	256.7	
10	20	石刀類	第2号壕跡	覆土	粘板岩	(78)	(44)	(22)	102.2	胴部片
10	21	石刀類	第2号壕跡	覆土	粘板岩	(178)	61	25	309.5	剥離・敲打
10	22	石製円盤	第2号壕跡	覆土	粘板岩	43	39	8	18.1	剥離・研磨
11	22	尖頭器	第3号壕跡	覆土	粘板岩	58	16	6	4.8	剥離・研磨
11	23	石刀類	第3号壕跡	覆土	粘板岩	94	46	13	47.8	剥離・敲打
11	24	石製円盤	第3号壕跡	覆土	粘板岩	115	82	11	140.8	短冊形・剥離
11	25	石刀類	第3号壕跡	覆土	粘板岩	(245)	53	20	350.6	刃部欠失
11	26	磨製石斧	第3号壕跡	覆土	輝綠凝灰岩	(75)	(42)	(29)	137.4	基部欠失
11	27	石製円盤	第3号壕跡	覆土	粘板岩	53	51	8	30.6	剥離・研磨
11	28	石製円盤	第3号壕跡	覆土	粘板岩	68	47	5	25.1	研磨
11	29	石製円盤	第3号壕跡	覆土	粘板岩	57	45	7	26.7	研磨
11	30	磨石	第3号壕跡	覆土	安山岩	133	84	50	803.8	一側縁・剥離
11	31	台石	第3号壕跡	覆土	安山岩	202	172	86	4852.6	破損
12	16	石鏃	第4号壕跡	覆土	珪質頁岩	32	21	4.5	1.2	凹基・有脚
12	17	削器	第4号壕跡	覆土	黒曜石	26	24	9.5	5.4	
12	18	石刀類	第4号壕跡	覆土	粘板岩	(161)	47	17	138.0	刃部欠失
12	19	磨製石斧	第4号壕跡	覆土	砂岩	(105)	47	30	270.0	刃部欠失・定角式
12	20	敲石	第4号壕跡	覆土	粘板岩	116	28	14	73.7	棒状・剥離
12	21	石製円盤	第4号壕跡	覆土	粘板岩	87	80	9	90.5	剥離
12	22	石製円盤	第4号壕跡	覆土	粘板岩	56	44	5	12.4	剥離
12	23	敲石	第4号壕跡	覆土	砂岩	108	84	51	695.1	両面凹
12	24	敲石	第4号壕跡	覆土	砂岩	103	100	62	831.2	磨面・敲打面
12	25	磨石	第4号壕跡	覆土	砂岩	102	77	40	506.6	扁平
12	26	磨石	第4号壕跡	覆土	安山岩	87	76	55	518.9	球状
12	27	磨石	第4号壕跡	覆土	礫岩	57	57	47	174.9	球状
13	29	磨石	第4号壕跡	覆土	砂岩	145	90	39	784.6	一側縁・剥離
13	30	石皿	第4号壕跡	覆土	凝灰岩	(150)	(148)	43	733.7	縁付き・破損品
14	9	石皿	第6号壕跡	覆土	砂岩	448	242	68	5987.0	縁・脚付き
23	17	石製円盤	第1号竪穴建物跡	覆土	粘板岩	67	46	5	24.1	基部欠失
23	18	磨製石斧	第1号竪穴建物跡	覆土	砂岩	(42)	(44)	(23)	52.2	基部欠失
25	14	磨石	第8号竪穴住居跡	覆土	安山岩	58	57	55	226.5	球状
25	15	磨石	第8号竪穴住居跡	覆土	安山岩	81	79	43	393.7	削石
29	6	石刀類	第10号竪穴住居跡	床面	粘板岩	133	66	13	131.9	剥離痕
29	7	石刀類	第10号竪穴住居跡	床面	粘板岩	195	72	15	220.8	剥離・敲打
37	7	石筥	第29号土坑	覆土	珪質頁岩	(24)	(19)	8	3.2	1 / 2 欠失
37	11	石筥	第31号土坑	1層	珪質頁岩	53.5	22	13	14.2	短冊形
37	20	敲石	第36号土坑	覆土	頁岩	94	82	31	466.2	周縁敲打
37	32	礫器	第39号土坑	底面	砂岩	111	75	25	286.0	剥離・敲打
37	33	敲石	第39号土坑	底面	砂岩	168	68	66	913.0	端部敲打
38	65	石製円盤	第50号土坑	覆土	粘板岩	76	35	7	24.2	剥離・研磨
39	74	磨石	第52号土坑	覆土	凝灰岩	48	46	43	78.9	球状
39	87	石製円盤	第61号土坑	覆土	粘板岩	60	51	11	48.8	剥離・研磨
39	96	石刀類	第62号土坑	覆土	粘板岩	96	43	9	31.1	剥離・敲打
39	113	石刀類	第69号土坑	覆土	粘板岩	96	36	11	46.5	剥離・敲打・研磨
40	119	楔形石器	第74号土坑	覆土	珪質頁岩	38	36	12	12.9	
40	120	楔形石器	第74号土坑	覆土	珪質頁岩	48	34	15	20.8	
40	121	楔形石器	第74号土坑	覆土	珪質頁岩	36	27	11	8.9	
40	122	楔形石器	第74号土坑	覆土	珪質頁岩	43	36	12	17.9	
40	123	楔形石器	第74号土坑	覆土	珪質頁岩	44	21	13	12.4	
40	124	楔形石器	第74号土坑	覆土	珪質頁岩	50	44	15	23.9	
40	139	石刀類	第80号土坑	1層	粘板岩	(274)	69	18	469.3	基部欠失
40	140	石刀類	第80号土坑	1層	粘板岩	(73)	50	14	74.7	刃部欠失
40	141	礫器	第80号土坑	覆土	砂岩	103	72	28	197.1	剥離
41	159	磨製石斧	第84号土坑	1層	砂岩	(57)	(42)	(27)	93.1	刃部欠失
41	172	砥石	平場柱穴	覆土	頁岩	153	(29)	48	193.4	石製品再利用
41	173	礫器	通路・柱穴	覆土	安山岩	55	50	13	53.1	胴部剥離片
41	174	石製円盤	平場柱穴	覆土	粘板岩	34	34	5	7.6	剥離
41	179	削器	第1号集配石	検出面	珪質頁岩	33	23	8	5.7	小剥離
41	180	礫器	第1号集配石	検出面	砂岩	138	75	27	401.7	剥離
49	1	石鏃	J - 28	層	珪質頁岩	(35)	10.5	3	1.2	凹基・五角形
49	2	石鏃	平場	層	珪質頁岩	(24)	15	5.5	1.6	有茎・先端部欠失
49	3	石鏃	R - 15	層	珪質頁岩	(21)	15	4	0.6	凹基・小型
49	4	石鏃	O - 29	層	玉髄(玉髄質頁岩)	20	11	4.5	0.7	凹基・小型
49	5	石鏃	G - 31	層	珪質頁岩	47	24	9	6.7	楕型
49	6	石筥	K - 25	層	珪質頁岩	64	40	15	40.2	トランシエ様石器
49	7	擣器	平場法面	層	黒曜石	20	19.5	16	5.5	ラウンドスクレイパー
49	8	楔形石器	Q - 17	層	珪質頁岩	47	30	12	16.6	両極技法
49	9	削器	T - 13	層	珪質頁岩	21	24	7	2.5	小剥離
49	10	削器	平場土層ベルト	層	チャート	20	26	7.5	3.0	小剥離
49	11	磨製石斧	T - 12	層	粘板岩	126	51	24	256.6	刃部欠失
49	12	磨製石斧	T - 10	層	粘板岩	88	38	11	49.1	剥片素材
49	13	石刀類	R - 12	盛土	粘板岩	154	48	9	78.0	剥離・敲打
49	14	石刀類	R - 12	層	粘板岩	(180)	58	14	178.6	剥離・敲打
49	15	石刀類	平場法面	層	粘板岩	(112)	(33)	(10)	47.0	刃部欠失
49	16	石刀類	R - 24	盛土	粘板岩	(136)	(34)	14	94.9	刃部欠失
49	17	石刀類	T - 12	層	粘板岩	209	24	12.5	130.2	研磨・敲打
49	18	敲石	平場法面	層	粘板岩	172	40	32	265.4	棒状
49	19	敲石	R - 24	盛土	粘板岩	114	40	22	139.9	棒状・剥離
50	20	石製円盤	平場法面	層	粘板岩	68	61	18	86.7	剥離
50	21	石製円盤	T - 17	層	粘板岩	63	62	13	73.3	剥離
50	22	石製円盤	平場	層	粘板岩	53	52	8	24.3	剥離
50	23	石製円盤	S - 18	層	粘板岩	54	45	9	27.7	剥離
50	24	石製円盤	T - 17	層	粘板岩	54	52	8	37.1	剥離・研磨
50	25	石製円盤	平場	層	粘板岩	50	50	9	32.9	剥離・研磨
50	26	石製円盤	S - 18	層	粘板岩	65	61	10	59.1	剥離・研磨
50	27	石製円盤	T - 17	層	粘板岩	62	60	11	69.0	剥離・研磨
50	28	石製円盤	Q - 12	層	粘板岩	63	61	11	63.7	剥離・研磨
50	29	石製円盤	T - 16	層	粘板岩	63	63	9	62.7	剥離・研磨
50	30	石製円盤	平場	層	粘板岩	61	55	10	43.4	剥離・研磨
50	31	石製円盤	T - 10	層	粘板岩	60	46	9	35.9	剥離・研磨
50	32	石製円盤	R - 12	盛土	粘板岩	75	55	10	56.7	研磨
50	33	石製円盤	平場	層	粘板岩	60	42	8	34.9	剥離・研磨
50	34	石製円盤	平場	層	粘板岩	58	46	6	29.0	剥離・研磨
50	35	石製円盤	K - 24	層	粘板岩	53	38	7	22.1	剥離・研磨
50	36	石製円盤	K - 24	層	粘板岩	83	61	9	62.7	剥離・研磨
50	37	石製円盤	R - 24	盛土	粘板岩	110	61	7	71.4	短冊形・剥離・研磨
50	38	石製円盤	平場	法面	粘板岩	109	33	9	54.0	棒状・研磨
50	39	礫器	T - 18	層	砂岩	(58)	99	11	120.0	剥離・破損?
50	40	台石	Q - 18	層	砂岩	185	109	45	1283.8	剥離
50	41	台石	R - 17	層	砂岩	(150)	(121)	51	1330.0	被熱・剥離
50	42	砥石	J - 18	層	細粒凝灰岩	(120)	62	41	426.7	多面
50	43	石臼	J - 18	層	安山岩	(142)	(75)	(72)	857.3	破損

写真図版



第2号壕跡出土銭繙（無文銭・輪銭）



写真1 調査区全景 (空撮NW)



調査前遺跡近景 (NW)



調査区近景 (N)

写真2 調査前遺跡近景



調査後遺跡全景 (N)



壕跡・平場 (N E)

写真3 調査後調査区全景



平場全景 (N)

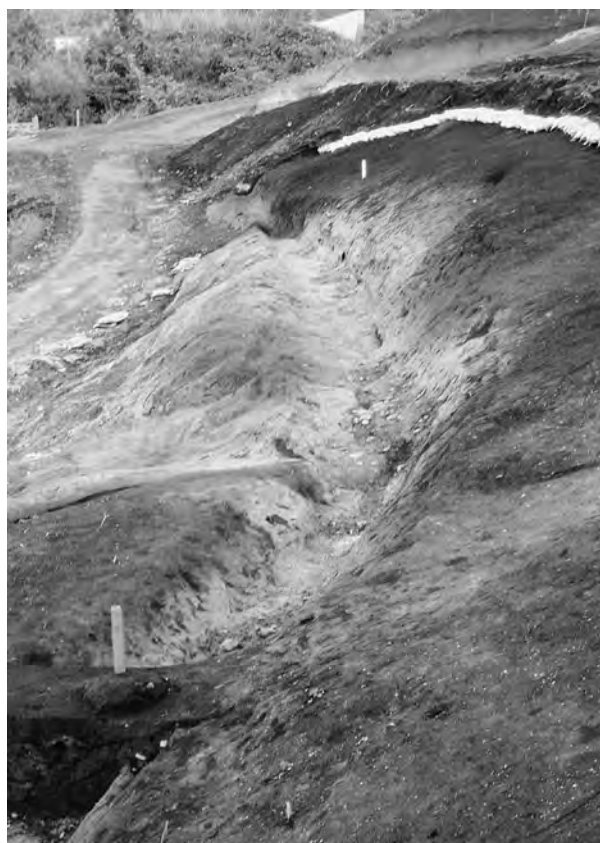


平場全景 (S E)

写真4 平場



第1号壕跡完掘 (NW)



第1号壕跡完掘 (NW)



第1号壕跡土層 A - B (NW)



第1号壕跡土層 C - D (W)



第1号壕跡土層 E - F (NW)



第1号壕跡土層 G - H (W)



調査前第2・3・4号壕跡 (NW)



調査後第2・3・4・5号壕跡 (NW)

写真6 第2・3・4・5号壕跡



壕跡全景 (NE)



壕跡全景 (S)



第2号壕跡土層A - B



第3号壕跡土層A - B



第4号壕跡土層A - B



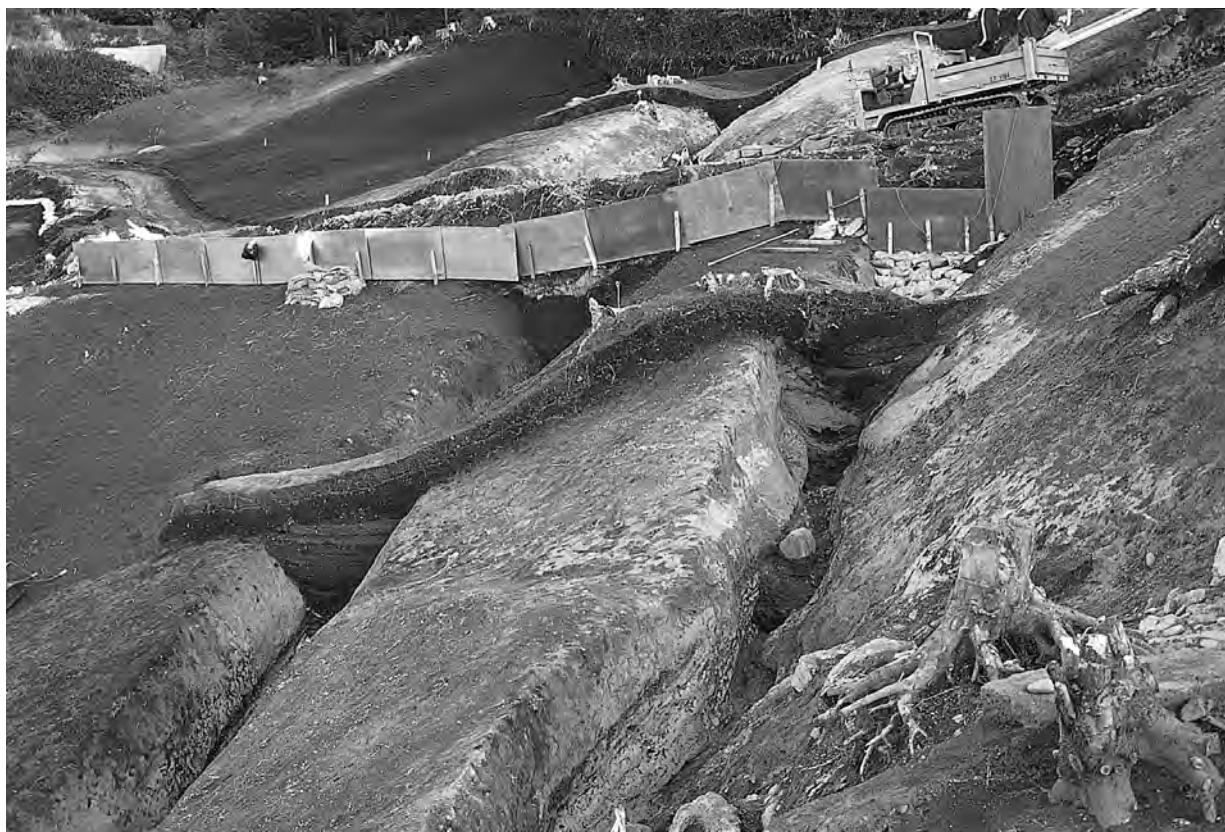
第2号壕跡土層C - D



第3号壕跡土層C - D



第4号壕跡土層C - D



第2・3号壕跡土層 E - F



第2号壕跡土層



第3号壕跡土層



第3号壕跡土層G - H



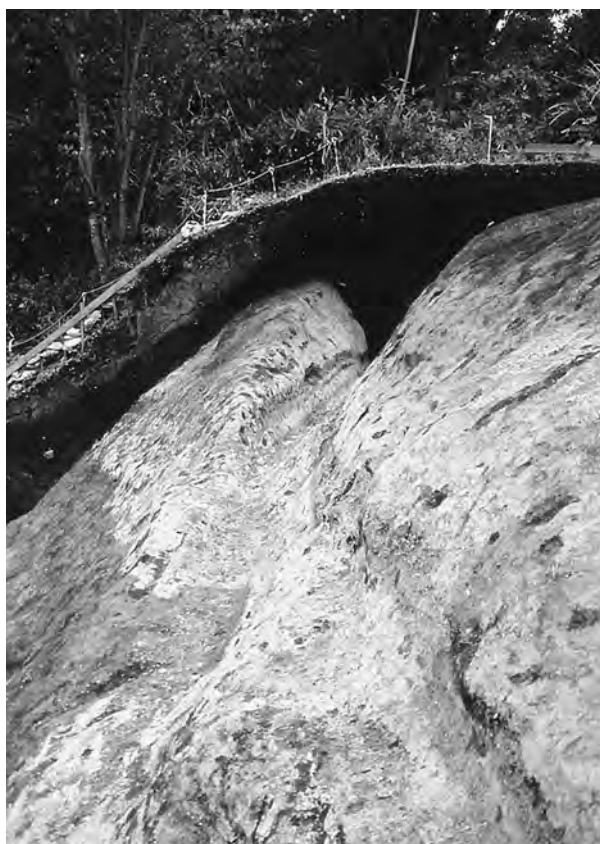
第4号壕跡土層I - J



第4号壕跡完掘 (E)



第5号壕跡完掘 (S E)



第5号壕跡完掘 (N)



第5号壕跡遺物出土状況 (S E)



第4号壕跡土層 C - D (掘り返し)



第5号溝跡土層



第5号溝跡完掘



門跡全景 (E)



門跡検出状況 (N E)



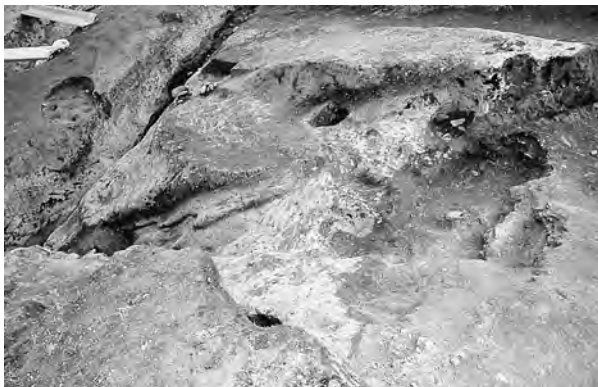
門跡全景 (3号壕)



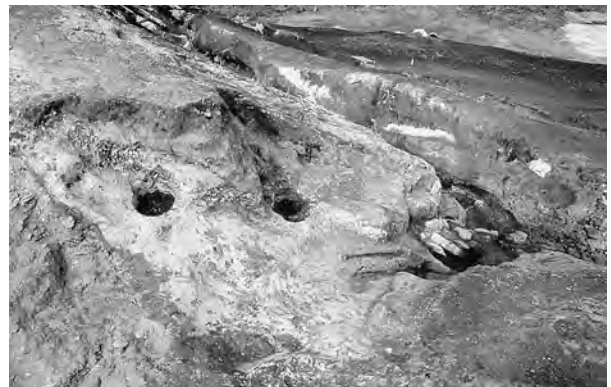
門跡全景 (NE)



門跡全景 (SW)



門跡全景 (N)



門跡全景 (S)



門跡Pit 1



門跡Pit 2



門跡Pit 3



門跡Pit 4



第3・4号壕跡間通路跡(1)



第3・4号壕跡間通路跡(2)



平場西縁部通路跡

写真16 通路跡(1)



平場下道路跡 (1)



平場下通路跡 (2)



平場西縁通路跡段差 (1)



平場西縁部通路跡盛土



平場西縁通路跡段差 (2)



第8号竖穴住居跡全景 (S)



第8号竖穴住居跡土層 (NW)



第8号竖穴住居跡土層 (S)



第8号竖穴住居跡刀子出土状況



第8号竖穴住居跡刀子出土状況



第9号竖穴住居跡土層 (E)



第9号竖穴住居跡カマド遺物出土状況 (S E)



第9号竖穴住居跡カマド遺物出土状況 (S W)



第9号竖穴住居跡カマド・煙道土層 (S)



第10号竖穴住居土層 (N)



第10号竖穴住居跡完掘 (SW)

写真20 第10号竖穴住居跡



第1号竖穴建物跡全景 (SW)



第1号竖穴建物跡土層 (W)



第1号竖穴建物跡土層 (SW)



第1号竖穴建物跡完掘 (NW)



第27号土坑土層 (W)



第27号土坑完掘 (W)



第28号土坑土層 (E)



第28号土坑完掘 (E)



第29号土坑遺物出土状況 (W)



第29号土坑完掘 (W)



第30号土坑土層 (W)



第30号土坑完掘 (W)



第31号土坑土層 (E)



第31号土坑完掘 (N)



第33号土坑土層 (S E)



第33号土坑完掘 (S E)



第35号土坑土層 (E)



第35号土坑完掘 (N E)



第36・37号土坑土層 (W)



第36・37号土坑完掘 (W)



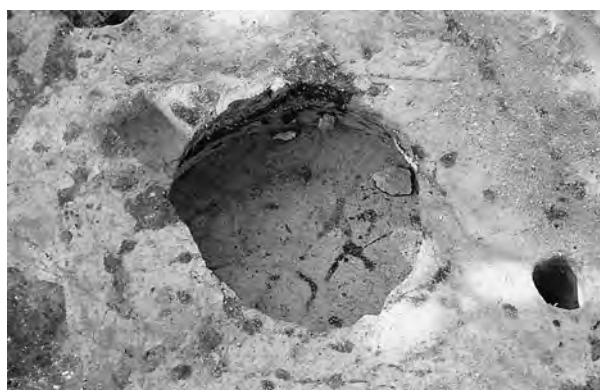
第38号土坑土層 (E)



第38号土坑完掘 (E)



第39号土坑土層 (S)



第39号土坑完掘 (S)



第40号土坑土層 (S E)



第40号土坑完掘 (S E)



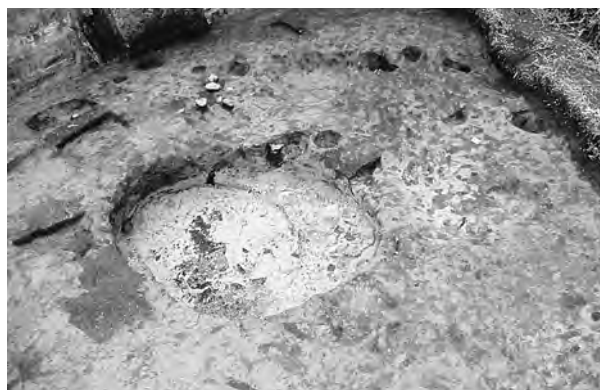
第41号土坑土層 (E)



第41号土坑完掘 (N W)



第43・44・45・46号土坑土層 (N)



第43・44・45・46号完掘 (W)



第48号土坑土層 (NW)



第48号土坑完掘 (NW)



第49・50号土坑土層 (E)



第49・50号土坑完掘 (E)



第52号土坑土層 (NW)



第52号土坑完掘 (S E)



第53号土坑土層 (N)



第54号土坑土層 (N)



第55号土坑土層 (N)



第53・54・55号土坑完掘 (NW)



第59号土坑土層 (W)



第59号土坑完掘 (SW)



第60号土坑土層 (W)



第60号土坑土層 (W)



第61号土坑土層 (S E)



第61号土坑完掘 (S E)



第62号土坑土層 (N W)



第62号土坑完掘 (N W)



第63号土坑土層 (N W)



第63号土坑完掘 (S W)



第67号土坑土層 (S W)



第67号土坑完掘 (E)



第69号土坑土層 (W)



第69号土坑完掘 (NW)



第73号土坑土層 (N)



第73号土坑完掘 (N)



第74号土坑土層 (NE)



第74号土坑完掘 (W)



第75号土坑土層 (W)



第75号土坑完掘 (NW)



第80号土坑土層 (N)



第80号土坑完掘 (W)



第81号土坑土層 (W)



第81号土坑完掘 (W)



第83号土坑土層 (SW)



第83号土坑完掘 (SE)



第86号土坑土層 (E)



第76・82・86号土坑完掘 (E)



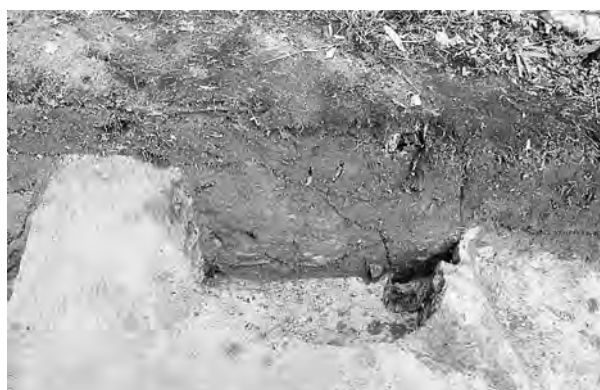
第47号土坑土層 (N)



第51号土坑土層 (S E)



第56号土坑土層 (N)



第57号土坑土層 (N)



第72号土坑土層 (S W)



第78号土坑土層 (N E)



第79号土坑土層 (E)



第82号土坑土層 (N E)



第15号焼土遺構検出 (S)



第15号焼土遺構土層 (E)



第16号焼土遺構検出 (S)



第16号焼土遺構土層 (E)



第17号焼土遺構検出 (S)



第18号焼土遺構検出 (N E)



第19号焼土遺構検出 (N)



第19号焼土遺構土層 (N E)



第1号集配石 (SE)



第1号集配石 (SW)



第2号集配石 (SE)



第2号集配石断ち割り (S)



第2号壕跡出土銭束



第2号壕跡出土繒銭



第2号壕跡出土繒銭



刈り払い作業状況



刈り払い作業状況



刈り払い作業状況



刈り払い作業状況



東斜面部検出作業状況



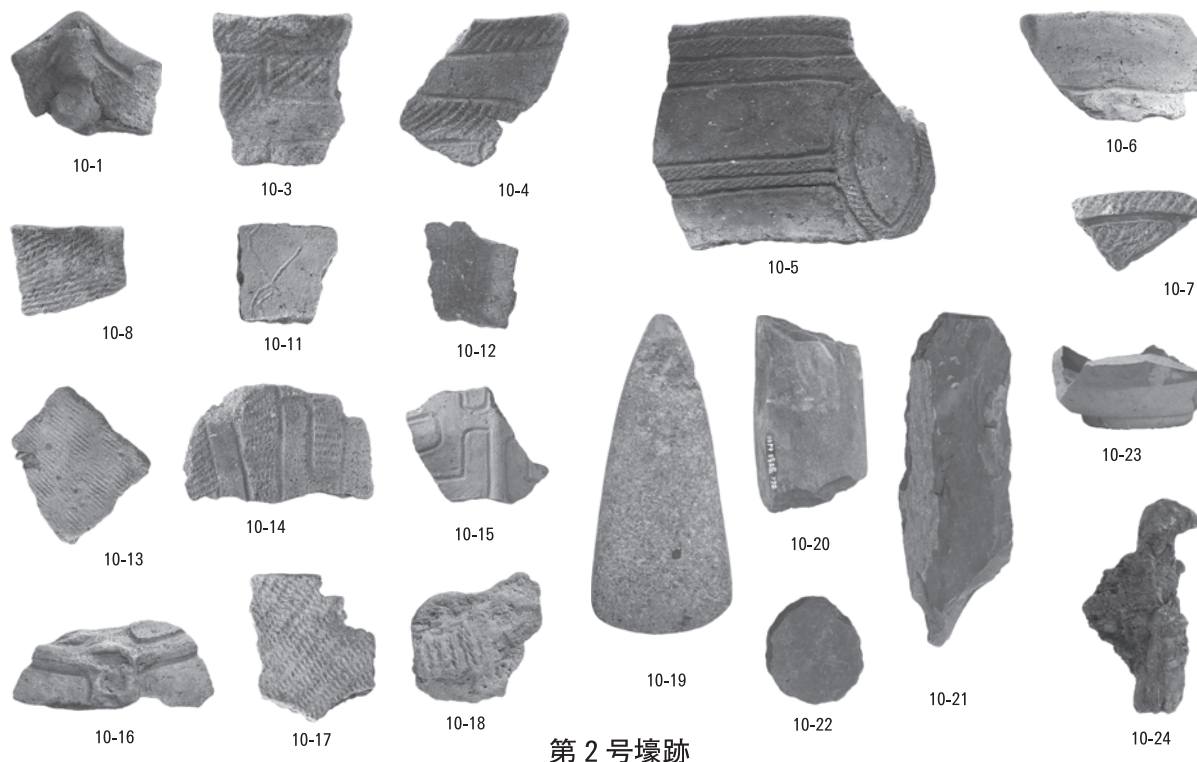
平場遺構精査状況



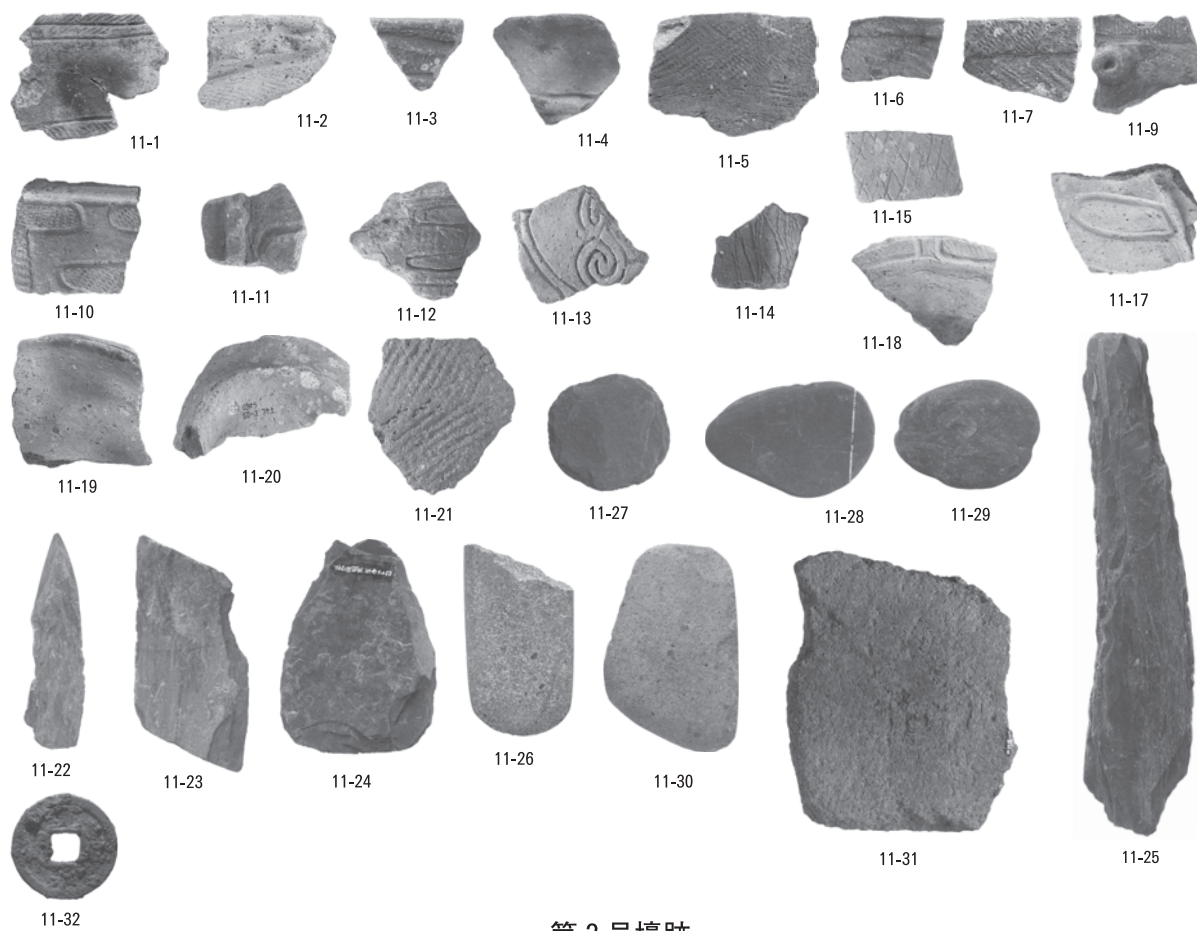
壕跡掘り下げ状況



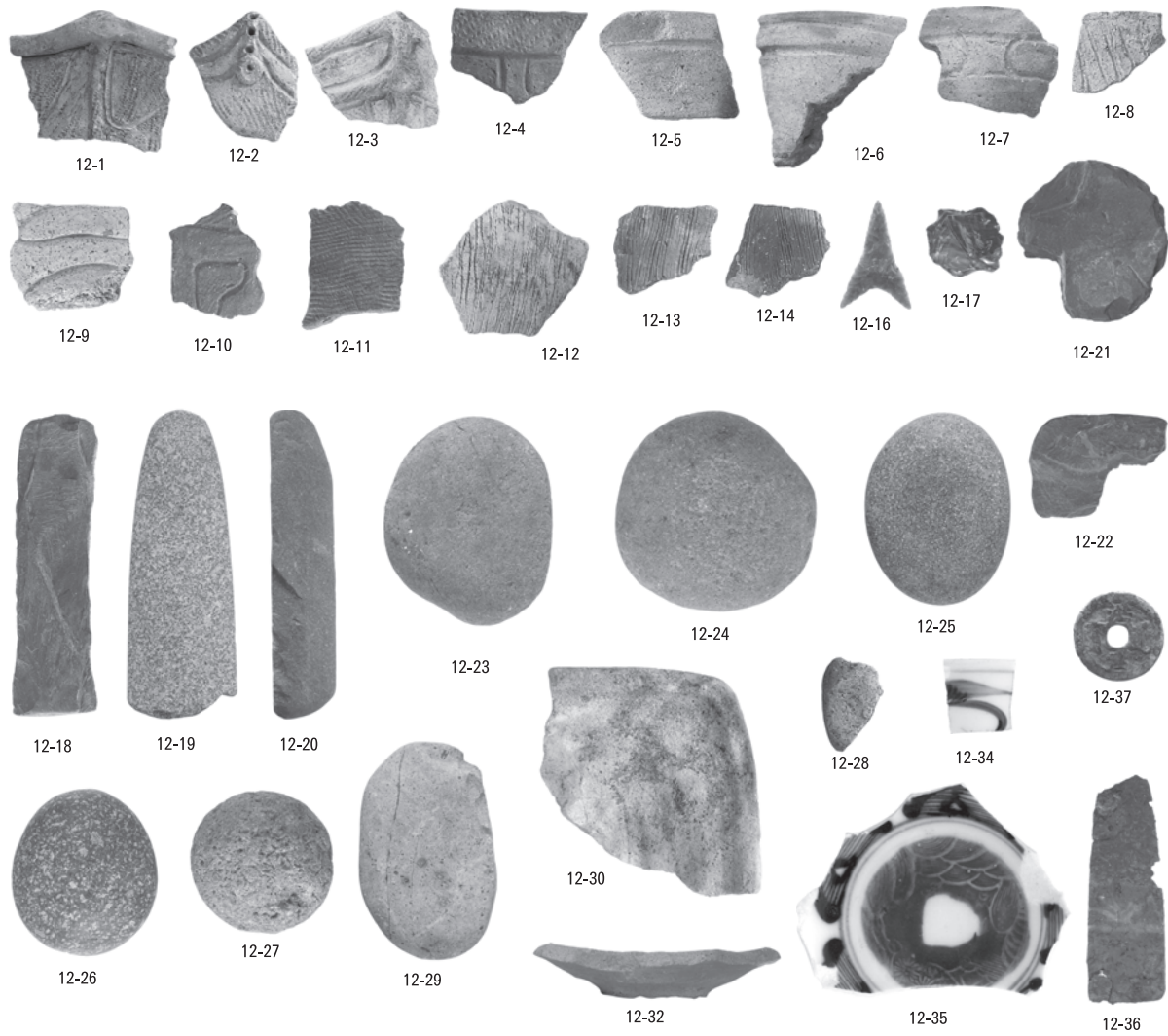
壕跡掘り下げ状況



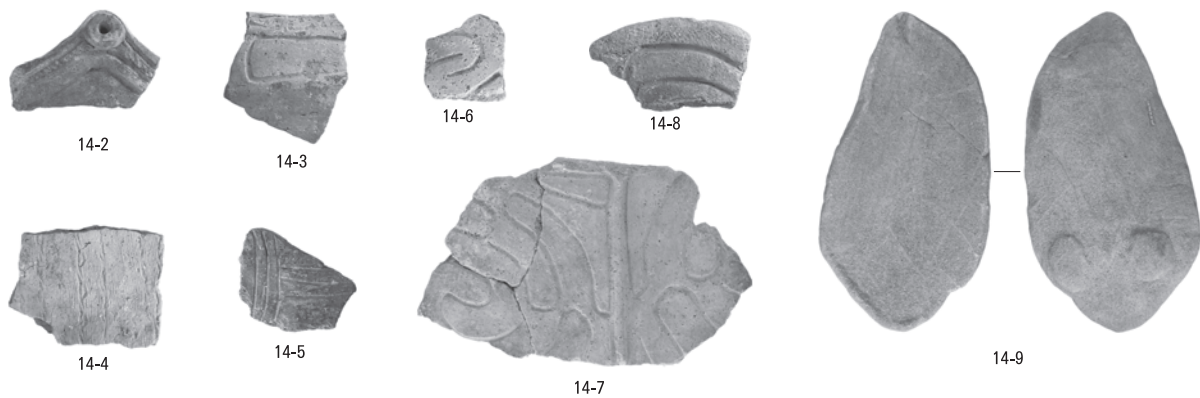
第 2 号壕跡



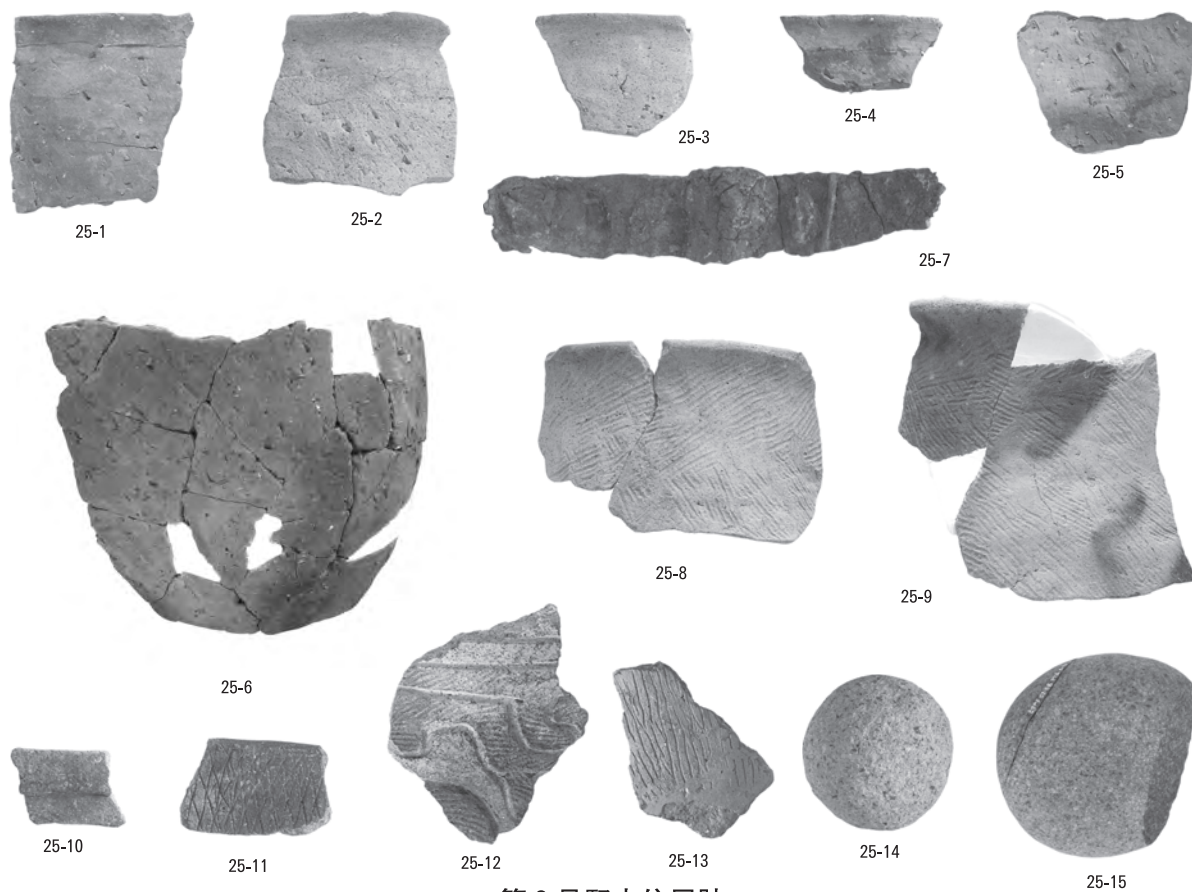
第 3 号壕跡



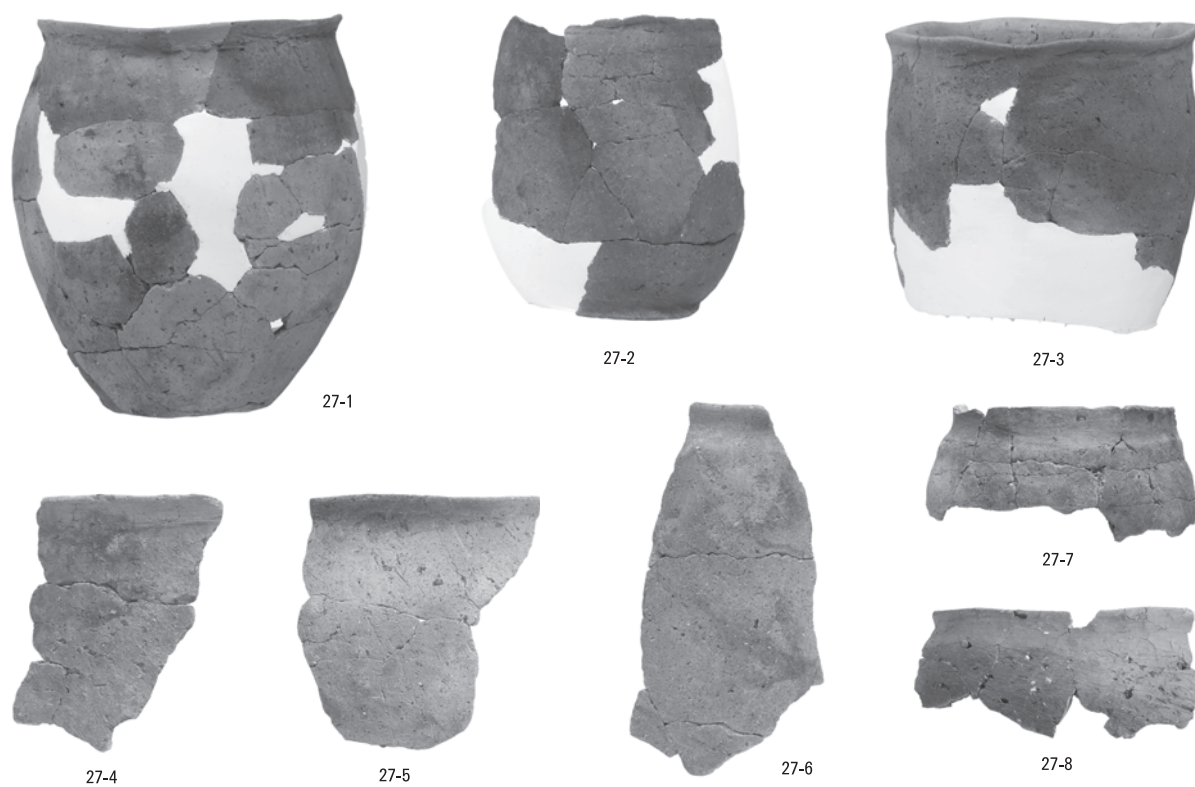
第 4 号壕跡



第 5 号壕跡

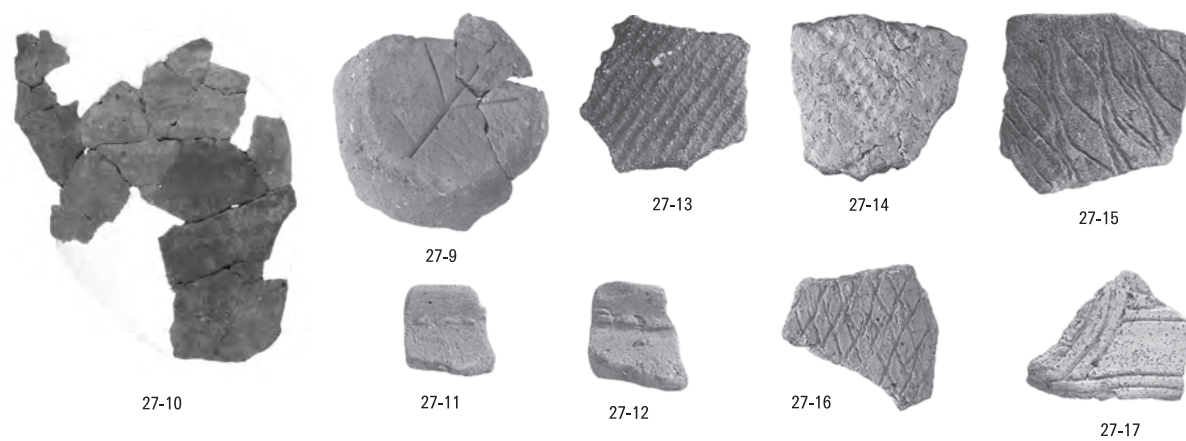


第 8 号竖穴住居跡

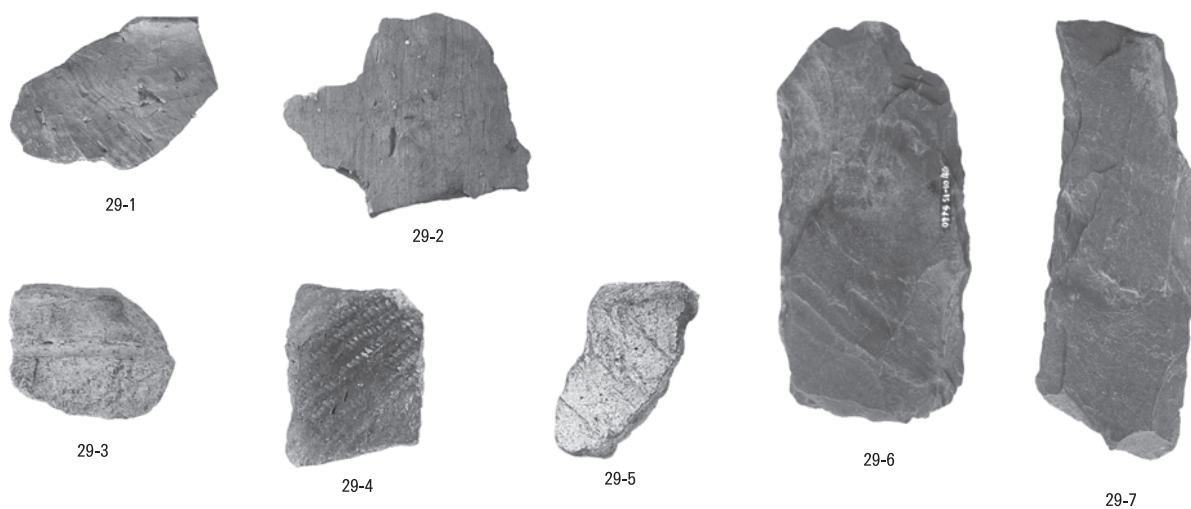


第 9 号竖穴住居跡 (1)

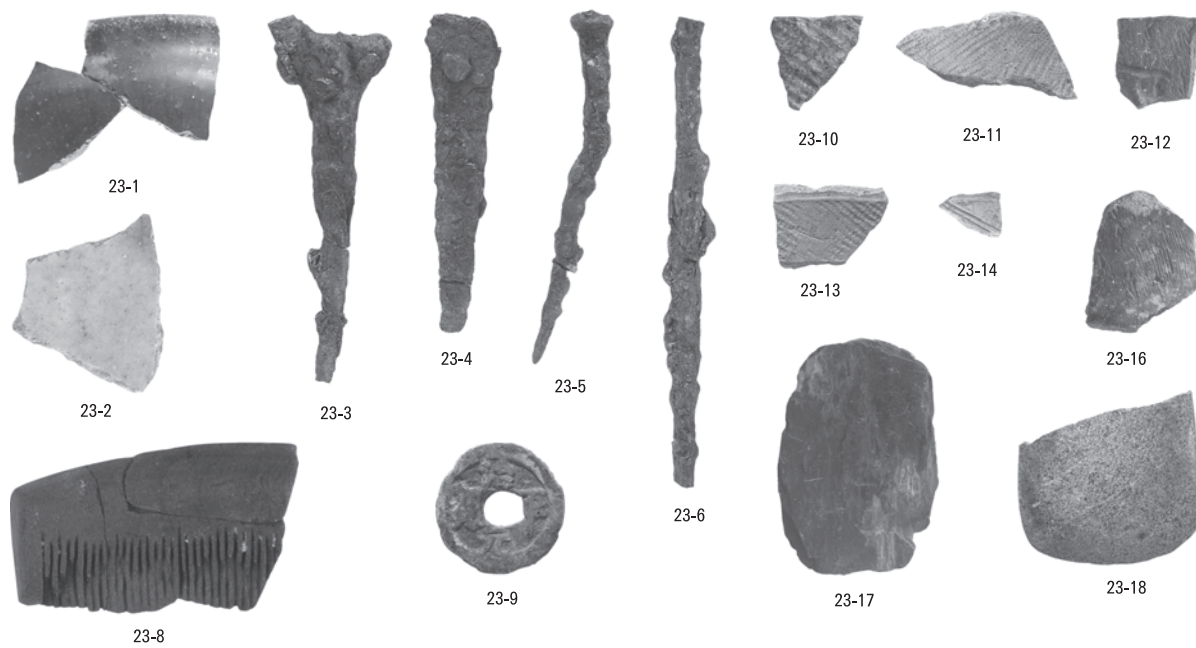
写真36 竖穴住居跡出土遺物 (1)



第9号竖穴住居跡(2)



第10号竖穴住居跡



第1号竖穴建物跡

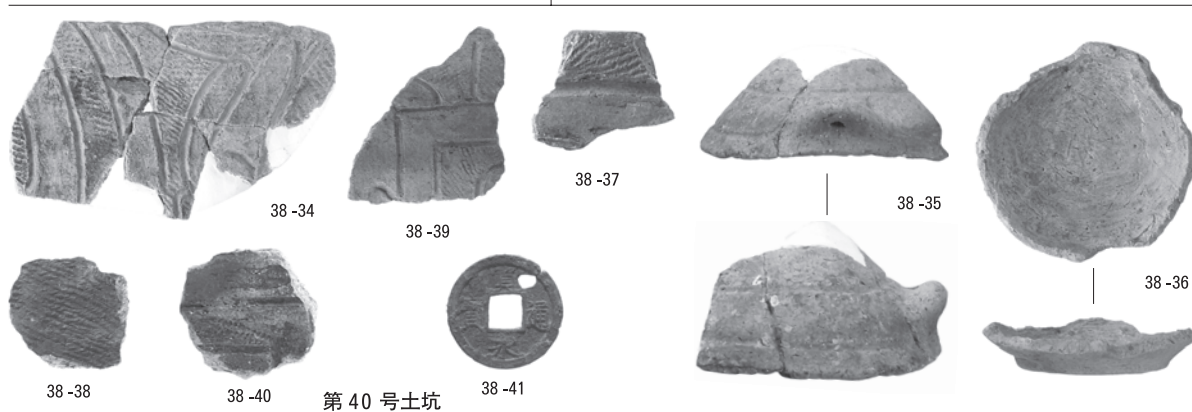
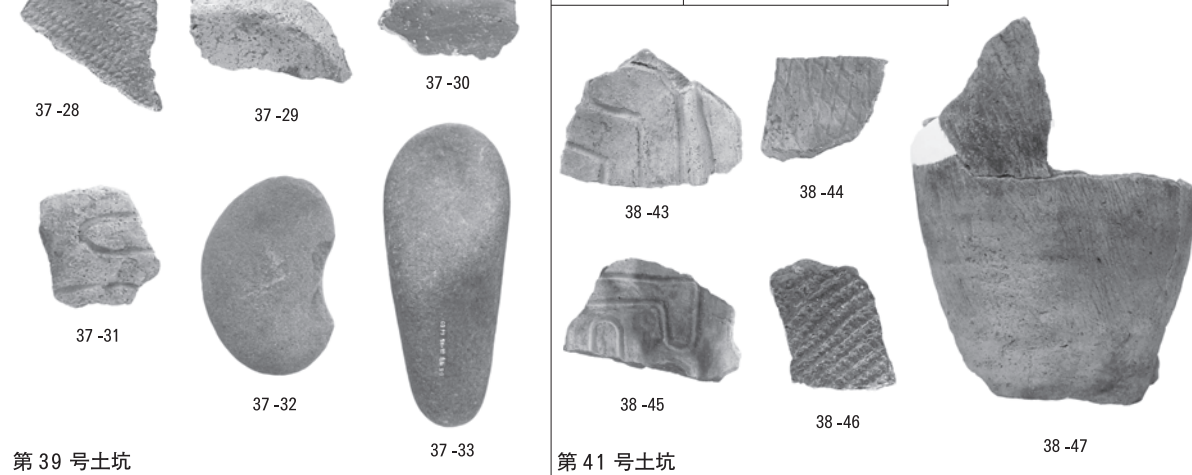
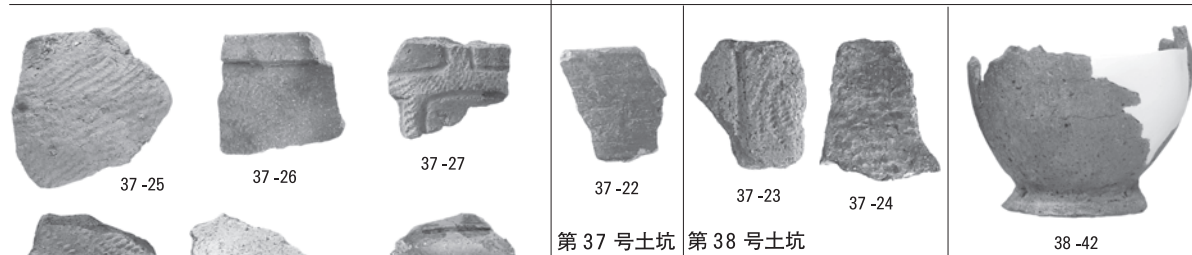
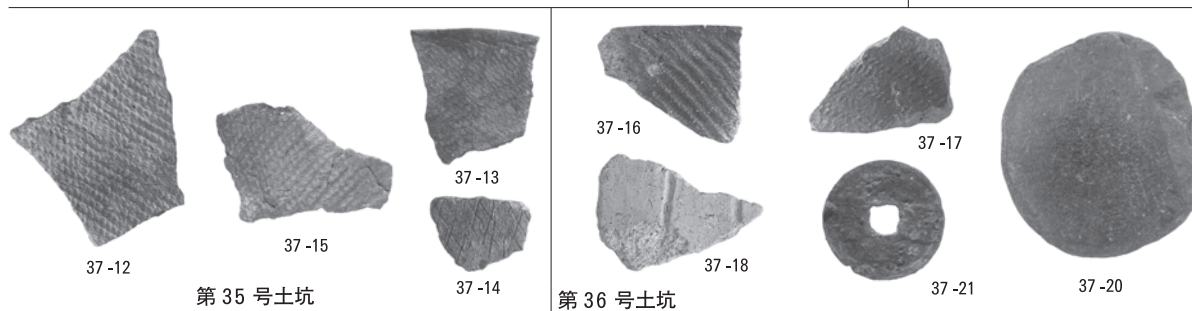
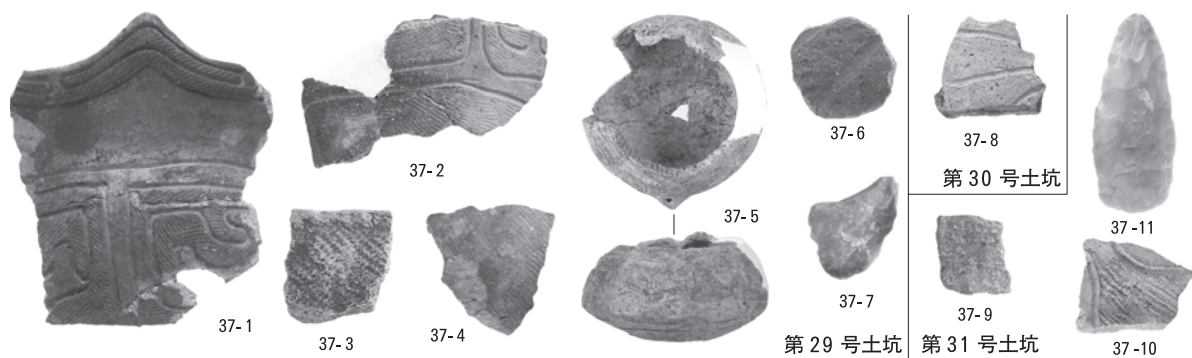


写真38 土坑出土遺物 (1)

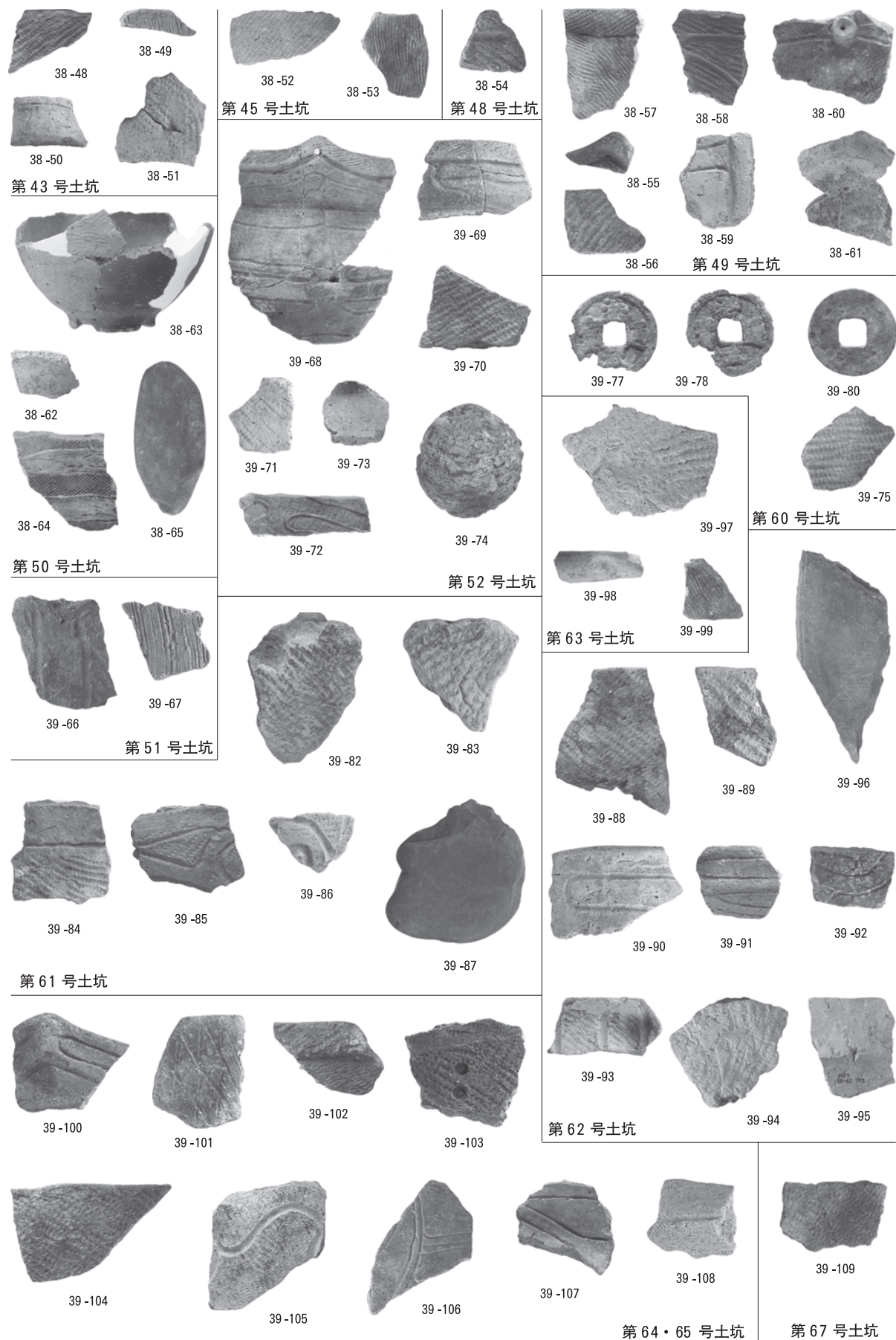
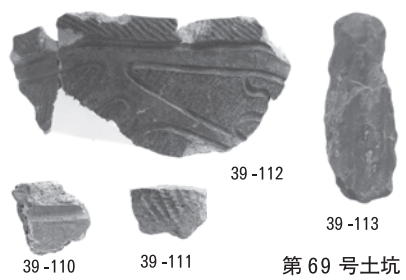
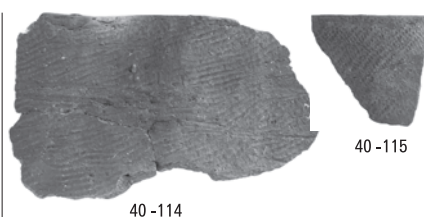
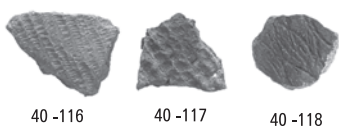


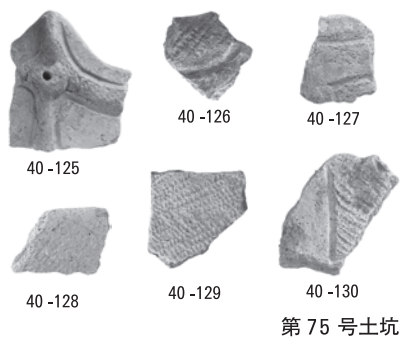
写真39 土坑出土遺物 (2)



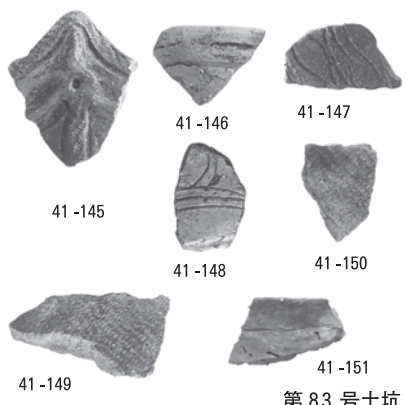
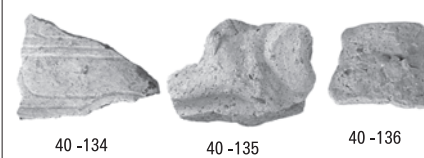
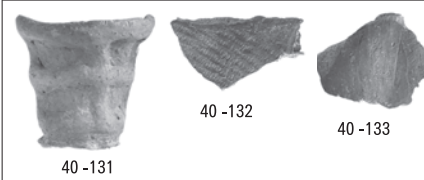
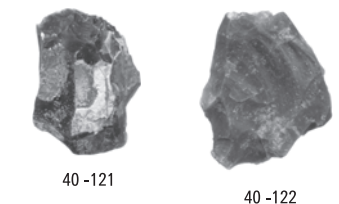
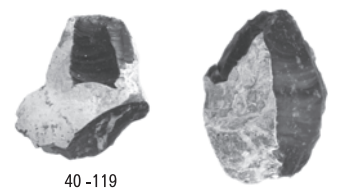
第 69 号土坑



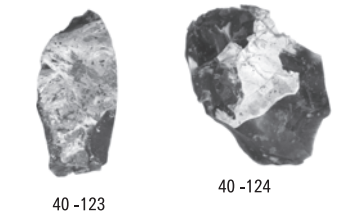
第 73 号土坑



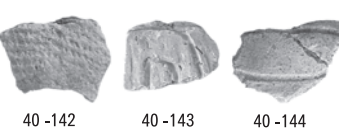
第 75 号土坑



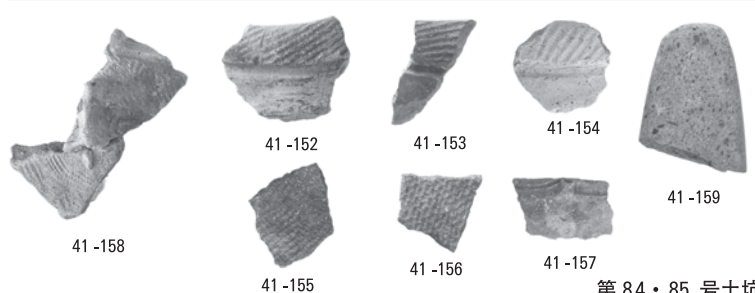
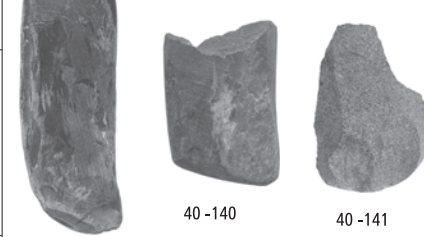
第 83 号土坑



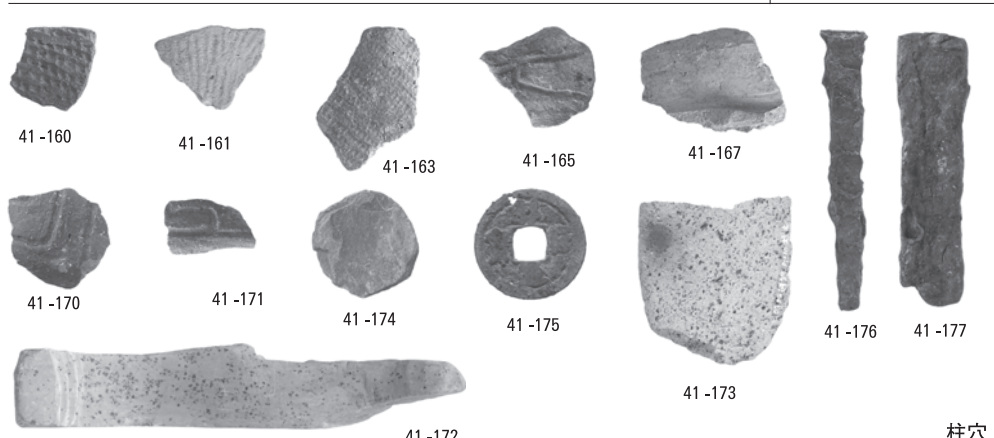
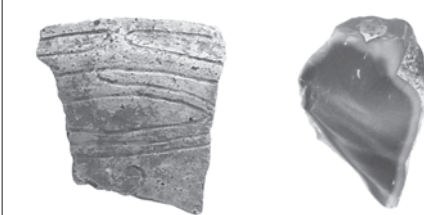
第 74 号土坑



第 81 号土坑



第 84・85 号土坑



柱穴



集配石

写真40 土坑出土遺物 (3) ・集配石・柱穴出土遺物

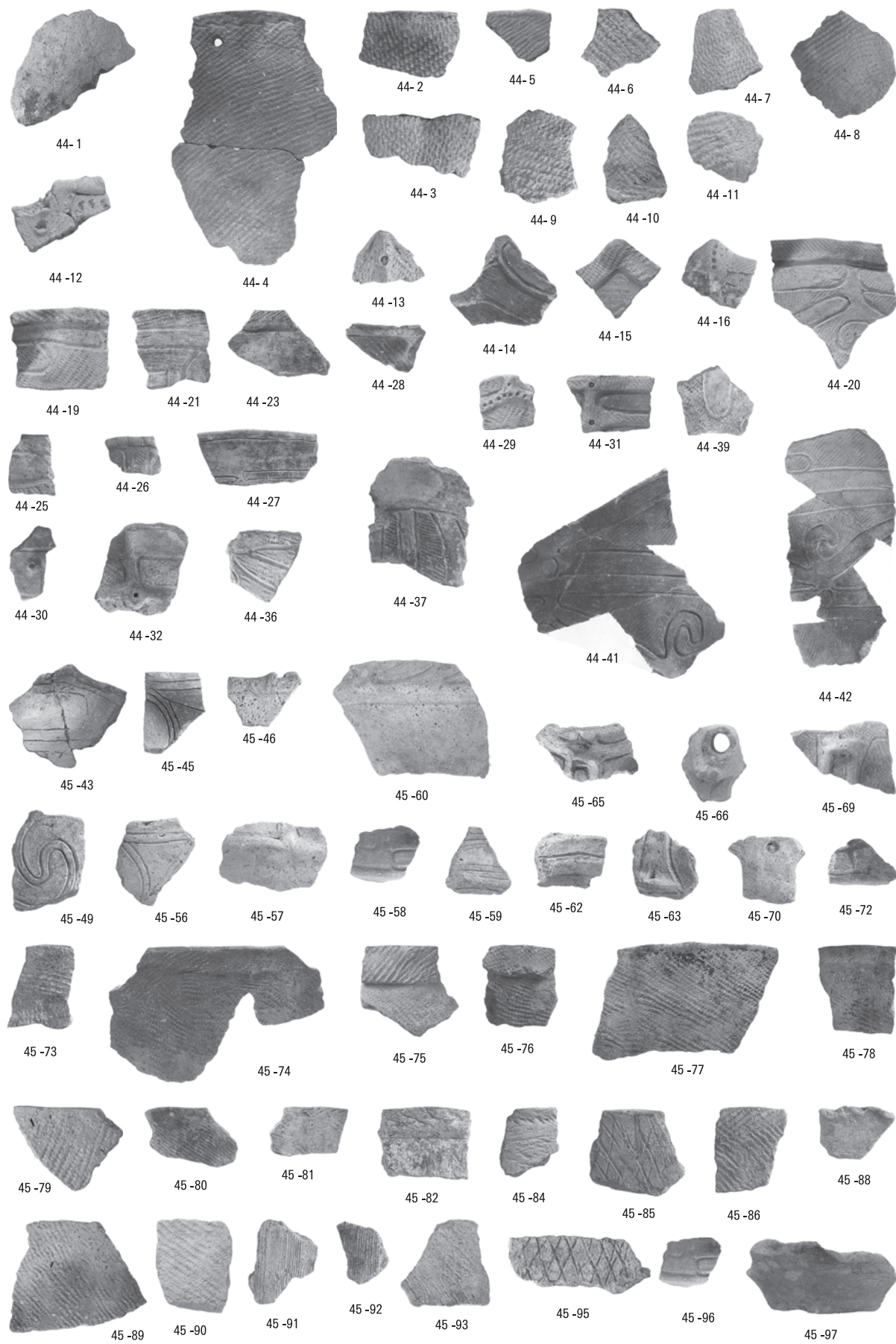


写真41 遺構外出土遺物 (1)

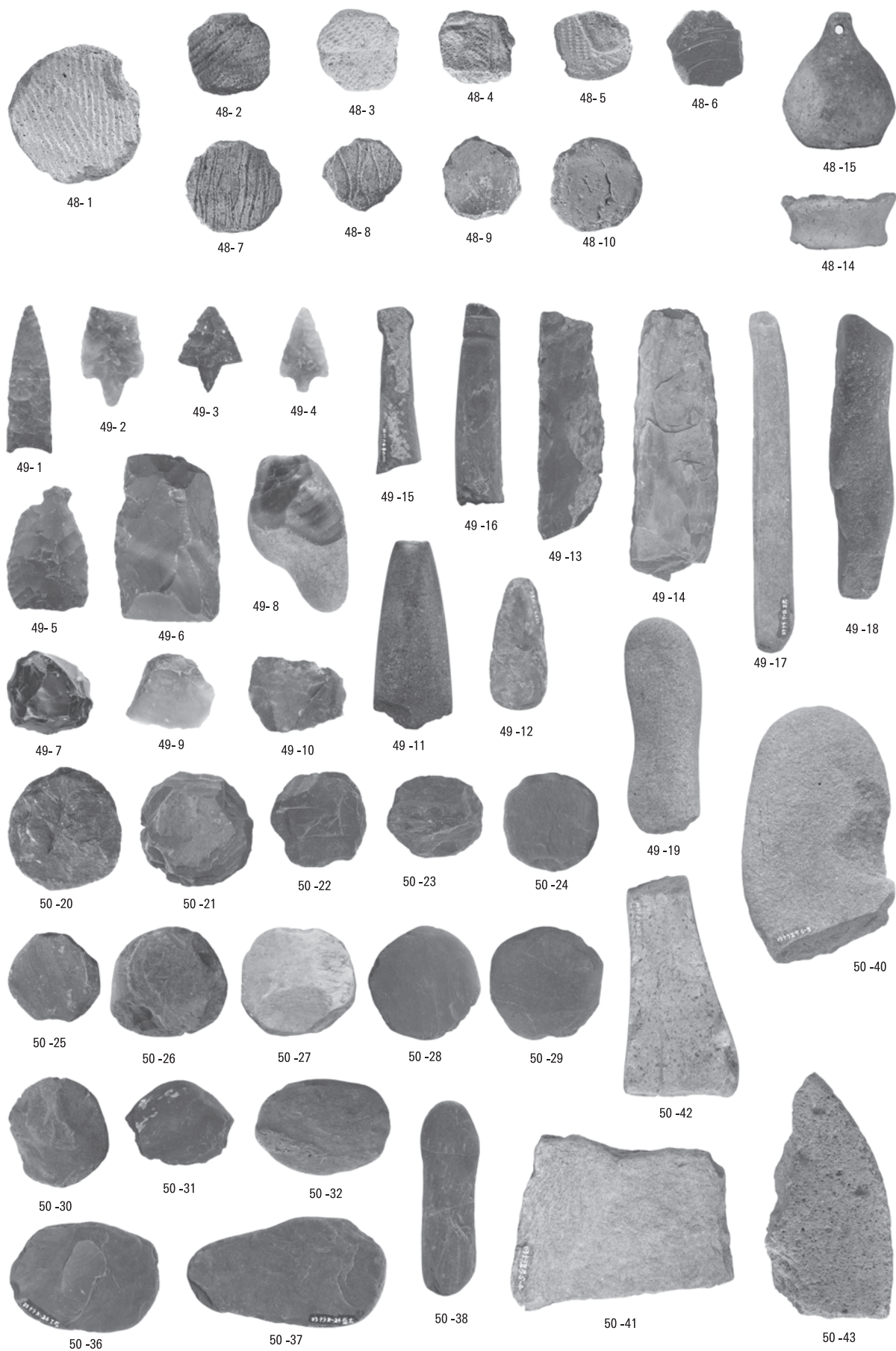


写真42 遺構外出土遺物 (2)

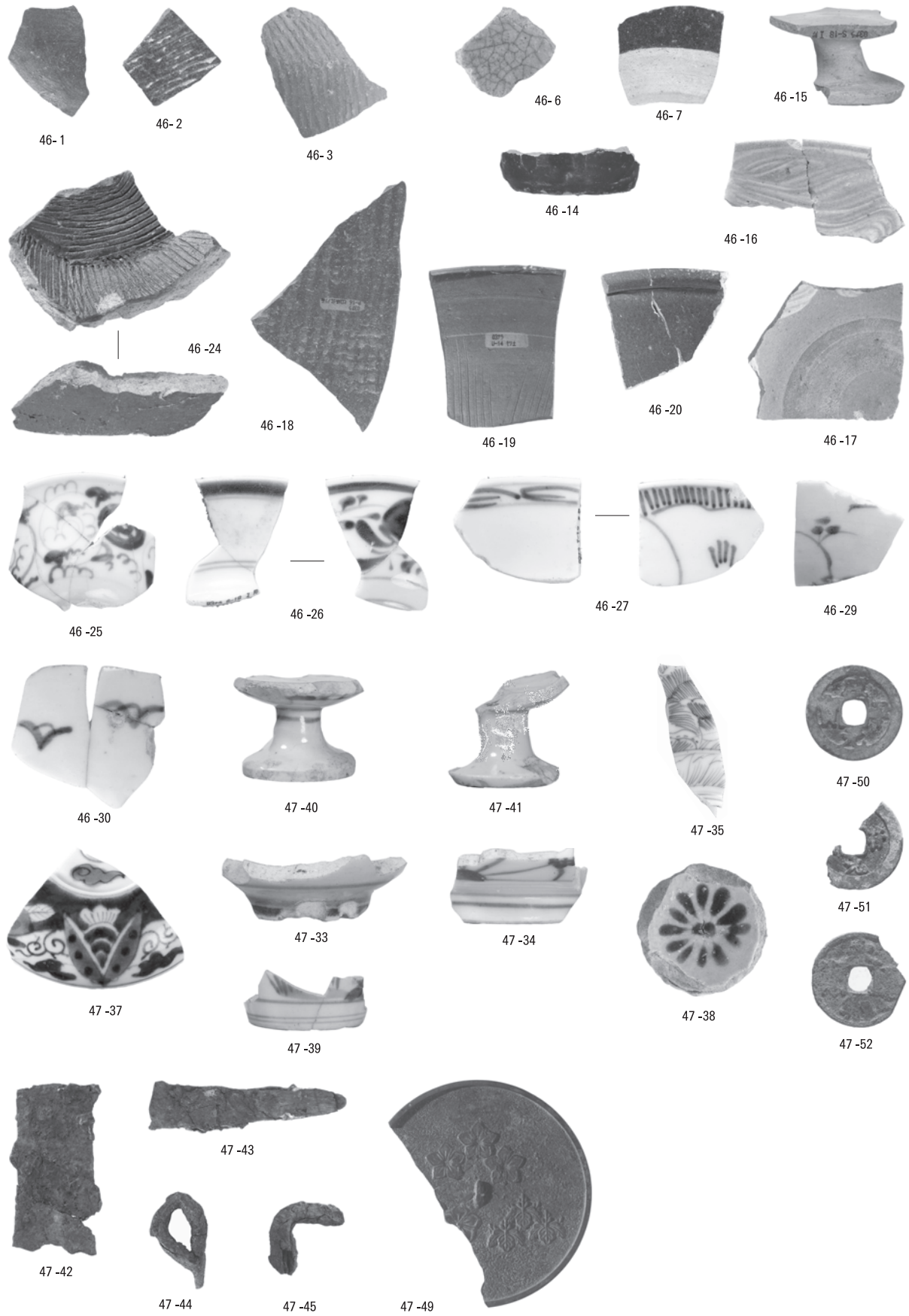


写真43 遺構外出土遺物 (3)

報告書抄録

ふりがな	ならだていせき							
書名	櫛館遺跡							
副書名	八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第388集							
編著者名	小田川哲彦・平山明寿							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038 - 0042 青森市大字新城字天田内152 - 15 TEL 017 - 788 - 5701							
発行年月日	西暦2005年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ-ド		旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ならだていせき 櫛館遺跡	あおもりけんはちのへし おおあざこれ 青森県八戸市大字是 かわあざならだて 川字櫛館、外	02203	03148	40°	141°	20030701 ~ 20031031	6,000	八戸南環状 道路建設事 業に伴う事 前調査
				28	31			
				51	50			
				世界測地系 (JGD 2000)				
				40°	141°			
				29	30			
				00	37			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
櫛館遺跡	集落跡 館跡 他	縄文時代 後期 平安時代 中世 近世	壕跡 5条 土壘 門跡 2箇所 通路跡 4経路 掘立柱建物跡 4棟 柱穴 竪穴建物跡 1軒 竪穴住居跡 3軒 土坑 61基 焼土跡 5基 集配石遺構 3基 性格不明遺構 2基	縄文時代前期 " 後期 土器・石器 平安時代 土師器・鉄器 中世~近世 陶磁器 石製品 銭貨・緡銭	河川に面した、三重の壕が巡らされる館跡。館廃絶後も壕を通路として使用している。無文銭・輪銭の緡銭は希少。 平安時代には環壕集落であった可能性がある。 縄文時代後期では、集落からはなれて土坑群がつけられる。			

青森県埋蔵文化財調査報告書 第388集

櫛 館 遺 跡 II

- 八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 -

発行年月日 2005年3月25日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038 - 0042 青森市大字新城字天田内152 - 15

T E L .017 - 788 - 5701 FAX.017 - 788 - 5702

印 刷 所 東奥印刷株式会社

〒030 - 0113 青森市第二問屋町三丁目1 - 77

T E L 017 - 739 - 8951、FAX017 - 739 - 8953
